対魔大聖
デモンベイン
DEUS MACHINA DEMONBANE
明日への翼
原作：鋼屋ジン
(ニトロプラス)
著：涼風涼
(デジターボ)
角川スニーカー文庫

この世でたった一人の肉親を手にかけ、
新たな罪を背負うことになったとしても、
私には守らなければならない者たちがいる」

デモンベインとアル。
究極の三位一体となった
俺たちは――無敵だ!!

DON'T BE AFRAID TO GO INTO THE UNIVERSE
IT'S JUST LIKE A JUMPING STARS READY FOR THE CHANGE?
DON'T LOOK AWAY FROM VICE STILL DROWING IN DESPAIR?
TO MAKE A GLORIOUS START EVEN THOUGHT MY HEART IS CRUSHED
まだ見ぬ世界へ　続いていくTO THE HOLY NEW WORLD

(『HOLY WORLD』written by Hassy)

斬魔大聖デモンベイン

明日への翼

原作：鋼屋ジン（Nitroplus）

著：涼風涼（DIGITURBO）

角川スニーカー文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

DEUS MACHINA DEMONBANE

CONTENTS

プロローグ　HOLY WORLD——009

第一章　絶望に灼ける剣——013

第二章　魔人狂舞——血風、爆炎、灼ける大気を呼吸する時間——067

第三章　汚怪なる血脈——093

第四章　宇宙・生命・神・悪魔——183

第五章　征こう、恐怖と絶望と勇気と誇りに満ちた戦場に——247

エピローグ　世界最後の詩——我等は神話を紡ぐ者なり——315

あとがき——344

解説——古橋秀之——346

CONTENTS

プロローグ　ＨＯＬＹ　ＷＯＲＬＤ

第一章　絶望に灼やける剣

第二章　魔人狂舞──血風、爆炎、灼ける大気を呼吸する時間

第三章　汚怪なる血脈

第四章　宇宙・生命・神・悪魔

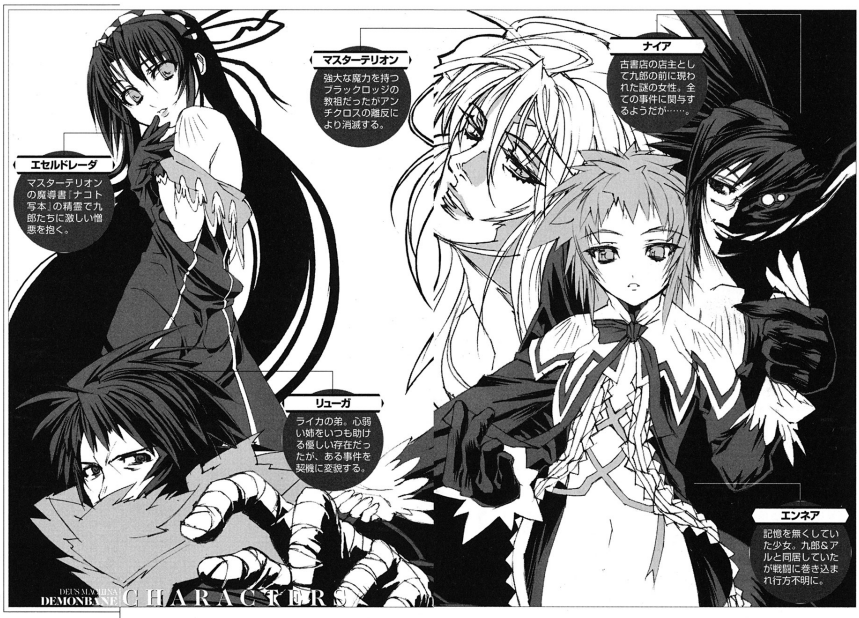
第五章　征ゆこう、恐怖と絶望と勇気と誇りに満ちた戦場に

エピローグ　世界最後の詩──我等は神話を紡つむぐ者なり

あとがき

解説──古ふる橋はし秀ひで之ゆき

ライカ
街の片隅の教会で孤児院を営むシスター。九郎のよき理解者でもあるが……。
覇道瑠璃
アーカムシティに君臨する覇道財閥の主。祖父の遺志を継ぎデモンペインを完成させる。
アル・アジフ
1000年の時を生きる魔導書。九郎たちの必死の反撃によって復活をとげる。
ドクター・ウエスト
ブラックロッジのマッドサイエンティスト。九郎の行く手を阻む存在だったが……。
ウィンフィールド
覇道家に仕える忠実な執事で主の瑠璃を影から支える影のある男。ボクシングの達人。
エルザ
ウエストが開発したアンドロイド。術式魔砲「我、埋葬にあたわず」とトンファーが武器。
大十字九郎
三流探偵だったが、アルと出会い魔術師になる。鬼械神デモンペインを狩り魔を断つ。
DEUS MACHINA
DEMONBANE
CHARACTERS


マスターテリオン
強大な魔力を持つブラックロッジの教祖だったがアンチクロスの離反により消滅する。
ナイア
古書店の店主として九郎の前に現われた謎の女性。全ての事件に関与するようだが……。
エセルドレーダ
マスターテリオンの魔導書「ナコト写本」の精霊で九郎たちに激しい憎悪を抱く。
リューガ
ライカの弟。心弱い姉をいつも助ける優しい存在だったが、ある事件を契機に変貌する。
エンネア
記憶を無くしていた少女。九郎&アルと同居していたが戦闘に巻き込まれ行方不明に。
DEUS MACHINA
DEMONBANE
CHARACTER

プロローグ

HOLY WORLD

鮮せん烈れつを極きわめる膨ぼう大だいな光が世界を包みこんでいく。

灼しやく熱ねつする太陽よりも激しく、圧あつ倒とう的な存在感を以もつて世界に現出したそれは、芸術作品にも似た壮そう大だいな幾き何か学模様である。魔ま法ほう円の内側に描えがき出された星形の紋もん様ようと魔ま術じゆつ文字は見事なまでの調和を果たし、燦さん然ぜんと輝かがやく巨きよ大だいな防ぼう御ぎよ陣じんと化した。

旧エルきダー・印サイン―。

それは瘴しよう気きと狂きよう気きと絶望に充みち満ちた地じ獄ごくの中にあっても陰かげることを知らず、邪じや悪あくを寄せつけぬ清せい浄じようなる光を放っていた。

そんなあらゆる邪悪を浄じよう化かせんばかりの激しい光の直中に、一人の少女の姿が現出する。

穢けがれなき白いドレスに身を包み、光を孕はらんで煌きらめく銀ぎん髪ぱつを靡なびかせながら中空に浮うかび上がっている彼女の名はアル・アジフ。それはアブドゥル・アルハザードによって記された最強の魔導書の名であり、彼女はそれに宿る精せい霊れいだった。アルは翡ひ翠すい色をした双そう眸ぼうに意志の力をありありと浮かべると、眼前にそびえ立つ威い容ようへと一いち瞥べつをくれた。

神を模した鋼鉄の巨きよ人じん・鬼デウ械ス・神マキナ。【妖よう蛆しゆの秘密】によって召しよう喚かんされたそれは神と呼ぶにはあまりにもグロテスクであり、そして邪悪だった。

だがアルは怯ひるまない。怯む必要もない。

状じよう況きようは最悪である。デモンベインは半はん壊かいし、少女の主あるじ・大だい十じゆう字じ九く郎ろうは生死の境を彷徨さまようほどの重傷を負っている。勝てる要素など、どこにもない。どこにもなかったが、負ける要素も見つからなかった。その

ために彼女は死すら乗り越こえて復活を遂とげたのだから──。

「奇き跡せきだ……」

　背後から九郎の声が聞こえてくる。だがアルは即そく座ざにそれを否定した。

　彼女は知っている。魔術師マギウスとしての力を失い、デモンベインを失い、絶望の淵ふちに立たされながらも戦い続けた九郎の姿を。そして彼の想おもいを──。

　絶望的な戦力差だった。

　だが九郎は戦った。戦って戦って戦い抜ぬいて、今、この瞬しゅん間かんまで耐たえ続けてきたのだ。強大で理り不ふ尽じんな相手を前に、一歩も退ひかずに。

（だからこそ妾わらわが間に合った）

　アルはゆっくりと振ふり返る。

　探すまでもなく、彼女は九郎と目を合わせることができた。

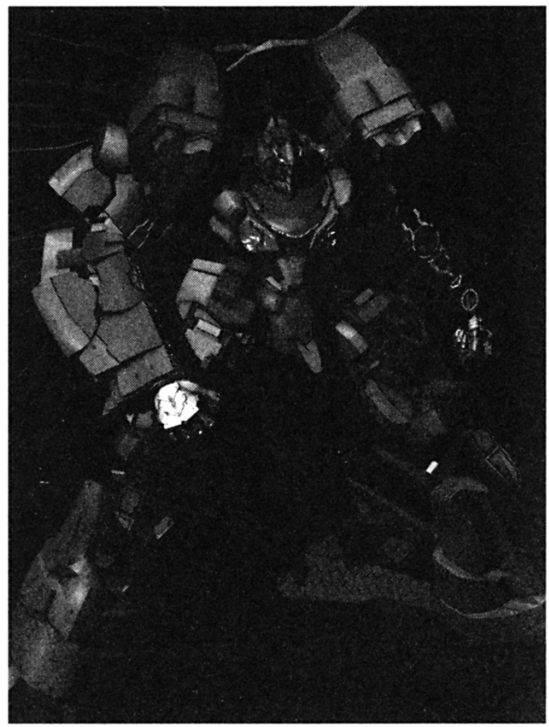
「アル──────────ッッッ！」

　全世界、全宇宙へ届けと言わんばかりの九郎の魂たましいの叫さけびが響ひびき渡わたる。

　アルは九郎に頷うなずいてみせた。

「そうだ。これは奇跡などではない！　確実に汝なれがもたらした、当然の結果としての勝利だ！　我わが主、大十字九郎！」

第一章 絶望に灼ける剣



アイオーン
搭乗者：アル・アジフ

鬼デウ械ス・神マキナ・ベルゼビュートの猛もう攻こうにより、デモンベインは致ち命めい的とも言えるほどの被ひ害がいを受けていた。

腕うでは潰つぶされ、装そう甲こうは剝はげ落ち、さらけ出された機関に無数の火花と紫し電でんが散っている。精せい悍かんな貌かおも半ば剔えぐれており、魔まを断つ剣けんと称しようされた鬼械神も今はその面おも影かげすら感じられない。

コックピットの中も無残な有様だった。ハッチは吹ふき飛び、計器類は一つ残らず破損している。まともに機能している計器は一つもない。そのどれもが火を噴ふき、火花を散らせ、爆はぜている。心なしかデモンベインの駆く動どう音おんも頼たよりなくなっていた。

そんな崩ほう壊かい寸前のコックピットの中で大十字九郎は無様な姿を晒さらしていた。四し肢しの骨折は当然として、折れた肋あばら骨ぼねが内臓を深く傷つけている。それだけではない。刺さし傷や切り傷、打だ撲ぼくなど、ありとあらゆる怪け我がを負っていた。呼吸は荒あらく、多量に出血しているせいか意識は遠い。気を抜ぬけば意識は断絶し、それっきり二度と戻もどってはこないだろう。死なずにいるのが不思議なほどの重傷である。

それにもかかわらず九郎の闘とう気きは微み塵じんも衰おとろえない。崩くずれかけた操そう縦じゆう桿かんにもたれかかりながらも、その目は死んではいなかった。むしろ生命力に溢あふれている。

理由は明白だ。ハッチの向こう側に──深い絶望だけが支配する歪ゆがんだ世界の直中に、少女の……アルの姿を見つけたからだ。

初め九郎は我が目を疑った。だがそれは夢でもなければ幻まぼろしでもない。根こん拠きよなどなかったが、そう感じるのだ。徹てつ底てい的に痛めつけられ、痛覚すらまともに機能していないボロ雑ぞう巾きんのような体だったが、それでもアルの気配を肌はだで

感じ取ることができた。

　絶望色に染め上げられた心が癒いやされていく。希望が激痛を駆く逐ちくし、喜びへと変えていく。

　アルの体が光を放ち、煌きらめく粒りゆう子しへと変化を遂とげていく。それは速すみやかにコックピットへと流入し、次の瞬しゆん間かんには再び少女の姿を形成した。目と鼻の先にアルの顔が迫せまる。体温、そして息づかいが感じられるほど二人の距きよ離りは近づき、やがて零ゼロになった。

　九郎とアルはどちらからともなく抱だき合うと、口づけを交かわす。

　生きているのだという確かな感かん触しよく。

　失われた半身を取り戻したかのような充じゆう足そく感かん──。

　体の奥底から力が湧わき出してくる。それは体中を満たし、溢れ出した力は光と化して九郎とアルを包みこんでいく。

　心が、体が、細さい胞ぼうの一つ一つが活性化していた。

　傷口は塞ふさがり、砕くだけた骨は接合し、激痛が生命力へと劇的な変化を遂げていく。

　九郎は確かな力を感じていた。邪じや悪あくを討うち滅ほろぼすための確かな力を──。

　そしてそれは一つの形となって現れた。九郎の体が黒のボディスーツに包まれていく。

　それは最強の魔ま導どう書しよ【アル・アジフ】とともに戦う魔術師マギウス・大十字九郎の本来の姿である。

（戦える。あのクソ野や郎ろうに抗あらがう──いや、ぶちのめすに足る確かな力がここにある！）

　九郎は両手に握にぎり拳こぶしを作ると、旧エルきダー・印サインの向こう側にそびえ立つベルゼビュートを睨にらみつけた。

「心配ない。あのような輩やからは恐おそれるに足りぬ」

　アルはニヤリと笑うと、半ば崩壊しているコックピットの壁へき面めんへと手を添そえた。

「それに此こ奴やつも応こたえてくれている」

「解わかっているさ。なあ、デモンベイン！」

　九郎の叫さけびに応じるかのようにデモンベインの各機関が一いつ斉せいに目を覚ます。

　心ここ地ちよい駆動音が辺りに響ひびき渡わたり、足あし下もとから伝わってくる振しん動どうにデモンベインの鼓こ動どうを感じ取ることができた。

　仰あお向むけに近い状態で地面にめりこんでいたデモンベインが上体を引き起こしていく。満身創そう痍いの巨きょ人じんが大地を踏ふみしめ、ゆっくりと立ち上がった。だが、それでも負ける気はしなかった。

（どこに負ける要素がある。究極の三さん位み一体。最強の戦士になった俺たちのどこに！）

　不安はない。

　ただ眼前にいる理り不ふ尽じんな輩を捻ひねり潰すのみである。

『ふっ……うふふふふふふふっ……あはははははははははっ！
ば、馬ば鹿かね、アンタたち！』

　ベルゼビュートの搭とう乗じょう者しや・ティベリウスが嘲ちょう笑しょうを浴びせかけてくる。

　だがその程度では九郎の心は揺ゆるぎもしない。弱者が吠ほえているようにしか聞こえなかったからである。実際、ティベリウスの口調には明らかな動どう揺よう、そして困こん惑わくの色が滲にじんでいた。

『そんなズタボロな機体でなにができるってわけ!?　まさかアタシを倒たおせるとでも……！』

　不意にティベリウスの言葉が途と切ぎれる。だが九郎もまた言葉を失っていた。

　散乱していた計器類の破片が組み合わさり、自然に修復し始めていたのだ。ひしゃげていたコックピットが元通りになっていく。

　異変は外部にも及おんでいた。失われた腕の周りにパーツが溢れ出し、それを復元していく。剔えぐられ、穿うがたれ、剝がされた装甲も元に戻っていた。

　復活したのは内外装だけではない。モニターが外界を、そしてデモンベインの各種ステータスを表示していく。魔ま術じゆつ回路のステータスはオールグリーン。完かん璧ぺきだった。

『自己修復機能……紛まがい物が……デウス・マキナの紛い物が何故なぜ!?』

　アルは鼻を鳴らした。

「忘れたか罪人。此奴の名の意味を。それをなすためなら我等は何度でも甦よみがえるのだ！　やるぞ、九郎！」

　九郎が応じるや否いなや、アルは軽かろやかに跳ちよう躍やくして自らの操縦席へと向かった。

　だが次の瞬間である。

「だあああああああっ！　なにがどうなっておる!?」

　アルの叫びに何事かと様子をうかがうと、彼女は操縦席の脇わきで目を白黒させていた。

「妾わらわの……妾の操縦席が妙みような機械で埋うめつくされておるぞ!?　それに何故、機械人形がここにおるのだ!?」

　アルの席には様々なコードにつながれたまま突つっ伏ぷしているエルザの姿があった。

（あ。忘れてた）

　エルザは怨おん霊りよう呪じゆ弾だんの影えい響きようを受け、その機能を停止したままだったのである。

「こら！　起きんか！　そこを退どけ！　ここは妾の場所だぞ！」

　アルは力任せにエルザの体を揺さぶるが、彼女が再起動する様子はない。

「ここは汝なれのような者がいてもよい場所では……。って、完全に気絶しておるではないか！」

　アルは目め尻じりを吊つり上げ、九郎を睨みつけた。

「九郎！　どういうことか説明せよ！」

「い、いや、それは……。ドクター・ウェストが勝手にやったことで……」

「ああん？　ドクター・ウェストだと!?」

「いや、だからな、デモンベインを動かすために必要でさ、奴やつの力を……」

「あのたわけめ、余計な真似まねをしおって」

　アルは語気を荒あらげる。

「九郎！　汝がおりながらなんたる不始末！　汝は妾の留守も満足に守れぬのか！」

「しょうがねえだろ！　そうしなきゃデモンベインを動かせなかったんだからよっ！」

「ふん。言い訳など聞きたくもないわ」

「今の今まで死んでおいて、なんだその態度っ！　どんだけ大変だったか解ってんのか！」

　九郎は口を尖とがらせるが、アルは素知らぬ顔でそっぽを向いている。聞き流すつもりらしい。

　アルは操縦席からエルザを追い出してコックピットの片かた隅すみに転がすと、九郎に一いち瞥べつをくれ、鼻を鳴らしてからそこに座した。

『こ、こ、こん餓ガ鬼キァァァ！　人様ムシして勝手に盛り上がってんじゃねぇぇぇわよッッッ！』

戦せん闘とう中とは思えぬ和なごやかな会話を繰くり広げていた二人に、とうとうティベリウスが切れた。彼の怒ど気きが瘴しよう気きと化してベルゼビュートから噴ふき上がる。

『スター・ヴァンパイア！　暴食せよ！』

ぞくりと、背筋に悪お寒かんが走り抜ぬける。九郎は得え体たいの知れない危機感を感じ取り、反射的にデモンベインを飛び退のかせた。と同時に、なにもないはずの空間が爆ばく発はつする。

『ほーほっほっほっ！　視みえないでしょ!?　迷めい彩さい兵器《スター・ヴァンパイア》。電子的にも魔術的にも迷彩を施ほどこしたこれをかわすのは不可能！　さあ、木こっ端ぱ微み塵じんにしてあげるわっ！』

勝ち誇ほこるティベリウスの姿が目に浮うかんでくるかのようだ。

九郎は軽く溜ため息をついた。

デモンベインは今、不可視の兵器に取り囲まれている。そのことがティベリウスに優ゆう越えつ感かんを与あたえているのだろうが、憐れん憫びんの情しか浮かんでこなかった。

九郎は静かに精神を集中させていく。思考が疾しつ走そうし、猛もう烈れつな勢いで世界の法則を演算し始めた。瞬しゆん時じに導き出された式に理論を書き加え、自らの世界を構築していく。

（―視みえた）

ソーサーにも似た不可視の脅きよう威いが眼前に迫せまっていたが、それでも九郎は動じない。全世界に神経を張りめぐらせ、思考を疾走させている彼にとって、その攻こう撃げきは欠伸あくびが出るほどの緩かん慢まんな動きにしか見えなかったのである。脅威ではあり得ず、力を振ふるうには十分すぎた。

光が奔はしるのと同時に、デモンベインの周りで立て続けに爆発が起きる。姿なく忍しのび寄ってきた迷彩兵器を一つ残らず斬きって捨てたのだ。デモンベインの右手には三日月形をした刀・バルザイの偃えん月げつ刀とうが握にぎられていた。

『バ、バカな……。ただの一ひと振ふりで……』

　デモンベインは後あと退ずさるベルゼビュートに偃月刀の切っ先を突きつける。

　もはや恐おそれるものなどなにもない。あるのは確かな自信と、ベルゼビュートを凌りよう駕がする絶対的な力だけだ。

「思い出しただろう？　そうだ。これが魔まを断つ剣けんだ」

　デモンベインは両手でバルザイの偃月刀を握りしめると、それを上段に構える。

「さあ、ゾンビ野や郎ろう！　死体は死体らしく墓に帰りなっ！」

　デモンベインが間合いを詰つめ、気け圧おされたベルゼビュートが後退る。

　今や完全に立場は逆転しており、九郎は精神的にも優位に立っていた。

　九郎が勝利を意識したときである。突とつ然ぜん、ティベリウスが笑い出した。

『アンタたち、大切なこと忘れてなぁい？　こっちには人ひと質じちがいるのよっ！』

　九郎はハッとする。

　アルの復活に気を取られて失念していたが、ベルゼビュートの頭頂部には十じゆう字じ架かが括くくりつけられており、覇は道どう財ざい閥ばつ総そう帥すい・覇道瑠る璃りが磔はりつけにされていたのだ。デモンベインが甚じん大だいな被ひ害がいを受けたのは、彼女を人ひと質じちに取られていたためでもあった。

『ほらほらぁ！　瑠璃お嬢じようちゃんをペチャンコにされたくなければ、おとなしくすんのよっ！』

　ティベリウスは言い放つが、余よ裕ゆうがないのは口調で判わかる。

　とは言え、瑠璃を人質に取られている以上、迂う闊かつに手出しはできない。

「あの小こ娘むすめ、人の足をひっぱることしかできんのか？
で、どうする？」

「どうするって、どうすっかな……」

　九郎はつぶやきながらも、あることに期待していた。

（いつもならこんなとき、あの人が助けてくれるんだが）

+

　不ふ浄じようの大地と化したアーカムシティの上空で光と闇やみが激げき突とつする。

　それは幾いく度どとなく交差し、交こう錯さくし、それでもけっして混じり合うことはない。

　対極にある二つの想おもいが凶きよう器きと化していく。

　一つは光り輝かがやく白い刃やいばに。

　一つは闇をまとった漆しつ黒こくの拳こぶしに──。

　白と黒の天使は上空で激突したかと思うと、弾はじかれるように地上へと落ちていく。

　白の天使・メタトロンは汚けがれなき白い翼つばさを、黒の天使・サンダルフォンは闇あん黒こくに冒おかされた黒い翼を広げると、フレアを噴き上げながら上空へと舞まい上がっていく。二人は螺ら旋せんを描えがきながら上じよう昇しようし続け、中空で静止。どちらからともなく動き出し、極限まで高めた力をぶつけ合う。

　拮きつ抗こうする膨ぼう大だいなエネルギーが両りよう雄ゆうの間で集約し、行き場を失って爆ばく砕さいした。二人の天使は煽あおりを受けて弾け飛び、互たがいに違ちがうビルの屋上に降り立つ。

《ははっ……。傷が疼うずく。お前と対たい峙じする度たびに疼きが酷ひどくなる。痛む……酷く痛むぞ……ッ！　なんて……なんて心地よい憎ぞう悪おの疼きだ！》

　顔を押さえながらつぶやくサンダルフォンに対し、メタトロンは右みぎ腕うでに顕けん現げんさせたビーム砲ほうを撃うち放った。だがすでに彼の姿はない。代わりにビルが粉ふん塵じんを巻き上げながら崩くずれ去った。

　殺気を感じて上空へと目を向けると、遥はるか遠方で悠ゆう然ぜんと佇たたずむサンダルフォンの姿が。メタトロンは舌打ちしたくなるのを堪こらえると、双そう翼よくを広げてサンダルフォンの下へと突とつ撃げきしていく。その両りよう腕うでには光を放つ白き剣が握られていた。速すみやかにサンダルフォンは迎げい撃げき態勢に入り、その拳が闇を孕はらんでいく。

　両者の闘とう気きに空間が戦慄おののき、震ふるえ始める。

　白と黒の天使が激突した。

《チッ……！》

　呻うめくサンダルフォン。

　その脇わき腹ばらはメタトロンのセイバーに裂さかれ、血が滴したたり落ちている。

《クッ……！》

　呻くメタトロン。

　その鳩尾みぞおちはサンダルフォンの拳に剔えぐられ、装そう甲こうが落ち窪くぼんでいる。

　両者とも錐きり揉もみ状態で大地へと突つっこみ、盛大な粉塵が上空へと噴き上がった。そしてそれが収まる前に、天使たちは立ち上がって身構える。

　ただ対峙しているだけにもかかわらず、メタトロンは体力の消しよう耗もうを感じていた。極限状態が精神を磨すり減へらし、肉体を疲ひ弊へいさせていく。だがそれはサンダルフォンとて同じだ。

《愉たのしいな、メタトロン》

《私は愉しくなどない》

《ノリの悪い奴やつだ》

《戦いに愉ゆ悦えつを感じるほど下げ衆すではない》

《……己オレを殺したお前がなにを言うか！》

　サンダルフォンは唾だ棄きするかのように言葉を吐はき出すと、純然たる殺意をメタトロンへとぶつけた。メタトロンは臆おくする様子すら見せず、それを真正面から受け止める。怯おびえはない。あるのは苦しみと痛み、そして──。

《お前だって……！　みんなを殺した……ッ！》

　ムーンチャイルド計画という恐ろしい実験の最さ中なかに出で逢あった少女たち。彼女たちはメタトロンにとって家族のようなものだった。ウェスパシアヌスの実験により、最後は操あやつり人形と化してはいたが……。彼女たちはサンダルフォンの手にかかって死していた。人として生きる喜びすら知らないまま──。

　心の奥底から激情が溢あふれ出てくる。それは殺意に優まさるとも劣おとらない感情の奔ほん流りゆうだった。

《お前に皆みなの死を嘆なげく権利があるのか？　何度も言っている。お前はそんなんじゃない。もっとえげつない代しろ物ものだよ》

　罪はいつまでも天使の名を冠かんする咎とが人びとを苛さいなむ。

　だが、それでもなお──。

　遠くから爆ばく音おんが聞こえてくる。サンダルフォンに注意を向けながらそちらへと目をやると、デモンベインが──大十字九郎が戦っていた。絶望的な状じよう況きように屈くつすることなく、邪じや悪あくを討うち滅ほろぼすために。明日を、未来を勝ち取るために死にものぐるいで抗あらがっている。

（守りたい……。守らなければならない者たちがいる）

なればこそ、ここで剣けんを置くわけにはいかない。

（彼らを守ることが贖しよく罪ざいとなるのなら……）

たとえそのための戦いで新たな罪を背負い、未来永えい劫ごう、罪を重ねるのが定めだとしても―。

メタトロンはサンダルフォンに剣けん先さきを突きつける。

《大十字九郎が苦戦している。お前ごときにかまっている暇ひまはない》

《くっ……はは……はははっ！　まだか!?　お前はまだ己を見ないのか！　メタトロンッ！》

サンダルフォンの言葉に耳を貸さず、メタトロンは白き翼を広げて大空へと舞い上がった。

（そうだ。心が血の涙なみだを流そうと戦い続けなければ）

罪と戦うことが生きることだった。そしてそれだけが今のメタトロンを支える誇ほこりなのだ。

メタトロンが翔かける。その目はベルゼビュートの頭頂部、囚とらわれの身となっている瑠璃へと向けられていた。無論、それを許すサンダルフォンではない。

振ふり返ると、ピタリと後方につけているサンダルフォンが気を溜ためていた。それで叩たたき落とすつもりなのだろう。

迎撃するべく体勢を調えたときだ。地上から射出された一発のロケット弾だんがサンダルフォンに直ちよく撃げきした。爆ばく煙えんの中に彼の姿が埋うもれていく。突とつ然ぜんの出来事に事態を把は握あくできないメタトロンだったが、おかげでサンダルフォンとの距きょ離りを大きく引き離はなすことに成功していた。

《なにっ!?》

再び姿を現したサンダルフォンは無傷だったが、彼との距離を数百メートルほど離すことができた。ロケット弾が発射された方向へと目を向けると、ギターケースを肩かたに担かついで高笑いしている白衣の男の姿を確かく認にんすることができた。ドクター・ウェ

ストである。

「サンダルフォン！　貴様の好きにはさせんのであーる」

　ウェストはサンダルフォンに中指を突き立てたかと思うと、尻しりを向けて掌てのひらで叩いて見せた。

「ヘイ！　カモン！　カラテカ！　ＨＡＨＡＨＡ！」

　さらなるウェストの挑ちよう発はつに、サンダルフォンの憎ぞう悪おが膨ふくれ上がる。

「おお、怒おこってる怒ってる」

　ウェストは慌あわてて逃にげる準備を調えると、すたこらさっさと遁とん走そうを開始する。

《……死ね》

　サンダルフォンの拳こぶしに集約されていく殺意という名の気が、地表を這はいずるウェストへと向かって放たれた。大気が震ふるえ、獣けものの雄お叫たけびを引き連れながら衝しよう撃げき波はが走り抜ぬけていく。

「お、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

　ウェストが絶ぜつ叫きようした直後、そこを中心とした巨きよ大だいな爆ばく発はつが起こる。

　キノコ雲にも似た粉ふん塵じんがアーカムシティ上空へと噴き上がった。

＋

　九郎はベルゼビュートを睨にらみつけていた。

　最優先事じ項こうは瑠璃の救助だが、今の九郎に打つ手はない。

だが焦あせりや不安は感じなかった。

（いつもならこんなとき、あの人が助けてくれるんだが――）

ほとんど確信に近いものを抱いだきながら、九郎はその瞬しゆん間かんが訪おとずれるのを静かに待った。

『なに突っ立ってんのヨっ！　さあ、早くデモンベインを停止させるのヨっ！』

苛いら立だたしげな声が聞こえてきたときだ。ベルゼビュートの頭頂部に一条の閃せん光こうが走り抜けた。それは十じゆう字じ架かの土台部分を破は壊かいしたかと思うと、それごと瑠璃を抱だきかかえて飛び去っていく。一いつ瞬しゆんの出来事にベルゼビュートは棒立ち状態で何一つ対処できなかった。

『メ、メタトロン！』

泡あわを食い、動どう揺ようするティベリウスを尻しり目めに、九郎はガッツポーズを作った。

「よっしゃ！　ご期待どおりに登場だな！」

「他力本願とは……」

アルが呆あきれ顔でつぶやく。

『どいつもこいつもアタシの邪じゃ魔まばっかして！　そう簡単に逃がすとは思わないでっ！』

ティベリウスは地じ団だん駄だでも踏ふみそうな勢いで悔くやしがると、飛び去るメタトロンへと機体を向けた。だが怒りに任せたその行動は、一瞬の隙すきが明暗を分ける戦いにおいて決定的な隙となる。

九郎はデモンベインを疾しつ駆くさせ、ベルゼビュートとの距離を一気に詰つめた。

「よそ見してんじゃねえ、このクソ野や郎ろうがっ！」

ティベリウスが反応を示すが、時すでに遅おそし。躊ちゆう躇ちよなく振り下ろされた偃えん月げつ刀とうは、ベルゼビュートの頭

部から股また下したへと一瞬で走り抜けていく。そのあまりの速さにワンテンポ遅おくれて結果がついてきた。ベルゼビュートの機体は中心で上下にズレたかと思うと、左右に分かれていく。

『また……っ！　またもや……大十字九郎ッッッッ！　おのれがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！』

　崩くずれゆくベルゼビュートからティベリウスが這い出してくるが、それを見届けるよりも早く九郎は打って出た。自ク動ト式ウ拳グ銃アを顕けん現げんさせるのと同時にトリガーを引く。

「成じよう仏ぶつしろよ」

　右手に伝わる鈍どん重じゆうな反動。それに心ここ地ちよさを感じながら魔ま弾だんの軌き道どうを目で追いかける。それはティベリウスを巻きこみながらベルゼビュートに着ちやく弾だん。空気が震えるほどの激しい振しん動どうとともに紅ぐ蓮れんの炎ほのおが天高く舞まい上がった。

「これで跡あと形かたもねえだろ。借りは返したぜ」

「うむ。汝なれにしては上出来だ」

　アルは満足げにうなずくが、その声から緊きん張ちよう感かんが抜けることはない。

「一息ついている暇はないぞ。一刻も早くあの汚けがらわしい肉につ塊かいをなんとかせねば」

　九郎とアルは同時に上空へと目を向けた。

　旧支配者・クトゥルー。

　いまだ深い眠ねむりの淵ふちにいるそれも、このような状じよう況きよう下かではいつ覚かく醒せいしても不思議ではなかった。

　そして目を醒さませばアーカムシティは―いや、地球は確実に終焉を迎むかえる。ティベリウス程度の小物相手に浮うかれている場合ではなかった。

「ああ、解わかっているさ……」

決意を胸にする一方で、九郎は得え体たいの知れない不安感に襲おそわれていた。

そしてその理由に思い至る間もなく背筋に悪お寒かんが走り抜けていく。それはやがて警けい鐘しようへと変わり、九郎の全身を強こわ張ばらせていった。

+

移動要よう塞さい・夢む幻げん心母。

破壊ロボットを収めた巨大な格納庫に無数の光の粒りゆう子しが集まり始める。

どこからともなく湧わき出してきた光の粒つぶは一点に集約し、やがて恒こう星せいでも誕生するかのような苛か烈れつな閃光を放っていく。荒あらぶる光の洪こう水ずいは格納庫を真っ白に塗ぬり潰つぶしたかと思うと、やがてその中心に巨大な神しん殿でんのごときシルエットを浮かび上がらせた。

爆ばく砕さいする閃光。粒子と化して散っていったそのあとに残されたのは巨大な偉い容ようである。

無む銘めいの神──。

異界の神を模して造られた鬼デウ械ス・神マキナである。

その頭頂部には一人の少女が佇たたずんでいた。手足の拘こう束そく具ぐ、視力を奪うばう仮面、会話を制約する轡ギヤグ──。立っていることすら困難な状況にもかかわらず体は微み塵じんも揺ゆるがない。感情の片へん鱗りんすら見せないまま静かに立ちつくすだけである。

異変はすぐに訪れた。少女を呪じゆ縛ばくする拘束具が魔ま導どう書しよの頁ページと化して一枚、また一枚と解ほどけていく。晒さらされる少女の裸ら身しん。未成熟ではあるが丸みを帯びた瑞みず々みずしい体に、錦きん糸しへと姿を変えた紙片が幾いく重えにも幾重にも絡からみついていく。やがてそれは朱しゆ色いろのドレ

スとなって少女を彩いろどった。

　不意に少女の顔が愉ゆ悦えつで歪ゆがむ。

「さあ、これからが本当の始まり。ここからは運命の中心に立つネロたちのための物語。舞ぶ台たいに相応ふさわしくない大根役者は引っこんでいることね、アウグストゥス！」

　ネロは猫ねこのような身軽さで鬼械神から飛び降りると、半ば神の肉に侵おかされたフロアへと着地する。そして場に似合わぬ軽快な足取りで歩き始めた。行き先は『祭さい壇だんの間』と決まっている。

　少女は濃のう密みつな闇やみで満たされた長い回かい廊ろうをスキップでも踏むかのように進んでいく。だが祭壇の間で待ち受けているのは恋こい人びとでもなければ友達でもない。魔人である。そうと知りながらもネロに恐きよう怖ふ心しんはない。

　さらに通路を進んでいくと、やがて前方から巨きよ大だいな門が見えてくる。その左右にはブラックロッジの信徒が数名、門番よろしく銃じゆう器きを手に控ひかえていた。彼らは少女の姿を認めた途と端たん、一人残らず顔を青くした。末まつ端たんの信徒である彼等が彼女の正体を知る由よしもないが、本能が警告しているのだろう。信徒らは置物のように身動き一つせず、顔に絶望を貼はりつけたまま硬こう直ちよくしている。そんな彼等には目もくれず、ネロは鼻歌を歌いながら門へと歩み寄っていく。

　ネロが門に手をかけようとしたときだ。信徒の一人が震ふるえる体で銃じゆうを構え、銃じゆう口こうを向けた。

「止ま――！」

　信徒の言葉は続かなかった。

　ぽん

　間ま抜ぬけなほど軽い破は裂れつ音おんとともに信徒の顔が破裂した。床ゆかに脳のう漿しようや肉片、骨片がぶちまけられ、少し遅おくれて頭部を失った体が掛かけ金がねの壊こわれた玩具おもちゃのように崩くずれ落ちる。瘴しよう気きのせいだろう。信者の死体は黒い霧きりを噴ふき出しながら蒸発し、やがて空気中に溶とけこんでいった。

声なき悲鳴を上げる信者たち。だがそれには目もくれず、ネロは眼前の扉とびらへと意識を向けた。

門の表面に幾き何か学がく的な紋もん様ようが浮かび上がるのと同時に、観かん音のん開きの門が軋きしむ音を立てながら開かれていく。ネロは凄せい絶ぜつなまでの笑えみを浮かべると、致ち命めい傷しようとなりえるほどの邪よこしまな気で満たされた空間へと足を踏ふみ入れる。背後で独りでに門が閉じていくのが解った。

祭壇であり王座の間でもあるそこはコロシアムを連想させるドーム状の空間だった。中央には王座が鎮ちん座ざしており、それを囲み、見下ろすような位置に七つの席が配置されている。アンチクロスの席である。現在、空席は五つ。カリグラとクラウディウスは死亡し、ティトゥスとティベリウスは出で払はらっている。残りの一つはネロの席だ。彼女は自分の席を一いち瞥べつしたあと、王座の前で並んで立つ二人の魔人へと目を向けた。アウグストゥスとウェスパシアヌスである。

「まさか君のほうから来るとはな。他のアンチクロスが出払っている今を狙ねらったか……」

苦にが虫むしを噛かみ潰したかのような渋しぶい顔で問うてくるアウグストゥス。

それに対し、ネロはキョトンとした表情になる。首を傾かしげ、目を瞬しばたたかせたあと、彼女は呆あきれ顔でつぶやいた。

「アウグストゥスってば自信過か剰じようじゃない？　さっきクラウディウスを殺やったんだけど、もの凄すごく弱かったよ？　あんなの何なん匹びきいてもネロは怖こわくないけど？」

笑うネロの瞳ひとみに光はない。しかも酷ひどく異形じみており、名状しがたい邪じや悪あくを孕はらんでいた。

アウグストゥスは痙けい攣れんさせるかのように頬ほおを引きつらせ、額から多量の汗あせを流し始めた。

それはウェスパシアヌスも同じである。彼等は恐怖心を誤ご魔ま化かすかのように身構えた。

空気が張りつめていく。気が触ふれてもおかしくないほどの緊きん張ちよう感かんの中にありながら、ネロは澄すまし顔で二人の様

子をうかがっていた。緊張感は欠片かけらほども芽生えてはこない。

　アウグストゥスが口を開いた。

「そうだ。そのことについて問い質ただしたい。ネロ。君は何なに故ゆえ、我々に歯向かう？」

「はにゃ？　あんなところに閉じこめておいて、よくもまーぬけぬけと」

「君を幽ゆう閉へいしたのは大グラ導ンドマ師スターだ。そして彼は死んだ。我々がいがみ合う理由はないはずだが？」

　アウグストゥスの話にネロは目を細める。

「……ネロが知らないとでも思ってるの？　失礼しちゃうなー」

　それまで浮うかべていた笑みを崩し、口の端はしを吊つり上げた。あからさまな嘲ちよう笑しようの仕草である。

「Ｃの巫み女こ。ようするにネロは生いけ贄にえなんでしょ？　ネロの魔ま力りよくと中ちゆう枢すうユニットとしてのネームレス・ワンがなければクトゥルーを制せい御ぎよできないはずだよ？　全部お見通しなんだから」

「残念だな。ならば仕方がない」

　アウグストゥスは凄せい惨さんな笑みを浮かべた。そこにはもはや恐怖の色を覗のぞかせてはいない。

「大人しく捕つかまってもらおうか、お嬢じようさん？」

　まずはウェスパシアヌスが行動を起こした。風もないのに外がい套とうが激しくはためく。

「ウィテリウス！」

　叫さけぶウェスパシアヌスの腹部──仕立ての良い白いスーツの上に腫しゆ瘍ようにも似た歪いびつで醜しゆう悪あくな顔が浮かび上がった。人じん面めん疽そである。それは口こう端たんを裂さきながら口を開いた。大きく開かれたその向こう側に、燃えたぎる煉れ

ん獄ごくが姿を現す。咆ほう吼こうする人面疽。同時に口から灼しやく熱ねつする炎ほのおが吐はき出された。それは瞬またたく間にネロを包みこみ、その柔やわ肌はだを嘗なめ回していく。しかし――。

「キミたちってホントに自信過剰。その程度の位階クラスで邪じゃ神しんを操あやつろーなんて無む謀ぼうなんだから……」

　燃え盛さかる炎の中でネロは苦く笑しようすると、体から魔力を放出させる。それは衝しよう撃げき波はとして迸ほとばしった。呼吸するかのような単純な魔ま術じゆつだが、たったそれだけで業ごう火かは跡あと形かたもなく吹ふき消されてしまう。ネロは前まえ髪がみを少し焦こがしただけで、火傷やけど一つ負ってはいなかった。

「うーっ。ちょっと焦げちゃったじゃないかぁ！」

　頬を膨ふくらませ、恨うらめしそうな目でウェスパシアヌスを睨にらみつけたときである。アウグストゥスが現出させた光の槍やりがネロ目がけて飛来した。だがそれは彼女に触れる寸前、あらぬ方向へと屈くつ折せつして飛び去っていく。

「チッ……！」

　舌打ちをするアウグストゥスを嘲あざ笑わらうかのように、ネロは欠伸あくびを噛み殺していた。もはやこのような茶番には飽あき飽きだったのである。だがそう考えているのは彼女だけのようで、アウグストゥスとウェスパシアヌスは戦せん慄りつし、体を小刻みに震ふるわせていた。

「なるほどなるほど……。やはりこの程度では駄だ目めか。この程度の術などものともしないか。流石さすがは、流石は『暴君』。いやはや、まさしく化け物だねえ」

「ウェスパシアヌスも、よーやく解ったみたいだね？　レベルの違ちがいってやつがさぁ」

　ネロは諸もろ手てを突つき上げながら軽く伸のびをすると、その場で体をほぐし始めた。

「そんなわけでクトゥルーはネロが有効利用してあげるよ。夢む幻げん心母は九郎と遊ぶための絶好の玩具おもちやだからね。見み逃

のがしてあげるから、キミたちは尻尾しつぽを巻いてトンズラするにゃー」

　にっこりと微笑ほほえみながらネロは勝利宣言をするが、魔ま人じんたちは引き下がらなかった。

「そうはいかないな」

　アウグストゥスの返答に、ウェスパシアヌスも同調する姿勢を見せた。

　状じよう況きようは彼らのほうが圧あつ倒とう的に不利である。それにもかかわらず歯向かうつもりでいるらしい。

　怪け訝げんに感じたネロは運動を止やめ、二人へと向き直った。そして本気の殺意をぶつける。その途と端たん、壁かべや床に亀き裂れつが生じ、彼女の冷めた眼まな差ざしが空気を凍こおらせていく。

「まだ解んないのかなぁ……。ま、別にいいけどね。キミたちを殺しちゃえば事足りるし」

　ネロは剝むき出しの殺意を二人へと浴びせかける。それは力なき者なら死んでもおかしくはないほどの凶きよう悪あくな重プレツ圧シヤーだったが、二人の魔人はそれに耐たえ―いや、それどころか余よ裕ゆうの笑みすら浮かべていた。

「この期ごに及およんで、まだなにか企たくらんでるの？」

　ネロは眉み間けんにシワを寄せて不快感をあらわにする。

「忘れてはいないか？　此処ここは邪神・クトゥルーの体内だということを！」

　喉のどを鳴らしながら忍しのび笑いを漏もらすアウグストゥスの様子にハッとしたときである。

　突とつ然ぜん、王座の間が強きよう烈れつで凶悪な神気で満たされた。空気が一いつ瞬しゆんにして神気に冒おかされ、形容しがたい腐ふ臭しゆうが広間を満たしていく。その濃のう度どの高い悪あく臭しゆうに目が染しみ、涙なみださえ浮かんできた。

　王座の間が鳴動した。そしてそれを合図に天てん井じよう、壁、床ゆか―ありとあらゆるところから粘ねん液えきまみれの触しよく手しゆが排はい出しゆつされ、ネロへと向かって一いつ斉せいに伸びていく。涙で視界が霞かすんでいたせいか、コンマ数秒、対処が遅おくれた。ネロの右手首に汚お穢わいな触手が絡からみつく。そしてそれを引きちぎる間もなく触手は四し肢しに、首に、しなやかな細い腰こしに巻きついた。体中で蠢うごめく触手の感かん触しよくに不快感を覚えながらも、ネロは術式の演算を開始する。

「この程度でネロをどうこうできるとでも……」

　不意に体から力が抜ぬけ落ち、膝ひざから崩くずれ落ちそうになる。触手が力を吸い上げているのだろう。魔力が流出していくのが解る。強ごう引いんで一方的な略りやく奪だつ行こう為いに体が倒たおれかけるが、床に沈しずむことはなかった。触手が彼女の体を支え、それを許さなかったのである。

「あ……ああ……あっ……」

　触手は蠕ぜん動どう運動にも似た動きをしながらネロの魔力を吸い出し続ける。体から魔力が―気力が抜け落ちていく。やがて体どころか指一本すら動かせなくなった。意識が急速に遠ざかり、視界に霞かすみがかかってくる。

　そんな状況下でネロは見た。広間を満たす触手の森の中心部。王座の前に佇たたずむ少女の姿を。

　その少女は虚うつろな瞳ひとみでネロを見つめている。少女の色オ違ツいドのア目イには見覚えがあった。

「……ルルイエ……異本……ッ！」

　ネロは【ルルイエ異本】の少女に手を伸ばしかけるが、それがかなうことはなかった。精根つき果てた彼女の意識は深しん淵えんへと向かって落ちていく。

「それではおやすみだ、ネロ。二度と目覚めることもないだろう」

　アウグストゥスの哄こう笑しようを耳にしながら、ネロの意識は暗転した。

+

　ネロの姿を見下ろしながら、アウグストゥスは満足げな笑えみを浮うかべていた。

「ネロ。君の意識は神の下もとで死をも超こえる夢を見るのだ」

　アウグストゥスのつぶやきはネロの耳には届くことはない。触手に絡からみつかれたまま身み動じろぎ一つしないネロからは重圧の片へん鱗りんすら感じられなかった。魔ま力りよくを根こそぎ奪うばわれた今の彼女は、どこにでもいる少女と同じでしかない。それでも先ほどの出来事を考えると冷や汗あせが流れる。マスターテリオンと肩かたを並べるとまで言わしめたその力は驚きよう愕がくに値あたいし、このような状況下でなければ確実に殺されていただろう。

「なるほど。ブラックロッジを相手に牙きばを剝むくだけのことはある」

　アウグストゥスは静かに溜ため息を漏らした。

「どうだ、どうだね？　素す晴ばらしいだろう？　これこそ『暴君』。これこそネロ。これこそムーンチャルイド計画のナンバー９。最後にして最高傑けつ作さく！　私の研究もなかなかのものだろう？」

　ウェスパシアヌスは顎あご鬚ひげをなでつけながら、己おのれの作品であるネロへと目を向けた。

「飼い犬の手た綱づなはしっかり握にぎってもらいたいがな。ムーンチャイルドは制せい御ぎよがきかなくて困る」

　嫌いや味みを言ったつもりなのだが、ウェスパシアヌスは気にする素そ振ぶりすらなく笑っていた。

「ははは っ。いやはや、手厳しい。それを言われると立つ瀬がないな」

　アウグストゥスは嘆たん息そくすると、さらに続ける。

「これでCの巫み女こと中ちゆう枢すうユニット、そして【ルルイエ異本】がそろったわけだ」

「それは、それはつまり、我らの悲願がかなう時がきたということだ」

「そう。遂ついに我々は神の力を手にすることができる！」

　アウグストゥスは歓かん喜きに打ち震えながら叫さけんでいた。ウェスパシアヌスも満足げにうなずく。

　そして魔人たちの傍かたわらでは【ルルイエ異本】の少女が表情もなく佇んでいた。

「る・りえー……くとはぅるはぅ……ら……ら……」

　少女は祝詞のりとのような言葉を口ずさんでいる。それに応こたえるように触手がピクリと動いた。

　アウグストゥスは少女に微笑ほほえみかける。

「さあ、すべてはそろった！　【ルルイエ異本】よ、お前の愛する神が覚かく醒せいの時を迎むかえるぞ！」

「かみ……さま……いあ……いあ……」

【ルルイエ異本】は異界の言葉で歌い続ける。その歌声に心ここ地ちよさを感じながらアウグストゥスは笑う。それはやがて下げ卑びた笑いへと変化していった。体は火ほ照てり、麻ま薬やくにも似た高こう揚よう感かんに支配されていくのが解る。それは室内に充じゆう満まんした強力な神気のせいか、それとも―。

　アウグストゥスとウェスパシアヌスが笑い続ける中、ささやかな変化が起きていた。

　すべての力を失ったネロの口元が微かすかに動いたのである。

　それは嘲ちよう笑しように歪ゆがんでいた。

+

瑠璃は十じゆう字じ架かに磔はりつけにされたまま空を飛んでいた。

激しい風圧に呼吸をすることすらままならなかったが、脅きよう威いからは確実に遠ざかっているようだ。薄うす目めを開けるとベルゼビュートの姿を遥はるか遠方に確かく認にんできた。

軽い振しん動どうとともに風が止やんだ。

おそるおそる目を開けると、白い天使が十字架を地面に突つき刺さすところだった。

メタトロンは即そく座ざにビームセイバーを走らせ、瑠璃の手足の拘こう束そく具ぐを切り落とした。解き放たれ、崩くずれ落ちる瑠璃の体をメタトロンが抱だきとめる。

「あ、ありがとうございます」

瑠璃は深々と頭を下げた。

《礼には及およばん。それより、ここからならシェルターにも戻もどれるはずだ》

言われて辺りを見み渡わたした瑠璃は、そこがアーカムシティの市街地であることに気がついた。一面、瓦が礫れきの山ではあるが、倒とう壊かいを免まぬかれているビルなどからその面おも影かげを見ることはできる。だがそこは廃はい墟きよりも酷ひどい荒あれ具合であり、繁はん栄えいを誇ほこったかつての町並みはどこにもない。あるのは黄昏たそがれ時どきを迎えた町と、砂すな埃ぼこりと死し臭しゆうを孕はらんで吹ふき抜ぬける風だけである。

やり切れなさに胸が締しめつけられていく。それでも気を取り直して辺りを見渡した瑠璃は、地面にポッカリと口を開いている穴へと目を向けた。シェルターへと続く地下道への入り口である。

《さあ、早く私から離はなれろ》

メタトロンは瑠璃の体をそっと地面に下ろした。

「……え？」

　わけが解らず首を傾かしげたときである。

　黒い影かげのようなものが頭上を横切ったかと思うと、かろうじて立っている電柱の先せん端たんにそれは舞まい下りた。黒い鎧よろいを身にまとい、漆しつ黒こくの翼つばさを持つ天使・サンダルフォンである。

《気はすんだか？》

　サンダルフォンは静かに語りかけてきた。だがそれ故ゆえに、内に秘ひめられた殺意に瑠璃は身を凍こおらせる。常じよう軌きを逸いつした気配に体は硬こう直ちよくし、足がすくんで一歩も動けなくなった。

　そんな彼女の背をメタトロンがそっと押した。呪じゆ縛ばくから解放されたかのように前へと押し出される瑠璃。振ふり向く瑠璃にメタトロンはうなずきを返すと、サンダルフォンへと向き直った。

《ああ、これでいい。待たせたな》

　メタトロンの装そう甲こうが音を立てながら変形し始めた。白く眩まばゆい光とともに全身から武装が現出し、溢あふれ出た光がメタトロンの体を包みこみ、輝かがやかせる。その姿は天使王そのものだった。

《ようやく本気か！　本気になったか！　そうだ、それでよい！》

　サンダルフォンの体から闇やみ色の光が放たれる。自然界に存在しない黒の光はサンダルフォンが燃え上がらせた闘とう気きの色だ。その姿は堕だ天使そのものである。

《その姿のお前を殺してこそ、己オレはようやく至高の領域に到とう達たつするのだ！》

《修しゆ羅ら道どうの果てに至高の領域など存在しない。そう、なにもありはしない。なにも……》

　そこで会話は途と切ぎれた。

　そしてそれをキッカケに天使たちは空へと舞い上がると、爆ばく

音おんを残して瑠璃の視界から消え失うせてしまう。

　足を止め、空を見上げた瑠璃の胸中に、郷きよう愁しゆうにも似た切なさが過よぎっていく。それはたぶん天使たちの姿に憐あわれみのような感情を抱いだいたからだ。地上を追われて天へと帰っていくかのようなその姿に……。

　そう。どんなに望んだところで地上に天使が帰る家はないのだ。

（せめて翼さえ失えば、地上は彼等を受け入れてくれるのかもしれない）

　愚ぐにもつかぬことが脳のう裏りをかすめ、自じ嘲ちようする。だが少しだけ思考を続ける。

（ならデモンベインはどうなのだろう？）

　祖父・覇は道どう鋼こう造ぞうは魔まを討うつものだと言った。外げ道どうの知識の集大成である魔導書を用い、魔を斬きるために魔の領域へと踏ふみこむのだと。

（魔を斬ることが魔となることなら、デモンベインの居場所は地上にあるのだろうか？）

　答えを出せぬまま瑠璃は走り出した。

+

　幸いにも地下道は無事だった。

　とは言え床ゆか、壁かべ、天てん井じようともに大小様々な亀き裂れつが生じており、崩れずにいるのが不思議なほどである。長居は無用だったが、駆かけ抜けられるような状じよう況きようでもない。床に散乱した様々な破片は凶きよう器きであり、加えて辺りは暗かった。瑠璃は壁を頼たよりに一歩一歩、慎しん重ちように歩を進めるより他ほかなかったのである。

　百メートルほど移動しただろうか。前方から非常灯の微かすかな

明かりが見えてきた。瑠璃はホッと溜ため息をつくと、明かりを頼りに歩き出す。導かれるようにその下へとたどり着いた瑠璃は、鋼鉄製の頑がん強きような扉とびらの前に立った。そしてそれに設置されたセンサーに手を添そえる。扉は鈍どん重じゆうな音を立てながら横にスライドし、シェルターへと道を開いた。

シェルター内は絶望と失望、そして死の臭においで満ちていた。アンチクロスの侵しん入にゆうを許し、虐ぎやく殺さつが繰くり広げられたそこは、すでにシェルターとしての役目を果たしてはいなかったのである。

人々が発する負の感情は閉とざされた空間の中で沈ちん殿でんし、澱おりと化し、より破は滅めつ的な未来へと向かっているようにも感じられた。市民の中には覇道財ざい閥ばつの警備兵も含ふくまれていたのだが、訓練された彼等でさえ絶望に打ちひしがれているのだ。暗い気持ちになるのも無理からぬことである。

加えて上空には旧支配者・クトゥルーが座していた。いまだ深い眠ねむりに就ついているとはいえ、存在するだけで打ちのめされそうになる凶きよう悪あくな神気は、心身ともに疲つかれ果てている住民たちを絶望させるには十分すぎた。

最悪の状況である。瑠璃は励はげます言葉すら思いつかなかった。だが自分が挫くじけるわけにはいかない。絶望的な状況を打破すべく死にものぐるいで抗あらがっている者たちがいた。彼等の心が折れぬ限り、魔を断つ剣けんが折れぬ限り、彼女の心もまた折れることはない。

そのとき瑠璃は啜すすり泣く声を聞いた。そちらへと目を向けると子供たちが数人、廊ろう下かの隅すみで縮まっている。周囲に親の姿はなく、励まそうとする大人もいない。迷子になったのか、それとも親を殺されてしまったのか……。瑠璃は子供たちの下もとへと足を運び、目線を合わせるために屈かがみこんだ。

「みんな、大だい丈じよう夫ぶ？」

余計な不安を与あたえぬように、そっと、腫はれ物にでも触ふれるかのような丁てい寧ねいさで語りかける。

それに安あん堵どしたのか子供たちはしゃくり上げるように泣き始め、やがて落ち着いた。

「ライカ姉ちゃんが戻もどってこないんだ」

　子供の一人がポツリとつぶやく。

　その名には聞き覚えがあった瑠璃だが、今一つ判然としない。関係者の誰だれかか、それともその知人か……。どちらにせよ調べればすぐに解るだろう。

「お姉ちゃんに任せて。きっと見つけてあげるから」

　瑠璃の話に子供たちの顔がパッと華はなやいだ。その笑え顔がおだけで気力が満ちてくる。

（この子たちの未来を奪うばわせるわけにはいかない。絶対に）

　その決意を胸に、瑠璃はゆっくりと立ち上がった。

+

　夢む幻げん心母の中心部。祭さい壇だんの間の真下に位置するそこは神の心臓部・心臓の間である。

　肉の壁に囲まれた広大な空間は鮮せん血けつの海のようであり、実際、多量の血液で満たされていた。

　室内はむせ返るほど血なまぐさい。空気は粘ねばり気を帯び、微かに血の色に染まっているほどだ。

　そんな心臓の間の中心部。その名に相応ふさわしい物体が天てん井じようにはあった。巨きよ大だいな肉の塊かたまり―。脈打ち、鼓こ動どうし、大気を震ふるわせ、鮮血の海を波立たせるその肉につ塊かいは夢幻心母の心臓であり、模して造られた神の心臓である。

　視界を覆おおい隠かくすほどの巨大な心臓の下には二体の鬼デウ械ス・神マキナの姿があった。レガシー・オブ・ゴールドとサイクラノーシュである。神を模した二体の威い容ようも、この広大な空間にあっては矮わい小しような存在でしかない。

レガシー・オブ・ゴールドの頭頂部とサイクラノーシュの装そう甲こうの上には、それぞれアウグストゥスとウェスパシアヌスが立っていた。アウグストゥスの腕うでの中には眠るネロが、ウェスパシアヌスの腕の中には【ルルイエ異本】の少女が抱だかれている。

「うむ。では、それでは取りかかるとしよう。【ルルイエ異本】よ……」

ウェスパシアヌスが声をかけると、異界の少女は人外の言葉を歌うように発した。

「くする……るいえ……ふたぐん……」

少女の体が魔導書の頁ページとなって解ほどけ、紙かみ吹雪ふぶきと化して天井へと舞まい上がっていく。

ウェスパシアヌスは満足そうにうなずくと、懐ふところから書名のない黒い魔導書を取り出した。

「強制接続アクセス―。ネロの代理人・ウェスパシアヌスの名において命ずる。模して造られし名もなき神よ。いでませい！」

皮の装丁につけられた掛かけ金がねが独りでに外れ、頁が解けて天へと向かっていく。やがてその黒い魔導書―【無む銘めい祭さい祀し書しよ】の頁は【ルルイエ異本】の頁に導かれて混ざり合った。

血の色で染め上げられた空間に閃せん光こうが走る。【ルルイエ異本】と【無銘祭祀書】の頁は遺伝子のような二重螺ら旋せんを描えがきながら心臓の下へと昇のぼり、その外周を輪のように取り囲んでいく。

そして怪かい異いは起きた。心臓の中心部が縦に裂さけ、膨ぼう大だいな鮮血が滝たきのごとく溢あふれ出す。そしてその裂け目から押し出されるかのように、神しん殿でんのごとき巨大な威容が姿を現した。ネームレス・ワンである。裂け目から上半身だけを晒さらしているそれは、溢れ出す鮮血で濡ぬれそぼっている。それでも装甲は血に染まらず、神こう々ごうしいまでの白い輝かがやきを放っていた。

「ついに神を我わが手で操あやつることができる。何者も抗えぬ窮

きゆう極きよくの力だ！」

　アウグストゥスの高笑いが辺りに広がる中、ネームレス・ワンのコックピットが静かに開いた。その内部は触しよく手しゆで埋うめつくされており、搭とう乗じよう者しやを求めるかのように怪あやしく蠢うごめいている。

　アウグストゥスは供く物もつでも捧ささげるかのように恭うやうやしくネロの体を前方へと差し出した。彼女の体は淡あわい光を放ちながら宙に浮うき、ネームレス・ワンへと引き寄せられていく。

　ネロの体がコックピットまで迫せまったときだ。待ちかねたように触手がいっせいに這はい出し、彼女の体へと絡からみついた。そして内部へと強ごう引いんに引きずりこんでいく。うねる触手がネロの衣服を剝はぎ、白く瑞みずみずしい柔やわ肌はだがさらけ出される。粘ねん液えきまみれの触手が少女の体をまさぐり、蹂じゆう躙りんし、垂れる粘液が体を汚よごしていく。

　息苦しいのだろう。ネロの眉み間けんにシワが寄る。だが彼女のことなど気にも留めず、触手は執しつ拗ように少女を嬲なぶり続けた。白い肌が紅潮していく。口からは喘あえぎ声が漏もれ、ネロは苦痛とも快楽とも取れるような切ない表情を浮かべながら身み悶もだえしている。見開かれた目は彷徨さまよい、焦しよう点てんはまるで定まらない。覚かく醒せいしてはいないようだが、少女の肉体は素す直なおな反応を示している。ネロは涙なみだを流し、涎よだれを垂らしながら、絶え間なくもたらされる快楽の虜とりことなっていた。

「神がもたらす快楽だ。存分に、存分に甘受したまえよ」

　嘲あざ笑わらうウェスパシアヌス。

「ん……！　んんんんっ！　んーっ！」

　触手の動きが激しさを増す。そして―。

　ネロは跳はねるような感じで体を痙けい攣れんさせたかと思うと、四し肢しをだらりと垂らしてグッタリとしてしまう。生命力を根こそぎ奪われたようだが死してはいない。ほとんど生気は感じられないが、彼女は恍こう惚こつの表情を浮かべながら消えそうなほど儚はかない吐と息いきを漏らしている。

「神とつながったな」

　アウグストゥスは笑えみを浮かべながらネームレス・ワンへと目を向ける。存在するだけで圧あつ倒とうされてしまうその機体から爆ばく発はつ的な魔ま力りよくが噴ふん出しゆつしていた。

　神の心臓が激しく鼓動する。落らく雷らいにも似た心音が空間を震わせ、血の海がわななき、波立ち、時化しけていく。光が広大な空間を満たした。

「中ちゆう枢すう部の完成だ……。見ろ。これこそが神を支配する法則だ！　素す晴ばらしい！　ブラックロッジの論理は神さえも従わせるのだ！」

　両手を左右に広げながら哄こう笑しようするアウグストゥス。彼の顔に浮かぶのは、魔に魅みせられた者だけが持つ狂きよう気きである。

　そんな魔人の姿をウェスパシアヌスは静かに見つめていた。その瞳ひとみがスッと細くなり、紳しん士しらしからぬ下げ卑びた笑みが浮かんだ。

　神の心臓が鼓動を早める。脈打つ度たびに迸ほとばしる超ちよう越えつ的てきな魔力が邪じや神しんの全身を巡めぐっていく。

　クトゥルーが覚醒するのも時間の問題だった。

　歌が聞こえる。

　祝詞のりとが聞こえる。

　別次元から響ひびいてくる不可思議な旋せん律りつに乗り、触手は蠢き続けていた。

「ふんぐるぅい、むぐるうなふぅ、く・りとぁー・りとぁー、ら・いらー、うがふなぐる、ふたぐん……」

　ネロは嬲られ、犯おかされ、弄もてあそばれながら、ひっきりなしに訪おとずれる快楽の虜となっていた。

そんなネロの瞳が、光を失った双そう眸ぼうが歌い手の姿を求めてゆっくりと動く。

その少女──【ルルイエ異本】の精せい霊れいは触手の向こう側にいた。彼女もまた裸ら体たいを晒し、触手に嬲られ、快楽に激しく身悶えしている。少女の口から導き出されるのは熱い吐息と異界の歌のみ。

ネロは悶えながらも歌い続ける少女の姿を見るともなしに眺ながめ続けていた。

理性を失い、快楽に酔よいしれるネロの口元に笑みが浮かび上がる。

それは嘲ちよう笑しようを形作っていた──。

+

バルザイの偃えん月げつ刀とうでベルゼビュートを一刀両断にし、自ク動ト式ウ拳グ銃アの魔ま弾だんでティベリウスもろとも爆ばく砕さいさせていた九郎だが、はびこった危機感を胸中から払ふつ拭しよくできずにいた。

それは上空に座するクトゥルーから感じる重圧ではない。もっと別のなにかがシコリのように残り、喩たとえようのない不安感を与あたえてくるのだ。

そしてその感覚は気のせいなどではなかった

「……見ろ」

二つに分断されたベルゼビュートの機体。怪異はそこで起きていた。

焼けただれていた装そう甲こうの表面に錆さびが浮き上がり、凄すさまじい勢いで腐ふ食しよくし始めていたのである。

「腐ふ敗はいしているのか？」

鋼鉄の装甲に亀き裂れつが走り、そこから緑色をした汚お濁だくのような肉にく汁じゆうが染み出してくる。

ベルゼビュートの表面が弾はじける音とともに砕くだけた。中に収められていた腐ふ肉にくが溢あふれ出し、嗅きゆう覚かくが麻ま痺ひしかねないほどの悪あく臭しゆうが辺りに広がっていく。吐はき出された腐肉は地面を埋うめつくしたかと思うと膨ぼう張ちようを始め、摘てき出しゆつされた腫しゆ瘍ようのごとく地面に横たわった。

「なにが起きているのかは解わからぬが……。まだ倒たおしたことにはならんようだな」

腐肉の中では人間ほどもある巨きよ大だいな蛆うじ虫むしが何百匹ぴきも蠢うごめいている。それは腐肉を食くらい、さらに大きさを増していく。正気を失いかねないほどのおぞましい光景から自然に目を背そむける九郎。

《大十字……九郎……アル……アジフぅぅぅぅ……》

どこからともなく品性の欠片かけらもない声が響いてきた。

「あのクソ野や郎ろう……。あれだけやっても死なねえのかよ」

《【妖よう蛆しゆの秘密】を操あやつる……アタシは不死身……殺せない……アンタなんかに……このアタシが……コロセルものくあぁぁあああああああっ！》

悲ひ壮そう感かんすら漂ただようティベリウスの叫さけびが轟とどろいたかと思うと、ざわめきにも似た虫の羽音が聞こえてきた。一匹や二匹ではない。何千、何万という虫の群れが奏かなでる不快なノイズである。姿こそ確かく認にんできなかったが、それは確実に迫せまっていた。

「──くる！」

唐とう突とつに腐肉と化したベルゼビュートが爆はぜた。

辺りに肉片がぶちまけられ、そこから黒い群むら雲くもが噴出する。だがそれは雲などではない。明確な意志の下もとに蠢くそれはとぐろを巻きながら広がったかと思うと、ベルゼビュートのような形を形成してデモンベインの前に立ちはだかった。ベルゼビュート

の影かげのようなそれは無数の蠅はえの集合体である。

《ぐぶるぶぼぎゃあああああああああ！》

　ティベリウスの絶ぜつ叫きようが木こ霊だまし、それに合わせるように蠅が吠ほえた。

　怖おぞ気けを誘さそう異様な旋律が奏かなでられたかと思うと、ベルゼビュートを中心に怨おん念ねんが渦うずを巻いて迸っていく。やがてそれは集約し、圧縮された瘴しよう気きの塊かたまりを作り出した。

　慟どう哭こくと怨えん嗟さに満ちた塊が断だん末まつ魔まの叫びを上げる。凝ぎよう結けつした気配でしかなかったその表面に無数の人間の顔が浮うかび上がった。老ろう若にやく男なん女によ、様々な顔が入り乱れてはいるが、皆みな一様に苦く悶もんの表情を浮かべている。怨おん霊りよう呪じゆ弾だん。最強にして最悪なベルゼビュートの必殺技わざである。

　そして九郎の脳内に、あの声が響き渡わたった。

　―ママぁ。

　痛切で悲ひ哀あいに満ちた幼子の声を耳にしたとき、九郎の中でなにかが焼き切れた。

《アンタらも呪弾の糧かてにしてあげるわッ！　さあ、汚きたならしい怨おん霊りようになり果てちゃいなさい！》

　怨霊呪弾が放たれた。それはつんざくような悲鳴を引きずりながらデモンベインへと迫る。

　その威い力りよくは嫌いやと言うほど知りつくしている九郎だが、不思議と心は落ち着いていた。

　恐おそれはない。恐れる理由もない。九郎は冷静にデモンベインを操あやつり、その拳こぶしを重ね合わせる。魔ま力りよくを宿した光が噴ふき出した。両の拳を用いて宙に五ご芒ぼう星せい形を描

えがく。拳にまとった清せい浄じような光が、瘴気が吹ふき荒すさぶ不ふ浄じような世界に軌き跡せきを描き出す。

　──旧エルきダー・印サイン。

　敵意と脅きよう威いを払はらう結印である。九郎はそれをデモンベインの前面に展開させる。

　怨霊呪弾が唸うなりを上げながら衝しよう撃げき波はを叩たたきつけてきた。だが旧き印は揺ゆるがず、光は陰かげることを知らない。さらに押し寄せてくる圧あつ倒とう的な死の気配──。だがデモンベインには届かない。

《グッ……あ、アアああアアアア悪あああああああああアア！》

　呻うめきとも焦あせりとも取れるティベリウスの咆ほう哮こうが響ひびき渡り、より凶きよう暴ぼう性を増した怨念が怒ど濤とうの波状攻こう撃げきを仕し掛かけてくる。瘴気の黒と旧き印の白が激しくせめぎ合う。

《滅ほろびろ……滅びロ……ホロビロォォォォォォォォォォォ！》

　瘴気が爆ばく砕さいする。撒まき散らされた怨念は空間を吹き飛ばし、大地を汚けがし、街を朽くちさせていく。そしてその凶きよう悪あくなエネルギーの奔ほん流りゆうにいるのはデモンベインである。

《あは……ひぃはははは……っ！　腐くされ腐れ腐れ腐れ爛ただれろ！　腐って妖よう蛆しゆの苗なえ床どことなれ！》

　ティベリウスの壊こわれた笑い声が聞こえてくる。

《アタシの糧となれぇぇぇぇぇぇッ！》

　断末魔の叫びを裂さいて響くティベリウスの声を耳にしながら、九郎は奇き妙みような感かん慨がいに囚とらわれていた。そう。あの死ぬことができない屍しかばねに対し、憐あわれみのような感情を抱いだいていたのである。

（こんなものでデモンベインを倒せるとでも思っているのか？）

　怨霊がデモンベインを飲みこみ、辺りが闇あん黒こくに包まれて

いく。

《おーっほほほほほほほほほほほほほほほほほほほほほっ！》

　勝利を確信したのだろう。ティベリウスは安あん堵どに満ちた哄こう笑しようを発した。

（哀あわれだよな、お前……。本当に哀れだよ）

　それ以外の感情が湧わいてこない。

　デモンベインに衝しよう撃げきが襲おそいかかる。

　爆ばく発はつにつぐ爆発。陵りよう辱じよくにつぐ陵辱──。

　憤ふん怒ぬの爆ばく風ふうを叩きつけられ、怨えん嗟さの炎ほのおに旧き印が焼かれる。

　だがそれほどの蹂じゆう躙りんに晒さらされてもデモンベインは無傷だった。それを守る旧き印の輝かがやきは微み塵じんも衰おとろえてはいない。

（この程度か。他人の命を貪むさぼって得た力と永遠ってのは、こんなもんか）

　九郎は下した唇くちびるを噛かみしめる。

（こんな脆ぜい弱じやくな力を得るために多くの人を犠ぎ牲せいにしたのか……）

　沸ふつ々ふつとした怒いかりが心の中で燻くすぶっているのが解わかる。

（もういいよ。疲つかれただろう？）

　姿こそ確かく認にんできないが、九郎はティベリウスへと問いかける。

（もう終わりにしてやるよ。俺がお前を否定してやる）

　九郎は闇黒しか映し出さないモニターを睨にらみつけながら思案する。

（どうしてやろう？　どうやって死なないお前を滅ぼしてやろう？）

　答えは即そく座ざに導き出された。

（安心しろ。手段は無限にある。例えば、例えばだ）

　そのときである。突とつ然ぜん、九郎は雷かみなりに打たれたかのような衝撃に貫つらぬかれ、体を跳はね上げた。

　なにが起きたのか理解できない。理解できなかったが、九郎は声を聞いた。頭の中へと直じかに響いてくる異い形ぎようの声を……。

　──さあ、見せてもらうよ。九郎君にアル・アジフ。

　──時の濁だく流りゆうに飲まれ、鍛きたえに鍛えられた術者と最強の魔ま導どう書しよの力がどれほどのものか！

　──今回こそ、今回こそ僕を悦よろこばせてくれ！

　九郎の意識は混こん沌とんとした闇の中に沈しずんだ。

+

　一片の光すらない混沌の闇に九郎は囚われていた。

　周囲にはなにもない。自分の姿ですら認識できぬほどの深い闇が垂れこめている。

　落ちているのか、それとも昇のぼっているのかさえ判然としない。ただ常識では理解できない角度を向いており、そこへと向かって進んでいるようだ。

　あまりにも異常だった。ここは空間も時間も理解できぬ鎖とざさ

れた領域である。

人じん智ちを超こえた混沌の中で心が朽くちていく。理解を超える異形が魂たましいを冒おかしていく。

九郎は必死で意識をつなぎ止めるが、そんな切なる想おもいを嘲あざ笑わらうかのように異形の闇が心を貪っていく。存在するかも定かではない手足を用いて抵てい抗こうを試みるが、それは無ぶ遠えん慮りよにも牙きばを立てて食くらいついてきた。意識が霧む散さんするかのような絶望的な感覚に襲われながらも、九郎はそれらを必死に掻かき集め、自我を形成し続けていた。

そんな苛か烈れつな戦いの果て―。漆しつ黒こくの闇の中、一ひと粒つぶの光が唐とう突とつに生まれた。

九郎は光を求めて手を伸のばす。

それは《筐はこ》だった。

均整のとれない不格好な筐の隙すき間まから僅わずかに光が漏もれている。九郎の手はあっさりと筐に触ふれ、その途と端たん、音もなく蓋ふたは開いた。そっと中を覗のぞきこむ。

それは異様な物体だった。筐の中心部に浮うかぶ黒い結けつ晶しよう体たい―。七本の支柱に支えられたそれは不ふ揃ぞろいの平面で構成された多面体であり、その表面には血管にも似た紅い線が幾いく本ほんも走っている。鉱物でありながら脈動する生命の生々しさを感じさせる奇妙な物質……。光はその結晶体から発せられており、それと認識した瞬しゅん間かん、光が爆ばく裂れつする。黒い結晶体を光源とした異形じみた光は、悶もだえ、狂くるい、乱らん舞ぶしながら九郎へと迫せまり、飲みこんでしまう。

光の奔ほん流りゅうに流される中、九郎は異形の声を聞いた。それは祝詞のりとのような呪じゅ詛そにも似た異界の言葉であり、人間の理解を超えた異形の声である。だがそれも、やがては理解可能な言葉へと変化を遂とげていく。

不意に意識が覚かく醒せいした。あまりにも不意な出来事に白昼夢でも見ていたのではないかとさえ思えたが、すぐに思考は正常に戻もどる。状じょう況きょうの分ぶん析せきを開始するまでもなく、九郎はそこがデモンベインのコックピットだと気がついた。

九郎とアルが同時につぶやく。

「輝Shiくningトラ Traペゾpezoヘドhedロンronだと？」

―然しかり！

どこからともなく聞き覚えのある艶つややかな女の声が響ひびいてくる。

そして戦場は異界と化した。

闇やみが集つどう。

闇が集う。

闇が集う。

歪ゆがんだ、狂った、悶える、異形の闇が集う。

光が集う。

光が集う。

光が集う。

荒あらぶる、吼ほえる、嘲笑う、異形の光が集う。

闇の極限に位置する。

光の極限に位置する。

世界が異界へと──あり得ぬ世界へと姿を変えていく。

乱舞する光と闇。

世界を侵しん食しよくしていくそれは世界に綻ほころびを生み、ありとあらゆる矛む盾じゆんの巣そう窟くつへと変へん貌ぼうを遂げていった。

ここは神々の禁きん忌きである。

そして九郎は知覚する。この場所が決戦場であることを。

いや、一方的な蹂じゆう躙りんを決戦とは呼ばない。ここは処しよ刑けい場じようである。

異様な気配を感じ取ったのだろう。ティベリウスの恐きよう怖ふ心しんが伝わってくる。だがそれは九郎とて同じだった。これからなにが起きようとしているのかまるで理解できない。

だが困こん惑わくする九郎をよそにデモンベインは独りでに動き始める。

（暴走している？）

慌あわててデモンベインの制せい御ぎよを試みるが、まるで言うことを聞かない。制御権を奪うばわれでもしているのか、九郎の意思とは関係なくデモンベインは暴走し続けている。

それはただ定められた仕事をなそうとしていた。レムリア・インパクトを放とうとしているのか、右みぎ腕うでに組みこまれた機関が覚醒する。必ひつ滅めつのエネルギーを秘ひめた右腕が突つき出された。

右の掌てのひらから闇の塊かたまりが現出する。それは周囲の空間をも歪ませる圧あつ倒とう的な闇だった。

「ブラックホール!?」

それはさらに周囲を歪ませ、しまいには次元そのものさえも歪ませてしまう。

　デモンベインの眼前に次元の裂さけ目が広がり、そこからなにかが現れ始めた。デモンベインは手を伸ばし、それを引きずり出していく。

（なんなんだ、こりゃ……）

　それはねじ曲がった神柱のようにも見えるし、狂った神樹、あるいは刃はのない神しん剣けんのようにも見えた。とにかく酷ひどく奇き怪かいな物質である。そしてその中心部には黒い結晶体があった。

「これがシャイニング・トラペゾヘドロンなのか？」

　その名を口にした途と端たん、デモンベインに凄すさまじいエネルギーが流入してきた。四し肢しを引きちぎらんばかりの凶きよう悪あくで凶きよう暴ぼうな魔ま力りよくに機体が悲鳴を上げ、無遠慮に流入してくるそれが九郎の体を蹂躙していく。皮ひ膚ふをめくられるかのような激しい痛みに顔が引きつった。

「ぐあああああああああああ！」

「く、九郎！　なんとか……っ！」

　アルは押し寄せる津つ波なみのような魔力を必死に制御し、その流れをトラペゾヘドロンへと向けようとしていた。その制御に九郎も介かい入にゆうし、彼女の手助けをする。

　暴れ馬のように暴走し続ける魔力ではあるが、協力し合うことでなんとかその流れをトラペゾヘドロンへと固定することができた。それでも機体の中で荒あれ狂う魔力の力は凄まじく、気を強く持たなければ当てられて気絶しかねない。

　だが問題はそれだけではなかった。

「おい……。なんかヤバい感じに膨ふくれ上がってるぞ!?」

　トラペゾヘドロンに集中し始めた魔力が増大している。そこへ魔力を逃にがしているのだから当然だったが、このままでは許容量を超こえて爆ばく発はつしかねなかった。

（どうすれば……）

苦く悩のうする九郎に応こたえるかのようにデモンベインが動いた。

神剣のごときトラペゾヘドロンの切っ先を蠅はえの群れへと向ける。そこで機体の自由が戻った。

「敵にぶつけろと言っているのか!?」

半ば呆ぼう然ぜんとつぶやくアル。

「なんか知らんが、やってやるぜ！」

九郎は制御可能となったデモンベインをベルゼビュートの下もとへと走らせる。

『なによ!?　なんなのよアンタたち！　来るなァァァ！　アタシに近寄るなああぁぁぁぁ！』

トラペゾヘドロンが放つ凶暴性に気づいたのだろう。ティベリウスは半はん狂きよう乱らんで叫さけびまくっている。

雲にも似た瘴しよう気き、そして蠅の群れがデモンベインへと押し寄せてくるが、そのすべては機体に触ふれることさえできずに塵

ちりとなっていく。防ぼう御ぎよ陣じんがあらゆる邪じや悪あくを粉ふん砕さいしているのだ。

『ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！　ひいいいいいいいいいいいいいぃぃぃぃぃぃッ！』

　蠅の群れの中心部からつんざくような悲鳴が聞こえてくる。そちらへと目をやると、球状をしたベルゼビュートのコックピットが浮うかんでいた。

　九郎はトラペゾヘドロンの切っ先をベルゼビュートのコックピットへと突き出した。その瞬しゆん間かん、極限まで膨れ上がっていた力がコックピットを──いや、蠅の群れを飲みこんだ。

　光と闇が奔はしった。それは混じり合い、解け合い、渦うずを巻きながら空間を侵しん略りやくしていく。

『ひぃぎゃらばあああ！　な、なにぃぃぃぃ、これぇぇぇぇぇぇ!?』

　荒れ狂くるう光と闇が空間を引き裂き、虚こ空くうに亀き裂れつが走っていく。やがてそれは破は砕さいし、空間に裂け目を生じさせた。その向こう側にはなにもない。不自然な形をした穴には深しん淵えんのみが存在している。そしてその中に蠅の群れは吸いこまれ始めた。

　裂け目から光と闇が溢あふれ出す。無数の手のようにも見えるそれはベルゼビュートのコックピットをつかみ、亀裂の中へと引きずりこんでいった。

『や、やめてっ！　どこへ連れて行くつもり!?　い、いやあああああ！　そこはいやよおおおおお！　お願い、お願いよおおおおお！　……殺してぇぇぇぇ！　殺してお願いぃぃぃぃ！』

　亀裂の向こう側になにがあるのかは解らない。ティベリウスが気づいたかどうかも判らない。それはトラペゾヘドロンの一いち撃げきを食くらった者にしか識しることのできない恐きよう怖ふに違ちがいなかった。

「他人をさんざん踏ふみにじって手に入れた不死身の体だろ？　だったら、どこまでも面めん倒どうを見るのが道理ってもんだろうが！」

今にも亀裂の中へと落ちていくコックピットを見つめながら、九郎は告げる。

『ひゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！』

尾おを引くような悲鳴を残してコックピットは亀裂の中へと消えていく。同時にトラペゾヘドロンも光となって消失し、異界と化した空間も亀裂の向こう側へと吸いこまれていった。そこにデモンベインだけを残し、一いつ切さい合がつ切さい、裂け目の向こう側へと消え失うせてしまう。

そして異界の出来事などすべて忘れろとでも言いたげに、世界は元の姿を取り戻もどした。

輝くトラペゾヘドロン―。

デモンベインに組みこまれていた形けい跡せきはなく、データとしても存在してはいない。

今ごろになって戦せん慄りつが走る。顔が青ざめ、全身から冷ひや汗あせが噴ふき出してきた。

「シャイニング・トラペゾヘドロンだと……。なんなのだ、これは？」

アルの問いに答えられる者はいなかった。

+

夢む幻げんと現うつし世よの狭はざ間まで―何処いずことも知れぬ空間で、その様子を見守っていたモノがいる。

それは女だった。

仕立ての良いスーツを身にまとった長身痩そう軀くの美女・ナイアである。

だがそれは人間ではありえない。限りなく純じゆん粋すいな邪悪を孕はらんだその軀からだからは異形の闇やみが噴ふん出しゆつし、それによって周囲の景色は醜みにくく歪ゆがんでいたのである。

ナイアは笑っていた。泣きながら笑っていた。

それは永きに亘わたる願いをかなえた者の純粋な感動の涙なみだ。

純粋な喜びの涙──。

だがそれが包ほう括かつするものは、邪悪。

窮きゆう極きよくの邪悪。

真の邪悪であるが故に濁にごりがない。

そういう純粋。

「遂ついに……終ついに……！」

声が感動で打ち震ふるえる。

「やはりだ！　九郎君！　やはり今回の君がそうだったんだ！　大導師殿どの！　終に世界は君と並ぶ者を生み落としたよ！」

歓かん喜きの衝しよう動どうが体を突つき抜ぬけていく。

「来たる来たる来たる！　切望の時が来たる！

世界を血に沈しずめ、血の海の上に屍しかばねを積み上げ、幾いく星せい霜そう！

腐くされ堕おちる世界を苗なえ床どこに更さらなる腐ふ敗はいの世界を育はぐくみ、幾星霜！

嗚呼ああ、次の世界はもっと忌いまわしいに違ちがいない。

嗚呼、次の次の世界はもっともっと呪のろわしいに違いない。

嗚呼、次の次の次の世界はもっともっともっと惨むごたらしいに違いない。

それを繰くり返して未来永えい劫ごう、過去永劫！

幾いく千せん、幾万、幾億回！

終ぞ終ぞ終ぞ──来たる！」

それは愛に似ていた。

純粋でひたむきであるが故に愛に似ている。

躊躇ためらわぬが故に愛に似ている。

省みぬが故に愛に似ている。

「さあ！　始めよう！　だって待ち遠しい、待ち遠しいんだ！

君たちだって望んでいるんだろう!?

終われるんだ……。君たちにとっては、やっと終われるんだ！

そうさ、すぐにでも終わらせてあげるよ！

そう、君たちは本当に素す晴ばらしい子たちだった！

嗚呼、愛いとしい……愛しいよ！」

否、愛が悪に似ているのか……。

ともかく、その邪じゃ悪あくは傀かい儡らいを愛していることに変わりはなかった。

「大十字九郎！」

神を殺す刃やいばを。

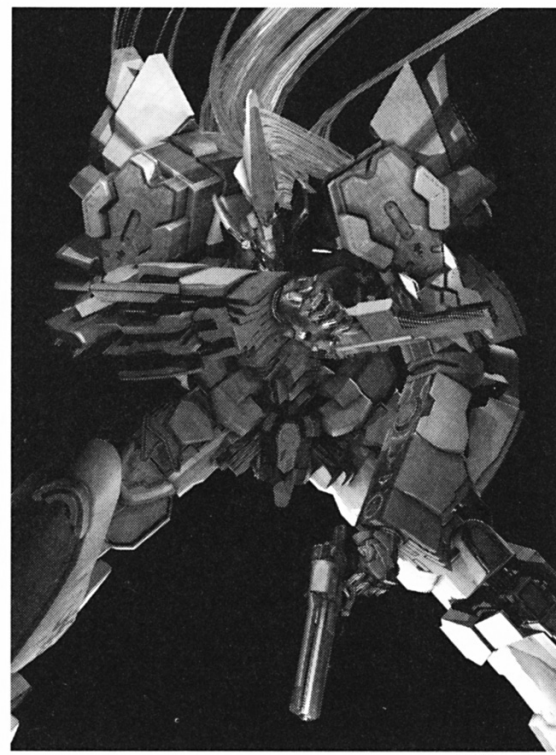
「マスターテリオン！」

神を解き放つ鍵かぎを。

地球狂きよう想そう曲きよく最終楽章の幕があがる──。

第二章

魔人狂舞——血風、爆炎、灼ける大気を呼吸する時間



デモンベイン
搭乗者：大十字九郎＆アル・アジフ

夢む幻げん心母の中心部。

脈打ち、鼓こ動どうする神の心臓の下に二機の威い容ようがそびえ立っている。金こん色じきの鋼はがねを身にまとう卵形の鬼デウ械ス・神マキナ・レガシー・オブ・ゴールドと、円えん盤ばんにも蜘蛛くもにも見える容姿をした鬼械神・サイクラノーシュである。そしてその上には、それぞれの搭とう乗じよう者しやが硬かたい表情で屹きつ立りつしていた。

「……なんだ、今の力は？　なんなのだ、今の力はッッ！」

アウグストゥスが放つ怒ど号ごうとともにレガシー・オブ・ゴールドから衝しよう撃げき波はが迸ほとばしる。それは血の海を爆ばく裂れつさせ、水柱にも似た盛大な水みず飛沫しぶきを上げた。二人の魔ま人じんに血の雨が降り注ぐ。

（あれが紛まがい物のデウス・マキナの力なのか？）

冷静さを欠き、正体を失いつつあるアウグストゥスを尻しり目めに、ウェスパシアヌスは思案する。

（あれではデウス・マキナに匹ひつ敵てきするどころか超ちよう越えつすらしている。あれはまるで、まるで――）

ふと脳のう裏りに金色の眸ひとみを持つ絶対者の姿が浮うかび上がる。その姿を想像しただけでウェスパシアヌスの魂たましいは凍こおりつき、死すら安らぎと感じるほどの恐きよう怖ふ心しんで満たされてしまう。だが彼は即そく座ざに頭かぶりを振ふり、金色の少年の姿を頭から払ふつ拭しよくする。今さら恐怖する必要などなかったからだ。

（落ち着け……恐おそれるな……）

暗示でもかけるかのように、何度も何度も同じ言葉を胸中で繰り返す。

（彼は、彼は死んだ。我々の手で。そう、そうだとも。我々の手で仕留めたのだっ！）

　彼は―マスターテリオンはウェスパシアヌスにとって恐怖の対象とはなり得なかった。それにもかかわらず魂を鷲わしづかみにするかのような威い圧あつ感かんを感じるのである。

　彼は死すらも凌りよう駕がし、遥はるかなる高みから己おのれの愚ぐ鈍どんさを笑っているのではないか。そんな愚ぐにもつかぬことを想像してしまうほどの絶対者がマスターテリオンだった。

「お、おのれぇぇぇぇぇッ！」

「吠ほえるな、アウグストゥス……。落ち着け、落ち着きたまえ！」

「く……ッ！」

　アウグストゥスは爪つめを噛かみながら舌打ちする。

　だが彼が心を乱されるのも当然だ。あまりにも想定外の事態が多すぎた。覇道財ざい閥ばつの秘密基地に大だい打だ撃げきを与あたえることはできたものの、投入した三名のアンチクロスのうち二人が死亡、一人は重傷である。それだけの損害を出したにもかかわらず覇道瑠璃は健在だった。しかも【アル・アジフ】が復活し、デモンベインにいたっては戦力を増している。

（何故なぜだ？　何ど処こで計算が狂くるった？　なにがイレギュラーだったのだ!?）

　計画自体に不備はない。

（落ち着け。大だい丈じよう夫ぶだ。計算は確かに狂った。だが苦境に追いこまれているわけではない）

　最強の手札である邪じや神しんの力はブラックロッジの手の内にあった。いくら覇道財閥が足あ掻がいたところで、この絶望的な力の差を埋うめることなどできはしない。

「……非常に目め障ざわりだ！」

　アウグストゥスは唾だ棄きするかのようにつぶやいた。

「で、どうするつもりだ？」

「こうするまでだ！

　―フングルイ！　ムグルウナフ・クトゥルー・ルルイエ・ウガフナグル……フタグンッ！」

+

　最初、九郎はそれが咆ほう吼こうだとは気がつかなかった。

　何故ならそれが音という領域を超越していたからである。

　それは音を超こえ、物理を超え、霊れい域いきを超え、魂を粉こな微み塵じんに粉ふん砕さいするかのような破は滅めつの咆ほう吼こうだった。

　その絶望的な叫さけびは遥か上空から怒ど濤とうの勢いで降り注いでくる。

　導かれるように空へと目を向けた九郎は、そこに空を覆おおい隠かくすほどの巨きよ大だいな怪かい異いの姿を認めた。クトゥルーである。長きに亘わたる死の眠ねむりに就ついていた神が……その巨大な眸ひとみが静かに開き始めた。その途と端たん、圧あつ倒とう的な邪神の神気が世界に撒まき散らされていく。

　神の眸が街を見下ろした。

　それと目が合った瞬しゆん間かん、九郎の心は木こっ端ぱ微み塵じんに砕くだけ散った。全身が揮発し、魂ごと存在が消しよう滅めつしてしまうような激げき烈れつな感覚が体を貫つらぬいていく。それでも魔術師マギウスとしての精神力が砕くだけた自我の欠片かけらを掻かき集め、かろうじて自己を保つことに成功していた。

　限界を超えて稼か働どうする脳が灼しやく熱ねつする。血けつ涙るいが頬ほおを伝い、鼻血が噴ふき出した。

　九郎は片かた膝ひざをつくと、砕け散ろうとしている魂を必死に

つなぎ止める。集中力が切れた瞬間、自我が粉微塵になるのは明らかだった。

「クトゥルーが……動き出すのか！」

「まずい。まずいぞ、九郎！」

　言われるまでもなかったが、どう対処すべきか判断できない。

　鬼械神ならまだしも、相手は正真正しよう銘めいの神である。それを退しりぞけることなどできるのだろうかと不安が過よぎる。

　相手は強大で強きよう壮そう、凶きよう暴ぼうで凶きよう悪あく、絶対的かつ絶望的な力を持った化け物だ。勝算はない。

　だが悩なやんでいる場合でもなかった。その姿に恐怖し、絶望している暇ひまもない。奇き跡せきを起こしてでもクトゥルーを止めなければならない。

　龍りゆうの頭にも似た触しよく腕わんの一つがデモンベインに牙きばを剝むく。それは裂さけるほど大きく口を開いたかと思うと、そこから破滅の業ごう火かを吐はき出そうとしていた。九郎は即そく座ざにデモンベインを疾しつ走そうさせ、翔かけるような勢いで走り抜ぬけていく。もちろんその程度で逃にげおおせる相手ではない。

　上空に無数の太陽が現出し、続いて雷らい鳴めいが世界に轟とどろいた。邪神の吐と息いきが街を薙なぎ払はらっていく。

　破滅をもたらす閃せん光こうに飲みこまれ、世界は白い闇の中へと沈しずんでいった。

+

「遂ついに……遂に遂に遂に！　遂に！　Ｃ計画が成じよう就じゆする！」

　アウグストゥスは腹の底から笑っていた。そのせいか浅黒い肌は

だは赤しやく銅どう色に染まり、顔は醜みにくく歪ゆがんでいる。怪異ですら恐おそれをなすほどの醜しゆう悪あくさだが、当の本人はそれに気づいてはいない。

「大導師によってではない！　我々の──いや、私の手によってだ！　大いなるクトゥルーが！　強壮たるクトゥルーが！　旧支配者たるクトゥルーが、今、私の手中にある！　そう、今や私は神と同じ領域に立っているのだ！」

　両の掌てのひらに目を落としながら漏もらす忍しのび笑いは、やがて濁だく流りゆうのごとく垂れ流される哄こう笑しようへと変わっていった。理性という仮面で隠されていたアウグストゥスの狂きよう気きが白日の下もとに晒さらされる。

「制せい御ぎよできる！　制御できるぞ！　神の法則ですら私は超ちよう越えつしたっ！」

　全身に漲みなぎる邪神の力。溢あふれ出すほどの神気がアウグストゥスに陶とう酔すい感かんをもたらしていた。

「さあ、少しだけ遊んでやる！」

　アウグストゥスの命令に応じ、統一性を得たクトゥルーの触しよく腕わんがいっせいに動き出す。龍の首が眼下を見み据すえ、巨大な口を開いた。強酸性の涎よだれが雨となってアーカムシティへと降り注いだ。

「せいぜい足あ掻がくがいい……デモンベイン！　覇道財閥！」

+

　世界が白い闇に没ぼつする中、九郎は失神しかねないほどの強きよう烈れつなＧに耐たえていた。

　あらゆる角度から襲おそってくる凶暴なＧで顔は歪み、内臓が捻ねじれ、押し潰つぶされていく。体中の血液が上へ下へと忙せわしなく移動し、その度たびにレッドアウトとブラックアウトが繰くり返される。戦せん闘とう機きのパイロットがジーロックで失神する

ときの感覚に似ているかもしれない。そんな余計なことが脳のう裏りをかすめるが、頭を働かせることで意識を保つことができた。

　そのときである。すべてを超越するかのような激しい神気が機体をかすめていくのが判わかった。霞かすむ視野の中で判然とはしないが、それに捕つかまっていたら跡あと形かたもなく消滅していただろう。

　凶悪なＧに体が慣れてきたのだろうか。徐じよ々じよに視力が回復していく。その途端、九郎は目を見開いた。街が遥はるか下方へと遠ざかっていたからだ。デモンベインは空を翔ていたのである。

（飛んでいる!?）

　九郎が仰ぎよう天てんしている間にも、デモンベインはぐんぐん上じよう昇しようし続けている。

「凍いてつく荒こう野やより翔とび立つ翼つばさを我に──シャンタク！」

　アルの叫びに応じて魔ま力りよくがデモンベインの内部を疾走していく。それは背面へと集中していた。そちらを注視すると、鋼鉄の鱗うろこを幾いく重えにも重ねた翼を確かく認にんすることができた。

「こいつはっ！」

「妾わらわの本来の　鬼デウ械ス・神マキナ・アイオーン。その飛行ユニット『シャンタク』だ」

　その名には聞き覚えがあった。象よりも大きく馬のような頭部を持ち、羽毛ではなく鱗に覆われた鳥の名である。黒い翼として召しよう喚かんされたそれはフレアを吐き出し、デモンベインに過激なまでの推進力を与あたえていた。

「受け取れ、九郎！」

　アルの叫さけびと同時に、九郎の脳裏にシャンタクの操作方法が刻みこまれた。高度な飛行能力を有するそれを駆く使しすれば、クトゥルーの内部へと攻せめこむこともできるだろう。それを倒たおすのは無理だとしても、中で待ち受けているであろうアンチクロスを葬ほうむることで再び眠ねむりに就つく可能性はあった。微かす

かだが確かな希望が胸中に芽生える。

「いくぜぇぇぇぇぇぇ──ッ！」

　九郎は気合いを注入すると、クトゥルーへと向かってデモンベインを加速させた。シャンタクからフレアが噴き上がり、ただでさえ尋じん常じようではなかったＧが殺人的な領域にまで高められる。脳のう味噌みそがミキサーの中で攪かく拌はんされるかのような激しい衝しよう撃げきが突つき抜けていった。

　頭上で妖あやしく蠢うごめく触腕の一つが鞭むちのような勢いで迫せまってきた。デモンベインを噛かみ砕くだくつもりなのだろう。その先せん端たんがパックリと割れ、乱らん杭ぐい歯ばが剝き出しになる。九郎は舌打ちをしながらデモンベインを制御し、すれすれのところを龍の首が通り過ぎていく。

「くっ……。無茶なことを……！」

　悲鳴とも愚ぐ痴ちとも取れるアルの言葉を耳にしながら、九郎は数キロの距きよ離りを一気に飛ひ翔しようする。巨きよ大だいな邪じや神しんの眸ひとみが景色となって広がった。

　クトゥルーも大人しくしていたわけではない。無数の龍の首がうねり、乱気流を巻き起こしながらいっせいに襲いかかってきた。九郎は自ク動ト式ウ拳グ銃アを顕けん現げんさせ、追つい尾びしてくる龍の首へと狙ねらいを定める。トリガーへと指を添そえたときだ。

　──そこまで。

　突とつ然ぜん、脳裏に突き刺ささる女の声こわ音ね。

　闇やみを孕はらんだその声が聞こえてきたのと同時に、九郎は幻げん覚かくを、いや、何ど処こかに存在するであろう世界の記き憶おくを幻げん視しした。

　膨ぼう大だいな記憶が情報となって九郎の意識に流れこんでくる。

それは膨大すぎて、一いつ瞬しゆんすぎて、茫ぼう洋ようすぎて、とても理解できる領域にはなかったが、それでも鮮せん烈れつなまでのイメージが脳に焼きついていた。

それは虹にじ色いろをした球体だった。大小様々な球が集積したそれは、石せつ鹸けん水すいを泡あわ立だてて作ったシャボン玉のようだ。それは煌きらびやかで、吐はき気けをもよおすほどの美しさだった。

再び異形の声が響ひびき渡わたる。

──最終決戦の場所は此処ここじゃない。もっと適した場所があるだろう？

世界が極ごく彩さい色しきの光に包まれていく。

──白き王よ。黒き王よ。白き使徒よ。黒き使徒よ。今、宇宙の歴史は分ぶん岐き点てんに到とう達たつした。

──そう、決戦の地はすべての時間と宿命が集つどう場所で。

──あの忌いまわしい海で。

意識が極彩色の闇に飲みこまれていく。

──正しく並んだ星せい辰しんの下、邪じゃ悪あくと狂きょう気きに侵おかされた海で。

──白き道どう化けよ。黒き道化よ。白き贄にえよ。黒き贄よ。

──存分に愛し合い。

──殺し愛え。

不意に現実が戻もどってくる。

その途と端たん、世界を圧あつ迫ぱくしていた威い容ようは一瞬にして消え失うせていた。

アーカムシティの上空にはなにもない。そこには瘴しよう気きもなければ邪じや気きもなく、蒼そう天てんが広がるのみである。周囲を見み渡わたしても邪神の姿はなく、気配は微み塵じんも感じられなかった。

クトゥルーなど初めから存在しなかったとでも言いたげだが、夢を見ていたわけではない。地上に刻みこまれた傷きず痕あとは、なによりも雄ゆう弁べんに現実を物語っていた。

「なんだよ……。なにが起こったってんだよ、ちくしょうっ！」

+

誕生は祝福であるとヒトは信じている。

喜びに満たされ、愛に満たされ、命は生まれてくると信じている。

それは過あやまちである。

それは欺ぎ瞞まんである。

誕生は呪のろいであり、世界は悪意と冒ぼう瀆とくに満ちている。

そして赤子は純じゆん粋すいであるが故に、それを理解している。

母の胎たい内ないにあって赤子は完全である。

母の温ぬくもりに包まれた、母の鼓こ動どうに抱だかれた其そ処こは世界の中心。

無限の愛の揺ゆり籃かご。

ならばそれ以上、なにを求めるものがあろう？

赤子は世界を精せいーいつ杯ぱいに享きよう受じゆしている。

故に―。

楽園から放ほう逐ちくされ、外界に産み堕おとされたそのとき、赤子は泣き叫ぶのだ。

慟どう哭こくするのだ。

肌はだを切り裂さく尖とがった大気。

鼻び腔こうに突き刺さる臭しゆう気き。

耳を砕くだく騒そう音おん。

瞳ひとみを灼やく閃せん光こう。

そのすべて、世界のすべてが赤子に悪意の牙きばを剝むく。

不完全な、ただの脆ぜい弱じやくな肉の塊かたまりとなった赤子を嘲あざ笑わらう。

赤子は世界が呪いに満ちていることを知る。

完全ではなくなった自らを嘆なげき悲しむ。

それをヒトは知らない。

否。

忘ぼう却きやくの彼方かなたへと追いやってしまっている。

忘れることで、欺あざむくことで、この呪われた世界を生きている。

なんと憐あわれで不ふ愉ゆ快かいな生き物なのだろう。

だが泣き叫ぶものは、慟哭するものは幸福である。

無む駄だを費ついやす余力があるのは、真の絶望を知らない故だ。

真の絶望に対たい峙じしたものは、叫ぶ咽の喉どすら残されていない。

己おのれの総すべてを、ただ「在る」ことのみに注ぎこむ。

己の一ひと滴しずくたりとも漏もらすわけにはいかない。

世界に己の存在を搾さく取しゆしつくされないために。

絶望は諦てい観かんへ、諦観は怠たい惰だへ、怠惰は焦しよう燥そうへ、焦燥は憎ぞう悪おへとうつろう。

この憎悪を糧かてとしよう。

不完全に産まれ堕ちる我わが身を埋うめ合わせるために。

世界が呪いに満ちているのなら、我が身、我が心、我が存在そのものを呪じゆ詛そと化そう。

鍍金めつきの世界に生きる者どもに教えてやる。

世界がどんなに絶望に穢けがれているかを。

そうだ。この宇宙……

──この宇宙の遍あまねくすべてが運命に隷れい従じゆうする。

その真実を初めて刻まれたのは、いつだって身を裂く激痛と身を焼く快楽との奔ほん流りゆうの中。

脳の容量を越こえる情報の洪こう水ずい。

刻ときの記録と世界の記き憶おくと運命の記述。

強制的に記き載さいされる絶望の知識。

そのとき、私は今回もまたこの宇宙に生を受けたことを呪った。

邪悪を乗せて回る運命の輪は、歪ゆがみ、路みちを外れ、暴走する。

より致ち命めい的な方角を目指して。

より破は滅めつ的な結論を求めて。

そして運命の輪は遂ついに不可逆の境界線を突とつ破ぱする。

……シャイニング・トラペゾヘドロン。

大十字九郎が、神を殺す刃やいばが、遂にそれを手にしてしまった。

この怪かい異いなる永えい劫ごうは、ただのヒトだった彼を、遂にその領域まで到とう達たつさせてしまった。

すべては宇宙の裏側に潜ひそむ邪じゃ悪あくの思おも惑わくどおり。

足あ掻がけば足掻くほど絡からまる蜘蛛くもの糸。

すべては運命の奴ど隷れい。

だけど……

──じゃあすべて無駄だったとして、なにもしないでいられるかな？

──俺には無理っぽいな。

おそらく君はそれを知っても、なお戦うだろう。なお足掻くだろう。

今なら解わかる。

君と触ふれ合った今ならはっきりと。

運命を知らないとか、絶望を知らないとかは関係ない。

君は今なすべきことを選せん択たくできる人間なんだ。

迷おうと怖おそれようと、それでも君は必ず選択する。

それがきっと強いということだ。

私にはその強さがなかった。

だが、今ならまだ間に合う。

──シャイニング・トラペゾヘドロン。

忌いまわしい禁きん忌きの武装。

それは奴やつ等らにとっても諸もろ刃はの剣けんだ。

なればこそ、この運命に僅わずかな綻ほころびを生むことができる。

その僅かな綻びにすべてを賭かけよう。

必要なのは恐おそれを知らない決意。

大十字九郎。君の強さを分けてもらう。

だから──。

「早く来て、九郎……。ネロは此処ここにいるよ……」

+

突とつ然ぜんのクトゥルーの消しよう滅めつに対し、九郎は安あん堵どではなく呆ぼう然ぜんとしていた。

魂たましいを砕き、崩ほう壊かいさせるほどの重圧を以もつて君臨していた威い容ようが跡あと形かたもなく消え失うせてしまったのである。

なにが起きたのかまるで理解できない。

邪じや神しんなど存在しなかったかのような静せい寂じやくさに辺りは包まれていたが、あのような邪悪が簡単に消えてしまうとも思えない。だとしたらクトゥルーはどうしたのかという疑問が出てくるが、現状では何一つ判明してはいなかった。

本当に消えたのであれば言うことなしだが、希望的観測ができるような状じよう況きようでも相手でもない。

九郎はカタパルトに収まっているデモンベインを見上げながら、深々と溜ため息をついた。

アンチクロスの襲しゆう撃げきで格納庫内は嵐あらしでも過ぎたかのような有様だったが、利用できないほどでもない。カタパルトとトイ・リアニメーターは奇き跡せき的にも無事だった。

その一方で被ひ害がいをモロに受けている者もいた。エルザである。彼女は怨おん霊りよう呪じゆ弾だんの影えい響きようで沈ちん黙もくしたままなのである。

「おーい、どうなんだ？　大だい丈じよう夫ぶなのか？」

九郎はデモンベインのコックピットへと目を向けると、その中で格かく闘とうしているドクター・ウェストへと声をかけた。普ふ段だん、なにかと騒さわがしいエルザである。有り余る元気のおかげでいらぬ苦労を強しいられることも度たび々たびだが、共に戦ってきた仲間だ。心配でないわけがなかった。当然、最悪の事態も考えられるわけだが、九郎の心配を余所よそにウェストの返事は不敵である。

「ふんっ。我わが輩はいを甘く見るなよ、大十字九郎！　この大！　天！　才！　ドクター・ウェストの最高傑けつ作さくたるオー・マイ・愛いとしのエルザが、この程度でどうにかなるはずがなかろうっ！」

叫さけびとともに響ひびいてくるエレキ・ギターの不協和音。その凶きよう悪あくな調べにうんざりしながらコックピットの様子を見守っていると、そこからひょっこりと少女が顔を出してきた。

「おはようロボ！」

　エルザは無む邪じや気きな笑えみを浮うかべながら手を振ふってきた。

　彼女はウェストが造り上げた人造人間である。制作者同様、しぶといのは考えるまでもなく、心配するほどのことでもなかったのかもしれない。

　途と端たんに騒がしくなる格納庫。祭でも始まったかのような空気が漂ただよう中、不ふ機き嫌げんを絵に描かいたかのような表情をしながらアルがつかつかと歩いていく。彼女はコックピットまで歩を進めるとそこからエルザを引きずり出し、ウェストを睨にらみつけた。

「さっさとコックピットを元に戻もどさぬか！」

　蹴けり飛ばすかのような勢いでアルはウェストへと詰つめ寄っていく。

「妾わらわの居場所を仰ぎよう々ぎようしく改造しおって……。不ふ愉ゆ快かいな！」

「えーい急せかすでないのである！　急がば回れという諺ことわざもあるワケであって、回って回って回りつくして美味おいしいバターになりました。原材料・トラ」

　魔ま術じゆつより不可解な言い回しをするウェストに対し、アルは小さいながらも鋭するどい拳こぶしを問答無用で叩たたきこんだ。それは的確に顔面を捉とらえ、ウェストは鼻血を噴ふき出しながらひっくり返る。

「……はぁ～」

　怒ど鳴なり合い、罵ののしり合うアルとウェストを眺ながめながら嘆たん息そくする九郎。先ほどまで世界は危機的状況にあったのだが、そんなことは微み塵じんも感じさせぬほどの間の抜ぬけた雰ふん囲い気きである。人類の未来を憂うれえているようには思えなかった。

「緊きん張ちよう感かんに欠ける人たちですわね」

　作業員にあれこれと指示を出しながら孤こ軍ぐん奮ふん闘とうしていた瑠璃は、ふと手を休めてつぶやいた。

（まったくだ）

　九郎と瑠璃は見つめ合うと、それぞれ深い溜め息をつく。

「姫ひめさん。結局のところ、被害はどれくらいなんだ？」

　九郎の問いに、瑠璃の表情が陰かげった。

「酷ひどいものです。今回の犠ぎ牲せい者しやだけでも、おそらくは五百人以上。アーカムシティが襲撃されたときの件を入れると……。正直、数えたくはないですわね」

　地上は核かくでも落とされたかのような凄せい惨さんな状況である。数千、あるいは万単位の被ひ害がい者しやが出ていても不思議ではない。それでも襲撃の規模から考えれば被害は少ないほうだと考えるべきだろう。覇道財ざい閥ばつが地下シェルターを用意していなければ、誰だれ一ひと人りとして生き残らなかったはずである。そう考えるとゾッとするが、それと同時に、このような事態を予見していたであろう覇道鋼造に頭が下がる思いがした。

　そのことを考えたとき、ふと九郎の胸中に不安感が過よぎった。浮かんできたのはライカと子供たちの姿である。シェルターでティベリウスが暴れ回ったことを考えると、どのような惨さん劇げきが繰くり広げられたかは考えるまでもない。

「私情で申し訳ないんだけど……。シェルターに避ひ難なんしている人のことを調べられるかな？」

　突とつ然ぜんの申し出に瑠璃は目を瞬しばたたかせるが、すぐに問題ないことを告げた。

「ライカ・クルセイドっていうシスターが避難してると思うんだ」

　その名を口にした瞬しゆん間かん、瑠璃は手をポンと叩いて得心した。

「安心してくださいな。ライカさんも、子供たちも、たいした怪け我がもしていませんわ。子供たちのショックは大きいとは思いますけど……」

　瑠璃の話に九郎は少なからず安あん堵どした。子供たちが負った心の傷も、ライカさえ側そばにいれば直すぐに癒いえるだろうとい

う確信があったからだ。

　九郎と瑠璃が深刻な話をしている間にもウェストの作業は続いていた。

「これで完かん璧ぺきであーる！」

　ウェストはコックピットから這はい出すと、全世界へ轟とどろけとばかりに声を張り上げた。

（はやっ！）

　突とつ貫かん工事とは言え尋じん常じようではない速度である。手を抜いたのではないかと疑うたぐりたくなるが、ウェストが完璧だと言っている以上は完璧なのだろう。人間的な欠けつ陥かんはあるが、機械の取り扱あつかいについては十分すぎるほど信しん頼らいできる。

　だがアルは依い然ぜん、不機嫌なままだった。彼女は「チッ」と露ろ骨こつなまでの舌打ちをしたかと思うと、さらに続ける。

「遅おそい！　遅すぎる！　待ちくたびれたわ！」

「なっ……。き、貴様！　我わが輩はいの労苦に対して労いたわりの言葉どころが罵ば声せいを浴びせるとはっ!?」

　ウェストは憤ふん慨がいするとギターを掻かき鳴らした。どうやら怒いかりと悲しみを表現しているらしい。

「勝手に改造した汝なれが悪い。自じ業ごう自得だ」

　悪びれる様子もなく淡たん々たんと応こたえるアル。

「出のタイミングを計っていた貴様がなにを言うかっ！」

　アルとウェストは向かい合うと視殺戦に入った。両者は一歩も退ひかずに激しく睨み合う。

「しかしあいつら、無む駄だに元気だよなぁ」

　九郎はガックリと肩かたを落とした。

+

　九郎とアルは臨時に設けられた司令室へと足を運んでいた。クトゥルー発見の報が入ったからである。けっして楽観視していたわけではなかったのだが、その一方で九郎は少なからず動どう揺ようしていた。覚かく悟ごしてなかったら立ち直れなかったかもしれない。

　司令室は狭せまかった。元が市民のために用意された居住スペースであるためだったが、加えてモニターを始めとした様々な機器が設置されているのである。ただでさえ狭い空間はより圧あつ迫ぱくされ、機器から放たれる熱でやけに暑かった。だがそれすら気にならないほど室内は重苦しい空気に包まれている。クトゥルー発見の報に皆みなが衝しよう撃げきを受けているのは言わずもがなだ。

「クトゥルーはアーカムシティからの消しよう滅めつと時を同じくして、ニューヨーク上空に出現が報告されています」

　オペレーターの一人が告げる。

「アーカムシティからニューヨークまでの距きょ離りを空間転移したものと思われます」

「んなことだろうとは思ってたけどよ……」

　神様相手に常識を期待しても無駄だったが、愚ぐ痴ちらずにはいられない九郎である。

「まったく、厄やつ介かいなもんだぜ」

「いや、違ちがう」

　ぽつりとアルはつぶやく。

「あの転移は、おそらくクトゥルーの意図するところではない」

　アルの話に、その場にいる全員の視線が集中する。

「なら何者の仕し業わざだよ。よりにもよってクトゥルーを転移させるなんざ……。第一、なんのためにそんなことを？」

「もしや、あれは……。いや、止やめておこう。憶おく測そくでは混乱するだけだ」

　アルは頭を振ふり、さらに続ける。

「実際、妾わらわの理解を超こえることが多すぎる」

　苦く悩のうの表情を浮うかべながらアルは沈ちん黙もくした。

　オペレーターが話を続ける。

「ニューヨークは破は壊かいロボの攻こう撃げきによって半はん壊かい状態。クトゥルーは大陸を進路上の都市を破壊しながら南西に横断。太平洋へと向かっています」

「各地で軍による散発的な反はん撃げきが行われていますが、当然ながら効果を上げていません。ホワイトハウス、ペンタゴン等、重要な施し設せつは残らず壊かい滅めつ。指揮系統は断たれています。事実上、合衆国は国家として機能を失ったと言えるでしょう」

「そのため治安が大きく乱れています。暴動や略りやく奪だつ、殺人などの犯罪行こう為いが発ひん発ぱつ。カルト教団の台たい頭とうなども目立ちます。各州警察が対応に当たっていますが、情報が錯さく綜そうしているせいか成果は上がってないようです」

「情報は覇道財ざい閥ばつ側で処理していますが、通信施設に障害が起きているせいかうまく伝達していません。近きん隣りん諸国に注意を呼びかけるのと同時に、各国に救きゆう援えんの要よう請せいを行っています」

　聞けば聞くほど気分は滅め入いってくるが、それでも九郎は気を取り直して口を開いた。

「で、クトゥルーの現在位置は？」

「進行方向と速度より算出した結果、クトゥルーは現在、ちょうど赤道辺り……。ここです」

　オペレーターは正面のモニターに世界地図を表示させ、その一点にマーカーをつけた。それによるとクトゥルーは赤道付近を通過し、さらに南下を続けているようだ。

「けど、いったい何ど処こを目指しているのでしょう？」

　瑠璃の疑問は九郎も感じていた。南下し続けてもその先には南極があるだけだ。途と中ちゆうに主要な国があるわけではない。なにか意図するところがあるのかもしれないが、なにも考えてない可能性もあった。そもそも今回の瞬しゆん間かん移動がクトゥルーの意思なのか、それともアンチクロスの仕業なのかも判わからない。とにかく解わからないことばかりだった。

　答えの出ない思考の迷宮に迷いこんだときだ。アルが深刻な顔でつぶやいた。

「南なん緯い四七度九分、西経一二五度四三分」

「なんだそりゃ？」

「クトゥルーの目指しておる場所だ」

　アルの話を受けて、オペレーターが該がい当とうする位置にマーカーをつける。その付近には海以外、なにもなかった。首を傾かしげる九郎に対し、瑠璃はピンとくるものがあったのだろう。緊きん張ちようで顔を強こわ張ばらせながらアルの言葉を継ついだ。

「一九二五年三月二十三日！　アラート号事件！」

　その事件は九郎も知っていた。魔ま導どう研究所で見た覇道鋼造の調査記録にアラート号に関する記述があったからだ。

「お爺じい様が熱心に調査していた事件です。武装快速艇ていアラート号の遭そう難なん。乗組員はかの海域で正体不明の怪かい異いと遭そう遇ぐうしたと言います。海底から浮ふ上じようした、なにかに」

「ルルイエだ。クトゥルーが治める海底都市。彼奴きやつは自らの城を浮上させるつもりなのだ」

「ブラックロッジはルルイエを拠きよ点てんに地球制せい覇はに乗り出す気なのですか？」

「大陸規模の大きさを持つ異形の都市だ。そんな都市が撒まき散らす瘴しよう気きの量はどれほどのものか……。浮上するだけで地球は灰かい燼じんに帰すであろうな」

　重たい沈黙が訪おとずれた。事態は刻一刻と破は滅めつへの道を突つき進んでいる。相手は神だ。ただの人にしかすぎぬ者たちにどうこうできる相手ではない。だが──。

「絶対に阻そ止しせねばなりません」

　瑠璃の声が沈黙を貫つらぬくかのごとく響ひびき渡わたる。そこには断固とした意思の力が感じられた。

（そうだ。できるできないの問題じゃない。やらなきゃ地球は滅ほろびる）

　だとしたら、やるしかない。無理だと解わかっていても──相手が神だったとしても、邪じや悪あくなる野望は完かん膚ぷなきまで叩たたき潰つぶさなければならなかった。

「俺たちの手でクトゥルーを倒たおすんだ！」

　その場にいる全員が神しん妙みような面おも持もちでうなずいた。

「悪い話ばかりではありません。吉きつ報ぽうもあります。国連が今回の事態に対して行動を開始しました。世界中の艦かん隊たいがルルイエの海域に集結しつつあります」

「さすがに無視できる状じよう況きようじゃねえからな」

「ですが人類の戦力で邪じや神しんに通用するものかと……」

　瑠璃の表情は硬かたい。戦力差などというレベルで考えることができない相手である。国連が出てきたところで死にに行くようなものだった。

「決戦の鍵かぎを握にぎるのは大十字さん、それにアル・アジフ。やはり貴方あなたがただけなのです」

　九郎とアルは黙だまってうなずいた。

「申し訳なく思っております。こんなことに巻きこんでしまって……」

　九郎は瑠璃の話を手で制する。

「なに言ってんだよ、姫ひめさん。俺たちが勝手に居座っただけじゃないか。何ど処こその馬の骨にデモンベインを奪うばわれた姫さんは被ひ害がい者しやみたいなもんだ」

「自うぬ惚ぼれるなよ、小こ娘むすめ。妾わらわは妾の仕事をこなすだけだ。汝なれの都合など知ったことか」

　アルは悪態をつくが、顔は笑っていた。

「わたくしには貴方がたに未来を託たくすより術すべはありません」

　瑠璃の口ぶりには若じやつ干かんの無念さが顔を覗のぞかせている。可能ならデモンベインに搭とう乗じようし、自分の手でなんとかしたいと考えているのかもしれない。

　瑠璃は薄うすく笑うと、迷いを振ふり払はらうかのような凛りんとした表情で告げた。

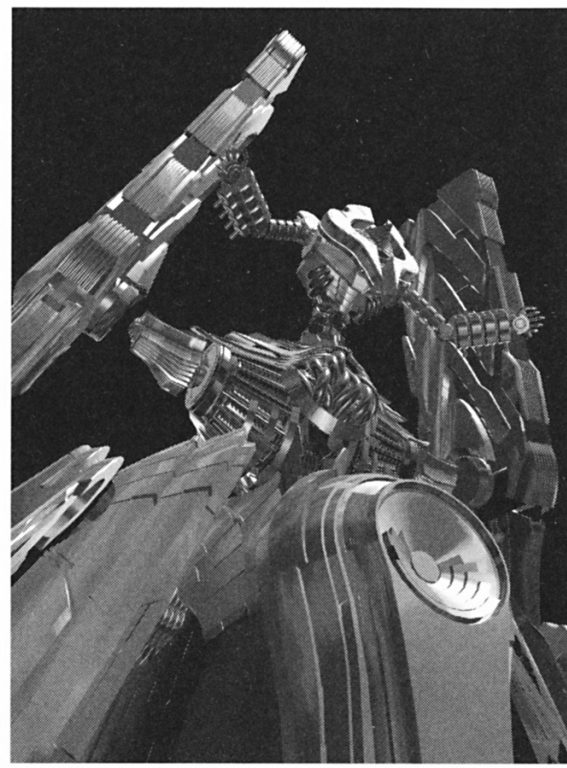
「夜明けと同時に全戦力を投じてルルイエへと向かいます。大十字さん、それに──アル」

　アルと瑠璃は、しばし無言で見つめ合う。だがそれだけで十分だったのだろう。アルは力強く頷うなずいてみせ、それに応こたえるかのように瑠璃は微笑ほほえみを返した。

「どうか世界の未来をよろしくお願いいたします」

　瑠璃は深々と頭を下げた。

第三章 汚怪なる血脈



ネームレス・ワン
搭乗者：ネロ

一点の曇くもりすらない蒼そう穹きゆうが広がる中、海は澱よどんだ深しん淵えんの色に染まっていた。

そこに母なる海の姿はない。海は影かげによって侵おかされ、汚けがされ、汚お水すいにも似た悪あく臭しゆうすら放っている。海面には無数の死魚が浮うかび、付近を舞まっていた鳥たちは吸い寄せられるように海面へと墜おちていく。

海中には巨きよ大だいななにかが泳いでいた。触しよく腕わんを靡なびかせながら泳ぐその姿は蛸たこか槍やり烏い賊かのようにも見える。だが島をも連想させるその巨きよ軀く、そして原初の宇宙の業ごう火かを灯ともしたその双そう眸ぼうは、地球上に存在する生命体ではあり得なかった。

邪神・クトゥルー。

かつて地球を支配していた旧ふるき支配者が帰き還かんを遂とげようとしていた。

目指す場所は、ただ一つ。ニュージーランド沖おき、南なん緯い四七度九分、西経一二五度四三分の海底に沈しずんでいるという巨大な石造都市・ルルイエである。

「ふむ。国連の艦隊がルルイエに集結しつつあるようだな」

夢む幻げん心母の中心部。拍はく動どうする神の心臓の下、サイクラノーシュの上で情報を整理していたウェスパシアヌスが口を開いた。

「合衆国の艦隊も見受けられるな。なるほど、なるほど。こいつは覇道の仕し業わざだろうなあ」

ウェスパシアヌスは口くち髭ひげを愛めでると、金色の鬼デウ械ス・神マキナの上に立つ痩そう身しんの男・アウグストゥスへと目を向けた。彼は口元に嫌いやらしい笑えみを浮かべている。

「苦し紛まぎれだな。たとえ世界中の戦力を集めようとクトゥルーには抵てい抗こうたり得ない」

　まもなく母なる海は愚ぐ者しやの鮮せん血けつで染まるだろう。それが解るのか、アウグストゥスの顔はより醜みにくく、より邪じや悪あくなものへと変わっていった。

「ではではでは、塵ちりすら残さないほど徹てつ底てい的に吹ふき飛ばしてしまうかね？」

　それは邪じや神しんの力を以もつてすれば造作もないことである。だがアウグストゥスは即そく座ざに却きやつ下かした。

「あれは術式に乱れを生む。多用するものではない。それに気にかかることがあってな……」

「あの空間転移かね？」

「そう。あれは想定外だ。考えたくはないが、計画に漏もれがあったのかもしれぬ」

「確かに、確かに。あの空間転移は解げせぬ。術式等のデータに異常は認められんのだがなあ」

　首を傾かしげるウェスパシアヌスの脳のう裏りに、一いつ瞬しゅん、金色の髪かみを靡なびかせる少年の姿が過よぎった。

（あれでは、あれではまるで……）

　その姿を、その名を思い浮かべただけで体は震ふるえ、心は氷結するかのように固まってしまう。

（いや、気のせいだ。気のせいだろうさ）

　そう思いこむことでウェスパシアヌスは自分自身を納なつ得とくさせた。

「まあ、よい。原因が判明していない以上、クトゥルーに特とく殊しゅな能力を使わせるべきではない」

「では、では、如い何か様ようにするかね？」

「ここを何ど処こだと思っているのだ、兄弟。聖地を汚す輩やからは敬けい虔けんたる信徒に任せようではないか」

「なるほど、なるほど。ここは海。ここは魔ま海かい。ここはクトゥルーの領域だな」

　ウェスパシアヌスは得心する。

「解わかった、解ったよ。とりあえず破は壊かいロボは先行させておくぞ？」

「ああ、頼たのんだ」

　アウグストゥスはそう言うと、血の海の果てへと目を向ける。

「さて。そろそろ見えてくるな、ルルイエが……。魔人による地球の統治がついに始まるぞ！」

　響ひびき渡わたるアウグストゥスの哄こう笑しよう。その姿を横目で眺ながめながらウェスパシアヌスはうなずく。

　だがその瞳ひとみの奥にある侮ぶ蔑べつにアウグストゥスが気づく様子はない。

（今くらいは夢を見させてやらねば可哀かわい想そうか。そうだろう、兄弟？）

　ウェスパシアヌスは失笑しそうになるのを堪こらえながら胸中でつぶやいた。

+

　揺ゆらめく海かい藻そうのような触しよく手しゆの群れの中に二人の少女が埋うまっている。彼女たちもまた海草のように体を揺らめかせながらたゆたっていた。ネロと【ルルイエ異本】の少女である。

　触手は二人の体を貪どん欲よくに貪むさぼり続け、それがもたら

す鮮せん烈れつなまでの快楽によって少女たちは幾いく度ども幾度も、果てなく、限りなく絶頂へと上り詰つめていく。正体すら失うせてしまうほどの快楽を強制的に引き出された彼女たちは涙なみだを流し、涎よだれを垂らしながらよがり続けている。

「しぃ……C……シー……くするるるぅぅ……みこ……巫み女こ……」

【ルルイエ異本】の少女は喘あえぎながらも歌い続け、輪唱するようにネロの熱い吐と息いきが混じる。

「あ……ああ……んんっ……」

　しなやかで細い少女の指がネロの首筋を、胸むな元もとを、腹部を、陰いん部ぶを伝っていく。

「はぁぁぁぁぁぁ……ツッ！」

　上気していくネロの裸ら体たい。うっすらと浮かび上がる汗あせが少女の体を妖あやしく、そして艶なまめかしいものへと変えていく。そんなネロの艶あでやかな姿を色オ違ツいドのア瞳イが見み据すえている。

「星は正しい位置に……巫女を……生いけ贄にえを……花はな嫁よめを……いあ、いあ」

　触手に犯おかされながら、自らもまたネロの体を嬲なぶっていた【ルルイエ異本】の少女だが、ふとその手が止まった。快楽に酔よいしれていた少女の瞳がネロを見下ろす。

「でも……ちがう……」

【ルルイエ異本】の少女はネロへと顔を寄せると、その耳元で囁ささやいた。

「あなたは、ちがう……あなたは、だれ？　だぁれ？　だれ……だれだれだれ誰だれ誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰だれだれだぁぁれ？　だれ……だれの……あなたは──誰のもの？」

　少女は愛らしく小首を傾げる。

　ネロは答えない。

ただ一方的に与あたえられる快楽に嬌きよう声せいを上げるばかりだ。

だが涎にまみれたその口が、赤く濡ぬれた舌をだらしなく垂らすばかりのその口が歪いびつに吊つり上がっていた。

嘲ちよう笑しようである―。

+

どこまでも続く大海原に鋼はがねの群れがひしめき合っていた。

海は驚おどろくほど静かで、凪ないだ波の狭はざ間まには大小様々な戦せん闘とう艦かんが黙もく然ぜんと居並んでいる。

その光景は壮そう観かんそのものだ。空母三十一隻せき、巡じゆん洋よう艦かん五十四隻、駆く逐ちく艦かん、護ご衛えい艦かんの総計は九百隻以上。総計千隻にも及およぶ大艦隊である。ルルイエの浮ふ上じようが人類の破は滅めつを意味することを理解した各国がそれぞれが持てる海軍力のすべてを南大西洋に投入し、集結させた成果がこれである。

異なる国旗、異なる言語。まったく異なる指揮体系。それにもかかわらず一丸となった艦隊は東洋の曼まん陀だ羅らのように整然と隊たい伍ごを組んでいる。そしてその中ちゆう枢すうに位置するのは戦艦・アリゾナだ。合衆国太平洋艦隊の旗艦も、総指揮官たる大統領亡なき今は掲かかげるべき旗を持たない。そう。今は世界連合艦隊の一隻である。

不意に海が輝かがやきを失った。目が覚めるほどの青さを誇こっていた大海が闇やみ色に染まり、空気が瘴しよう気きで汚お染せんされていく。漆しつ黒こくの闇が実態を結び、海面が盛り上がった。同時に人じん智ちを凌りよう駕がする神気、そして邪じや気きを放つおぞましい山のようなものが浮うかび上がる。巨きよ軀くから無数の触しよく腕わんを生やした蛸たこのような怪かい異い・クトゥルーである。

その瞬しゆん間かん、海は激げき震しんした。爆ばく音おんが轟

とどろき、荒あれる波は濤とうが連合艦隊に襲おそいかかる。数十メートルもの高波を浴びた戦艦の何隻かが藻も屑くずとなって海底へと沈しずんでいった。クトゥルーが攻こう撃げきを仕し掛かけたわけではない。触腕を蠢うごめかせ、わななかせただけだ。たったそれだけだったが、生み出された津つ波なみに飲みこまれて十隻ほどの艦隊が転てん覆ぷくしてしまったのである。それでもなんとか邪じゃ神しんの挨あい拶さつに耐たえた空母の甲かん板ばんから、国こく籍せきも機種も様々な戦せん闘とう機きが続々と発進していく。数百もの戦闘機が神気と邪気に満たされた空へと旅立ち、飛行機雲を描えがきながら旧ふるき支配者へと向かっていく。

ミサイルが一いつ斉せいに火を噴ふいた。おびただしい数のミサイルがクトゥルーの軀からだへと炸さく裂れつし、爆ばく発はつする。炎ほのおと黒こく煙えんが幾いく筋すじも上がるが、それは邪神の威い容ように比べてあまりにも慎つつましやかだった。それを確かく認にんするまでもなく戦闘機は旋せん回かいし、再攻撃を試みる。だが戦闘機はミサイルを発射することなく爆発して海上へと墜つい落らくしていった。クトゥルーの攻撃ではなく、その頭上に浮かんだ無数の機き影えい―破壊ロボットからの砲ほう撃げきだった。それは上空に発生した歪ゆがんだ空間を掻かき分けるかのように次から次へと出現し、群むら雲くものごとく空を塗ぬり潰つぶしていく。

戦闘機と破壊ロボットが交戦を開始した。ミサイルが、バルカンが、破壊ビームが、空を引き裂さいていく。間断なく続く閃せん光こう、そして爆発音。空が燃え、金属片やオイル、肉につ塊かいなどが豪ごう雨うよりも激しく降ってきた。

戦場は空だけではない。海上、そして海中もまた戦場だった。海上同様、ルルイエの海中には各国の潜せん水すい艦かん隊が多数配備されていたのである。それらは外しようのない目標に向かって一いつ斉せい攻こう撃げきをしかけていた。発射される数千発の魚ぎょ雷らい。だがその大半はクトゥルーに届くことなく爆発、あるいは軌き道どうを逸そらしていく。魚雷が軌道を逸らしたのにはわけがあった。人とも魚ともつかない何千、何万の怪異がそれに取りつき、力ずくで弾だん道どうを変化させていたのだ。クトゥルーに仕える水すい棲せい種族・深きデイーものプワどもンズである。彼らは深海を自在に泳ぎ回って潜水艦隊を翻ほん弄ろうしていく。艦にしがみつき、何度も何度も装そう甲こうを叩たたく深きものども。だが怪かい力りきを誇る彼らでも、深海の水圧に耐えうる潜水艦の

装甲を破は壊かいすることはできない。

　突とつ然ぜん、遠えん雷らいにも似た轟ごう音おんとともに巨きよ大だいな水柱が何十本も上がった。海中から飛び出してきた船虫にも似たそれは、一体一体が駆逐艦ほどもある巨大な怪異である。大海のすべてを埋うめつくし、波を蹴け散ちらしながら大艦隊へと押し寄せてくるそれは、クトゥルーの配下であり深きものどもの首領・ダゴンである。古代ペリシテ人に半人半魚の神として崇あがめられていたそれは、水みず飛沫しぶきを巻き上げながら一軍となって大艦隊に襲いかかってきた。辺りに霧きりが立ちこめ、呪のろわれた眸ひとみが濃のう霧むの中で茫ぼう洋ようと輝く。海神の群れは瞬またたく間まに艦隊を飲みこみ、人類最強を誇る大艦隊は壊かい滅めつ状態へと追いこまれていった。

　空は破壊ロボットに支配され、海は深きものどもとダゴンに制圧された。抵てい抗こうらしい抵抗を見せる間もなく連合軍は崩ほう壊かいしつつあった。

　人類最後の砦とりでがもろくも崩くずれ去ろうとしたときだ。怪異の大群がピタリと動きを止めた。

　静けさを取り戻もどした海に、高らかとあの詩うたが響ひびき渡わたる。

　破は邪じやの剣けんの招来を告げるあの詩が―。

憎ぞう悪おの空より来たりて

正しき怒いかりを胸に

我等は魔まを断つ剣を執とる

汝なんじ、無む垢くなる刃やいば―デモンベイン！

　その詩が世界に広がった瞬間、絶望に染まりかけた空を引き裂き、衝しよう撃げき波はを引き連れてそれは現れた。黒い翼つばさを悠ゆう然ぜんと広げた鋼鉄の巨きよ人じんである。超ちよう高こう速そくで飛ひ翔しようするそれは、燃え盛さかる炎をまとった魔

ま銃じゆうを手にぐんぐんと迫せまってくる。

　閃光にも等しい強きよう烈れつな光が銃じゆう口こうから迸ほとばしり、野や獣じゆうにも似た凶きよう暴ぼうな唸うなり声が漏もれてきた。爆音とともに射出された魔ま弾だんは閃光と焔ほのおをまとい、一直線にダゴンの一軍へ―。それはやがて神なる獣けものへと姿を変えていく。フォマルハウト星に棲すまう炎の神性・クトゥグアである。

　魔ま獣じゆうの咆ほう吼こうは轟かない。宇宙の秩ちつ序じよを揺ゆるがすほどの魔ま力りよくに満ち溢あふれたそれは、音の領域に収まらなかった。それはただ無む慈じ悲ひに破壊のみを広げていく。ダゴンはクトゥグアの咆吼がもたらす崩壊に飲みこまれ、さらには突とつ撃げきしてくるそれ自身の牙きばや爪つめに、燃え盛る軀からだに触ふれて消しよう滅めつしていく。核かくにも匹ひつ敵てきする熱量が海魔の軍勢を嘗なめつくし、その三分の一ほどが消滅した。

「気合い入れていくぜっ！」

　九郎は海上へと目を向けると、半ば壊かい滅めつ状じよう況きようにある連合軍へと向かって叫さけぶ。

「こちらデモンベイン！　地球の大敵を滅ほろぼすため、いざ参る！」

　背中に装備された黒き翼が魔力のフレアを噴ふん射しやした。

　デモンベインは呆ぼう然ぜんと見上げているダゴンたちへと目がけて突撃していく。

「バルザイの偃えん月げつ刀とう！」

　デモンベインの左手に集つどった光が結けつ晶しようとなり、弓を張ったような月形の刃と化した。いまだ淡あわい輝かがやきをまとう偃月刀をしっかりと握にぎりしめると、眼下のダゴンへと向かって振ふり下ろした。刃はダゴンの甲こう殻かくをいとも簡単に斬きり、それに護まもられている柔やわらかな肉をも裂いていく。背骨を割り、内臓を分断する嫌いやな感かん触しよくが伝わってくるが、おかまいなしに刀を振り下ろす。ダゴンは魚よろしく二枚に下ろされ、緑色の汚よごれた鮮せん血けつを迸らせながら海の底へ

と沈んだ。

　海魔たちが動き始めた。牙を剝むき出しにしたダゴンが四方から襲いかかってくる。デモンベインの倍はあろうかという巨軀が迫りくる中、九郎は不敵な笑えみを浮かべていた。彼は敵意を闘とう争そう心しんへと変え、バルザイの偃月刀をブーメランのように投げ放った。それは高速で回転しながらダゴンたちへと襲いかかっていく。偃月刀がダゴンを討っていく最中さなか、九郎は次の術式を施し行こうさせる。空になっているデモンベインの左手に集う銀色の光―。やがてそれは質量を獲かく得とくし、銀色の回転式拳けん銃じゆうとなった。

　銃口の奥から魂たましいを凍こおらせるほどの鋭えい利りな閃せん光こうが迸る。そして唸り声とともに弾だん丸がんが射出された。七色に輝く雪が吹ふ雪ぶき、弾丸が風に乗って疾しつ駆くする。極低温になった大気に紫し電でんが伝い、弾道に沿って走り抜ぬけていく。弾丸は冷たく燃える焔をまとい、その中から一体の氷ひよう竜りゆうが現出した。イヌイットの伝承でウェンディゴの名で伝わる旧支配者・イタクァである。それは群れなすダゴンの上空すれすれを飛翔していった。その途と端たん、海が、ダゴンが氷結していく。先ほどまで灼しやく熱ねつする焔に晒さらされていた海は一いつ瞬しゆんにして氷海と化した。

　灼しやく熱ねつ地じ獄ごくと氷結地獄が海魔の軍勢を蹴散らしていく。その凄すさまじい威い力りよくに九郎は絶対的な自信とともに恐きよう怖ふ心しんさえも感じていた。

「ギシャアアアァァァァ！」

　一体のダゴンが氷の呪じゆ縛ばくを砕くだき、デモンベインへと襲おそいかかってきた。怒りの咆吼が空気を震ふるわせるが、邪じや悪あくな肉につ塊かいがデモンベインを押し潰つぶすよりも早くバルザイの偃月刀が帰き還かんした。右手の自ク動ト式ウ拳グ銃アを消し、その手でバルザイの偃月刀をキャッチ。すぐさま裂れつ帛ぱくとともに刀を振るう。横に流れた刀身がダゴンの首を刎はね、汚お穢わいな鮮血が雨となって海面を叩きつける。

「どんどんいくぞ、九郎！　雑ざ魚こに時間を取られるわけにはいかんのでな！」

「おうっ！」

気合いを入れ直し、再び戦せん闘とうを開始しようとしたときだ。

北の海よりそれはやってきた。連合軍に優まさるとも劣おとらない艦かん隊たいの船せん影えい。それは覇道財ざい閥ばつの艦隊であり、その旗き艦かん・ノーデンスの姿も見て取れた。〈大いなる深しん淵えんの主〉の異名を持つ海の神・ノーデンス。その名に相応ふさわしい堂々たる軍ぐん艦かんである。その格納庫からブラックロッジのものとは異なる塗と装そうが施ほどこされた破は壊かいロボットが出現した。ゾンバイオと名付けられたその破壊ロボットは、ドクター・ウェストが飛行型破壊ロボットを元に完成させた機体である。

『加勢するロボよ、ダーリン』

『そのとーり！　今日のステージは満員御おん礼れい。銀河よ我わが輩はいの歌を聴きけ、であーる』

不ふ吉きつなギターの旋せん律りつとともにゾンバイオのブースターが火を噴ふいた。爆ばく音おんを轟とどろかせながらノーデンスから出しゆつ立たつしたそれはロケットのような勢いで上空へと突つき進んでいく。上空を我わが物顔で旋せん回かいしていた破壊ロボットが一いつ斉せいに覇道艦かん隊たい、そしてゾンバイオへと目を向けた。

『博士、行くロボよ！』

『エルザ！　我々の科学の美と威いを存分に見せつけてやるのである！』

破壊ロボットのビームがゾンバイオに降り注ぐ。だがその先にゾンバイオの姿はない。ゾンバイオは旋回しつつビームの網あみをかいくぐり、敵機に照準を合わせる。

『ビィィィィィィィィィムゥゥっ！』

エルザの叫びに乗って発射された迎げい撃げきのビームによって破壊ロボットは爆ばく破は。破は砕さいした機体の破片が海へと消えていく様は散骨のようである。

『お前にラブハァァァァァァァット！』

　ゾンバイオは縦じゆう横おう無む尽じんに動き回り、一機ずつ的確に撃うち落としていく。

　そしてそれに続けとばかりにノーデンスから続々と戦闘機が発進し始めた。それらは生き残った戦闘機とともに破壊ロボットへと反はん撃げきを開始する。

「九郎！　我らもいくぞっ！」

「おう」

　デモンベインはダゴンの群れの中へと突とつ撃げきしていく。

+

「くっ……情けない！　それでも神の眷けん属ぞくか！」

　デモンベインに蹂じゆう躙りんされる海かい魔まの無様さにアウグストゥスは憤ふん慨がいしていた。親指の爪つめを噛かみしめる彼の額には脂あぶら汗あせが浮うかび上がり、あからさまに緊きん張ちようしている様子が見て取れる。

「落ち着け。落ち着きたまえ。確かにデータを超こえる戦闘力だが神の敵ではない。そうだろう？」

　なだめるウェスパシアヌスも心中穏おだやかではない。クトゥルーには遠く及およばぬとはいえ、ダゴンは神の眷属である。それを事もなげに撃げき破はしていくなどとは想像すらかなわなかった。

　二人の魔人が戦おののく中、デモンベインは舞まうかのごとく戦場を駆かけ抜けていく。その姿は戦せん慄りつに値あたいし、心を凍いてつかせ、魂を呪縛し、畏い敬けいの念を掻かき立てずにはいられない。

（これでは、これではまるで大グラ導ンドマ師スターのようではないか！）

　ウェスパシアヌスの体は小刻みに震え、心臓は早はや鐘がねのごとく打ち鳴らされている。

（なにを血迷うか……そんなはずがあるまい。あんな存在が二人といるはずがない）

　恐怖に昂たかぶる心を落ち着かせ、乱れる鼓こ動どうを意志の力で強ごう引いんに制せい御ぎよする。

（そう、そうだ。そうともさ。大だい丈じよう夫ぶだ。落ち着け……）

　繰くり返し自分に言い聞かせることで、徐じよ々じよに震えは治まってくる。

「アウグストゥス。あれは……デモンベインは今、確実に仕留めなければならない！　あれは危険だ。危険すぎるぞ！」

「言われるまでもない！」

　アウグストゥスは指先から現出させた輝かがやく糸のようなものを編み上げていく。それはやがて金色の書【金きん枝し篇へん】と化し彼の前に浮かび上がった。それは独りでに開き、風もないのに頁ページが捲めくれていく。

「【金枝篇】より中ちゆう枢すうユニットに接続！　強きよう壮そうたるクトゥルーよ！　彼かの敵を討うち滅ほろぼし……」

　そのときである。突とつ然ぜん、思考に何者かの念話が割りこんできた。

「ティトゥスか」

　アウグストゥスは術を止め、召しよう喚かんした【金枝篇】を小こ脇わきに抱かかえる。

『拙せつ者しやが出よう』

「しかし、しかしだ。ティトゥス。君はまだ傷が癒いえてはいないのでは？」

『問題ない』

　ティトゥスはキッパリと言い切った。

「今の彼を、大十字九郎を侮あなどってはならん。以前の奴やつとは格が違ちがう……」

　警告するウェスパシアヌスをアウグストゥスが手で制す。

「―よい。任せた、ティトゥス」

『うむ』

　そこでティトゥスからの念話は途と切ぎれた。

「このままでは埒らちが明かん。結局、デモンベインを倒たおすのは、我々アンチクロスだけのようだ」

　ウェスパシアヌスはうなずきを返しながらも、その目はアウグストゥスの内面に隠かくされた暗い衝しよう動どうを見破っていた。

（それはあまりにも……あまりにも、あからさますぎやしないかね、兄弟？）

+

　鬼き神しんのごとき勢いでダゴンを蹴け散ちらしながら飛ひ翔しようし続けるデモンベインの前方。なにもないはずの空間に無数の剣けん閃せんが走り、幾いく筋すじもの線が宙に刻みこまれた。九郎は反射的にシャンタクを逆ぎやく噴ふん射しやさせて急制動をかける。激しい衝しよう撃げきで口から臓物をぶちまけてしまいそうだったが、かろうじて堪こらえて前方を睨にらみつけた。

　空間に走った亀き裂れつは無数の破片となって砕くだけ散り、硝子ガラスにも似た甲かん高だかい破は砕さい音おんを響ひびかせながら風にさらわれていく。あとに残されたのは虚こ空くうに生じた時空の裂さけ目であり、その向こう側にある血の色をした宇宙から鎧よろい武む者しやにも似た鋼鉄の巨きよ人じんが姿を現した。鬼デウ械ス・神マキナ・皇餓オーガである。

「チッ！　ティトゥスか」

　デモンベインは即そく座ざにバルザイの偃えん月げつ刀とうを前面に構えた。

『皇餓、いざ参る！』

　時空の裂け目から皇餓が躍おどり出た。それは一いつ旦たん、海面に浮かぶダゴンの背中に着地すると、甲こう羅らを蹴けり飛ばして跳ちよう躍やく。デモンベインの眼前へと迫せまる。皇餓が二振ふりの巨きよ大だいな太刀たちを振り上げたかと思うと、次の瞬しゆん間かんには十字の閃せん光こうが走った。九郎は舌打ちすると、一つを身を捻ひねらせてかわし、もう一つを偃月刀で跳はね返した。甲かん高だかい金属音が響くのと同時に激しい火花が散る。デモンベインと皇餓は弾はじかれるようにして後方へと跳び、それぞれダゴンの背に着地してにらみ合う。だがそれも一いつ瞬しゆんのことだ。

『斬きり棄すて御ご免めん！』

　皇餓は腰こしを沈しずめて一気に跳躍すると、刀を振り下ろしながら降下してきた。デモンベインは飛び退のいてその一いち撃げきをかわすが、足場となっていたダゴンは背を裂かれて絶命する。緑色の鮮せん血けつが皇餓の軀からだを染め上げるが、鎧武者はそれを振り払はらうように二撃目を繰り出した。ぶつかり合う刀かたなと刀。魔ま力りよくを帯びた火花が散り、衝撃でバルザイの偃月刀が弾かれそうになる。それを堪える間もなく三撃目が迫った。

（速いっ！）

　不格好ながらも皇餓の斬ざん撃げきを受け止める。だが安心する間もなく四撃目が繰り出され、ついに偃月刀は弾き飛ばされた。デモンベインの手を離はなれたそれは回転しながら宙に舞まい上がる。間髪かんはつを入れずに五撃目が迫る―。

「ちぃぃぃっ！　調子に乗るなぁぁぁっ！」

　九郎は迫る斬撃を回転式イタ拳銃クアで受け止めた。その意外な受けに動どう揺ようしたのか、皇餓に僅わずかな隙すきが生じる。だがそれで十分だった。皇餓に見み出いだした隙に乗じ、紫し電でんを帯びたデモンベインの蹴りが腹部に叩たたきこまれる。皇餓の

機体は遥はるか上空まで吹ふき飛んだかと思うと、緑の鮮血に染まる海へと落ちていく。盛大な水柱が上がった。

「剣けんじゃ勝ち目はないか。だったら……」

　デモンベインの前方にある空間が燃え盛さかる。灼しやく熱ねつする空間の中に顕けん現げんする自ク動ト式ウ拳グ銃アを右手に取ると、油断なく身構えた。

　皇餓が落ちた辺りの海面が盛り上がり、間欠泉にも似た激しい水柱が上がった。

　デモンベインは腰を落として脚きやく部ぶに力を蓄たくわえると、それを一気に解放して跳とび上がった。足場になっていたダゴンを踏ふみ抜ぬいて跳ちよう躍やくしたデモンベインは、同じく一気に翔かけてくる皇餓と空中で向かい合う。すでに二に挺ちよう拳けん銃じゆうの銃じゆう口こうは相手を捉とらえていた。

「そっちが二刀流なら、こっちは二挺拳銃ってな！」

『そのような玩具おもちやで拙せつ者しやの剣けん技ぎにかなうとでも思ったか！』

「玩具かどうか、てめえの体で確かめやがれ！」

　自動式拳銃と回転式拳銃が同時に吠ほえた。銃口から魔ま弾だんが吐はき出される。それは確実に皇餓へと迫るが、機体に着ちやく弾だんする前にすべて斬って捨てられた。

（……化け物め）

　互たがいの跳躍が頂点に達したとき、デモンベインは皇餓の間合いへと侵しん入にゆう。すかさず左右から空を斬り裂くような勢いで斬撃が迫った。真横から迫る刃やいばを自動式拳銃で弾き、真上から振り下ろされる刃を回転式拳銃で受け止める。九郎は回転式拳銃で刃を受け止めたまま引き金を引いた。がら空きになっている皇餓の胸部に魔弾が撃ちこまれる。一瞬の間を置いて皇餓の胸部が爆ばく発はつした。炎ほのおを噴ふき上げ、装そう甲こうの破片を撒まき散らしながら後ろ向きに皇餓は落ちていく。それを追いかけながら自動式拳銃の銃口を鎧武者へと向けた。

「食くらっとけぇぇぇぇぇぇぇっ！」

銃口から放たれた強きよう烈れつなマズル・フラッシュが九郎の視界を灼やく。

銃じゆう声せいが轟とどろき、それに続いて爆発音がルルイエの海に響き渡わたる。右半身を吹き飛ばされた皇餓は黒こく煙えんを引きずりながら海へと叩き落とされた。即座に追つい撃げきする。

「これでトドメだぁぁぁぁぁっ！」

自動式拳銃を手放すのと同時に、右の掌てのひらに組みこまれた機関に術式が駆かけていく。

「光射す世界に、汝なんじら闇あん黒こく、棲すまう場所なし！」

右の掌に組みこまれた機関が覚かく醒せいする。

「渇かわかず、飢かつえず、無に還かえれ！」

掌から迸ほとばしった閃光がデモンベインを、皇餓を、そして世界を包みこんでいく。

「レムリア・インパクト！」

デモンベインの右の掌から途と方ほうもない熱が放出される。必ひつ滅めつの威い力りよくを秘ひめた呪じゆ法ほうは周囲の氷を溶かし、海面さえも剔えぐり取った。

「──昇しよう華か！」

無限熱量が皇餓の機体を消しよう滅めつさせ、一いつ切さいの無へと引きずりこんでいく。それは潔けつ癖ぺきなまでにすべてを浄じよう化かしていった。

閃光が収まり、再び世界は色しき彩さいを帯びてくる。

九郎は徐じよ々じよに浮うかび上がってくる邪じや神しんを睨にらみつけた。

「……よう。待たせたな、クトゥルー」

九郎の囁ささやきが聞こえたのか定かではないが、絶ぜつ妙みようのタイミングでその叫さけびは轟いた。

「□□□□□□□□□□□□□□□□□□！」

　それはいかなる生物の器官でも発声できぬ咆ほう吼こうだった。次の瞬間、数キロの距きよ離りを踏とう破はしてクトゥルーの触しよく腕わんが押し寄せてくる。視覚で確かく認にんするよりも速く、聴ちよう覚かくで認識するよりも速く、吐き気をもよおすほどの圧あつ迫ぱく感かんに急せき立てられてシャンタクを加速させる九郎。

　海が爆ばく裂れつした。コンマ数秒前にデモンベインがいた位置に触腕の一つが押し寄せ、海面を穿うがっていく。龍りゆうの首を連想させるその先せん端たんにはダゴンの一匹ぴきがくわえられていた。絶ぜつ叫きようするダゴンを気にも留めず、触腕は躊ちゆう躇ちよなく自らの眷けん属ぞくを噛かみ砕くだき、飲みこんでいく。

「この悪あく食じきめ！」

　吐き捨てるアル。

　ダゴンの肉片を口こう端たんに引っかけたまま龍の首がデモンベインを睨ねめつける。それが鎌かま首くびをもたげたときだ。後方からの放たれた砲ほう撃げきが触腕に浴びせかけられた。

　サブモニターにノーデンスからの通信映像が入る。瑠璃のバストアップが表示された。

『大十字さん、残りの敵は連合艦かん隊たいで引き受けます。大十字さんは一刻も早くクトゥルーを』

　急き立てるかのような勢いで瑠璃は話す。

『これは大十字さんだけの戦いではありません。覇道財ざい閥ばつにとってもブラックロッジとの因いん縁ねんを終わらせる最後の戦い。それは他ほかの者も同じでしょう。ですから私は私の務めを。大十字さんは大十字さんの務めを』

　ほんの一いつ瞬しゆんだけ二人は見つめ合う。気持ちを確認するには、それで十分だった。

「了りよう解かいした。デモンベイン、これより敵本ほん拠きよに乗りこみ、中ちゆう枢すうを破は壊かいする！」

『御ご武運を！』

「姫ひめさんこそ！　いくぜ、アルっっ！」

「おう！　シャンタク・フルパワー！」

　シャンタクの魔ま力りよくが爆ばく砕さいし、暴走したのではないかと思うほどの急激な加速がＧとなって襲おそいかかってきた。全身にかかる凶きよう悪あくな圧力──。邪神との距離は一気に縮まり、その全容が視界いっぱいに広がっていく。

　クトゥルーが咆吼する。無数の触腕が波打ち、うねり、突とつ風ぷうを巻き起こしながら迫せまってきた。上下左右、あらゆる方向から押し寄せてくるそれを、身をよじらせ、僅わずかな隙すき間まに突とつ入にゆうすることで回かい避ひしていく。スピードは落とさない。デモンベインは神風のような勢いで特とつ攻こうし続ける。

　だが、かわせどかわせど触腕の群れは四方八方から押し寄せてきた。しかもその一本一本がデモンベインを一いち撃げきで粉こな微み塵じんにできるほどのパワーを有している。一瞬たりとも気は抜ぬけなかった。デモンベインは触腕の間を縫ぬうように飛ひ翔しようしていく。

　眼前に触腕が迫る。思考が回避不能と判断するよりも速く、九郎は行動に移った。二に挺ちよう拳けん銃じゆうを構えるのと同時にトリガーを引く。超ちよう高熱と極冷温──。相反する旧支配者の力が二挺の魔ま銃じゆうから迸った。それは空間を灼き、凍こおらせ、空を引き裂さきながら疾しつ駆くする。宇宙の論理を超ちよう越えつする爆発が、宇宙の論理を超越する存在を粉ふん砕さいしていく。超宇宙的物質で構成された肉片がぶちまけられた。

　エネルギーの暴走の渦か中ちゆうから、デモンベインはクトゥルーの頭上へと飛び出してくる。眼下へと目を向けた九郎は、雄お叫たけびとともに言葉を吐き出した。

「さあ！　やって来たぜ、アンチクロス！　お前たちを滅ほろぼす刃やいばが喉のど元もとまで迫っているぞ！　小便チビりながら怯おびえていやがれ！」

+

人類と邪神の眷属との戦いは続いていた。

砲撃に次ぐ砲撃で大洋は震しん撼かんし、断だん末まつ魔まの叫びで大気が震ふるえている。海は緑色の鮮せん血けつと重油、肉片と臓ぞう腑ふで汚よごされ、空は炎ほのおと煙けむりで覆おおわれていた。そこには狂きよう気きと憎ぞう悪おと嘲ちよう笑しようと恐きよう怖ふと誇ほこりと勇気と怒いかりと絶望と決意と嗜し虐ぎやくと自じ虐ぎやくと慟どう哭こくと……あらゆる光こう輝きと闇あん黒こくが撒まき散らされている。それはまさに地じ獄ごく絵え図ずであり、地球を賭とした最終戦争と呼ぶに相応ふさわしい光景だった。

息つく暇ひますらないほどの激戦の中、束つかの間だけ奇き跡せき的にも平へい穏おんが訪おとずれた。氷海が凪なぎのように静まり、無音に近い静せい寂じやくに包まれていく。そんな氷海に浮かぶ流氷の一つ。巨きよ大だいな氷ひよう塊かいの上に海面から勢いよく飛び出した小さな黒い影かげが着地した。

「流石さすがに……冷えるな」

ずぶ濡ぬれの黒くろ装しよう束ぞくを身にまとったその男は流氷の上で片かた膝ひざをついた。冷水を滴したたらせるざんばらの髪かみは瞬またたく間に凍こおり始め、白はく髪はつのようになっていく。黒の侍さむらい・ティトゥス。レムリア・インパクトが炸さく裂れつするよりも速く、彼は皇餓のコックピットから脱だつ出しゆつすることに成功していた。だが絶対的な破は滅めつから逃のがれることができたにもかかわらず胸中に去来するのは空くう虚きよのみである。

「はは……。鬼デウ械ス・神マキナを失い、なおも生き延びて……無様としかいいようがないではないか」

自虐的な笑えみを浮かべるティトゥス。

どれだけ強者と戦おうとも、どれだけ業を極きわめようとも、あるのは空虚と怠たい惰だ―。

だが、そんなはずはないとティトゥスは首を横に振ふる。そのよ

うな場所に堕おちることが堪たえられなかったからこそ外げ道どうへの道を選んだのである。

（それなのに何故なぜ―）

　不意に向けられた鋭するどい視線に、ティトゥスは顔を上げる。視線の先には包帯だらけの体にスーツを羽織り、氷の地表を踏ふみしめながら佇たたずんでいる一人の男がいた。ウィンフィールドである。一見、満身創そう痍いにしか見えない彼の体からは、闘とう気きが湯気のように立ち昇のぼっていた。

　ティトゥスの顔に愉ゆ悦えつの笑みが広がる。

「生きておったか」

「健康だけが取り柄えでして」

「……お主、何故ここに参った？」

「たまたま逃にげ落ちている貴方あなたの姿が目に入ったもので、こうして足を運ばせていただきました。それに負けっ放しでは主あるじに顔向けできないもので」

　口元に薄うすい笑みを浮うかべたかと思うと、ウィンフィールドはファイティングポーズを取る。そして摩ま擦さつのない氷上で鮮あざやかなステップを踏み始めた。それを認めるまでもなくティトゥスは行動に移る。両の掌てのひらを裂いて現出させた二振りの刀を握にぎりしめると、それを杖つえの代わりにして立ち上がった。刀とう尖せんをウィンフィールドへと突つきつける。

「さあ、決着をつけましょう。ミスター・ブシドー」

「その体で拙せつ者しやと渡わたり合うつもりか？」

　ティトゥスは刀を十字に構えると、不敵な笑みを浮かべる。

「ちょうど良いハンデかと」

　ウィンフィールドもまた挑ちよう発はつ的な笑みを浮かべていた。

「手加減はできんぞ？」

「手加減して差し上げましょうか？」

　二人の体から放出される高密度の闘気が、周囲の光景を陽炎かげろうのように揺ゆらめかせていく。放たれた熱気が冷えきった大気を燃やし、互たがいの闘気の衝しよう突とつ点てんにある氷に亀き裂れつが走る。それが合図だった。ティトゥスは黒い風と化し、ウィンフィールドのステップは氷を無数に穿うがっていく。間合いに入るのと同時にティトゥスが仕し掛かけた。地面を這はうように煌きらめく刃やいばが氷を両断しながら走った。その軌き道どう上にあるのはウィンフィールドの首。だがすでに彼の姿はない。それはティトゥスの動体視力を以もつてしても確かく認にんできなかった。彼は直感で二撃げき目を振り下ろす。衝しよう撃げきに堪えられなくなった氷が砕くだけ、足場が崩くずれ落ちた。海水が溢あふれ出てくる。

　悪条件が重なる中でも二人の体勢は揺るがない。一いつ瞬しゅんのうちに懐ふところへと潜もぐりこんできたウィンフィールドに対し、ティトゥスは三撃目と四撃目を繰くり出す。あり得るはずのない追つい撃げきが、あり得るはずのない角度から打ち出される。それは以前、ウィンフィールドを破ったときにティトゥスが採った戦法だった。彼の両りよう脇わきから生えた三本目と四本目の腕うでは──その手に握られた刀は、ウィンフィールドを左右から挟はさみこんで両断するはずだった。だがそれは脇わき腹ばらの薄うす皮かわ一枚を切り裂くに留とどまる。

　勝敗は決した。斬ざん撃げきより速い左の拳こぶしが、がらんどうになっているティトゥスの鳩尾みぞおちを捉とらえる。

「奥おう義ぎ──鎮レク魂イ曲エム・怒デイリエスの・イ日レ」

　ウィンフィールドが放った拳がティトゥスの体を穿つ。腹部が拳の形に陥かん没ぼつし、衝撃が全身に広がっていく。内臓が破は裂れつし、肋あばら骨ぼねが粉こな微み塵じんに破は砕さいしたのが解わかった。背骨が打ち砕かれる。

「カッ……ハッ……！」

　体を『く』の字に曲げたままティトゥスは宙を舞まい、崩れゆく氷の地表へと叩たたきつけられた。

「手品の種は、バレてしまっては意味がありませんよ」

　足場が崩れ落ち、沈しずみ始める。だが二人は氷上に留まっていた。そこに突っ伏ぷすように倒たおれこんでいるティトゥスを、ウィンフィールドの冷たい瞳ひとみが見下ろしている。

　むせるように咳せきこむティトゥス。その度たびに口からは多量の血液が吐はき出され、意識が遠ざかっていくのが解る。だが不思議と死への恐怖はなく、心は酷ひどく穏おだやかだった。

「そうか……」

　ティトゥスは微笑ほほえむでもなく、憎にくむでもなく、ウィンフィールドの瞳を見つめ返す。

　そして得心したかのように静かに告げた。

「あくまで人間として戦うお主に……人間であることに堪えきれなかった拙者が敵かなう道理はないか……はははははッ……なんたる間ま抜ぬけよ……」

　それが最期の言葉となった。

　ティトゥスは目を伏ふせ、そして事切れた。

　ウィンフィールドは崩ほう壊かいが続く氷上でティトゥスの亡なき骸がらを見下ろしていた。

　すでに立っていることすら困難なほどの状じよう況きよう下かで、彼は瞳を閉じてつぶやく。

「今度こそ……すべて片づきまして御ご座ざいます。お嬢じよう様さま」

　ウィンフィールドは侍さむらいの骸むくろに背を向けた。そして泊とめてあった小型艇ていに乗りこむと、急いで流氷から遠ざかる。砕けた流氷が海に沈ずむのが判わかった。

　ウィンフィールドは一度も振り向かなかった。

　それが彼なりの、道を誤った哀あわれな侍に対する弔ちよう意いだったのである。

+

「何故なぜだっ！　何故、クトゥルーがこうまで手こずる!?」

　アウグストゥスの激げつ昂こうが心臓の間に空むなしく響ひびき渡る。

　圧あつ倒とう的に有利な状況―いや、絶対的な力で赤子の手を捻ひねるかのごとくねじ伏せるはずだった相手が善戦を繰り広げている。にわかには信じがたい光景だった。

「おのれ……。この期ごにおよんで見苦しい……！」

　歯ぎしりをしながら悔くやしがるアウグストゥス。それでも足りないのか、彼はさらに続ける。

「私を誰だれだと思っている！　神の領域に到とう達たつした私は、私はアウグストゥスだ！　これ以上の抵てい抗こうになんの意味があるッ！」

　その狼ろう狽ばいぶりは神の領域に達した者とは思えぬほどの低てい俗ぞくぶりである。

　子供のように喚わめき立てるアウグストゥスとは対照的に、ウェスパシアヌスは沈ちん黙もくしていた。眉み間けんに皺しわを寄せ、難しい顔で思考に耽ふけりながら顎あご鬚ひげをなでている。このような事態は彼も想定してはいなかった。クトゥルーは神であり、それに従う眷けん属ぞくも常識を凌りょう駕がする超ちょう越えつ的な存在だ。大十字九郎は特別だとしても、この状況は明らかに不可解だった。

（そうそう上手うまく事は運ばんというわけか）

　ウェスパシアヌスの思考は巡めぐる。

（しかし、これではまるで、なにか大いなる意思に操あやつられているかのような……）

　そこへたどり着いた瞬しゆん間かん、金色の闇やみが嗤わらった。

（ええい、嗤うな！　なにが聖書の獣けものだ！　貴様なぞ無様に殺されただけではないか！　しょせん貴様は至高の領域にはいなかったのだ！　私は、私は違ちがうぞ！）

　ウェスパシアヌスは首を振ふり、こびりついて離はなれない思考を強ごう引いんに払ふつ拭しよくした。いつの間にか体は緊きん張ちようしており、全身にじわりと嫌いやな汗あせが浮うかび上がっている。そして今さらながら、ウェスパシアヌスは少年の正体に疑問を抱いだいた。死してもなお影えい響きよう力りよくを持ち続ける彼は何者だったのだろうかと―。結局のところ、マスターテリオンについてはなにも解らないままだった。

　ウェスパシアヌスが思案している間にもアウグストゥスは猛たけっていた。

「身の程ほどを知らぬ下等な人間が！　クトゥルーに、この私に歯は向むかいおってっ！」

（……俗ぞく物ぶつめ）

　アウグストゥスの姿を横目で眺ながめながら、ウェスパシアヌスは胸中で毒づく。

「落ち着け、落ち着きたまえ。見苦しい」

　爪つめを噛かみ、猛り狂くるうアウグストゥスに侮ぶ蔑べつの視線を送るウェスパシアヌス。

「敵が侵しん入にゆうしたならば、そう、排はい除じよすればよいだけだ」

「……ならば、貴君は何故ぼうっと突つっ立っているのかね、ウェスパシアヌス？」

　怒いかりに燃えるアウグストゥスの視線をさらりとかわし、ウェスパシアヌスは足あし下もとをステッキでコツンと叩いた。サイクラノーシュが血の海の中へと沈み始める。その最中さなか、ウェスパシアヌスは仰あおぐようにしてアウグストゥスへと目を向けた。

「アウグストゥス、君も後れを取るなよ？　くれぐれも、くれぐれもな。君はどうにもこうにもアレだ。そそっかしいところがあるからなあ。はははははははっ！」

　ウェスパシアヌスは嘲ちよう笑しようを残し、サイクラノーシュごと血の海へと消えていく。

「クソッ！」

　アウグストゥスの吐き捨てる声が聞こえてきた。

+

　ルルイエの海で繰くり広げられる最終戦争。

　人類と邪じや神しんが壮そう絶ぜつなる戦いを展開する中、白い装そう甲こうで身を固めた天使が光の軌き跡せきを描えがきながら海上を飛ひ翔しようしていた。メタトロンである。それは戦火で焼ける空を切り裂さくように飛び続け、やがて流氷の一つに舞まい下りた。

　その瞬間、偶ぐう然ぜんにも平へい穏おんが訪おとずれた。奇き跡せきでも起きたかのような心穏おだやかな時が流れていく。

　だが不意に静せい寂じやくは破られ、巨きよ大だいな水みず飛沫しぶきとともにダゴンが姿を現した。巨大なビルほどもある海かい魔まに比べ、メタトロンはあまりにも矮わい小しようだ。しかし天使は身み動じろぎ一つしない。焦あせりや不安は一いつ切さい感じなかった。戦うべき相手はそれではない。よって体勢を整える必要もなかった。

　ダゴンが雄お叫たけびとともに襲おそいかかってくる。空を覆おおいつくすほどの巨きよ軀くが迫せまる中、メタトロンはそれとは別の気配を感じ取っていた。それは体を串くし刺ざしにしかねないほどの鋭するどい殺気である。メタトロンは静かに告げた。

『来たか、サンダルフォン』

ダゴンの雄叫びは断だん末まつ魔まの叫さけびへと変わった。貌かおが爆はぜ、緑色の血液を撒まき散らしながら海へと還かえっていく。見上げるとそこには黒い天使・サンダルフォンの姿があった。

『やはり来ていたのだな』

サンダルフォンは氷上に下りると、メタトロンと相対した。

『さあ……己オレと戦え、メタトロン』

天地上下の構えを取るサンダルフォン。

それに応こたえるようにビームセイバーを現出させるメタトロン。

天使たちの体から白と黒の闘とう気きが蒸気のごとく噴ふん出しゆつし始める。凶きよう器きにも等しい激げき烈れつな闘気は怪かい異いたちをも震ふるえ上がらせ、ごく自然に天使たちから遠ざかっていく。メタトロンとサンダルフォンを乗せた流氷は二人のために用意された血戦場と化し、過去、何度となく繰り返された戦いが始まろうとしていた。

だが、それも今回で終わりだとメタトロンは思う。大十字九郎が、そして人類が未来を勝ち取るために戦っている。この戦いですべては決するのだ。それはメタトロンとサンダルフォンの戦いにも同じことが言えた。ここで決着する。今までの戦いは、この場にいたるまでの前ぜん哨しよう戦せんにすぎなかったのではないかとさえ思えるほどだ。

『メタトロン。否いや、ライカ……。今日こそ己は貴女あなたを超こえてみせる』

サンダルフォンは悲ひ壮そう感かんにも似た言葉を紡つむぎ出すが、その表情をうかがい知ることはできない。仮面の下に浮かぶのは狂きよう気きで歪ゆがめられた顔か、それとも──。サンダルフォンは続ける。

『貴女がいなくなれば己は自由になれる。ライカ・クルセイドという白い牢ろう獄ごくから解き放たれるのだ』

『白い……牢獄？』

それを耳にした瞬間、メタトロンは―ライカは雷かみなりに打たれたかのような衝しよう撃げきを受けた。

『私がリューガの牢獄？　それって、いったい……？』

予想すらできなかったその言葉にライカは驚きよう愕がくしていた。体が小刻みに震えている。それは寒さでもなければ武む者しや震ぶるいでもない。得体の知れぬ恐きよう怖ふ心しんに支配された彼女は、鋼鉄の体を抱だきしめながらサンダルフォンを―リューガを見み据すえる。

『さあ、今度こそ決着だ』

リューガが剝むき出しの殺意をぶつけてきた。質量すら持つそれにライカは後あと退ずさるが、すぐに踏ふみ止とどまってビームセイバーを一いつ閃せんさせる。分断された見えない凶器がライカの両りよう脇わきをすり抜ぬけていった。

静かに高まる闘とう志しと殺意―。

それは流氷に亀き裂れつを生じさせた。そしてそれをキッカケにして白と黒の天使が動き出す。メタトロンが十スラ字ツシ・ユ断罪・クロスを放ち、応えるようにサンダルフォンが拳こぶしを突き出す。十字の閃せん光こうが疾しつ走そうし、闇やみを孕はらんだ衝撃波が唸うなり声を上げる。両者とも相手の出方をうかがうことすらしない。のっけから全力だった。

ぶつかり合う衝撃と衝撃。せめぎ合う白と黒。拮きつ抗こうした力は両者の間で爆ばく砕さいし、その影えい響きようで装甲に亀裂が走っていく。メタトロンの、そしてサンダルフォンの仮面が砕くだけた。双そう方ほう、素す顔がおを晒さらしたまま上空へと舞い上がり、再び対たい峙じする。

（どこで間ま違ちがえてしまったのだろう？）

ライカは狂気の炎ほのおを燃え上がらせるリューガを見つめながら思案する。

ライカとリューガは敵同士だったわけではない。二人は血を分けた姉きよう弟だいであり、この世で唯ゆい一いつの肉親だった。それが今では瘴しよう気きで冒おかされた異常な世界で殺し合いをしている。それが宿命だとしたら、運命を呪のろわずにはいられな

かった。

（リューガがこの狂気に冒おかされたのは、いつからなのだろう？　私が彼を殺したときか……）

　ライカは昏くらく沈しずんだリューガの瞳ひとみを覗のぞきこんだ。そこには一片の光もなく、それすら飲みこむほどの深い闇あん黒こくで満たされている。そこには何一つ存在しない。あるのは純然たる闇だけだ。

　すべてはあの日──。

　ライカがリューガを殺したあの日に狂くるったのである。

　だがライカは、すぐに考えをあらためる。

（そう信じたかっただけなのかもしれない……）

　リューガは死んだ。目の前で動いているのは彼ではない。サンダルフォンという怨おん霊りようが彼の骸むくろを操あやつっているにすぎないのだ。そういうことにしておけば過去は汚けがれず、ただ運命の残ざん酷こくさを呪うだけですむ。

　リューガの狂気の正体は、日々の中で積み重ねられた想おもいそのものだった。だがライカはそれすらも否定したのである。そうしなければ罪の重さに堪たえられなかったからだ。

　そう。あのとき既すでにライカは逃にげていたのである。罪から逃のがれられないとうそぶきながら、一番肝かん心じんな罪から逃げていたのだ。

　だからこそ、ここで決着をつけねばならない。

「リューガ……。貴方あなたにとって私は枷かせでしかなかったの？」

　気がつけばライカは問うていた。

　彼は言った。ライカ・クルセイドは自分にとっての牢獄だったと。白い牢獄だと。ライカにとって施し設せつが白い牢獄だったのと同じように……。

「□□□□」

　不意にリューガの双そう眸ぼうから狂気の色が失うせた。あとに残されたのは驚おどろいたような、困ったような、無防備なまでの少年の瞳ひとみである。

　リューガはライカの問いには答えず、そっと目を閉じた。

　世界が黄昏たそがれ時どきを迎むかえる中、ただ沈ちん黙もくのみが辺りを支配していく。

　リューガの顔に刻まれた傷が──ライカの手によって刻まれたあの傷が血を滲にじませる。一筋の血液が頬ほおを伝っていった。その紅あかい涙なみだは、彼に残された最後の人間らしさだったのだろう。

　再び開かれた瞳は昏く沈み、だがどこまでも清せい浄じような輝かがやきを秘ひめていた。

「己オレはきっと、ライカ以外の世界を知らなかった」

　澄すんだ狂気が告げる。

「それを知る必要もなかった。知りたくもなかった」

　リューガの独白は続く。

「そうだ。己は誰だれよりも未知に怯おびえていた。だけど、そんなことすら知らずにすませてきた……。だから姉さん。あんたが己にとって未知の存在になったとき──己には為なす術すべがなかった。恐おそれて怯えて泣いて憎にくんで、たどり着いた先にあった答えが壊こわすことだった。己は、それしか知らなかったから」

　リューガは静かに身構えた。

　あれほど激しかった殺意も今はない。混じり気のない純じゆん粋すいで透とう明めいな狂きよう気きがそこにあった。それはリューガが誰にも気づかせなかった凪ないだ海のような狂気である。

　リューガの口元が嗜し虐ぎやくに、そして自じ虐ぎやくに歪ゆがんだ。

「ライカ姉さん。これが貴女あなたが知らなかった、貴女が見なかった己の狂気だ」

「リューガ……」

　自分が知り得なかったリューガの想いに触ふれ、ライカの心は激しい自責の念に囚とらわれていた。

　今さら悔くやんでも遅おそかったが、そうせずにはいられない。可能なら子供のころに戻もどり、一からやり直したかった。

　だがそれはかなわぬ願いである。もはや戦いは避さけられず、おそらくは次の一いち撃げきでどちらかが死ぬ。

　ライカは躊躇ためらいながらも身構えた。

「ああ、そうか」

　ふとリューガが妙みようにサッパリとした口調でつぶやいた。

「どうして空に行きたかったのか解わかった気がする」

　彼は仰あおぐようにして空を見つめた。

　そこにはクトゥルーが蠢うごめくだけで、青空はない。

「青空にはね、なにもないんだ。ぼくをおびやかすものが、なにも」

　リューガは上空を目指して静かに飛ひ翔しようする。

「リューガ……私は……」

　ライカもまた空を翔かけていく。

　神気と瘴しよう気きで満ちた空で、ライカとリューガは向かい合った。

　互たがいに必ひつ滅めつの一撃を加えるべく闘とう気きを高めていく。

（リューガ……）

様々な想いがライカの胸中を交こう錯さくしていく。

思えば辛つらいことばかりだった。なぜ自分ばかりこんな目に遭あうのだろうと呪のろいの言葉を吐はいたこともある。だが彼女の傍かたわらには常にリューガがいた。彼がいたからこそ施設での暮らしにも耐たえられたのだ。

ライカはリューガへと目を向ける。彼の闘気は極限を超こえ、さらに高まりつつあった。

リューガに討うたれたとしても文句は言えないとライカは思う。だが、それでも討たれるわけにはいかなかった。この世でたった一人の肉親を手にかけ、新たな罪を背負うことになったとしても、である。

守らなければならない者たちがいた。それはやっとの思いで手に入れたちっぽけな幸せ。それはどこにでもあるありふれた日常だったが、ライカにとってはかけがえのない大切なものだ。それを守るためなら……子供たちの未来を守るためなら地じ獄ごくへ堕おちたとしても本ほん望もうだった。

ライカの闘気が高まっていく。

ビームセイバーがこれ以上ないほどの輝きを発した。

そして――。

白と黒の天使が中空で衝しよう突とつする。

今までの戦いの中で最も速く、そして最も鋭するどい一撃が打ち出された。

煌きらめく刃やいばが、闇やみを孕はらむ拳こぶしが、光すら凌りよう駕がするほどの速度で相手へと迫せまっていく。

勝負は一撃で決した。

ライカの体を覆おおう白い装そう甲こうに亀き裂れつが走る。肩かたの装甲が砕くだけ散り、白い柔やわ肌はだがさらけ出された。だがそれだけである。

一方、リューガは雷かみなりにでも打たれたかのように体を硬こ

う直ちよくさせたかと思うと、ゆっくりと、酷ひどくゆっくりと仰あお向むけに倒たおれこんでいく。黒い翼つばさは宙に舞まい、胴どう体たいはザックリと切り裂さかれていた。おびただしい量の血液がルルイエの海に血の雨を降らせていく。

リューガは呻うめくこともせず、手を差し出してきた。

ライカに向けられていたわけではない。

その手は天へと……空へと向かって伸のびていた。

その手で空をつかもうと、懸けん命めいに──。

だが、ついにそれはかなわなかった。

大空への果てない憧れを抱いだいた少年が、地上へと向かって墜おちていく。

その様子を、ライカは見つめ続けるより他ほかなかった。

体が動かなかったこともある。

だが助けたところで意味などなかったし、リューガもそれをよしとはしなかったはずである。

「人は空では死ねないよ……。解っていたんだろう？」

ライカは弔とむらうように、そっと目を伏ふせる。

頬ほおに一ひと滴しずくの涙なみだが伝った。

+

夢む幻げん心母の内部へと潜せん入にゆうしたデモンベインは、地面を這はうような低空飛行で回かい廊ろうを奥へ奥へと進んでいた。

内部は暗く、空気は澱よどんでいる。

吐き気がするほどの瘴気が辺りに満ちており、常人ならば一いつ瞬しゆんで気が触れてしまうだろう。邪じや神しんの腹の中なのだから当然だったが、そうだと解っていても気け圧おされそうになる。

「ここからは完全に敵てき陣じんの真まっ只ただ中なかだ。気を抜ぬくなよ」

「ああ、解ってる」

デモンベインはクトゥルーの内部を突つき進んでいく。

進めば進むほどそれが放つ強きよう烈れつで凶きよう悪あくな邪じや気きは密度を増していくが、それはつまり中心部へと向かっているという確たる証しよう拠こだった。

「邪気に中あてられるなよ」

アルに言われるまでもなく、体は勝手に臨戦態勢を整えている。

圧あつ倒とう的な邪気に対たい抗こうするため細さい胞ぼうの一つ一つが激しく燃焼し、体は熱した鉄のごとく熱を帯びていた。邪気や瘴気は九郎の体に触ふれる前に燃もし、塵ちりへと変わっていく。

恐きよう怖ふはある。

だがそれを凌しのぐほどの闘とう志しに心は満たされていた。

魔まの圧力に潰つぶされ、冒おかされ、屈くつしそうになる一方で、内部から迸ほとばしる生命力をも同時に感じていたのである。戦うには絶好のコンディションと言えよう。

さらなる闘志を燃え上がらせたときだ。延々に続くかと思われた回廊の先に下層へと続くシャフトを確かく認にんすることができた。デモンベインをシャフトの前で制止させ、下方へと目を向ける。

地獄へでも通じているのだろうか。縦穴の先は暗く、先を見通すことができない。それは単に暗いという理由だけではなさそうだ。澱おりのような邪気で満たされ、得体の知れぬ怪かい異いのようなものが蠢うごめいているようにさえ見えた。

瞬しゆん間かん、九郎は怯ひるんだ。

だが文字どおり一瞬でしかなく、シャンタクを操あやつってゆっくりと降下していく。

内部は異常の一言に尽つきた。人工物と有機物とが出で鱈たら目めに融ゆう合ごうしているのである。奥へ向かうほど肉の割合は多くなり、脈打ち、蠢き、粘ねん液えきのようなものを滲にじませる壁へき面めんは、腸の中でも彷徨さまよっているかのような錯さつ覚かくすら覚えるほどだ。

降下を続けていたときである。

「九郎ッ！」

アルが叫さけぶのと同時に真横の壁かべが激しく波打った。脈動する肉は人工物と絡からまりながら肥大化し、巨きよ大だいな腕うでを編み上げていく。それは握にぎり拳こぶしを作るとデモンベインに殴なぐりかかってきた。

不意の出来事に対処が遅おくれた。巨大な手に殴り飛ばされたデモンベインは、反対側の壁へき面めんへと激げき突とつする。壁は陥かん没ぼつし、罅ひび割れ、血ち飛沫しぶきを上げた。

異変は続く。デモンベインの真上と真下の壁がなにかを編み上げ始めた。出現したのはデモンベインより一回り小さい半人半機の巨

きよ人じんである。先ほどデモンベインを殴り飛ばした手も同様の変化を遂とげた。壁に対して垂直に立つ三体の巨人がデモンベインを睨にらみつける。

『謳うたえ！　呪のろえ！　ガルバ！　オトー！　ウィテリウス！』

　どこからともなく男の声が木こ霊だましてくる。その声には聞き覚えがあった。

「ウェスパシアヌスか！　それに、あれは……」

「彼奴きやつの使い魔だ。インスマウスで彼奴が見せた人じん面めん疽そがあっただろう？」

　アルの指し摘てきで、はたと思い出す。

　ガルバ、そしてオトー。ウィテリウスの名は初耳だが、三体の巨人はあの人面疽なのだと推察できた。

　デモンベインを囲むかのようにそびえ立つ三体の巨人が結界を結ぶ。その中心に閉じこめられたデモンベインに対し、巨人たちは怨おん念ねんに満ちた断だん末まつ魔まの叫びを叩たたきつけてくる。

　そんな切せつ羽ぱ詰つまった状じよう況きようの中、九郎は追いこまれることなく対処を終えていた。

　巨人たちが発生させた結界の中に残像だけを残し、機体はすでに安全圏けんへと逃のがれていたのである。

『な、なんとっ！』

　驚きよう嘆たんし、動どう揺ようするウェスパシアヌスの声が響ひびき渡わたる。

「不意を突いたつもりだったのであろうが、甘かったな」

　アルは挑ちよう発はつ的なまでの笑えみを浮うかべた。

『貴様……っ！』

　ウェスパシアヌスの怒いかりが波動となって押し寄せてくるが、そのすべては九郎が放つ闘とう気きが打ち消していく。九郎はデモンベインの左手に回転式イタ拳銃クアを顕けん現げんさせると、巨人たちへと向けて立て続けに四発発射した。三発は巨人たちの頭部を撃うち抜き、残りの一発はなにも存在しない空間へと向かって飛んでいく。

『なっ……！』

　なにもない空間が爆ばく発はつする。

　爆ばく風ふうに煽あおられて体勢を崩くずしたデモンベインをシャンタクで立て直すと、九郎はいまだ激しい炎ほのおの海と化しているそこへと目を向けた。

「倒たおしたか？」

　九郎の読みが正しければ、姿を眩くらませていたサイクラノーシュを撃ち抜いているはずだった。

　爆発が収まり、辺りに静せい寂じやくが訪おとずれる。

「おそらくな。少なくとも彼奴きやつの気配はない」

　だとしたらこれ以上、気にしても仕方がない。ウェスパシアヌスが生きていたとしても、そのときはそのときである。九郎は割り切って降下を再開した。

　縦穴は永遠とも思えるほどの長さがあった。どれほどの時間が流れ、どれほどの距きよ離りを降りたのかは解わからない。だが降下し続けることで最下層が見えてきた。そこで待ち受けていたのは地面ではなく、どこまでも続く紅あかい海である。デモンベインの爪つま先さきが水面に触ふれ、波は紋もんを広げた。

「……まるで血の海だな」

「いや、血そのものだ。外に出てみろ」

　アルの指摘を受けてハッチを開いた途と端たん、九郎は手で口と鼻を塞ふさいだ。むせ返るほどの生なま臭ぐさい空気が押し寄せてきたからである。

「ゲッ……胸むな糞くそ悪わリィ」

「邪じや気きが桁けた違ちがいに濃のう厚こうになっている。おそらくは、この奥が中ちゆう枢すう部だろう」

　彼女の視線の先、紅く煙けむるその先には白く巨大な扉とびらがあった。

（あれか……）

　間ま違ちがいなかった。白い扉の向こう側で尋じん常じようでない邪気が渦うずとなって吹ふき荒あれている。そしてそれは心を折りかねないほどの怖おぞ気けを孕はらんだ風を運んできた。

　一歩一歩が重い。とてつもなく重い。枷かせでもつけているのではないかと思うほどだ。前方から押し寄せてくる圧力がデモンベインの装そう甲こうを軋きしませる。

「これまで倒した鬼デウ械ス・神マキナは五体。残るは……」

「金ピカの……アウグストゥスとかいう奴やつの鬼械神が残ってるな」

　九郎は扉の先で待ちかまえているであろうアウグストゥスを睨みつける。

（これで最後だ。ブラックロッジも、そしてクトゥルーも――）

　理り不ふ尽じんな存在を全部まとめてぶちのめすと心に決め、九郎はデモンベインを飛ひ翔しようさせる。

　邪気は濃のう度どを増す一方であり、それは空間すら歪ゆがませるほどになっていた。空間は捻ねじれ、ひしゃげ、攪かく拌はんされたかのようにあべこべになっている。抽ちゆう象しよう画がの中にでもいるかのようだ。真っ直すぐ進んでいるのか、それとも曲がっているのか――。昇のぼっているのか降りているのか、それすらも見失いそうになる。

　九郎は全神経を研とぎ澄すまして幻げん覚かくに対たい抗こうする。全身から冷や汗あせが噴ふき出し、脳のう細さい胞ぼうが残らず焼き切れてしまいそうなほどの衝しよう撃げきが走り抜ぬけていく。それに気づかぬふりをしながらデモンベインを飛行させ、扉の

前で静止させる。

　それは扉と呼ぶにはあまりにも巨きよ大だいであり、全容をうかがうことすらできなかった。

「この向こうだ。邪気はこの奥から吹いてくる」

　九郎はうなずくと、デモンベインの右の掌てのひらを扉に重ねる。

「レムリア・インパクト――昇しよう華か！」

　右みぎ腕うでに眠ねむる凶きよう暴ぼうな獣けものが覚かく醒せいし、解き放たれた無限熱量が扉の一部を円形に剔えぐり取った。

　その途端、穴の向こう側から膨ぼう大だいな量の血液が堰せきを切るような勢いで押し寄せてくる。デモンベインは腕うでを交差させ、鉄てつ砲ぽう水みずにも似た激流に耐たえた。

　やがて血の勢いは衰おとろえ、穴の向こう側が見えてくる。広大すぎる血の海の果て――。途と方ほうもない大きさの巨大な心臓が、爆ばく音おんのごとき鼓こ動どうを轟とどろかせていた。そしてそれが脈打つ度たびに紅色の水面が大きく波打つ。

　デモンベインは穴を潜くぐり抜け、先へと進んでいく。遠目に見ても巨大な心臓の真下に、黄金おうごん色に光り輝かがやく威い容よう・レガシー・オブ・ゴールドは浮かんでいた。そしてその頭上では、褐かつ色しよくの肌はだを持つ痩そう身しんの男が佇たたずんでいる。アウグストゥスだ。彼は脈動し続ける心臓を振ふり仰あおいでおり、九郎たちには目をくれようともしない。

「来たか……デモンベイン」

　アウグストゥスは心臓へと目を向けたままの姿でつぶやいた。

「おうよ。いつぞやの借りを、キッチリと返させてもらうぜ」

「利子もたっぷりとつけてやる。遠えん慮りよするな」

　九郎とアルは宣言すると、即そく座ざに戦せん闘とうモードへと移行する。デモンベインが身構えた。

「私に勝つつもりでいるのかね？」

　意外そうな口くち振ぶりのアウグストゥス。

「てめえに負ける道理がどこにあるってんだ？」

　不意にアウグストゥスは押し黙だまると、般はん若にやにも似た物もの凄すごい形相で睨にらみつけてきた。それに呼応するかのようにレガシー・オブ・ゴールドの金の装甲が怪あやしく輝かがやく。心を打ち砕くだかれても不思議ではないほどの凶きよう悪あくな悪意と殺意に晒さらされながらも、九郎が怯ひるむことはない。

　長い長い沈ちん黙もくが訪おとずれた。先にそれを破ったのはアウグストゥスである。彼の哄こう笑しようが血の海に響ひびき渡わたり、凪ないだ海面に広がっていく。

「なにがおかしい？」

「ははは……。いやいや、失礼。こいつは傑けつ作さくだ。まさか紛まがい物の分際で私に勝つつもりでいるのだと思うと」

　いまだ笑い続けるアウグストゥスに対し、アルは不快そうに顔を歪める。

「以前の我等だとでも思っておるのか？　此処ここにいたるまで何体の鬼械神と邪じや神しんの眷けん属ぞくを屠ほふってきたと思っておる？」

　その事実は九郎とアルに確かな自信を与あたえていた。それは彼とて承知しているはずだったが、なぜか意に介かいする様子すらなかった。それどころか喉のどを鳴らしながら忍しのび笑いを漏もらしたのである。

「私とて以前の私ではない」

　アウグストゥスは演説を行う独裁者のように両りよう腕うでを左右に広げる。

　興奮してきたのだろう。彼の声は高くなり、魔ま力りよくを孕んだその声は酷ひどく不快で耳みみ障ざわりだった。

「今の私は旧支配者をも制せい御ぎよしている！　そしてクトゥ

ルーを支配するのは唯ただ一人でよい！」

「こいつ……」

「君たちには感謝しているぞ！　今や邪じや魔ま者ものとなった他ほかのアンチクロスどもを処分してくれたのだからな！　これで私を阻ははばめる者は存在しない！　存在しないのだっ！」

　アウグストゥスの瞳ひとみは狂きよう気きの色に取り憑つかれ、正気を失っているようにも見受けられた。

「邪神の魔力を目まの当たりにして身の程ほどを見失ったか。愚おろかな……」

「ほざけ、アル・アジフ！　時じ代だい遅おくれの魔ま導どう書しよよ！　貴様がどう吠ほえたところで、もはやクトゥルーを止めることはかなわぬ！　そうだ！　今の私は神すらも隷れい従じゆうさせる世界の覇は者しやなのだ！」

　アウグストゥスは宣言すると同時にレガシー・オブ・ゴールドへと乗りこんだ。

「血迷いやがって。だけどな……」

　デモンベインは召しよう喚かんさせた自ク動ト式ウ拳グ銃アと回転式イタ拳銃クアを手に取ると、その銃じゆう口こうをレガシー・オブ・ゴールドへと向ける。溢あふれ出した魔力が魔ま銃じゆうへと集約し、表面に刻みこまれた紋もん様ようを淡あわく発光させた。

「短い天下だったな。てめえは俺たちには勝てない」

『やってみるがいい。不ふ愉ゆ快かいな羽虫が！　貴様らごときが！　この私を！　覇は王おう・アウグストゥスを脅おびやかすことなど断じてあり得ぬ！　絶望を以もつて！　絶命を以て！　絶ぜつ滅めつを以て！　貴様等に思いしらせてやる！』

　九郎は魔銃の引き金を引いた。立て続けに十数発の銃じゆう声せいが鳴り響く。

　雷らい鳴めいのごとく轟き渡る銃声に、九郎の雄お叫たけびが重なり合った。銃口から発せられたマズル・フラッシュが視界を白く

染め上げ、レガシー・オブ・ゴールドが爆ばく煙えんの中へと消えていく。

　確かな手て応ごたえ。だが──。

『その程度でレガシー・オブ・ゴールドを倒せるとでも？』

　爆ばく煙えんが散り、金の鬼デウ械ス・神マキナの姿が浮うかび上がってくる。

「なっ……！」

　アルが驚きよう嘆たんし、九郎は目を剝むいた。神の眷属すら屠る魔ま弾だんを浴びながら、金の装そう甲こうには傷一つついてはいなかったのである。

「馬ば鹿かな！　いくらなんでも無傷ってことは……」

『つくづくおめでたい連中だな』

　アウグストゥスの冷れい笑しようは、即座に熱を帯びた笑い声へと姿を変えた。

『今のレガシー・オブ・ゴールドを鬼械神ごとき一いつ緒しよにするな！』

　レガシー・オブ・ゴールドから心臓を握にぎり潰つぶされるような圧あつ倒とう的な重圧が放たれる。

（この気配……！）

　すべてを超ちよう越えつするかのような激しい神気──。その正体に九郎は気がついた。

「アル、あの野や郎ろう……」

「間ま違ちがいない。彼奴きやつめ……」

『ふはははは……ふは……はははは！　はは、フングルイ！　ひぃはははは！　ムグルウナフ！　ははは っクトゥルーげぇはーはっルルイエぎぃははウガフナグルはははははフタグンッ！』

　哄笑に異界の祝詞のりとが混じり合う。

　深海の闇やみに蠢うごめく怪かい異いの気配。すべてを押し潰すかのような究極の存在力──。

　平へい伏ふくしそうになるほどの圧力に抗あらがいながら、それでも九郎は金の鬼械神を凝ぎよう視しする。

「彼奴め、クトゥルーの神気を受けておる！　人間を辞やめるか、妖よう術じゆつ師し！」

　アルの問いにアウグストゥスは鼻を鳴らして応じる。

『人間？　人間だと!?　くだらん存在だなぁ！　人間など等しく神の家か畜ちくにすぎん！』

　レガシー・オブ・ゴールドの内部から魔力が湯水のごとく溢れ出してくる。

『貴様らも同じだぁぁぁぁぁぁ！』

　アウグストゥスの雄叫びとともに、装甲から無数の砲ほう身しんが出現した。そのすべての砲ほう口こうの奥に凶きよう暴ぼうすぎる燃える輝きを認める。

「まずい！　アル、防ぼう御ぎよ結界をっ！」

　閃せん光こうが炸さく裂れつするよりも早く、光り輝かがやく紋様がデモンベインを取り囲む。しかし──。

「もたない!?」

　アルが悲鳴にも似た声を発する。

　数あま多たの光線を浴びて灼しやく熱ねつする防御結界。光が弱まり、力が急速に衰おとろえていくのが実感できた。

　臨界点を超こえ、赤しやく銅どう色に燃える結界に亀き裂れつが生じる。それは即そく座ざに全体へと波は及きゆうし、悲鳴のような音を立てながら砕くだけ散った。凶きよう悪あくな光の槍やりが侵しん入にゆうし、視界が白の闇へと染まる。貫つらぬかんばかりの勢いで襲おそってくる無数の閃光を浴び、デモンベインを中心とした爆ばく発はつが起きた。

「ぐわあああああああああ！」

「きゃあああああああああ！」

　デモンベインの巨きよ軀くが宙へ舞まい、血の海へと落ちていく。

『理解できるかな？　神を前にした己おのが身の矮わい小しようさを！』

　レガシー・オブ・ゴールドは光と熱の残ざん滓しをまとい、そこから迸ほとばしる神気が空間を震ふるわせていた。まるで世界が怯おびえているかのような光景である。

『理解できるかな？　自分がどんなに愚かで無む謀ぼうで絶望的な戦いに身を投じているかをっ！』

　言いたい放題のアウグストゥスに対し、歯がみする九郎。だが、彼の話はさらに続く。

『デモンベインだと!?　魔を討うち滅ほろぼすものだと!?　怖おそれるに足りんな！　ふはははははは！』

「のぼせ上がりやがって……。三さん下したがっ！」

　九郎はモニターに目を走らせ各機関のステータスをチェックする。結界が威い力りよくの大半を削そいでくれたのだろう。ダメージは問題ないレベルだ。

　九郎は流れるような動作で自ク動ト式ウ拳グ銃アのマガジンを入れ替かえると、即座に連射する。大火力の反動が銃じゆう身しんを跳はね上げた。魔弾の雨がレガシー・オブ・ゴールドの魔ま法ほう障しよう壁へきへと突つき刺ささり、火花を散らす。防御結界の術式が解け、魔弾がそれを突とつ破ぱした。

『無む駄だなことを』

　金の鬼械神は回かい避ひすらせず、正面から魔弾のすべて受け止めた。間ま抜ぬけなほど軽い金属音が響ひびき、小さな火花が散る。魔弾は金色の装そう甲こうを貫くどころか表面ですべて弾はじかれてしまった。

『無駄だと言っただろう！』

　砲身の一つがデモンベインへと向けられ、大出力のビームが放たれた。九郎はデモンベインを飛び退のかせるのと同時に回転式イタ拳銃クアの引き金を引く。撃ち出された六発の魔弾は己おのれの意志でレガシー・オブ・ゴールドの急所へと襲いかかる。だがそれは障しよう壁へきを突破するほどの威力を得られず、血の海へと落ちていった。

『私の前にかしずけ！　この地球皇こう帝てい・アウグストゥスに平へい伏ふくせよ！　脆ぜい弱じやくな人間どもよ！』

　レガシー・オブ・ゴールドから次々と放たれるビームの嵐あらし。デモンベインはシャンタクをフル稼か働どうさせ、曲芸じみた動きで回避し続ける。

（……なにかないか？　あの金ピカ野郎をぶちのめす手段は！　邪じや神しんの力を突破する術すべは！）

　自動式拳銃ではレガシー・オブ・ゴールドの装甲を貫けない。急所を狙ねらえる回転式拳銃では防ぼう御ぎよ陣じんを突破できなかった。装甲、そして魔法障壁。あまりにも堅けん固ごすぎる二重の城じよう壁へき。まさに八はつ方ぽう塞ふさがりである。どちらかを無効化しない限り勝ち目はない。どちらかを──。

「そうか！」

　九郎は閃ひらめいた。

　二挺ちようの魔ま銃じゆうに弾だん丸がんを装そう塡てんすると、レガシー・オブ・ゴールドに銃じゆう口こうを向ける。

「どうするつもりだ？」

　九郎は答える代わりに自動式拳銃を連射する。銃じゆう声せいとマズル・フラッシュが重なり、落らく雷らいのような光景が紅あかの空間に展開した。

『無駄だというのが解わからないのか！　悲しいな、大十字九郎！』

　アウグストゥスの話はもっともである。自動式拳銃では防御陣を

突破するのが限界だからだ。

　そう。防御陣は突破できるのだ。

　九郎は間を置かずに回転式拳銃を連射する。全六発の弾丸が一いつ瞬しゆんのうちに射出された。

　無駄に乱射しているわけではない。音速を超える神速の領域で九郎の術は完成に至る。

　先に撃うち出された自動式拳銃の魔ま弾だんの真後ろ―。その陰かげに隠かくれて飛ひ翔しようする回転式拳銃の魔弾。回転式拳銃の性能だからこそ実現できる奇き跡せきである。

　整列した魔弾はレガシー・オブ・ゴールドへと疾しつ駆くしていく。自動式拳銃の魔弾が防御陣に触ふれた。それは圧あつ倒とう的な破は壊かい力りよくを以もつて障壁を貫いていく。魔弾がこじ開けた僅わずかな綻ほころびの中へ回転式拳銃の弾丸が通過していった。

『……なにぃ!?』

　六発の冷れい酷こくな狩人かりうどは牙きばを剝むき出しにすると、レガシー・オブ・ゴールドへと牙を突き立てた。

　魔弾が装甲の隙すき間まを貫いていく。内部から炎ほのおが噴ふき上がり、巨きよ体たいが揺ゆらいだ。

「なるほど！　そういうことか！　考えたな、九郎！」

「ああ。だが、まだだ！」

　それなりのダメージは与あたえていたが、決定打ではない。だが活路は開かれた。目前の敵は今、決定的な隙すきを晒さらしている。

　デモンベインの目の前に二発の弾丸が顕けん現げんする。それは自動式拳銃のチェンバー、そして回転式拳銃のリボルバーへと滑すべりこんだ。魔弾が装塡されるのと同時に魔銃に刻みこまれた魔ま術じゆつ文字が光り輝かがやく。銃口に光が集つどい、その奥から獣けものが唸うなるような声が聞こえてきた。

トリガーが引かれる。放たれるのは弾丸ではない。超ちよう高温に具現した魔ま力りよくと極低温に具現した魔力である。

一つは異形の劫ごう火かへ。焔もえ猛たける魔ま獣じゆうへ―。

一つは魔ま性しようの冷気へ。凍いてつく龍りゆうへ―。

二体の獣は咆ほう吼こうを轟とどろかせ、牙を剝き出しにしてレガシー・オブ・ゴールドへと襲いかかる。

『なんだとぉぉぉぉぉぉツツ!?』

灼しやく熱ねつと極冷の爪そう牙がが金の装甲を引き裂さき、粉ふん砕さいし、蹂じゆう躙りんし、陵りよう辱じよくしていく。

空間をも破壊するかのような強大なエネルギーの爆ばく発はつが心臓を収めた巨きよ大だいな空間を激げき震しんさせた。

閃せん光こうが炸さく裂れつし、その中へレガシー・オブ・ゴールドが溶とけていく。

（……殺やったか？）

だが次の瞬しゆん間かん、総毛立ち、危機感が全身を貫つらぬいていく。前方へと向けると、閃光の中から一本の光の筋が伸のびてくるのが視し認にんできた。アルは即そく座ざに防御陣を展開させるが、ビーム砲ほうはそれを砕くだいて押し寄せてくる。その直ちよく撃げきを受けたデモンベインは、その場に片かた膝ひざをついた。

閃光が止やみ、爆ばく煙えんの向こう側からレガシー・オブ・ゴールドの輝く巨体が姿を現す。

（あれでも倒たおせないのか……）

だがレガシー・オブ・ゴールドのダメージは大きい。むしろ稼働しているのが不思議なほどの有様だった。軀からだは半ば吹ふき飛び、残った装甲も融ゆう解かいしている。さらけ出された機械の内臓は破は裂れつし、多量の水銀の血を噴ふん出しゆつさせていた。だが、それでもなお動いているのである。

『さすがはマスター・オブ・ネクロノミコン！　味な真似まねをし

てくれる。だが甘い。甘いぞっ！』

　レガシー・オブ・ゴールドの破損箇か所しよから金属的な触しよく手しゆが大量に溢あふれ出す。それは蠢うごめきながら破損箇所を埋うめ始めた。

「自己修復機能！　これもクトゥルーの魔力か！」

　アルが驚きよう嘆たんし、九郎は言葉を失う。

『クトゥルーがある限り、私の魔力は無限だ！　何度でも甦よみがえる！　だが君たちはどうだね!?そうだ！　そもそも最初から勝負になどならないのだよ！　ふはははははははははははっ！』

　レガシー・オブ・ゴールドの全身から無数の砲ほう身しんが出現した。

「やべえ。あんなの全部ぶっ放されたら……。洒落しやれにならねえ！」

　だが、洒落を言うような相手ではない。

「九郎！　まずい！　まずすぎるぞっ！」

　砲ほう門もんに集う爆発的な魔力は、デモンベインを消し飛ばすには十分すぎた。

　砲ほう口こうに凶きよう暴ぼうすぎる光が灯ともったかと思った次の瞬間である。異変が起きた。

『……えっ？』

　アウグストゥスの哄こう笑しようが止んだ。次いで漏もれた疑問と驚きよう愕がく―。

「……どういうことだ？」

　誰だれに問うでもなくその言葉を口にする九郎。

　砲口に集約していたエネルギーが拡散し、消失していたのである。

　異変はそれだけに留とどまらない。修復しつつあった破損箇所が

再生を止めていたのだ。レガシー・オブ・ゴールドの崩ほう壊かいが再開した。

『な、なにが!?　なにが起こっているッ!?』

　アウグストゥスは混乱をきたし、激しく動どう揺ようしていた。

　混乱していたのは九郎とて同じだったが、すぐに思考は切り替かわった。

　そう。この勝機を見み逃のがすわけにはいかなかった。九郎はレガシー・オブ・ゴールドを撃うち抜ぬかんと、自ク動ト式ウ拳グ銃アのトリガーを引く。咆吼とも一体の神しん獣じゆうが駆かけ抜け、超高熱の顎あぎと、そして牙が金色の装そう甲こうへと食くらいつき、そして噛かみ砕いた。獣の軀は崩くずれ、猛る炎と閃光が広がっていく。レガシー・オブ・ゴールドの装甲が金色の溶よう岩がんと化して血の海へと流れこんだ。

「燃える燃える燃えるぅぅぅぅ!?　何故なぜに!?　何故何故何故何故ッッッ！　何故だぁぁぁ！」

　鬼デウ械ス・神マキナのコックピットから這はい出てきたアウグストゥスは炎にくるまれていた。彼はその頭上でのたうち、もがきながらも、天をつかむかのように右手を掲かかげている。

「いったい、なにがどうなってやがる」

　その疑問はすぐさま解消された。

『何故？　何故と訊きくかね、アウグストゥス君。そうか。解らないのか。よろしい。教えてあげよう。教えてあげるともさ』

　デモンベインと燃えるレガシー・オブ・ゴールドの合間―。紅の海面が盛り上がり始めた。

『とてもとても簡単なことだよ。君がクトゥルーの制せい御ぎよ権けんを失っただけのことだ』

　海中から出現したのは全長が百メートルはあろうかという鋼はがねである。

　それは血の海から酷ひどくゆっくりと浮ふ上じようしてきた。

　サイクラノーシュ―。土星の名を冠かんする鬼械神である。

『アウグストゥス。中ちゆう枢すうユニットの扱あつかいを知っているのは君だけじゃないだろう？　君から密ひそかに【ルルイエ異本】との接続を奪うばった。今、クトゥルーの力は私に流れている』

「ウ、ウェスパシアヌスッ！」

　炎ほのおに揉もまれ、あぶられながら、アウグストゥスが鬼おにのような形相を浮うかべる。殺意と苦く渋じゆうをない交ぜにした彼の目は、円えん盤ばん形をした鬼械神の上に立つ紳しん士しに向けられていた。白いスーツで身を固めたその紳士は、か細いステッキをつきながら不敵な笑えみを浮かべている。

「馬ば鹿かな！　貴様はあのときデモンベインに倒されたはず！」

　炭化し始めた体を支えつつ、アウグストゥスはウェスパシアヌスを睨にらみつける。

「確かに、確かに私はあのとき死んだ。死んだとも。このサイクラノーシュもろともね」

　ウェスパシアヌスは顎あご鬚ひげを愛めでながら弾はずむような声で告げた。

「しかし、しかしだ。私は君に、君たちに教えていないことがあるのだよ」

　言うや否いなや、スーツを突つき破るようにして二つの人じん面めん疽そが浮かび上がる。

「ご存じのとおり、私は体内に使い魔まを飼っている。ガルバ、オトー、ウィテリウスと言ってね。よく働いてくれる可愛かわいい奴やつ等なんだが……。同時に私の身代わりでもある」

　人面疽は醜しゆう悪あくなその顔をさらに歪ゆがめ、口こう端たんを吊つり上げた。笑みを浮かべたのかもしれない。

「私はね、この子たちの分も含ふくめて四つの魂たましいを持っていたわけだ。先ほどガルバが身代わりになってくれたので正確には残り三つだがね。つまりはそういうことだ。理解できたかな？」

「ウェスパシアヌスゥゥゥゥゥ！　貴様ァァァァァァ！」

　溶よう解かいし続けるレガシー・オブ・ゴールドの頭上で吠ほえるアウグストゥスに対し、彼は目め頭がしらを押さえ、首を大きく左右に振ふり、最大級の悲しみをアピールした。

「こう見えても悲しいんだ。ああ、とても悲しいとも。大事な大事なガルバが逝いってしまったのだからね。嗚呼ああ、なんたる悲劇か。こんなことがあってよいのだろうか？」

　そこに悲しさなど微み塵じんも存在しない。

「しかしね、この捨て身の演技のおかげで漁夫の利を得ることができそうだ。アウグストゥス君、私が君の肥大化した野心を見み抜ぬけないとでも思っていたのかね？　それとも私に手札がないと思って油断したのかね？」

　ウェスパシアヌスが嘲あざ笑わらう中、アウグストゥスとレガシー・オブ・ゴールドが崩れていく。

「がああああああああああああああああ！」

　燃えつき、灰となって散っていくアウグストゥス。うっとりとした目でそれを眺ながめていたウェスパシアヌスは乾かわいた笑い声を発した。

「詰つめが甘かったなぁ、とろけるように甘かったなぁ、アウグストゥス。切り札は最後まで取っておきたまえ。どうだ、勉強になったかね？」

『うん。ウェスパシアヌスの言うとーりだね』

+

　割りこんできたのは年とし端はもいかぬ少女の声だった。

　九郎の思考が疾しつ走そうするよりも速く、それは起きた。ウェスパシアヌスの体が前まえ触ぶれもなく爆はぜたのである。内部に

仕し掛かけられた爆ばく弾だんが破は裂れつしたかのように、肉片を散らしながら崩れていくウェスパシアヌス。彼は自らが流した血の中に沈しずんでいく。

　だがサイクラノーシュの上にぶちまけた肉片は人間のものではなかった。よく見ると、それがウェスパシアヌスの使い魔であると判わかる。そしてその汚よごれた肉片から少し離はなれた位置に、彼のマントがひらりと舞まい下りてきた。マントの内側から湧わいて出てきたウェスパシアヌスの顔には驚きよう愕がくが貼はりついている。

『あと二回、殺さなきゃ駄だ目めかぁー。めんどっちいよね、それって』

　広大な空間に弾はずむような少女の声が響ひびき渡わたる。

『よし！』

　突とつ然ぜん、脈打つ巨きよ大だいな心臓に裂さけ目が入った。鮮せん血けつが噴ふん出しゆつする中、血ち塗まみれの巨きよ人じんが姿を現す。

　ヒトを象かたどりながらも異形。

　異形でありながらも神こう々ごうしい。

　異界の神を模したであろう、まさに鬼械神の名に相応ふさわしい無む銘めいの神である。

　ネームレス・ワン。それがこの無銘の神の名である。

　無銘の神が右の腕うでをサイクラノーシュと、その上に立つウェスパシアヌスへと向ける。

「ネ、ネロォォォォォォォォォォォォ！」

　絶ぜつ叫きようするウェスパシアヌスの声が残ざん響きようすら残さず一いつ瞬しゆんにして失うせた。

　声だけではない。彼の体、そしてサイクラノーシュも消しよう滅めつしていた。なんの兆ちよう候こうもなく、なんの証あかしも残さず、ただ消えていた。おそらくは、この宇宙から完全に。

　その様子を呆ぼう然ぜんと見守り続ける九郎とアルの目の前で、ネームレス・ワンのコックピットが静かに開いた。その途と端たん、無数の触しよく手しゆが溢あふれ出してくる。それは奥にいる人ひと影かげに絡からみつき、その四し肢しを束そく縛ばくしていた。触手が一度に引き千ち切ぎられる。ぶちぶちという耳みみ障ざわりな音とともに千切られた触手は、のたうちながら血の海の中へと落ちていく。

　ネームレス・ワンのコックピットから罪人が姿を現し、その素す顔がおが白日の下もとに晒さらされる。

「えっ……？」

　素すっ頓とん狂きような声を上げる九郎。

　目は少女に釘くぎ付づけとなり、思考は整理できずに破は綻たんをきたしている。

「なんだと……？」

　アルは席から腰こしを浮かせ、ネームレス・ワンのコックピットから現れた少女の姿を凝ぎよう視しする。

　九郎の頭はショート寸前だった。目の前に映る光景のすべてを否定し、遮しや断だんしたくなる。

　噴出した疑問が頭上で乱らん舞ぶする。目の前にいるのは最強で最悪、マスターテリオンと肩かたを並べるほどの力を有する裏切り者のアンチクロスだ。彼女であるわけがなかった。だがそれ以前の問題もある。

（なんで……なんで生きてるんだ!?）

　もはや九郎は恐きよう慌こう状態に近かったのだが、その少女は意に介かいす様子もなく手を振ってきた。

「やっほー、九郎元気ー？」

「エンネア！」

　九郎とアルの声が重なった。

　ネームレス・ワンから出てきたのは九郎がよく知る少女である。たった一週間ではあるが同じ時を過ごしたあの少女だった。見み間ま違ちがえるわけがない。だが彼女はカリグラとクラウディウスの襲しゆう撃げきを受けた際、それに巻きこまれて死んだはずである。

　混乱する九郎をよそにその少女は―エンネアは大きな目めを瞬しばたたかせながら、ぱたぱた手と首を横に振った。否定の意味である。

「違ちがう違ちがう。ごめん。その名前、嘘うそ」

　あっけらかんとエンネアは言った。

「本当はネロって呼ばれているんだ」

　エンネアは悪びれる様子もなく、赤く濡ぬれた舌をちろりと覗のぞかせた。

　ネロ―。

　その名がなにを意味するのか九郎は理解していた。理解していたが、まるで理解できない。語気が自然と荒あらくなる。

「どういうことだッ！　どういうことなんだよ、エンネア！」

「どういうことって言われてもネロはネロだからとしか答えようがないよ」

　エンネアは鼻から息を吐はき出し、肩をすくめた。

「そうか。妾わらわが汝なれから感じた不ふ吉きつな気配はそういうことであったか……。アンチクロス―それも最強の罪人、『暴君』ネロよ」

　アルの指し摘てきにエンネアが薄うすく笑う。その笑えみは酷ひどく異形じみており、邪じゃ悪あくの根元を思わせる魔ま性しようの微笑ほほえみである。そこにはエンネアと呼ばれた少女が見せた明るく無む邪じゃ気きな笑顔はなかった。吐き気をもよおすほどの凶きよう悪あくな邪じゃ気きに体中の産うぶ毛げが総毛立つ。本能的な恐きよう怖ふ心しんが呼び覚まされ、わけもなく体は震ふるえ始めていた。それはあのマスターテリオンと同類のそれである。

ふとエンネアが―ネロがデモンベインの手の中にある自ク動ト式ウ拳グ銃アへと目を向けた。彼女は満足そうな笑みを浮うかべると、一つうなずいた。

「ネロの魔ま銃じゆう、二挺ちようとも使いこなしているみたいだね」

　邪悪さはそのままに、ネロは笑みを浮かべる。

「どう？　優すぐれものでしょ？　ネロのとっておきだけど九郎にあげたんだ。九郎、大変そうだったし……。なにより、それくらいのものを渡しておかないと戦いが楽しめないもんね」

「戦いが楽しめない？　どういうことだ!?」

　ネロの話がまるで理解できなかった。エンネアと呼ばれた少女と目の前の魔ま人じんがまるで重ならない。同一人物であるにもかかわらず符ふ合ごうしなかった。悪い夢でも見ているかのようだ。

　戸と惑まどう九郎の気持ちを察したのか、ネロは満面の笑みで話を続ける。

「九郎とネロは滅ほろぼし合うんだよ。今ここでね」

「滅ぼし、合う？」

「うん、そう。九郎はアーカムシティを護まもる『せーぎの味方』として。ネロは世界滅めつ亡ぼうを目もく論ろむ『悪のまほー使い』として。すべてを賭として相手のすべてを否定し合うの。素す敵てきでしょ？」

　ためらうことなく言ってのけるネロの姿に、九郎は目め眩まいを感じずにはいられなかった。

　それはやがて頭痛へと変わっていく。こめかみが脈打つように痛み、喉のどは渇かわききっていた。胸はむかつき、胃は軋きしみ、足あし下もとがぐらついている。

　怖こわかった。怯おびえていた。崩くずれゆくなにかに九郎は震えていた。

「なんで……。なんでそんなことをしなきゃならないんだ……」

「なんでって、そのために二回も助けたんだよ？　カリグラやクラウディウスなんかに美味おいしいところ持っていかせないもん。九郎を味わうのはネロだもん。誰だれにも渡わたしたりしないよ」

「そうじゃない！　なんでそんなことをしなくちゃならないんだって訊きいてんだよッ！」

　九郎は声を張り上げた。それは怒ど声せいというよりは悲鳴に近い叫さけびである。

「なんでって、ネロがそうしたいからだよ？」

　あっけらかんと答えを口にすると、彼女はバックステップを踏ふむかのように跳とび、コックピットへと潜もぐりこんだ。それと同時に心臓にめりこんでいたネームレス・ワンが飛び出した。巨きよ大だいすぎる右手がデモンベインへと突つきつけられる。

『術種選せん択たく：魔ソード剣・スペル！』

　ネームレス・ワンの右みぎ腕うでが巨大な剣けんへと形状を変化させた。無む銘めいの神は魔剣を突き出したままデモンベインへと迫せまる。

　九郎は反射的にデモンベインの機体を捻ひねらせ、斬ざん撃げきをかわす。それでも完全に避さけることはできず、背中を剣がかすめていった。動きは止まらない。着地と同時に剣を横に薙ないでくる。

「バルザイの偃えん月げつ刀とう！」

　デモンベインの手中に再召しよう喚かんされた大刀が握にぎられ、唸うなりを上げて迫る剣へと打ちこまれた。盛大な魔ま力りよくの火花が弾はじけて散った。二体の鬼デウ械ス・神マキナは刃やいばを重ねたまま拮きつ抗こう状態へと突とつ入にゆうする。

「お前も、お前も同じってことか!?　お前もブラックロッジと同じで破は壊かいを愉たのしむのかよ！」

　力任せに押し合う互たがいの刃が熱を生じ、赤く鈍にぶく光り始める。

『そーだよ！　ネロは魔人だから殺すのも壊こわすのも愉しいよ！　さあ、遊んでよ！』

　拮抗状態から繰くり出されたデモンベインの右のハイキックが、ネームレス・ワンの顔面に炸さく裂れつする。砕くだけ、剔えぐれ、爆はぜる頭部。それをキッカケに二機の鬼械神は後方へと跳び、間を取った。

　デモンベインはバルザイの偃月刀を、ネームレス・ワンは魔剣を構える。ほぼ吹ふき飛んでいたはずの頭部は自己修復能力によって瞬またたく間に修復し、デモンベインとネームレス・ワンは一定の距きょ離りを保ったまま対たい峙じする。

「なら、エンネアとして俺に見せた顔は全部嘘だったのか!?　なにが目的で俺に近づいた！」

「熱くなるな！　落ち着け、九郎！」

　アルにたしなめられるが、心の奥底から噴ふん出しゆつする激情は抑おさえられそうにない。短い期間ではあったがエンネアという少女と築き上げてきたものがまやかしだとしたら──。やり切れない想おもいが九郎の胸中に去来し、苛さいなんでいた。

　邪悪で満たされた空間に沈ちん黙もくが訪おとずれる。先に静せい寂じゃくを破ったのはネロだった。

『それは、ただ九郎に逢あいたかったから……。これは本当』

（……だったら、なんで）

『それと九郎と一いつ緒しよに遊んだのは楽しかった。とってもとっても楽しかった。これも本当』

（それが本当なら、なんで!?　なんで俺に剣を向けるんだよ？）

　いつの間にか握りしめていた拳こぶしが微かすかに震えている。

『戦って、九郎。滅ぼすべき悪はここにいるよ』

「……解わからねえよ」

『ヘブライ語の子音には数字の意味があるの。獣けものの数字「６６６」が表すのは皇こう帝ていネロ。だからアンチクロスのネロこそ聖マス書ターのテリ獣オン。ブラックロッジがネロのものになるのは約束されていたことなんだよ』

「……ワケ解らねえよ」

『クトゥルーを解き放ち、世界を滅ぼすのはネロ。九郎が憎にくむべき邪悪と理り不ふ尽じんはネロ。九郎はネロを滅ぼすために戦っ

ているんだよ』

「そんなことのために戦ってんじゃねえんだよ！　理不尽を理不尽で塗ぬり潰つぶすためになんか戦ってねえよ！」

『……そっか、解らないか。しょうがないなあ』

　ネロは軽く溜ため息をついた。それは子供の我わが儘ままに呆あきれて苦く笑しようするかのような優やさしげな口調―。それにもかかわらず心臓は破は裂れつしそうなほど跳はねていた。全身が警けい鐘しようを発している。

『【ルルイエ異本】に接続アクセス。命令オーダー。Ｃ臨界突とつ破ぱせよ』

　ネームレス・ワンのコックピットから再び触しよく手しゆが溢あふれ出してきた。

「彼奴きやつめ、なにをする気だ!?」

　その疑問はすぐに解消された。

「くするぅ……ら・いらー……」

　コックピットから押し出されるようにして現れたのは、触手に拘こう束そくされた一人の少女である。

　色オ違ツいドのア瞳イを持ち、夢を見ているかのような表情をした彼女は【ルルイエ異本】の精せい霊れいだった。

　ネロが唱える異界の呪じゆ文もんが広大な空間に広がっていく。そしてそれに呼応するかのごとく【ルルイエ異本】の少女の体が何度となく跳ねた。呪文は高らかに鳴り響ひびき、それに合わせて少女の痙けい攣れんも激しさを増す。

「アアアアアアアァァァァァァァァァァ
――――――――――――――――！」

　悲鳴とも咆ほう吼こうとも絶頂とも取れる声が少女の口から放たれる。

『クトゥルーの制せい御ぎよをね……なくすんだよ』

ネロの発言に九郎とアルは青ざめる。それがどのような惨さん状じようを招くかは想像するまでもない。

やがて【ルルイエ異本】の叫さけびは断だん末まつ魔まへと変わった。少女の体が頁ページとなって解ほどけ、光の粒りゆう子しとなって散っていく。そして神は暴走した。情報は錯さく乱らんし、神を留とどめた器うつわの構成が崩くずれ出した。神の細さい胞ぼうは癌がん細胞のごとく増ぞう殖しよくし続けていく。

──大いなる〝C Cthulhu〟を蝕むしばむ大いなる〝C Cancer〟。

ルルイエの海上で蠢うごめいていたクトゥルーの動きが止まった。その巨きよ大だいな軀からだの表面に細かい罅ひびが入る。いや、それは罅などではない。閉とざされていた幾いく千せん、幾万、幾億の瞼まぶたと唇くちびるである。

増殖に増殖を重ねる神の眸ひとみ、そして口が一いつ斉せいに開かれた。

幾千、幾万、幾億の眸が血けつ涙るいを流し、幾千、幾万、幾億の口が雄お叫たけびを上げる。

神の軀が爆ばく発はつ的な勢いで膨ふくれ上がった。無数の肉にく腫しゆが土台となる軀を覆おおいつくし、さらにその上に新たな肉腫が作られていく。その上で新たな眸と口が次々と芽め吹ぶき、そして咲さいた。流れ続ける血涙は眸が開くごとに量を増し、巨大な滝たきとなって海を汚よごしていく。雄叫びは唄うたとなって世界に輪唱を轟とどろかせる。

──それはまるで世界最さい期ごの日の光景。

+

ルルイエの海はクトゥルーが流した血涙で赤黒く染まっていた。

海面には海魔の肉片と臓ぞう腑ふ、そして重油とが混じり合い、耐たえがたい臭しゆう気きを放っている。悪夢にも似た光景だが、悪夢ではあり得ない。

ダゴンや深きデイーものプワどもンズ、そして破は壊かいロボットの姿は消え失うせていた。それは熾し烈れつなる戦いの末に、やっとの思いで勝ち取った勝利である。

だが払はらった代だい償しようは大きい。何百隻せきもの戦せん艦かんが海の藻も屑くずとなり、それと運命をともにする形で何千人もの乗組員が死していた。

そこまでして手に入れた勝利だが、真の決着には程ほど遠とおいのが実情である。狂きよう気きに満ちた現実が眼前に広がっている。

クトゥルーはこれまでにない変化を見せ始めていた。その偉い容ようはさらに巨大化し、秩ちつ序じよなく肥大化している。このまま膨ぼう張ちようを続ければ、地球は丸ごと邪じや神しんに飲みこまれてしまうだろう。

（大十字さん……アル……）

旗き艦かん・ノーデンス。その上で覇道瑠璃は硬こう直ちよくしていた。

彼女だけではない。誰だれも彼もが恐きよう怖ふに体をすくませ、身動きが取れなくなっていた。

極限まで高められた恐怖心。

限界に達する緊きん張ちよう感かん。

ふとした拍ひよう子しで全員を恐きよう慌こう状態へと陥おちいらせるであろう原初の恐怖が上空から降り注がれている。それを前にしては人間の理性など無力だ。できることは崩ほう壊かいを待つだけの脆ぜい弱じやくな忍にん耐たいのみである。

瑠璃は歯を食いしばり、押し寄せてくる恐怖に抗あらがっていた。限界は近い。全身から脂あぶら汗あせが噴ふき出し、立っていられなくなるほど膝ひざが笑っている。心は砕くだけ散る寸前であり、あと一押しですべてが決けつ壊かいしてしまうだろう。そしてそれは瞬またたく間に全員に伝でん播ぱするに違ちがいない。

それでもなお瑠璃が立っていられたのは、今もまだ戦い続けている九郎とアル、そして祖父が遺のこしてくれたデモンベインの存在

があったからである。彼等がいる限り、瑠璃もまた戦い続けることができた。だがそれでもなお神がもたらす神気は尋じん常じようではなかったのである。

　瑠璃の心が折れかけたときだ。彼女の傍かたわらに彼が立った。いつもと同じように──朝日が東から昇のぼるのと同様、それがごく自然なことだと言わんばかりに。

　だが次の行動が、いつもとほんの少しだけ異なっていた。あくまでも優やさしく、静かに、穏おだやかに……包帯まみれの彼の手が、瑠璃の右みぎ肩かたに添そえられる。

　振ふり向くとそこにはウィンフィールドがいた。余計なことは口にしない。長いこと一いつ緒しよに居続けたのだ。主人として、従者として。だからその瞳を覗のぞくだけで理解できる。

　瑠璃は静かにうなずいた。それを境に震ふるえは止まる。

「ありがとう。大だい丈じよう夫ぶです」

　なんの揺ゆらぎもない、落ち着いた声で瑠璃は告げる。そこにいたのは恐怖に身をすくめる少女ではない。覇道財ざい閥ばつ総そう帥すい・覇道瑠璃である。

「わたくしは大十字さんを、アルを、そしてお爺じい様のデモンベインを信じます」

+

　デモンベインとネームレス・ワンは間合いを取りながら睨にらみ合いを続けていた。互たがいに剣けん先さきを相手に向けつつ静止している。まるで時が流れるのを止めてしまったかのようだが、地上では崩壊の序曲が幕を開けようとしていた。

『このまま暴走を続けちゃったら、クトゥルーは地球を覆いつくすよ？　全世界を瘴しよう気きで汚お染せんして地球の歴史は終わっちゃう』

「なんてことを……」

『だからさっきから言ってるよ？　こうするのがネロだって。いいんだよ、別に。九郎が戦わないならそれはそれで。そしたら全部壊こわすだけだもん。そうだよ。全部壊れちゃえばいいんだ』

　ネロの声の冷たさは冷れい酷こくさからくるものではない。運命に絶望し、達観した者が持つ心が凍こおりついたかのような冷たさだ。それゆえに九郎の心はより深く剔えぐられていた。

『どうする、九郎？　このまま一緒に世界が終わるのを見てよっか？　お酒でも持ってきて壊れる世界を肴さかなに……ってのもけっこーオツかもね。そうだなー、このペースなら地球が亡びるまで一日もかからないと思うな。ほんとーに簡単に壊れるよ？　大切なものも、ちょっとだけお気に入りなものも、嫌いやなものだって──なんの区別なく、なんの意味もなく』

　まるで冗じよう談だんのようだったが、そうではない。確実に地球の終しゆう焉えんは近づいていた。

「九郎……」

　アルが囁ささやきかける。

　彼女が言わんとしていることを九郎は理解していた。

「九郎、戦うぞ」

　予想どおりの言葉をアルは吐はいた。当たり前である。それでこそアルなのだから。

「戦わなければ救われない者もいる」

　そのようなことは承知していた。承知していたが、それがなぜエンネアなのだという思いが九郎の胸を締しめつける。

（俺は──）

　九郎は苦く悩のうしながらもネームレス・ワンを──その中にいる少女へと目を向ける。

『……九郎』

つぶやく彼女の声はホッとしているようであり、嬉うれしそうでもあった。

デモンベインは戦せん闘とう態勢に入り、その様子をネームレス・ワンが静かに見守る。

『やっとその気になった？』

「ああ、期待に応こたえてやる。だがこれだけは断言しておく。俺が……デモンベインが討うち滅ほろぼすのはエンネア、お前じゃない。デモンベインは魔まを断つ剣けん。俺はここにある邪じゃや悪あくだけを断つ！」

それが苦悩の果てに導き出した答えである。

その宣言に対し、アルの応えはどこまでも優しかった。

「そうだ。それでいい。それでこそ汝なれだ、大十字九郎！」

『だからさ、ネロがその邪悪そのものなんだよ！　甘いこと考えていると秒殺だよ！』

ネームレス・ワンが突つき出した左ひだり腕うでに魔ま術じゆつ文字が走り、変質する。それは銃じゆう口こうを象かたどった。

『魔ブリツ術ト・弾スペル！』

無数の弾だん丸がんがデモンベインの機体に着ちやく弾だん。だがそれは虚きよ像ぞうであり、すでにデモンベインはネームレス・ワンの頭上で偃えん月げつ刀とうを掲かかげていた。

『上！　術種選せん択たく：魔カノ砲ン・ス弾ペル！』

ネームレス・ワンは見上げもせずに左腕を頭上へとかざす。銃口は巨きよ大だいで凶きよう悪あくな砲ほう口こうへと変形し、頭上のデモンベインを捉とらえた。魔ま力りよくを超ちよう高密度に圧縮させた砲弾が吐き出される。

九郎は怯ひるまない。シャンタクの推進力を最大にし、ネームレス・ワンへと突とつ撃げきする。

砲弾が機体をかすめていく。弾だん道どうに沿ってデモンベイン

の装そう甲こうが削けずり取られていくが問題はない。バルザイの偃月刀を突き出し、さらに加速を重ねる。後先のことは考えてはいない。今はその一いち撃げきに意識を集中させる。

　神風にも似た特とつ攻こうから放った一撃は、斬きるというより叩たたきつけるような感じである。ネームレス・ワンの右肩口に食いこんだそれは、機体を大きく切り裂さいた。

『この程度じゃ、まだまだだね！』

　右半身をだらりとぶら下げながらも、ネームレス・ワンの圧あつ倒とう的な神気は衰おとろえもしない。

　九郎は即そく座ざにデモンベインを起き上がらせると、自ク動ト式ウ拳グ銃アを召しよう喚かんして発はつ砲ぽうしていた。ネームレス・ワンの右半身が完全に吹ふき飛ぶが、クトゥルーの魔力を受けているのか自己修復が速い。みるみる欠損部分が埋うめ合わされていく。

『修復が追いつかないほど連続して攻こう撃げきするか、一撃で跡あと形かたもなく吹き飛ばさない限りネームレス・ワンは倒たおせないよ！』

「こっちにも考えがあるんだよっ！」

　九郎は回転式イタ拳銃クアを顕けん現げんさせてネームレス・ワンを撃うつ。その弾丸は複雑な軌き道どうを描えがきながら砲口を象ったネームレス・ワンの左腕へと向かい、その中へと吸いこまれていった。

「ＢＩＮＧＯ！」

　砲口から光が溢あふれ、次の瞬しゆん間かん、ネームレス・ワンの左腕が弾はじけ飛んだ。

　九郎は左腕が水面に落ちるよりも速く行動に移った。

「今だ！　いくぞ、アル！」

「ああ！」

　デモンベインを疾しつ駆くさせてネームレス・ワンとの距きよ離

りを一気に詰つめると、コックピットの辺りを目がけて貫ぬき手てを放つ。一見、致ち命めい傷しようを与あたえるかのような行こう為いだが、目的はネロを殺すことではない。貫手はコックピットのやや上側に突き刺ささり、そのままそれを鷲わしづかみにする。

『コックピットごとネロを引き離はなすつもり!?』

「そういうこった！」

　右みぎ掌てのひらにはレムリア・インパクトのパワーを溜ためてある。あとはコックピットを引きずり出し、すぐさまネームレス・ワンを昇しよう華かする。これですべて片がつく。

『だからネロを甘く見るなって言ったでしょ？』

　やれやれとでも言いたげなネロの嘆たん息そくが聞こえてきた瞬間である。脳天を貫つらぬくかのような鋭するどい危機感に煽あおられ、九郎はコックピットを手放してネームレス・ワンから飛び退のいた。

「どうした九郎!?　あのまま撃っていれば勝ちだったぞ!?」

　当然のごとくアルは当とう惑わくするが、九郎は釈しやく明めいする余よ裕ゆうすらなかった。

　全身を流れる冷や汗あせ―。恐きよう怖ふで荒あれ狂くるう心臓を落ち着かせながら、九郎は事態を見守った。

　目の前ではなにも起きてはいない。起きてはいなかったのだが……。

「九郎！　しっかりしろ！　なにがあった!?」

　アルが問うてくるが、息が上がっているせいか言葉を紡つむぎ出すことができない。底知れぬ恐怖が九郎の体を絡からめ取っていた。

『……凄すごいね、こと闘とう争そうにおける九郎の直感は。研とぎ澄すまされているとか、そういう生半可な言葉じゃ表現できないよ。やっぱりネロの思ったとおりだ』

　もしあのままネームレス・ワンに組みついていたらどうなってい

たか。

　それを考えると卒そつ倒とうしそうになる。

　消しよう滅めつである。

　魔術の効力が消えたとか、解かい呪じゆされたとか、そういう次元ではない。文字どおり存在の消滅である。なかったことにされたと言い換かえてもよい。それは先ほどサイクラノーシュを消し去った力と同じである。

『九郎は気づいたみたいだね』

「なっ……九郎!?　解わかるのか!?」

　信じられないとでも言いたげな口ぶりで問うてくるが、九郎に応こたえられるだけの余裕はない。

『あはははは、アルにぶちんー』

　ネロは場にそぐわぬ楽しげな口調で言った。

「なんだと、このぉ!?」

　アルが剝むきになっている間にネームレス・ワンは自己修復し、機体は再生を終えていた。

『あれがネームレス・ワン最大の力。情報を消去して因果から遮しや断だん―つまりね、世界を構成する情報からその存在の情報をなくしてしまうわけ。存在そのものをなかったことにしちゃうって力なんだ。「あらゆるものは観測者なしでは存在できない」だっけ？　あれに似てるかもね』

「そんな力は人間の領域ではない」

　応えるアルの声は心なしか震ふるえていた。

『解った？　ネロは魔ま人じんなんだよ？　正真正しよう銘めい、完全に世界を滅ほろぼし得る邪じや悪あくそのもの。そしてデモンベインはこの力に対たい抗こうする術すべはない』

　ネロの言うとおりだった。情報そのものを消去してしまうような

窮きゆう極きよくの理り不ふ尽じんに抗あらがう術など存在しない。それは死より恐おそろしいことである。

『ただ一つを、除いては』

「ただ、一つ？」

　九郎はネロの言葉を反はん芻すうする。

『そう。九郎はもう解っているはずだよ』

　考えるまでもなく、それは九郎の脳のう裏りに知覚される。

　異形の筐はこ──

　七本の支柱──

　黒い結けつ晶しよう体たい──

【Shining Trapezohedron】

　そして戦場は異界と化した。

+

　何処いずことも知れぬ世界の狭はざ間まから、デモンベインとネームレス・ワンの戦いを見守る異形の女がいた。

　ナイアである。

　長身痩そう軀くのその女は圧あつ倒とう的な闇やみを身にまとい、しきりにうなずいたかと思うと微び笑しようを浮うかべた。怖おぞ気けがするほど美しく、そして妖あやしい笑えみである。

「なるほど。考えたじゃないか、ネロ」

　ナイアは感心すると、時空を超こえた遥はるか彼方かなたで相対する二機の鬼デウ械ス・神マキナへと目を向ける。

　デモンベインの右みぎ腕うでからブラックホールが出現し、今まさに神しん剣けんが這はい出ようとしていた。その様子をネームレス・ワンが静かに見守っている。

「確かにあれで『縁えん』を絶たれれば、キミを縛しばる法則ロウは意味を失うだろうね」

　ネロの行動は意外ではあったが、ナイアの想像を超えるほどの事態ではなかった。

「自分の力でかなわぬなら、九郎君の力で、か。滅め茶ちや苦く茶ちやで愚おろかしい決断だけど敬意に値あたいするよ。でも……」

　狂きよう気きを宿したその眸ひとみに哀あい憫びんの情が浮かび上がった。

　儚はかなみ、哀あわれむ傲ごう慢まんな優やさしさは、とどのつまり侮ぶ蔑べつと冒ぼう瀆とくが姿を変えただけのことである。

（―嗚呼ああ、そうだ。いつだって気高き人々はこうだ。彼等は皆みな、自らの意志で命という路みちを踏とう破はする。未来にたどり着くための惨みじめでありながら限りなく美しい足あ掻がき）

　それが人間の強さである。

「そう。ヒトは強い。本当に強い。だからこそ、その強さが仇あだとなる」

　ナイアの超ちよう感覚がシャイニング・トラペゾヘドロンが創つくり出した処しよ刑けい場じようを知覚する。

　そこでは大十字九郎が強大で無む慈じ悲ひな力に翻ほん弄ろうされつつも、必死に、美しく足掻いていた。

+

　トラペゾヘドロンによって創り出された処刑場の中にありながら、ネロは落ち着いていた。

『正解ピンポン。それがただ一つの例外。ネームレス・ワンを滅ぼし得うる唯ゆい一いつにして圧倒的な力』

　異形の光と闇が集つどう矛む盾じゆんの巣そう窟くつに佇たたずみながら、裁きを待つかのように静かに告げる。

　一方、九郎は独りでに現出し、好き勝手に暴れ回ろうとするトラペゾヘドロンの力を抑おさえこむのに必死になっていた。

「ぐっ……！」

　トラペゾヘドロンはデモンベインの手中で荒あれ狂くるい、解き放たれる場所を求めて九郎を責め立てる。その強大な破は滅めつの力に応こたえるかのように、デモンベインはネームレス・ワンへとトラペゾヘドロンを向けようとしていた。

「ッ！　だ……駄だ目めだッ！」

　九郎は操そう縦じゆう桿かんを力任せに押さえこみ、デモンベインの動きを封ふうじこめる。

　だがその程度でトラペゾヘドロンの魔ま力りよくを殺すことなどできるわけもなく、邪じや魔まされたことに腹を立てるかのごとく、より激しく牙きばを剝むいてきた。脳のう髄ずいが掻かき乱され、神経が焼けつくかのような激しい衝しよう撃げきが襲おそいかかってくる。もはや限界だった。

「九郎っ！　敵に力を向けなければ……我等が滅ほろぼされてしまうぞっ！」

「だからってエンネアには向けられねえだろうがよッ！」

　全身の骨という骨が粉こな微み塵じんになりそうなほどの激痛に苦しみながらも、かろうじてトラペゾヘドロンを制せい御ぎよし続ける九郎とアル。そんな二人をネームレス・ワンは見守っていた。

『まだネロのことを甘く見ているの……？』

　これが最後の警告だと宣言するように、ネームレス・ワンが右腕をデモンベインへと向けた。

『別にいいけどね。どっちにしろネロはこの力で九郎を消し去るだけ。どうでもいいんだよ？　九郎が苦しもうが悩なやもうが全部無む駄だ。この一いち撃げきがすべてなかったことにしてしまう』

　神経が焼き切れそうなほどの激しい激痛が襲いかかる中、その声が頭に響ひびき渡わたる。それは九郎の脳を激しく掻き回し、痛みをより酷ひどいものにしていた。

（……無駄？　無駄だと!?　こん畜ちく生しようが……っ！）

　気を抜ぬけば意識が吹ふき飛んでしまいそうなほどの激痛の中、九郎は猛もう烈れつに苛いら立だっていた。

「勝手に決めつけてんじゃねえよ！　このバカタレがっ！」

　子供を叱しかりつけるかのようにぴしゃりと言ってのける。

「後味悪わりぃことは大だい嫌きらいだって言ってんのに、どいつもこいつも！　どうでもいいってのはこっちの台詞せりふだ！　魔ま人じんがどーのだの、世界を滅ぼすのがどーのだの、倒たおすべき邪じゃ悪あくがどーのだの、しまいにゃ人のことまで勝手に決めつけやがって！　こいつは俺たちが選んで俺たちが決断した俺たちの戦いなんだよ！」

　まくし立てる九郎。

「……むかついた。マジでむかついた！　その不細工な機体から引きずり下ろして倫りん理りコードに引っかかるよーなキツイおしおきしてやるからなッ！　そこで大人しく待ってろ！」

　長口上が終わりを告げたとき、ネームレス・ワンから発せられる敵意が少しだけ緩ゆるんだ。

　だが、それも一いつ瞬しゆんのことである。

『九郎ってば本当に……』

　突とつ然ぜん、ネームレス・ワンから高密度の敵意が叩たたきつけられる。それは魔力を通じて質量を持ち、敵意そのものが敵を破

は壊かいしうる力と化す。

『これで終わりだよ、九郎！』

　その激しい敵意にデモンベインは反応した。

　九郎の制御を振ふり払はらうと、トラペゾヘドロンをネームレス・ワンへと向けて駆かけ始める。

「くそっ！　やめろォォォォォォォ！」

　処刑場に九郎の絶ぜつ叫きようが響き渡る。

+

　異形の光と闇やみを引き連れ、絶対的権限を持つ断罪者が、冷れい酷こくな死し刑けい執しつ行こう人にんが迫せまってくる。

　ネロは突とつ進しんしてくる破壊神を……咽の喉どを貫つらぬかんとする魔を斬きる刃やいばを、満ち足りた顔で見つめていた。

　ごく自然に両手を広げる。

　己おのれを滅ぼす者のすべてを受け入れるために。

（これで終われる。なにもかもが終わる）

　それを考えただけで顔がほころぶ。

（この狂くるった運命の輪も、邪悪のシナリオに犯おかされた世界も、これで終わる）

　そしてそんな絶望に弄もてあそばれていた自分自身も、ようやく解放されるのだ。

　無限に続くと思われた邪悪の輪りん廻ね。

　それを撃うち砕くだくのが彼である。

　運命の直ただ中なかにありながら神の思おも惑わくさえも超こえる男・大十字九郎。

「九郎を甘く見たね、顔フエ無イスしレス」

　言って静かに瞳ひとみを閉じる。

　ネロは己の刻ときが始まって以来、初めて勝利を確信した。

「これが九郎の強さ！　これが人間の強さなんだよ！　ナイアラ……！」

　ネロの言葉は最後まで続かなかった。

　──違ちがうよ。大十字九郎の強さを甘く見ているのは君のほうさ、ネロ。

　闇色をした異形の女の声が木こ霊だまする。

+

　トラペゾヘドロンを手にしたデモンベインがネームレス・ワンを撃ち抜こうとした瞬しゆん間かん、九郎は渾こん身しんの力でそれをねじ曲げていた。神しん剣けんの軌き道どうは逸それ、ネームレス・ワンの右みぎ腕うでを引きちぎっていく。右腕が宙を舞まった。

「おらァアアアアアアアア！」

　雄お叫たけびとともに宙を舞うネームレス・ワンの右腕にトラペゾヘドロンを突つき出した。猛たけり狂くるう光と闇が右腕を撃ち抜き、それを貪むさぼっていく。トラペゾヘドロンの暴走は止まらない。

「でぇぇぇぇぇぇぇぇぃ！」

　九郎は暴れ続けるトラペゾヘドロンを振り上げると、ネームレス・ワンの左腕を撥はね飛ばし、撃ち抜いた。

　トラペゾヘドロンの暴走はさらに続く。振り上げられたトラペゾヘドロンを横に薙なぎ、ネームレス・ワンの首を刎はね飛ばす。千切れ飛ぶ頭を刃のない神剣で撃ち抜いた。顔に罅ひびが入り、そこから光と闇が溢あふれ出す。

「いい加減、言うことを聞きやがれぇぇぇぇぇぇぇ！」

　頭が砕け散った。

　光が砕け散った。

　闇が砕け散った。

　異界の処しよ刑けい場じようが次元の割れ目へと吸いこまれていく。

　そして悪夢は忘れろとでも言わんばかりに世界は正常に戻もどった。

　後に残されたのは頭と両腕を失ったネームレス・ワン、そしてデモンベインだけである。

　ネームレス・ワンが再生する気配はなかった。それどころか機体は古木のように罅が入り、干からびている。反り返った装そう甲こうは次々に剝はがれ落ち、血の海へと沈しずんでいった。内部の機関をさらけ出しながら崩くずれゆく鬼デウ械ス・神マキナから神気は感じられない。ネームレス・ワンは完全にその機能を停止しているようだ。

　そんな鬼械神の胸部にポッカリと穴が空いている。そこには呆ぼう然ぜんとした表情のエンネアの姿があった。なにが起きたのか理解できないとでも言いたげな表情だ。

　九郎はデモンベインの右腕をネームレス・ワンのコックピットへ寄せ、ハッチを開く。

「なっ！　こら、なにをするつもりだ？」

　アルが非難の声を上げるよりも速く九郎は行動に移っていた。デ

モンベインの右腕を伝い、ネロの下もとへと急ぐ。

「待て、九郎！　まったく、なんと無防備な！」

　アルが追いかけてくるのを感じながらネームレス・ワンのコックピットを覗のぞきこむと、その中で縮こまっている少女と真正面から目が合った。

「よう、お騒さわがせ娘むすめ」

「……やあ」

　呆然とした表情はそのままに、ネロは―エンネアはしゅたっと右手を挙げた。なんとも間の抜ぬけた、それでいて微笑ほほえましい仕草である。九郎は思わず苦く笑しようしてしまう。

「で、気はすんだのか!?　まあ、これだけ派手にやらかしたんだ。もう十分だろ？」

「気がすんだとか、そういう問題じゃ……」

「そういう問題だ、バカ」

　エンネアの頭を小こ突づかんばかりの勢いで言ってのける九郎。さらに続ける。

「お前は我わが儘ままを言ってただけだろうが」

「我が儘って……」

　わけが解わからないとでも言いたげに首を傾かしげるエンネア。

「九郎！　油断するな！　まだ其そ奴やつは力を失ったわけでは……」

　近寄ってきたアルを手で制し、心配ないと目で伝える。彼女はやれやれと肩かたをすくめ、聞こえよがしな溜ため息をついた。

　確かにエンネアからは強大な力を感じるが、悪意や殺意などは微み塵じんもない。そこにいるのは九郎が知る少女・エンネアである。九郎はそっと手を伸のばすと、少女の頭をなでた。

「あ……」

　ぴくんと体を少しだけ反応させると、エンネアは怯おびえにも似た目で見返してきた。

「帰るぞ」

「えっ？」

「帰るって言ったんだ」

　九郎は断言すると、ネームレス・ワンのコックピットからエンネアを引き出した。

「あの馬ば鹿かでかい心臓がクトゥルーの核かくなんだろ？　じゃあ、あれを昇しよう華かしてめでたしめでたしだ」

「そうじゃなくて！　……帰るって」

「こんな場所にいるくらいなら俺の事務所のほうがマシだったろ？　とりあえず戻って飯食って寝ねて、後のことはそれから考えれ」

　楽観的すぎるかもしれなかったが、クトゥルーの腹の中にいるよりはマシだった。

「……汝なれの事務所は粉こな微み塵じんに消え去っているがな」

　思わず九郎は呻うめくが、それも眠ねむればなんとかなる……ような気がした。

「でもネロは……」

「違うだろ！」

　九郎はエンネアを指差して睨にらみつける。

　彼女は「うっ」と言葉を詰つまらせながら、半歩ほど後あと退ずさった。

「ネロは俺が倒たおした。ここにいるのはエンネアだ。そういうことにしとけ」

　九郎の話にエンネアは気き恥はずかしそうな、それでいて泣き出しそうな……そんな微び妙みような表情で弱々しく笑った。そして

首を静かに横に振ふる。

「そんなふうに割り切れないよ。それって欺ぎ瞞まんだし」

「そうだな」

　あっさりと肯こう定ていしたのは、どんなに繕つくろったところで魔ま人じんだという事実は変わらないからだ。

「それでも俺はお前が邪じや悪あくだとは思えない」

　ましてや滅ほろぼすなどとんでもなかった。

「九郎に罪人を裁く権利があるとでも思ってるの？」

「んにゃ。気に入らねえからぶっ飛ばしてきただけさ。だから俺もお前と大して変わらない」

「九郎らしいなあ」

　エンネアは微妙な、だが幾いく分ぶん晴れやかな顔で笑った。九郎もつられるように笑みを浮うかべる。

「汝等……和なごむのは勝手だが、こうしている間にも世界はピンチだ」

「ををぅ」

　よく考えるまでもなくクトゥルーは現在進行形で暴走中である。

「ををぅ、じゃなかろう！　肝かん心じんなことを忘れるな！」

「忘れたわけじゃねえよ。ちょっとばかし意識の外に出てただけだ」

「出すなーっ！」

　アルにどやされる九郎の姿がおかしかったのか、エンネアは今度こそ本当の笑みを浮かべた。

　九郎は笑い返し、アルは憮ぶ然ぜんとしたままそっぽを向く。

「九郎は強いね」

　満面の笑みを浮かべたままエンネアは言った。

「なんだよ？　唐とう突とつに」

「九郎は本当に強いよ。ネロが思っていたよりずっと」

「だからネロじゃなくて……」

　咎とがめる九郎に対し、エンネアは穏おだやかで満ち足りた笑顔を浮かべる。

「ネロは決意したつもりだった。ネロはネロを滅ぼせないように呪プログわラミンれグされているけど、シャイニング・トラペゾヘドロンなら世界との縁えんを絶ち切り、呪のろいを無効化できる。そしたらネロはネロを殺せるはずだった」

　エンネアは笑みを浮かべたまま続ける。

「必要なのは決意。ネロ自身を滅ぼすための勇気。その強さをネロは九郎から分けてもらおうと思った。でも違ちがった。違ったんだね。そんなのは強さじゃなかったんだ。陳ちん腐ぷで言い古されたお説教だけど、そんなのは逃にげでしかなかったんだね……」

　九郎はエンネアの微笑みの中に、漠ばく然ぜんとした不安感を感じていた。それは彼の心を押し潰つぶし、焦しよう燥そう感かんへと変えていく。

「エンネア、お前、まだ……！」

　九郎は叫さけぶ間もなくエンネアに抱だき寄せられていた。腰こしに手が回され、華きや奢しやだが丸みを帯びた肌はだの感かん触しよくが服を通して伝わってくる。エンネアは九郎の唇くちびるに自分の唇を重ね合わせた。それは一いつ瞬しゅんの出来事である。だが九郎は永遠とも思えるほどの長さを感じた。

　エンネアの唇がゆっくりと離はなれた。

「もし次が来たら、ネロはもっともっと強くなるよ。絶望の淵ふちで足あ掻がいたって、ああ、生きているんだって誇ほこれるように」

　エンネアは九郎の腰に回していた手を解ほどくと、そっと後退っ

ていく。

　九郎は慌あわてて手を伸のばした。

　今、手を放してはいけない。

　全身を震ふるわせるほどの危機感が、そう告げていた。だが九郎の指は、あと一歩のところで彼女に触ふれることができない。

「ありがとう。エンネアの大好きな九郎。それと……せっかく買ってもらった洋服、駄だ目めにしちゃうな。──ごめんね」

　それが最後の言葉だった。

　忌いまゝいましいほどの白い手が、唐突にエンネアの腹を突つき破やぶる。さらに突き破った穴を広げて別の指が生えてきた。五本の指は手がかりを求めるかのようにわなないたあと、エンネアの腹をつかんだ。そして力ちから一いつ杯ぱい、左右に引っぱった。

「なっ……！」

　エンネアの腹は聞いたこともないような嫌いやな音を立てながら縦に裂さけ、鮮せん血けつが噴ふき出した。少女の体はゆっくりと仰あお向むけに倒れる。

　なにが起きているのか──なにが起きようとしているのか、まるで理解できない。ただエンネアが向けてきた最後の笑顔が、網もう膜まくに焼きついて離れない。こじ開けられた腹の裂け目から、血に塗まみれた金色の髪かみが、そして均整の取れた美しい顔が突き出された。

「て、てめえは……っ！」

　それは上半身を引きずり出しながら、エンネアの体内から産まれてくる。小さな少女の体と比べて明らかに大きな赤子──。その光景は美しくすらあった。

　新たな生命の誕生は輝かがやきに満ち溢あふれ、神聖で荘そう厳ごんである。それゆえにおぞましかった。嫌けん悪おすべき美を目まの当たりにしてこみ上げてくる吐はき気……。逆流してくる胃の内容物を九郎はぶちまけていた。

ついに赤子の全身が這はい出してくる。

押し広げられたエンネアの体は、ついに限界に達し―。

血が降り注ぎ、肉が降り注ぎ、骨が降り注ぐ。

血と肉の雨が降るその中心部に、それは立っていた。首を傾かしげ、長い金色の髪をたらした白い体―。男とも女とも取れる中性的な印象を持つ、凄せい絶ぜつなまでに美しい異形の少年である。その少年は秀しゆう麗れいな容姿にもかかわらず、まるで華はなやかさがない。そこにあるのは底知れぬ闇あん黒こくである。

彼は静かに顔を上げると、血にまみれた髪を掻かき上げた。ゆっくりと瞼まぶたが開く。

―金色の眸ひとみ。

金色でありながら―いつ切さいの輝きを持たない闇色の金を九郎は知っている。人にあらず、異質で邪じゃ悪あくな、亀き裂れつのような笑みは忘れようもない。

九郎とアルは少年の呪われた名を叫ぶ。

「マスターテリオン！」

第四章 宇宙・生命・神・悪魔

ヨグ＝ソトースの門

　その少年の姿を認めた瞬しゆん間かん、九郎は思考するより速く行動に移っていた。

　全身を貫つらぬく激しい悪お寒かんを闘とう争そう心しんで一いつ掃そうさせると、一いつ瞬しゆんにして魔術師マギウスへと変化を遂とげる。既すでに両手には二挺ちようの魔ま銃じゆうが握にぎられており、血だまりの中心で佇たたずむ金色の闇やみへと銃じゆう口こうを向けていた。

「うおおおおおおおおおおおっっっっっっ！」

　咆ほう吼こうとともに魔銃の引き金を引く。銃口が幾いく度どとなく煌きらめき、銃じゆう声せいが幾いく重えにも重なる。

　ヒトの形をした闇は仰のけ反るが、弾だん丸がんはすべて防ぼう御ぎよ陣じんに阻はばまれて足あし下もとに転がった。

「……はじめまして、だな。大十字九郎」

　その声こわ音ねは心を凍こおらせるほどの力を秘ひめていた。わけもなく体が震ふるえ、魂たましいに冷や水でも浴びせられたかのような衝しよう撃げきが走り抜ぬける。だがそれを跳はね返すほど九郎の体は熱くなっていた。

「マスターテリオン！」

　九郎は牙きばを剝むき出しにすると、バルザイの偃えん月げつ刀とうで斬きりかかる。剣けん閃せんが血の臭においで満ちた大気を裂さき、全体重を乗せた渾こん身しんの一いち撃げきが放たれた。だが少年は微び動どうだにせず、刃やいばを人差し指と中指の間に挟はさむようにして受け止めてしまう。

「初対面だというのに、ずいぶんな挨あい拶さつだな」

　マスターテリオンは涼すずしげな顔を崩くずそうともしない。

「てめえ！」

「ふっ……」

　マスターテリオンは指の間に挟んでいた刃を解放すると、掌てのひらを九郎の胸部へとかざす。ほとんど本能で防ぼう御ぎよの体勢に入った次の瞬間、九郎は不可視の衝撃に晒さらされて上空へと吹

ふき飛んだ。

「ッッッ！　ぐぅっッ！」

　胸骨が残らず砕くだけてしまいそうなほどの衝撃に気道が詰つまり、激しくむせ返る九郎。大事にはいたらないものの、口内に鉄の味が広がった。九郎は血液混じりの唾つばを吐はき捨てると、魔ま導どう書しよで造られた翼つばさを広げて空中で姿勢を制せい御ぎよ。すぐさま眼下のマスターテリオンを睨にらみつけた。彼は手をかざしたまま薄うす笑わらいを浮うかべている。

「ふざけるなッッッッ！」

　九郎は拳こぶしにありったけの魔ま力りよくをこめて突つき出した。迸ほとばしる魔力が衝撃波となってマスターテリオンへと襲おそいかかるが、彼は目の前に飛んできた羽虫を払はらうかのようにその軌き道どうを逸そらした。彼の足下で爆ばく砕さいした衝撃波は、枯かれ木きと化したネームレス・ワンの上半身を粉こな微み塵じんに粉ふん砕さいする。

　九郎はデモンベインのコックピットの前で着地し、マスターテリオンは残されたネームレス・ワンの下半身に着地する。

「生きていたというのは正しくない。貴公と逢あうのはこれが初めて」

　マスターテリオンは乱れた髪かみを指ですきながら九郎を見上げる。

「なにワケ解わかんねぇことホザいてやがる！」

「九郎、落ち着け！　彼奴きやつの思う壺つぼだぞ！」

　アルは暴走しかけている九郎の肩かたに降り立つと、耳元でたしなめた。

　冷静さを欠くことで付け入る隙すきを与あたえてしまうことは百も承知している。だが頭では理解できても感情はまるでついてこない。頭は沸ふつ騰とうしそうなほど熱くなっていた。

「余よは今まさにこの瞬間、我が母・ネロによって産み落とされたのだ──。貴公の知っている余は前回の余だ」

　マスターテリオンの話は謎なぞかけのようで、まったく理解できない。

（母？　前回？　なに言ってんだ、こいつは？）

　積み重なる疑問に、九郎の思考はより深い迷路の中へと迷いこんでいく。

「まだ解らぬのか？　聖ドミ書テイのアヌ獣スはネロの生まれ変わり。ネロの黄よ泉み帰り。聖マス書ターのテリ獣オンはネロであり、余でもある」

　マスターテリオンに脅きよう威いを感じているのか、それとも意識の奥底で言葉の意味を理解したのか──。理解不能であるにもかかわらず、九郎の背筋は凍りついていく。

（なんなんだ、こいつ……。ぜんぜん解らねえ）

　それは彼が人外の化け物であるがゆえに人間の理り屈くつが通用しないからなのか、それとも……。

「我が母は貴公と出で逢あう以前より余を身み籠ごもっていたのだ」

　困こん惑わくする九郎をよそに、マスターテリオンは謎の言葉を並べ立てていく。

「黙だまって聞いてりゃベラベラと！　電波か、てめえは！」

　九郎の我が慢まんも、もはや限界である。

　その胸中にはマスターテリオンへの憎にくしみと怒いかり、エンネアに対する想おもいと憐れん憫びんしかない。

　バルザイの偃月刀を握りしめ、飛びかかろうとしたときだ。枯かれ果て、下半身を残すばかりとなったネームレス・ワンの内部から強大な気配が放たれた。

　ピシッ

　なにかが軋きしみ、罅ひび割われる音が響ひびく。見るとネームレス・ワンの装そう甲こうに無数の亀き裂れつが走っていた。その

亀裂はさらなる亀裂を生み、より大きな裂さけ目となって機体を蝕むしばんでいく。

「前回の約束どおり、余は姿を顕あらわしたぞ。時の果てで貴公と対たい峙じするために」

　ネームレス・ワンが崩れてゆく。

「無論、余の力になんら欠けたるところはない。──見よ」

　高らかな宣言とともにネームレス・ワンが爆砕した。すべてを粉砕していくかのような激しい衝撃、そして爆ばく発はつ的なまでの閃せん光こうが放たれる。

「危ない、九郎ッッ！」

　アルが術を展開するのと同時に九郎の前面に五芒星形の魔ま法ほう障しよう壁へきが発生。盾たてと化す。

　九郎は腕うででかばいながら閃光へと目を向けた。星でも誕生するかのような激げき烈れつな光の向こう側──。球状に拡大するその中心部。罅割れた卵らん殻かくのごとく砕け散っていくネームレス・ワンの胎たい内ないから、臓ぞう腑ふにも似た紅あかく巨きよ大だいな偉い容ようが姿を現した。

（あれは……）

　九郎は血ち塗まみれの赤子のようなそれに見覚えがあった。差し出した掌の上にマスターテリオンを乗せて立っていたのは、紅くれないのマントをまとった巨大な刃は金がねである。

「リベル・レギス！」

　真しん紅くの鬼デウ械ス・神マキナはデモンベインと向かい合った。

　特に気負う様子もなく佇たたずんでいる獣の下に、魔導書の頁ページを乗せた一いち陣じんの風が吹いた。それは彼を取り囲んだかと思うと螺ら旋せんを描えがきながら燃え上がり、その中から焔ほのおの女を顕けん現げんさせる。

「来たか、エセルドレーダ」

「イエス、マスター。御ご前ぜんに」

　女と呼ぶには幼いその少女は、闇やみ色をした豪ごう奢しやなドレスを身にまとい、墨すみを流したかのような艶つややかな長ちよう髪はつを靡なびかせながら降り立った。

「【ナコト写本】！」

　アルは動どう揺ようを隠かくしきれない様子だったが、すぐに立ち直って闇色の少女を睨みつけた。

（マスターテリオンに続いて【ナコト写本】まで……。どうなってやがる）

「エセルドレーダ、体の調子はどうだ？　大事ないか？」

　マスターテリオンは傍かたわらに降り立った【ナコト写本】の精せい霊れい・エセルドレーダの腰こしに手を回し、そっと抱だき寄せた。

「問題ありません。お心こころ遣づかい、ありがたく思います」

　少年と少女は唇くちびるを重ねたあと、九郎たちへと目を向けた。どこまでも深い金と黒の眸ひとみが二人を絡からめ取る。

「さあ、この道化バーレ芝居スクも、ようやく終フイナ演ーレを迎むかえようとしている」

　少年は満足そうに、それでいて少し疲つかれたような表情でそう告げた。

「アルッ！」

「解わかった！」

　九郎とアルはコックピットに飛び込むと、それぞれの操縦席へと別れてデモンベインを起動させる。魔ま術じゆつ回路に魔ま力りよくが疾しつ走そうし、各種機関が一いつ斉せいに覚かく醒せいしていく。

　デモンベインは拳こぶしを振ふり上げると、唸うなり声とともにリベル・レギスへと殴なぐりかかった。

「ふふ。ずいぶんと積極的だな、大十字九郎。──エセルドレーダ！」

「イエス、マスター」

　少年と少女の体は光の粒りゆう子しと化し、リベル・レギスの内部へと吸いこまれていく。鬼械神の表面に無数の魔術文字が疾走し、その眸に光が宿った。

　リベル・レギスもまた拳を振り上げると、デモンベインへと突とつ撃げきしていく。

「デモンベイン、やれぃ！」

『リベル・レギス、撃うて！』

　アルが吠ほえ、エセルドレーダが叫さけぶ。

　少女たちの命令を受け、二機の鬼械神が拳を撃ち放つ。繰くり出された拳は交差し、互たがいの顔面に突つき刺ささった。コックピットが激しく震しん動どうし、モニターにノイズが走る。すぐに映像は回復し、紅の巨きよ人じんを映し出した。

「背徳の獣けものが！」

『魔まを断つ剣けんめ！』

　上半身を仰のけ反らせるデモンベインとリベル・レギス。互いに踏ふみ止とどまると、踏みこんでさらに拳を振るう。再び交差すると拳と拳。それは互いの腹部へと突き刺さる。

　コックピットのあちらこちらの機械が爆はぜ、紫し電でんが走り抜ぬけた。

「マスタァァァァテリオォォォォン！」

　血を吐はくような叫びを上げる九郎に対し、マスターテリオンは涼すずしげな声で笑った。

『猛たけっているな、大十字九郎？　そうか、それほどまでに我わが母に情が移っていたか？』

ぎりりと、驚おどろくほど大きな音を立てて奥歯が鳴った。砕くだけそうなほど強く噛かみしめているせいか、口の端はしが吊つり上がっているのが解る。九郎は顔に狂きよう的てきなまでの形相を刻みこむと、二に挺ちよう拳けん銃じゆうの銃じゆう口こうをリベル・レギスへと向けた。

「う、うつけ！　熱くなりおってっ！」

アルが咎とがめる間もなく銃口から神気が爆発した。銃口より放たれた二体の獣が咆ほう吼こうを上げながらリベル・レギスへと襲おそいかかる。それはただ単純に、純然に、純潔に、破は壊かいだけをもたらす力を引き連れて飛んでいく。だが結局は制せい御ぎよを失った魔術にすぎなかった。暴走する二体の獣はリベル・レギスから大きく外れ、心臓の間の壁かべを撃ち抜いていく。その威い力りよくは止とどまることを知らず、そのさらに奥、その奥の奥、さらにその奥へと突き進み、ついにクトゥルーの外がい殻かくをも突き破やぶってしまう。全長数キロのトンネルにも似た長大な肉の穴ができあがった。

『なんという威力……。素す晴ばらしい。人の身でありながら、よくぞここまで！　流石さすがの余とて、これには畏い敬けいの念を禁じ得んぞ！』

マスターテリオンの賞賛も癪しやくに障さわるだけだ。

（―黙だまらせてやる。滅ほろぼしてやる……）

九郎の怒いかりが体の奥底から魔力を汲くみ上げる。

「九郎！　九郎！　正気に戻もどれ！」

右の掌てのひらの機関が唸り声を上げ、必ひつ滅めつの威力を秘ひめた魔力が宿る。左手にはバルザイの偃えん月げつ刀とうを握にぎりしめた。

『しばし貴公と舞闘ダンスを楽しみたいところだが……。まだ完全には時は満ちていない』

「戯れるなァァァ！」

シャンタクのパワーを得て飛び立とうとしたときである。デモンベインを目に見えないなにかが呪じゆ縛ばくした。機体は飛ひ翔し

ようするどころか沈しずみ始める。

「重力結界！」

　九郎の体もまた重くなっていた。巨きよ大だいな岩でも背負ったかのようで、立っていることすらままならないほどだ。それでも片かた膝ひざをついて堪こらえていたのだが、さらなる加重に九郎は床ゆかに倒たおれこんだ。デモンベインも同様である。

「クッ……くそったれが！」

　起き上がらねばと思うのだが、臓物のすべてが押し潰つぶされるような感覚を味わいながら床に這はいつくばるしかなかった。倒れたデモンベインをリベル・レギスが見下ろしている。

『悔くやしがることもあるまい？　並みの術者なら鬼デウ械ス・神マキナごと鉄てつ塊かいに成り果てている』

「て、てめえっ！」

『ふふっ。ではそろそろ教えてやろう。Ｃ計画の本当の目的を──』

「本当の目的……だと？」

　顔を床から引きはがし、モニターに映るリベル・レギスを睨にらみつける九郎。

「……どういう意味だ……獣よ……！」

　アルが喘あえぐような息づかいで問いかける。

『余の目的は旧支配者を超こえた領域にこそある。クトゥルーも、ルルイエの浮ふ上じようも、すべてはその目的のため。窮きゆう極きよくの結末のために。万ばん物ぶつは神ですら、星ですら、運命の指し示すがままに』

　リベル・レギスが空を仰あおぐ。つられるように天上を見上げると、神の肉で造られた天てん井じように巨大な裂れつ傷しようができていた。それは血と粘ねん液えきと肉片を散らしながら徐じよ々じよに裂さけていく。そして穴が穿うがたれた。裂傷は遥はるか上空へと続き、遠方に青空を望むことができた。

　リベル・レギスが蝙こう蝠もりの羽根のような翼つばさを広げる。そこから魔力の爆ばく風ふうが吹ふき荒あれ、爆ばく音おんとともに閃せん光こうが迸ほとばしった。そして次の瞬しゆん間かん、紅くれないの鬼械神は穿たれた穴を通って一気に翔かけていく。

「ま、待て……畜ちく生しよう……っ！」

　気持ちだけはリベル・レギスを追いかけていたが、現実には指一本ですら動かすことができない。体は鉛なまりのような重さであり、床にめりこんでいきそうなほどだった。

（くっ……。このまま押し潰されたら……。いくらなんでも間ま抜ぬけすぎる……！）

　四し肢しに渾こん身しんの力をこめて起き上がろうとするのだが、体はピクリともしない。

「落ち着け、九郎！　このような術など……解かい呪じゆできぬ汝なれではなかろう……？」

　感情を理性で制御できなければ魔術師とは言えない。冷静さを欠いた状態ではマスターテリオンにかなうわけもなかった。

（落ち着け……落ち着け……）

　胸中で自分に言い聞かせ、そして思案する。脳を疾しつ走そうさせて世界の法則を読み取っていく。

（思案しろ。術式を解き、答えを導き出せ！）

　脳内をパルスが走り抜け、ありとあらゆる情報が押し寄せてきた。それは森しん羅ら万ばん象しようを暴あばく世界の真理であり、世界を形作っている情報の数々である。途と方ほうもない情報量がもたらされる中、九郎は冷静にそれをさばいていく。そしてその中には重力結界の術式も含ふくまれていた。

「──見えた！」

　九郎は視覚で捉とらえた術式に僅わずかな隙すきを見み出いだしていた。そしてその中に結界を破壊する新たな法則を強ごう引いんにねじこんでいく。砕けるような音とともに重力結界が跡あと形か

たもなく消失する。

「まったく……世話が焼ける！」

　溜ため息を漏もらすアル。

「ほっとけ！　そんなことより追いかけるぞ！　シャンタク！」

　強きよう烈れつなＧが襲おそいかかってくるが、九郎は意に介かいさずデモンベインを飛翔させる。

『外なる虚こ空くうの闇やみに棲すまいしものよ。今一度、大地に現れることを、我は汝に願い奉たてまつる。時空の彼方かなたに留とどまりしものよ。我わが嘆たん願がんを聞き入れ給え』

　先行するリベル・レギスからマスターテリオンの声が聞こえてくる。

（野や郎ろう……。なにをするつもりか知らねえが、させるかよっ！）

　九郎は回転式イタ拳銃クアを召しよう喚かんさせてトリガーを引く。銃じゆう口こうの奥から咆ほう吼こうが轟とどろき、閃光とともに凍こごえる竜りゆうが吐はき出された。イタクァは雄お叫たけびを上げ、大気を氷結させながら飛翔する。

『門にして道たるものよ。顕あらわれ出いで給たまえ。汝の下僕が喚よびたれば』

　リベル・レギスは振ふり向きもせずに機体を捻ひねらせ、音速を超えて迫せまるイタクァをかわす。氷竜はリベル・レギスの脇わきを通り過ぎ、上空へと翔かけ昇のぼったところで反転し急降下。眼下のリベル・レギスに向けて顎あごを開く。竜の鋭するどい牙きばが紅の装そう甲こうを捉えんとしたとき、リベル・レギスの手刀がそこに突つき刺ささった。顎から尾お先さきまで一気に貫つらぬかれ、イタクァは二枚におろされてしまう。その骸むくろは宙で分解し、雪となって降り注がれた。

　リベル・レギスは魔ま力りよくを帯びた手刀を宙に走らせる。雪が煌きらめく空間に紅あかく燃える【Ω】の紋もん様ようが刻みこまれた。続けて右手の親指と中指を立て、それを前方へと突き出す。

『顕れよ、顕れ出でよ。聞き給え、我は汝の縛いましめを破り、印を投げ棄すてたり。我が汝の強力な印を結ぶ世界へと、関門を抜ぬけて入り給え』

そこまで唱え、今度は人差し指と小指を立てる。

「この呪じゆ文もんは……」

「くそったれが！」

アルが目を剝むき、九郎が吠ほえる。

リベル・レギスとの距きよ離りを埋うめるべくバルカンを連射するが、盛大な爆ばく煙えんが上がるだけで効果はない。砲ほう弾だんのすべては障しよう壁へきに阻はばまれていた。だが魔ま術じゆつを織りこんだそれは魔力の流れを乱れさせることには成功している。そこにねじこませるようにバルザイの偃えん月げつ刀とうを投げつけた。

『――ッ!?』

火花が散り、金属音が響ひびき渡わたる。爆煙が風で流され、その向こう側からリベル・レギスの威い容ようが現れた。その左ひだり腕うではバルザイの偃月刀で貫かれている。それを確かく認にんするや否いなや九郎は自ク動ト式ウ拳グ銃アを召喚。トリガーを引く。雄叫びを上げながら焔ほのおの獣けものがリベル・レギスへと向かった。

『つくづく貴公は面おも白しろい』

リベル・レギスは腕うでに突き刺さった偃月刀を引き抜くと、牙を剝むいて迫るクトゥグアを微み塵じん切ぎりにした。一いつ瞬しゆんの静せい寂じやく。だが次の瞬間、大だい爆ばく発はつとともに獣の体は砕くだけ散った。

『返礼する』

リベル・レギスが投射した偃月刀が矢のような勢いでデモンベインへと襲いかかる。

「野郎ッ！」

機体を逸そらせてバルザイの偃月刀を避さけ、通り過ぎる間ま際ぎわにその柄つかをつかむ。

『くふふ……くはははは……ふはははは！』

リベル・レギスはさらに加速し、その勢いを保ったまま外へと飛び出す。

「待ちやがれ！」

蒼そう穹きゆうの下へと飛び出したデモンベインはリベル・レギスと対たい峙じする。

リベル・レギスが大おお仰ぎような仕草で腕を左右に広げ、次いでマスターテリオンが叫さけんだ。

『下し界たを見てみろ、大十字九郎！』

「なんだと!?」

言われるまま下方へと目を向けた九郎は、ルルイエの海を舞ぶ台たいに最終戦争を繰くり広げる人類と邪じや神しんの眷けん属ぞくの姿を捉えた。だが彼が指しているのはそれではない。舞台となっているルルイエの海である。今まさに怪かい異いが起ころうとしているその海域は不自然な沈ちん黙もくに満たされていた。

沈黙は戦いの終わりを意味しているのではない。その証しよう拠こに、海底から強大で広大な怪異の気配が急速に迫っていた。

「まさか……ルルイエが浮ふ上じようするのか!?」

その瞬しゆん間かん、海面を蹂じゆう躙りんする海かい魔まの軍勢も、海中で遊ゆう撃げきする深きデイーものプワどもンズも、そして邪神たるクトゥルーですら完全にその動きを止めていた。海面が沸ふつ騰とうしたかのように震ふるえたかと思うと、轟ごう音おんとともに急激に盛り上がる。

現れたのは巨きよ大だいな柱だった。あまりにも巨大すぎて壁かべにすら見えるそれは、天を貫かんばかりの勢いで上空へと達する。そしてそれに巻きこまれる形で数すう隻せきの戦せん艦かんと海魔が天高く舞まっていった。

柱は一本だけではない。圧あつ倒とう的質量の海水を押し退のけ、次から次へと突き出してくる。その度たびに戦艦が、そして海魔が宙を舞っていく。

壮そう大だいで凄せい絶ぜつな悪夢のような光景。突き出した幾いく本ほんもの柱はルルイエの建造物に他ほかならない。それは天へと向かって真っ直すぐにそびえながらも捩ねじれており、まるで騙だまし絵でも見ているかのような錯さつ覚かくにおちいる。明らかな矛む盾じゆんを孕はらみながらも現実として存在し続ける違い和わ感かん……。

だが問題はそこではなかった。突き出し、そびえ立つ無数の柱。それらは無む秩ちつ序じよに排はい出しゆつされていたわけではない。それらはクトゥルーを取り囲むかのように円形に並んでいたのである。規模こそ異なるが、かの有名なストーンヘンジを連想させるそれは巨大な環かん状じよう列石だった。

「環状列石、そしてあの呪文……。間ま違ちがいない！　まずい、九郎！　彼奴きやつを止めろ！」

しかし時すでに遅おそし。

人じん智ちなど遠く及およばない、宇宙規模の怪異が眼前で起こり始めた。

『ンガイ・ングアグアア・ブグ＝ショゴグ・イハア、ヨグ＝ソトース、ヨグ＝ソトース──。

イグナイイ・イグナイイ・トゥフルトゥクングア、ヨグ＝ソトース──。

イブトゥンク……ヘフイエ──ングルクドルウ……！

エエ・ヤ・ヤ・ヤ・ヤハアア──エヤヤアアア……ングアアアアア……ングアアアアア……！』

歌うようなマスターテリオンの詠えい唱しように応じ、リベル・レギスの右手に金色の剣けんが召喚された。

剣が虚こ空くうに走る。それは光り輝かがやく逆さΩの紋もん様ようを宙に刻みつけた。

『フユウ……フユウ……ヨグ＝ソトース！』

　九郎の体を冒おかし、蝕むしばんでいく耐たえ難がたい悪お寒かん。

（この詩うたを俺は……確かに俺は……識しって……）

　こめかみに鈍どん痛つうが抜ぬけていく。

　この世に存在してはならない邪じゃ悪あくなる詩──。

　記き憶おくの奥底で眠ねむる忌いまわしき過去が呼び覚まされようとしていた。

「これは『第九の詩』──ヨグ＝ソトースの召しよう喚かん！」

　絶望的とも取れるアルの叫びがコックピットに響く中、マスターテリオンの声が世界に轟とどろく。

『顕あらわれ給たまえ、門にして鍵かぎなる神よ！　顕れ出いで給え！　全にして一、一にして全なる神よ！　顕れ出で給え……！』

　そして少年は告げる。

『──我わが、父君！』

　眼下で動きを止めていた邪神が、強きよう壮そうたる支配者が沸騰した。

　外皮が歪いびつな形へと変わり、気き泡ほうのようなものが浮うき出してくる。

　やがて溶とけ出した外皮は泡あわを吹ふき出した。

　そう。まさにそれは沸騰していたのである。

　不定形な泡に覆おおわれていく邪神は急速に実態を失い、やがては泡と化していく……。

なにもかもが酷ひどく曖あい昧まいで境界と呼べるものが判然としなくなっていた。

何ど処こから何処までが世界なのか。

何処から何処までが異界なのか。

ルルイエの海域が虹にじ色いろに輝かがやき、虹色に澱よどむ。球体に満たされていく。

海面に。

海中に。

海底に。

水すい泡ほうの一つ一つに。

水の分子の間に。

空に。

空の蒼あおに。

空の風に。

大気の粒りゆう子しの一つ一つに。

陽子と中性子と電子の間々に。

海が変質した。

空が変質した。

空間が変質した。

時間が変質した。

世界が変質した。

変質した世界は、虹にじ色の球体。

世界が極ごく彩さい色しきに塗ぬり潰つぶされてゆく。

総すべての彩いろは、虹色となり

総ての物質は、球体となる。

──虹色の、球体。

虹色の球体。

虹色の球体。

虹色の球体。

球。

球。

球。

球。

球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球
球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球
球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球
球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球球
球球球球球球球球球球球球球球球球球球
○○○○○○○○○○○●●●○○○○○○○○●●●●●●●●●○○○○○○○○○○○○○●●●●●○○●○●●●

その球体は黄金の王おう冠かんを頂く駱らく駝だ。

その球体は巨きょ大だいな牡お牛うし。

その球体は偉い大だいな君主。

その球体は鉄の冠かんむりを頂く赤い男。

その球体は鴉からす。

その球体は暗雲。

その球体は蠅はえ。

その球体は白い蛇へび。

その球体は緑色の顔の男。

その球体は巨大な禿はげ鷹たか。

その球体は人間。

その球体は巨きよ人じん。

その球体は黄色の蟇ひき蛙がえる。

虹色の球体が集積する。

それは原初の粘ねん液えきとして泡あわ立だつ、触しよつ角かくのある不定形の怪かい物ぶつ。

全にして一。一にして全。

それは静止した『現在』。

それは流動する『過去』。

それは蓄ちく積せきされた『未来』。

それは『門』。

それは『鍵かぎ』。

それは

それは──

認にん識しきの限界を超こえて狂きよう気きにおちいる寸前である。

それは脳に合わせて実体を結実させた。

無数の球体は虚こ空くうを目指して高速で飛び、空間に虹にじの軌き跡せきを描えがいていく。そしてそのすべてが空へと消えたかと思うと七色に爆ばく発はつし、異界の光でルルイエの海を染め上

げた。

　異界の光が結けつ晶しよう化かして実体を結ぶ。

「扉とびら……だ」

　それは天に届くほどの果てなく巨大な扉だった。

　ただの扉ではない。クトゥルーですら遠く及およばないほどの厳おごそかで忌いまわしい神気を放つそれは、扉の属性を持つ神性である。

　扉が──冥めい界かいへの扉が断だん末まつ魔まに似た軋きしみを大だい音おん響きようで奏かなで、ゆっくりと、酷ひどくゆっくりと開かれた。

「ヨグ＝ソトース……。あらゆる時間と時空に存在する『門の鍵にして守護者』だ」

　扉の向こう側には言葉では言い表せぬ世界が広がっている。あらゆるものがたゆたい、歪ゆがみ、蠢うごめく、混こん沌とんとした景色だった。目を向けただけで正気を失いそうなほどである。

「旧支配者どもが棲すむ外宇宙へと繋つながる存在。正真正しよう銘めいの『外なる神』だ……」

「外アウなたーる・ゴ神ツド……。クトゥルーどころの騒さわぎじゃないってことか」

『左さ様よう。神を苗なえ床どことしてさらに上位の神を召しよう喚かんする──。Ｃ計画もこのための土台にすぎない。貴公等も覇道もアンチクロスも我わが母・ネロも、余が回す運命の歯車の上で踊おどっていただけだ』

　腸はらわたが煮にえくり返るようだった。マスターテリオンが回した歯車のために、どれほどの血と涙なみだが流れたのか……。それを考えただけで怒いかりで我を忘れそうになる。しかしそんな彼を現実へと引き戻もどすのは、いつだって彼女だった。

「落ち着け九郎」

「……アル？」

「獣けものよ。先ほど、ヨグ＝ソトースを父君と呼んでおったな？　汝なれ、もしや……」

『そのとおりだ、アル・アジフ。貴公が退しりぞけたダンウィッチの呪のろわれた兄弟──。彼等と余は同種の存在だ』

「やはりッ！」

　アルの体が戦せん慄りつに震ふるえた。

「お、おい、どういうことだよ？」

「彼奴きやつは、マスターテリオンはヨグ＝ソトースの血を引く神の子なのだ！」

「邪じや神しんの子供だと!?　そんな馬ば鹿かなことが……！」

『なにを驚おどろいている？　貴公も知っているはずだ。余と同じ存在を──』

「なんの話だ？」

　口にしながらも、九郎は埋うもれた記き憶おくがこじ開けられていくのを感じていた。こめかみが脈打つかのようにズキズキと痛む。

『ミスカトニック大学で、秘密図書館で、貴公はなにを見た？』

　マスターテリオンに導かれ、厳重に閉とざされていた忌まわしき記憶への扉が開かれていく。

　噴ふん出しゆつしてくる過去の記憶──。

（なんでヤツが秘密図書館での出来事を……）

　浮うかんでくるのはミスカトニック大学の学徒だったときの記憶である。

　ダンウィッチの怪かい。九郎の心に決定的なダメージを与あたえ、その後の人生を大きく変えてしまった事件である。秘密図書館で遭そう遇ぐうした怪かい異い・ウィルバー・ウェイトリイ。彼もまたヨグ＝ソトースの名を口にしていた。

「あ……あああ……あああああっ!?」

　心の奥底から滲にじみ出てくる恐きよう怖ふ心しん、そして驚きよう愕がくの事実に体が打ち震える。

「!?　どうした、九郎？」

『はははははははははははははは！』

「き、貴様ァ！」

『如い何かにも。余は人類最強の魔術師・ネロと邪神・ヨグ＝ソトースの間に産まれた異形の落とし子。ヨグ＝ソトースの血を引いた余にとって時間や空間は何ら意味を持たない』

　あのときすでに、マスターテリオンは九郎という存在を認にん識しきしていたのだ。九郎が【アル・アジフ】の主となって魔を断つ剣けんを執とることも、アンチクロスの謀む反ほんによって自らが死すことも、再びこの世に生まれ落ちることも──。そしてこの戦いの結末さえ……。

『そして、今回もまた時が開く』

　リベル・レギスの指が空に開かれた門を、開かれた扉のその奥を指差した。

『さあ、見よ。あの扉の向こう側、混沌の渦うずを。全神経を研とぎ澄すませ。魔術師の感覚でそれを認識するのだ』

　九郎はリベル・レギスの指の先、扉の奥に広がる世界へと意識を向けた。己おのれを研ぎ澄まし、混沌の渦の内を認識させる。そしてそれは知覚された。

　悪お寒かん。

　戦慄。

　畏い怖ふ。

　重圧。

（いる。あの渦の向こう側に……）

　それがなにかは想像すらかなわない。

　だがクトゥルーを凌りよう駕がし、軽く地球を滅ほろぼすに足る存在が無数、蠢いているのが解わかる。

『ヨグ＝ソトースはすべての時間と時空に存在し、旧支配者の棲む外宇宙へと繋がっている。アル・アジフの言ったとおりだな。もし神々が此処ここに扉とびらが開いたことを知ったらどうなる？　怒ど濤とうの如ごとく邪神の群れがこの世界に押し寄せるぞ……』

「あっ……ああ……あああああああああああ……」

　今まで必死に守り続けてきたなにかが、傍ぼう若じやく無ぶ人じんな輩やからに粉こな微み塵じんに粉ふん砕さいされていく。

「マスターテリオォォォォォォォンッッッッッッッッッッッッ！」

『ははははははははははははははははははははははははははははは！』

　九郎の雄お叫たけびをマスターテリオンの哄こう笑しようが打ち消していく。

『世界を救いたければ余を追ってこい！　世界の果て、時間の果てまでも！　いつとも知れぬ時間の狭はざ間ま、何処とも知れぬ世界の彼方かなたで最後の決着をつけようではないか！』

　楽しそうに、歌うように告げるマスターテリオン。

『さあ、これが最終楽章だ！　最後の最後まで余を愉たのしませろ！　神殺しの刃やいばよ！』

　リベル・レギスが雄ゆう大だいなその翼つばさを広げて飛び立った。その行き先はヨグ＝ソトースの門。

　紅くれないの鋼はがねは混こん沌とん渦うず巻まきくその扉の中へと飲みこまれ、その姿を掻かき消していく。

「ま、待ちやがれ！」

　リベル・レギスの後を追うべくシャンタクの出力を解放しようとするが、即そく座ざにアルが阻はばむ。

「早まるな、九郎！」

　デモンベインの命令系統に割りこみ、叫さけぶアル。

「ここで奴を追わないと、止めないと……とんでもないことになっちまうぞ！」

　九郎は奪うばわれた命令系統を取り戻もどすべく術を走らせる。

　相手が待ち伏ぶせてしていると解っていても飛びこむしかない。定められた結末があったとしても放ほうっておくなどできはしない。それが無む謀ぼうだと知っていても、だ。

「止やめろ！　早まるなと言っておる！」

　使命感と焦しよう燥そう感かんに突つき動かされる九郎をアルは必死に思い留とどまらせる。彼女は席を飛び出して九郎の下もとにやってくると、彼の体を抱だきしめた。なりふり構わぬその行動に混乱する九郎。

「ど、どうして……！」

「落ち着くのだ、九郎。次元の扉が開かれていようと、すぐに異形どもが押し寄せてくるわけではない！　それより汝なれは慎しん重ちように決断しなければならない！」

　アルの真しん摯しな目が真っ直すぐに九郎を捉とらえていた。そしてその翡ひ翠すい色をした瞳ひとみの奥では、戸と惑まどいを隠かくしきれない九郎の顔が映りこんでいる。

「ヨグ＝ソトースはすべての時間と時空に繋つながっている。それは解ったな？」

「ああ。あのクソ野や郎ろうの掌てのひらの上で踊おどっていたってこともな！」

「あの扉が何処に通じるのかは何なん人ぴとにも解らない。あの門を潜くぐれば現在、過去、未来、あらゆる宇宙を渡わたり往くことになる。そして──」

　そこでアルは一いつ拍ぱく置く。

　続けて紡つむがれた言葉は、九郎の心を静かに麻ま痺ひさせていった。

「そして──おそらくは二度と、この世界には帰れない」

+

　ルルイエの海に夜が訪おとずれていた。

　辺りは嘘うそのように静まり返り、海は驚おどろくほど凪ないでいる。空を食くらいつくしていたクトゥルーは失うせ、それに付き従う眷けん属ぞくたちも姿を消している。残ったのは旗き艦かん・ノーデンスを含ふくむ数十隻せきの戦せん艦かんと天高くそびえる環かん状じよう列石。そして上空に浮うかぶヨグ＝ソトースの門だけである。

　九郎はノーデンスの甲かん板ぱんで一人、思案に暮れていた。その表情は暗い。

　──一晩だけ待つ。それで決断するがよい。行くか、それとも留とどまるか。

　そう言ってアルは九郎に考える時間を与あたえてくれた。

（あれを潜れば二度と戻れない）

　それはつまり、今確かに存在するすべてのものを捨て去らなければならないということだ。

　友と呼べる大切な人たち、たくさんの思い出が詰つまった愛すべき街、そして自分の存在すらも捨て去らなければならないのである。迷わぬはずがない。

（たった一晩か……。短すぎるな）

　あるいは長すぎるのかもしれない。

　すべてと決別するには。

あるいは決意を鈍にぶらせないためには。

九郎は上空に浮かび上がるヨグ＝ソトースの門へと一いち瞥べつをくれ、甲板を歩き始めた。

+

九郎が足を運んでいたのは、デモンベイン専用の輸送艦・タカラブネだった。

艦かん内ないに設けられた巨きよ大だいな格納庫にデモンベインは横たえられており、その上を覇は道どうの秘密基地から持ちこんだ『トイ・リアニメーター』が脅きよう威いの作業スピードで動き回っている。

立て続けに行われた鬼デウ械ス・神マキナとの戦せん闘とうによりデモンベインは傷ついてはいたが、すでに大半が修復されている。今すぐにでも飛び立てそうだ。

九郎は作業を見守っているウェストとエルザの下もとへと足を運ぶ。

「……どうだ、デモンベインは？」

振ふり返ったウェストは、どこか不満げな顔をしていた。

「ふんっ。我わが輩はいからすれば、つまらん機体である。ダメージを負っても自らを修復するロボットなんてものは。魔ま力りよく回路の調整程度しかすることがないのである」

ようするに自分の手で調整を行いたかったのだろう。九郎には理解しかねる考え方ではあるが、すべてに自分の手が入ることで安心できるというのはあるのだろう。もっとも、彼のライフワークでもある破は壊かいロボットはゾンバイオを除けばすべて撃げき沈ちんされていたのだが……。

「夜明けまでに頼たのむぜ？　奴やつとの戦いでは僅わずかなズレが勝敗を決する。万ばん全ぜんを期したいんだ」

「そんなに時間は要いらぬのである。すぐ片がつく。任せろなのであーる！」

　腰こしに手を当て、傲ごう然ぜんと胸を反らせながら、天に向かってツバを吐はきかけるかのような勢いでウェストは言った。彼に任せておけば大だい丈じよう夫ぶだとは解わかっていても、一いち抹まつの不安を感じずにはいられない九郎である。

「ダーリン、行くロボか？」

　不安げな表情で問うてくるエルザに、九郎は「ああ」と応こたえて首を縦に振る。

「これでラストだ。俺は奴を……マスターテリオンを倒たおしに行ってくる」

「エルザも戦うロボッ！」

　九郎は気持ちだけを受け取り、彼女の申し出を断った。帰れるかどうかも知れない混こん沌とんの中へ連れていくわけにはいかないし、そもそもゾンバイオではリベル・レギスに掠かすり傷一つつけられないだろう。鬼械神を倒すことができるのは鬼械神だけである。

「お前等には地上を守るという大切な役目があるだろ？　それとも、俺たちがいないと駄だ目めだってか？」

「そんなことないロボ！　ダーリンが留守の間は、エルザと博士で地上を守るロボ！」

　元気よく応こたえるエルザに九郎は軽くうなずいて見せると、彼女に背を向けて歩き出した。

「ダーリン、頑がん張ばるロボよ！」

　九郎は振り向かずに片手を上げて応えた。

+

九郎はノーデンス内にある司令室へと足を運んでいた。

そこには瑠璃とウィンフィールド、そして秘密基地で獅し子し奮ふん迅じんの働きを見せたオペレーターたちの姿があった。彼女等は世界中の情報を集め、分ぶん析せきし、今後についての話し合いを行っている。当面の脅威は去ったものの、ヨグ＝ソトースの門が開いたことでより事態は深刻化していた。あの門から異形が一体でも潜り抜ぬけてきた瞬しゆん間かん、人類は―地球は滅めつ亡ぼうするだろう。

それ以外の問題もあった。未み曽ぞ有うの危機に直面した人々はパニックにおちいり、各地で様々な問題を引き起こしていたのである。未来に絶望した何百人もの人々が自らの命を絶ち、感受性の高い芸術家などは異形の神々の姿を幻げん視しして発はつ狂きよう、もしくは昏こん睡すい状態におちいっていた。暴動が発ひん発ぱつし、それに便乗した略りやく奪だつ行こう為いなども多発。理性を麻ま痺ひさせた一いつ般ぱん人じんが犯罪者へと変わり、無法地帯と化した街も少なくない。混乱を収拾するべく警察や軍隊も動いてはいたが、それ自体、統制が取れているとは言い難がたかった。それは結果的に混乱を助長し、無む駄だに多く血が流れることとなったのである。人類は邪じや神しんが襲しゆう来らいするまでもなく終焉を迎むかえようとしていた。

九郎の姿に気づいたのだろう。瑠璃が手を休めて歩み寄ってきた。

「いよいよですね……」

「ああ。奴をぶっ潰つぶして、ヨグ＝ソトースを追っ払ぱらう。今度こそケリをつけてくるよ」

しっかりとした口調で答える九郎に、瑠璃は不安と気き遣づかいが入り混じった表情を浮うかべた。

「それにしても、マスターテリオンが生きていようとは……」

瑠璃の斜ななめ後ろに控ひかえたウィンフィールドが口を開く。包帯姿が痛々しいが、そのような状態でティトゥスを討うったというのだから驚おどろきである。彼もまた人を超こえているのだ。

「つくづく化け物だよ。あんなものがこの世にいちゃいけない。だ

から討つ」

「大十字さん……私たちは……私は……全部、貴方あなたに押しつけてしまって……」

　うなだれる瑠璃に九郎は苦く笑しようすると、手をパタパタと振って笑い声を上げる。

「はは……そんな大したことじゃねえよ。俺だって奴をぶん殴なぐらねぇと気がすまねえし。それに天下のデモンベインが負けるわけねーだろ？　姫ひめさんには地球の復興っていう命題があるし、それぞれの仕事をキチンとこなしていけばいいんだ。そうだろ？」

「……大十字さん」

「これで終わりにしよう。なっ？　姫さん」

「……はい、お願いします」

　そう言って瑠璃は深々と頭を下げた。

「大十字様、御ご武運を」

　ウィンフィールドが──そこにいた全員が恭うやうやしく頭を下げた。

（って、まったく……。調子が狂くるっちまう）

　九郎は頭を乱暴に掻かきながら苦笑いをする。

「いちいち大おお袈げ裟さだっつーの」

　鼻から息を吐き出し、溜ため息をつく九郎。

「んじゃ、準備もあるからそろそろ行くよ」

　九郎は歩き出したところで、ふと足を止める。

「ああ、そうだ」

　言って瑠璃を、ウィンフィールドを、そしてこの場にいる全員の顔を不自然にならない程度に見つめる。そして共に戦ってきた戦友を目に焼きつけていった。この先の戦いは想像を絶するものにな

る。心が折れそうになることもあるだろう。そんなとき心を支え、奮い立たせてくれるのが戦友たちである。だから九郎はその姿をしっかりと目に焼きつける。

「しんどい戦いだったけどさ……。それでも、けっこー楽しかったぜ。だから……ありがとな？」

「えっ？」

　唐とう突とつな台詞セリフに困こん惑わくしたのか、全員、不思議そうな目で九郎を見つめ返してきた。

　不ふ審しんに思われるだろうが、それでも最後に一言、礼を言っておきたかったのである。

（これで十分だ。これで）

　長居は無用である。ボロを出す前に九郎は踵きびすを返すと、無言のまま部屋を後にした。

+

　一方的に別れの挨あい拶さつをすませた九郎は、再びノーデンスの甲かん板ぱんへと足を運んでいた。

　ライカに別れを告げられなかったことが悔くやまれるが、このような状じよう況きようでは仕方がない。マスターテリオンを討ち、彼女たちが住む世界を、そして未来を守ることができればそれでよかった。

　だから心に誓ちかう。絶対の勝利を──。

「……くっ」

　九郎は呻うめいていた。格好つけてはいたが恐きよう怖ふ心しんを払ふつ拭しよくできたわけではない。独りになったせいか思い出したように膝ひざが笑い始める。情けなくなるほど体は震ふるえ、目は潤うるんでさえいた。

　未練がないと言えば嘘うそになる。未練など山ほどあるに決まっていた。強がってはいたが、内心、逃にげ出したくて仕方がない。それはつまり失うことを恐おそれ、未練を抱いだくほど大切なものがこの世界にあるという証あかしだ。そんな愛してやまない大切なものを、あのような理り不ふ尽じんな化け物に壊こわされるのはもっと恐おそろしくて腹立たしいことだった。だからこそ九郎は戦う。大切なものを守るための力が彼にはあった。それは物もの凄すごく幸せなことなのだと思える。だからこそ、震えがくるほどの恐怖さえも彼にとって誇ほこりとなりえた。そして―。

（あいつがいる。あいつが俺の傍かたわらにいる）

　九郎の脳のう裏りに浮かぶのは、翡ひ翠すい色の瞳ひとみを持つ少女である。

（そうだ。俺は独りじゃない。アルがいる）

　彼女と一いつ緒しよならば、どんな困難でさえも軽く乗り越こえられるような気がした。アルの姿を思い浮かべるだけで体の奥底から闘とう志しが、そして力が湧わいてくる。

「なんだ……。全部を失っちまうワケじゃねえ」

　気がつけば体の震えは止まり、口元には笑えみが浮かび上がっていた。誇りと勇気に満たされるのと同時に、アルの存在がこんなにも大きくなっていたという事実に戸と惑まどいを覚える九郎。

（そうか。あいつの存在は、こんなにも俺の心を占しめて……）

　その事実には気き恥はずかしさすら感じられた。

「……なにを今さら」

　あらためて確かく認にんするまでもない。ずっと以前から解わかっていたことである。ただそれをハッキリと理解していなかっただけのことだ。そしてそのことに気づいた今、九郎は断言することができた。決意ではなく、確実に約束された事実として。

「勝ったな。負ける理由が見当たらねえよ」

　九郎は上空のヨグ＝ソトースの門を睨にらみつける。

（俺とアルとデモンベインは三さん位み一体。どれが欠けてもいけない。全部、そろってなきゃいけない。全部そろえば絶対無敵。そう。なんだってできる！　なぜなら、俺はアルのことを──）

　内に秘ひめた想おもいが闘志へと変わっていく。

　それを扉とびらの向こう側にいるマスターテリオンへと叩たたきつけようとしたときだ。大だい音おん響きようとともに海が激しく震え、ノーデンスが大きく揺ゆれた。

「な、な、なんだなんだっっっっ!?」

　バランスを崩くずした九郎だが、縁ふちにしがみつくことでなんとか転てん倒とうを免まぬかれることができた。だが突とつ然ぜんの事態に頭が混乱し、状況を分ぶん析せきすることができない。

　それでもなんとか周囲に目を走らせた九郎は、飛びこんできたその光景に身を強こわ張ばらせた。

　ノーデンスに寄り添そうように浮うかんでいたタカラブネのゲートが開かれ、不安定に揺らめく艦かんから巨きよ大だいな人ひと影かげが身を起こしたのである。その巨きよ人じんはバランスを取りながら顔をヨグ＝ソトースの門へと向けた。その正体は言わずもがな。

「デモンベイン!?　なんでデモンベインが勝手に起動している!?」

　立て続けに浮かび上がる疑問。そうこうしているうちに、シャンタクが翼つばさを広げた。

「だ、だだだだダーリン、大変ロボ～っ！」

　タカラブネの甲かん板ばんから近づいてくる一つの影かげ。それは甲板から甲板へと飛び移り、九郎の下もとへと降り立った。エルザである。

「いったい、何事だ!?　なにがあった？」

　彼女に問うた途と端たん、閃せん光こうとともに激しい衝しよう撃げきが襲おそいかかってくる。海が荒あれ狂くるい、ノーデンスが大きく揺れたかと思うとデモンベインは魔ま力りよくのフレアを吐はき出しながら飛ひ翔しようし始めた。

「な……っ！　待て！　どこへ……ッ!?」

　叫さけんだところで声が届くはずもない。

　あっという間に小さくなっていくデモンベインの姿に、九郎はただ呆ぼう然ぜんとするしかなかった。

「アル・アジフが勝手にデモンベインを動かしたロボっ！」

　一いつ瞬しゆん、九郎の思考は停止した。

「な……なななななな……っ！　なんだってぇぇぇぇーっ!?」

+

　九郎が甲板で物思いに耽ふけっていたころ、アルはアルで思い悩なやみ、一つの決断を下していた。

　――一晩だけ待つ。それで決断するがよい。行くか、それとも留とどまるか。

　九郎に対して告げた言葉である。

　だが実のところ答えなど解っていた。

　ここで退ひくような男であれば、とうの昔にアルの下から去っていたはずである。

　そんな男であるからこそ、今まで戦い続けることができたのだから。

　そんな男であるからこそ、今までずっと一緒にいられた。

　そんな男であるからこそ、一いつ緒しよにいて心ここ地ち良かった。

　そんな男であるからこそ、自分は死すら超こえて彼の下に舞まい戻もどった。

そんな男であるからこそ、彼女は──。

今やアルにとって九郎は、かけがえのないほど大きな存在となっていた。彼女自身の命運をも左右するほど大きな存在に……。

少女は自分の気持ちを、その想おもいがヒトのなんという感情に値あたいするかを理解していた。

（妾わらわは、九郎を──）

彼の側そばにいたかった。

自分の側にいてほしかった。

いつも、いつも。

ずっと、ずっと。

命が尽つきるまで。

魂たましいが朽くちるまで。

時が果てるまで。

いつまでも、いつまでも。

永遠に、ずっと一緒に。

それは戦うことしか識しらなかった少女に初めて芽生えた、ささやかな願いだった。

強く激しく狂くるおしく求める剝むき出しの願望だった。

なにを犠ぎ牲せいにしても惜おしくないほどの剝き出しの欲望だった。

そして同時に理解する。

その願いは決してかなえられないことを。

今となっては決してかなえてはいけないことを。

ヨグ＝ソトースの門の向こう側は人間の領域ではない。

神の領域。

異形の領域。

狂きよう気きと邪じや悪あくが哄こう笑しようする領域である。

人間が存在してよい領域ではない。

（だから。これ以上は――）

アルはタカラブネへと向かうと、出しゆつ撃げきを待つばかりとなっているデモンベインへと乗りこんだ。

これ以上、九郎をつきあわせるわけにはいかない。彼とともに戦うのはここまでである。

九郎は人間だから。

人間は人間の世界で生きるべきである。

（ここからは人外の領域。人外の相手は人外。人外同士で決着をつけるべきだ）

だから――。

「いくぞ、デモンベイン！」

+

「あの馬ば鹿か！　なに考えてやがるっ！」

あまりにも唐とう突とつすぎて、九郎は焦あせり、狼狽うろたえ、混乱していた。

（畜ちく生しようッ！　なにがどうしてどうなってんだっ!?　なにも言わずに飛び出しやがって――）

そのとき、はたと気づく。

「まさか、あいつ……。この期ごに及およんで独りで戦うつもりか!?」

　冗じよう談だんではなかった。やっとの思いで決意を固め、ようやく自分の気持ちにも気がついたのである。ここで置き去りにされたら間ま抜ぬけでしかない。

「だだだだダーリン！　どうするロボ!?」

　手足をばたつかせながら困こん惑わくするエルザに対し、九郎は怒ど声せいを吐き出した。

「んなもん、追うに決まってんだろうがぁぁぁぁっ！」

「でもでもでもでもでも、どーするロボ!?」

「戦せん闘とう機きでも破は壊かいロボでもいい！　早く出撃準備を！」

「りょ、了りょう解かいロボ……。あっ」

　不意にエルザの視線が九郎から外れ、その背後へと向けられた。

　背後に降り立つなにかの気配に、九郎は振ふり返る。

《まったく。最後まで問題ばかりだな》

　そこにいたのはメタトロンだった。

　白の天使は九郎を見つめると、首の動きで促うながしながら言った。

《つかまれ。私ならば追いつける》

　九郎は一も二もなくうなずくと、その背に飛び乗った。

+

　アルはデモンベインを駆かり、ひたすら前へ前へと突つき進んで

いた。

　目指すはヨグ＝ソトースの門。立ち塞ふさがるようにそびえる狂気じみた巨きよ大だいな門は開け放たれており、その奥に広がる絶望の世界をさらけ出している。

　門はあまりにも巨大で広大。全ぜん貌ぼうは当然として目標までの距きよ離り感かんさえもつかめない有様だ。

　近いようで遠いそれは、かなりの距きよ離りを飛んでいるにもかかわらず近づく気配がない。

　アルはモニターに目を向ける。そこには芥け子し粒つぶのように小さくなってしまった連合艦かん隊たいと、星のような儚はかなさで灯ともる微かすかな光が見て取れた。

（あの中の一つに九郎が……）

　首を横に振って自分を戒いましめる。

　胸中で別れを告げ、ヨグ＝ソトースの門へと向き直ったそのときである。

　艦隊方面から夜空を裂さくようにして走る光点が確かく認にんされた。不ふ審しんに感じて映像を拡大した途と端たん、アルは凍こおりついた。メタトロンと、その背にまたがる男の姿を確認したからだ。

　彼は凄すさまじい風圧に耐たえながらデモンベインだけを真っ直すぐに見つめている。

「……九郎」

　その名を口にしただけで胸が高鳴り、歓かん喜きが入り混じった躊ちゆう躇ちよが芽め吹ぶくのが解わかった。

（駄だ目めだ。ここで惑まどうわけには……）

　アルは何度も何度も首を横に振ると、己おのれの内に生じた衝しよう動どうに封ふうをする。

「あのうつけが……。わざわざ追ってくる奴やつが何ど処こにおる

か」

　アルは自らの想おもいを振り切るためにシャンタクを加速させる。

+

「ド畜生っ！　あの馬鹿、さらにスピードを上げやがった！」

　九郎はメタトロンにしがみつき、先行するデモンベインへと向かって突き進んでいく。

　暴風で顔が歪ゆがみ、息をすることすらままならなかったが、そんなことはおかまいなしだ。

（決定的だ。あいつの意図は知れた。アルの奴……本当に独りで戦いに向かうつもりだ）

　頭の中が沸ふつ騰とうしていた。

（ムカついた。本気でムカついた。心底、ムカついた。……さんざん振り回して、さんざん偉えらそうなことホザいて、だけど結局……。なんだかんだ言っときながら、結局──！）

「結局、俺のこと信しん頼らいしてなかった。そーいうことじゃねえかよ！　ザケんな、馬鹿っ！」

《あまり喋しやべると舌を噛かむぞ》

　メタトロンの忠告を無視し、怒いかりに任せて喋りまくっていたときだ。

「ふぶぐぶぉっ!?」

　九郎は思い切り舌を噛んでしまう。

《──遅おそかったか》

「ぬぐぅ～～っっっ！　えええぇぇぇいっ！　もうちとスピードを上

げてくろれろ！」

《しかし、これ以上は君の身体からだが──》

「いいからっ！　俺だって普ふ通つうじゃねえから、ちょっとの加速くらい耐たえられるさ！　それよりも……あの馬鹿は絶対、とっ捕つかまえなきゃならねえ！　やってくれ！」

《了解！》

　その途端、洒落しやれにならないほどのＧが九郎の体を蹂じゆう躙りんし始める。あまりにも激しいそれに九郎は失神寸前だったが、ちっぽけな魔ま力りよくをすべて防ぼう御ぎよに回し、歯を食いしばりながら耐えた。

　ともすれば後方へと置き去りになりそうな意識を奮い立たせながら、先を行くデモンベインを凝ぎよう視しする。

　デモンベインとの距離は一気に縮まり、やがて追いつくことに成功。手を伸のばせば届きそうなほどの位置まで迫せまることができた。

「アル──────ッッ！」

　九郎は力の限り叫さけんだが、風の壁かべに遮さえぎられて自分の声でさえまともに届かない。

　その間にデモンベインは軌き道どうを変え、さらに加速していく。

「～～～～ッ！　本ッッッッッ当にムカつく奴だなッ！」

　メタトロンも加速するが、その差は一向に縮まらず、それどころか広がりつつあった。

《くっ……これ以上は……っ！》

　さすがのメタトロンも限界のようだ。

　九郎の体も盛大な悲鳴を上げている。意識が吹ふき飛ぶ前に手を打たなければならなかった。

「構わねえ……撃うっちまえ！」

　それが九郎の出した答えである。

《な―！　……本気か？》

「むしろ撃ち墜おとす勢いで！」

《……いいのか？》

　躊躇するメタトロンに対し、九郎は告げる。

「少し痛い目を見なきゃ解らねぇんだよ、あのガキはっ！　ここはいっちょ、お灸きゆうをすえてやれ！　ガンホー！　ガンホー！　ガンホー！」

《うーん……》

　それでも迷う素そ振ぶりを見せていたメタトロンだが、覚かく悟ごを決めたのか右手にビーム砲ほうを顕けん現げんさせた。砲ほう口こうがデモンベインへと向けられ、そこからビーム砲が放たれる。

『なっ……！』

　泡あわを食ったらしいアルの叫びとともに、デモンベインが回かい避ひ行動へと移行する。

　メタトロンが放ったビームは機体のすれすれを通り過ぎていった。

　攻こう撃げきは続く。立て続けに放たれたビームは的確にデモンベインへと向かっていった。それは威い嚇かく射しや撃げきでもなんでもない本気の攻撃である。

『チィィ……ッ！』

　闇やみを切り刻んでいくビームの嵐あらしの中、デモンベインは縫ぬうように飛ひ翔しようしていく。命中こそしないものの回避に専念せざるを得ないせいか再び距きよ離りが縮まっていく。

「行けーっ！　そこだっ！　ぶった斬ぎれっ！」

　デモンベインを指差しながら吠ほえる九郎。

《やり過ぎじゃ……》

「問答無用ォォォ！　切り捨て御ご免めんッッッ！」

《……ところで。何故、私は命令されているのだ？》

　メタトロンは小首を傾かしげつつ、両りよう腕うでに光り輝かがやく白いビームセイバーを顕現させた。十字に重ねられた刃やいばが魔力を帯びて光度を増していく。

「装そう甲こうを引っペがしてもいい。コックピットに乗りこむんだ！　中に入ればどうにでもなる！」

《了りよう解かい！》

　白の天使は頷うなずくのと同時に翔かけ出した。板状の双そう翼よくから迸ほとばしるフレアが夜空に光の軌き跡せきを描えがき、九郎とメタトロンは白き雷らい光こうと化してデモンベインへと迫る。

《十スラツ字シユ……》

　交差された光の刃に、極限にまで高められた魔力が集約していく。

『……汝なれ等ぁぁぁっ！』

　デモンベインが振ふり返り、アルの怒ど声せいが響ひびき渡わたる。

　デモンベインのこめかみが凶きよう暴ぼうな輝かがやきを灯ともしていた。それがなにを意味しているのか知らぬ九郎ではない。

「ちょっ！　ちょっとタンマァァァ！」

《なっ!?　いきなり言われても……！》

　慌あわてたせいかメタトロンの集中力が乱れ、両手に集約されたビームセイバーの魔力が霧む散さんする。

　その一方で、デモンベインの頭部に設置されたバルカン砲が火を

噴ふいた。

『大たい概がいにせんかぁぁぁぁぁぁぁっ！』

　マズル・フラッシュが夜空を焼き、巨きよ大だいな砲ほう弾だんが雨あめ霰あられのように降ってくる。

「って、洒落しやれになんねぇぇぇぇぇ！」

《――!?　くぅぅぅぅ――っ！》

　九郎は両手で頭を抱かかえ、メタトロンは回避行動へと移行する。

　尋じん常じようではない横Ｇを感じ、不可視の衝しよう撃げきに叩たたきのめされた九郎は、振り回され、吹き飛ばされた。

「へっ？」

　状じよう況きようを確かく認にんするまでもない。えも言われぬ浮ふ遊ゆう感かんを感じた次の瞬しゆん間かん、九郎は遥はるか下方の海面へと向かって落下し始めたのである。

《あっ……しまった》

　あまりにも呑のん気きなメタトロンの発言に悪態をつきかけたが、それどころではなかった。

「ぬうあああああああああああああ――っ！」

　パラシュートなしのスカイダイビングがスタートした。

「たたたたたた助けてえええぇぇぇぇえええええええ
えぇぇぇぇぇぇぇ！」

　長く尾おを引く悲鳴を上げながら落下し続ける九郎。

《おおっと！》

　大おお慌あわてで追いかけてきたメタトロンが九郎の腕うでをつかみ、海面まで一、二キロの距離を残して静止する。

　安あん堵どの溜ため息をつく九郎。だがホッとした途と端たん、

再び煮にえくり返るほど腹が立ってきた。吊つるされるような体勢のまま、九郎はデモンベインを指差して怒ど鳴なり散らした。

「古本娘むすめ！　危ないじゃねえか！　この高さから落ちたらいくらなんも洒落にならんわ！」

『先に本気で攻撃してきたのはどっちだ、この三お流ち魔こ術ぼ師れっ！』

　アルも負けずに罵ば声せいを浴びせかけてくる。

（やっと無視するのを止めたか、あのド畜ちく生しようめ）

　話すことさえできれば状況を打破するのも難しくはない。

（それにこちとら言いたいことが山ほどあるんだ！）

　九郎はアルに怒声を投げかける。

「その落ちこぼれに、今の今まで頼たよってたヘタレはどこのどいつだ？　てめえじゃケツも満足に拭ふけない歳と月しばっか無む駄だに食ってる小こ娘むすめが無む鉄てつ砲ぽうに飛び出してんじゃねえ！」

『ここから先は人外の領分だ！　単なるヒトにすぎん汝に出る幕はない！』

「今さらなに言ってやがる！　とことんてめえ勝手な奴やつだな！　だいたいお前、独りでマスターテリオンと戦ってボロ負けしてんだろうが！　今回も負けられた日にゃ大迷めい惑わくなんだよ！」

『ええい！　少しばかり戦果を上げた程度の小こ僧ぞうが調子に乗るな。このうつけが！』

　よほど痛いところを突つかれたのだろう。アルの怒ど気きがデモンベインを通して伝わってくる。

『この先は想像を絶する超ちよう狂きよう気きの渦か中ちゆう。無明の大海。神々が嘲あざ笑わらう禁きん忌きの宇宙。そのような領域で汝ごとき泡ほう沫まつの存在がどれ程ほどの意味を持つ!?　もはや汝はデモンベインのパーツとしての役目すら果たせぬのだ！』

　この期ごに及およんで、そのような言葉が九郎に通用するはずもない。

　だが言い返す間もなく、アルは一方的に締しめくくろうとしていた。

『……今まで共に戦ってくれたこと、心より感謝する。だがそれも終わりだ。妾わらわは汝との契けい約やくを破は棄きする』

　断言するアルに対し、九郎は沈ちん黙もくするより他ほかなかった。

　言い返せなかったからではない。言葉を失うほどの怒いかりに支配されていたからだ。

『大十字九郎。汝は妾の主あるじでもなければ魔術師でもない。正真正しよう銘めいの単なるつまらぬ人間だ』

「アル……お前って奴は……！」

　もはや怒りなどという単純なレベルではない。様々な激情が制せい御ぎよを超こえて荒あれ狂くるっている。

九郎の様子に不可解なものを感じたのだろう。メタトロンが訝いぶかしげな目で見つめてきた。

《大十字九郎？》

　だがメタトロンでさえも予測できない行動に九郎は出ていた。彼はメタトロンにつかまれていた腕を払はらいのけたのである。

《えっ？》

　あまりにも突とつ拍ぴよう子しもない彼の行動に、白の天使は何一つ動きを取ることができなかった。

《大十字九郎ッ!?》

　メタトロンの声を耳にしながら九郎は大海へと向かって落ちていく。もちろん、ニュートンを超える術など魔術師ではなくなった今の彼にはない。ただひたすら海面へと向かって突き進んでいく。

『ッッ!?　莫ば迦か、なにを!?』

　取り乱すようなアルの声に耳を傾かたむけながら、九郎は信じがたい速度で落ちていく。

　そんな状況下ではあったが、なぜか心は水を打ったように静かだ。

《なにを考えているんだ！》

　メタトロンは落ちていく九郎を即そく座ざに追いかけ始める。

　だが―。

《□□□□!?》

　デモンベインはメタトロンよりも遥かに迅じん速そくだった。

　白い天使が指一つ動かすよりも速く、爆ばく音おんを置き去りにしながらデモンベインは翔かけていく。

『九郎――――――――ッ！』

　上空から巨大な機き影えいが迫せまっていた。

　見上げると鋼はがねの巨きょ人じんが爆ばく風ふうを引き連れながら九郎の後を追いかけていた。

（……ったく慌あわてやがって）

　九郎は苦く笑しようすると、肩かたの力を抜ぬいて重力に身を委ゆだねる。

『九郎っ！　くっ……汝なれという奴は、なんでいつもこう……っ！』

　切せつ羽ぱ詰つまっているアルの姿が目に浮うかぶようだ。

（そこまで必死にならんでも……。俺は解わかっていて、こういう真似まねをしているんだから……）

　だから海面へと向かって落ちているにもかかわらず心は穏おだやかだ。

（これでお前も解っただろ？　お前は簡単に人とのつながりを断ち切れるほど薄はく情じようでもなければ冷れい徹てつでもないんだって。ようするにお前は不器用で──）

「──寂さびしがり屋なんだよ」

『ちいいいいいいいっ！』

　アルの魔ま力りよくが九郎の体を優やさしく包みこんでいく。

『九郎ッ！』

　デモンベインの掌てのひらが九郎へと向かって伸のびてきた。

　海面まで目と鼻の先だった──。

+

　水平線の彼方かなたが白んできた。

　波は穏やかで、立ち並ぶ環かん状じよう列石と上空に浮かぶヨグ＝ソトースの門を除けばいつもと変わらぬ一日の始まりである。

　そんな柱の一つにデモンベインは立ち、胸の前で腕うでを組みながら水平線を見み据すえていた。

「おっ。そろそろ夜が明けるな」

　水平線の彼方が黄金色に煌きらめき始めた。その光は濡ぬれたデモンベインの装そう甲こうを虹にじ色のベールで包みこみ、荘そう厳ごんさを醸かもし出すのに一役買っている。

「見てみろよ、アル。なかなか壮そう観かんな眺ながめだぜ」

　九郎はコックピットから伸びるステップに乗り出すと、その壮そう大だいな景色に憧あこがれにも似た眼まな差ざしを送っていた。

　だがそんな彼を尻しり目めに、アルは不ふ機き嫌げんを絵に描かいたような表情でぶすっとしている。

九郎は嘆たん息そくし、すぐさま目線を元に戻もどした。

水平線の向こう側から静かに朝日が昇のぼり始めた。その高貴な光はデモンベインの機体を照らしていく。邪じや神しんが降臨しようが、その扉とびらの向こう側で異形が蠢うごめいていようが、それでも朝日はいつもと同じように昇ってくる。そう。必ず夜は明け、朝はやってくる。世界が続く限り──。

そんな感動的な情景も、アルの無言のプレッシャーに晒さらされては台無しである。そっぽを向いたまま頑かたくななまでに口を閉とざしている彼女に九郎は告げる。

「これから最後の戦いに赴おもむくってのに、そんなんじゃ戦意が萎なえちまう」

「くっ……。なにを格好つけておるか！　この超ちようド級の大うつけがッ！」

我が慢まんの限界だったのだろう。アルは柳りゆう眉びを逆立て激げき怒どした。こめかみには青筋が浮かび、ブチッという音とともに脳内の血管が束ごと切れるような音が聞こえてきた……気がした。

「血迷った真似をしよって！　妾わらわが間に合わなんだら、汝は今ごろ──！」

「いや、現に間に合ってるし。だいたい、こうなると解っていてやったことだからな。お前がしくじるはずがない」

しれっと言ってのける九郎に対し、アルの怒いかりは加速する。

「ふざけるな！　人をからかうのも大たい概がいに……」

「ふざけてんのは、てめえのほうだろうがッ！」

九郎に睨にらみつけられ、アルは少しだけたじろいだ。

「ここまできて仲間外れはなしだろ？」

静かにそう告げると、アルはバツが悪そうに目を背そむけた。

「……汝はこれからの戦いを軽く考えすぎている。ヒトにできる戦

いではないのだ」

　顔をうつむかせ、声を震ふるわせながら絞しぼり出すように告げる。

「またそれかよ。んなもんやってみないと判わからねえだろ？」

「それが甘いというのだ！」

　アルは顔を上げ、キッとした表情で九郎を睨みつけた。

「一度あの門を潜くぐれば、そこはもはや人間の常識はおろか宇宙の法則さえ通用しないのだ！　そんな領域に汝を飛びこませるなど……」

「お前こそ甘いってんだよ！　マスターテリオン相手に独りで勝てるわきゃねえだろ！」

　そのようなことはアルとて十分承知しているはずだった。

「結果なんて判り切ってるってのに……。それでもお前を見捨てて全部押しつけろって!?　んな後味悪わりぃことさせるなよ！」

「だって……ッ！」

　アルの表情がついに崩くずれた。怒りでどうにか取り繕つくろっていた表情が崩ほう壊かいし、あっという間に泣き顔へと変わっていく。そして心の壁かべが決けつ壊かいしてしまえば、もう止められない。宝石のような瞳ひとみが潤うるんだかと思うと、堰せきを切ったかのようにポロポロと涙なみだが零こぼれ落ちていく。

「解っておるのか！　二度と戻れないという意味が！　仮に彼奴きやつを倒たおしたとしよう。だとしても未来永えい劫ごう、時と次元の狭はざ間まを彷徨さまよい続けることになるのだぞ!?　そんな運命を汝なれに背負わせるわけにはいかぬではないかぁ！」

　取り乱すアルの姿に九郎は嘆息してみせる。

（どうしてこいつは、この期ごに及およんで全部を自分独りで背負おうとするんだろう？）

　九郎には理解できない。

（犠ぎ牲せいは自分だけでいいとか、なんでそんな馬ば鹿かなことを考えるんだろう？）

　そんな後味の悪いことをされて九郎が黙だまっているとでも本気で考えているのだろうか。だとしたら、とんでもない間ま違ちがいである。

「そんなのお前だって同じだろ？　お前だけが永劫に取り残される。そんな理り不ふ尽じんが許されていいわけねえだろ！」

「……妾は邪じゃ悪あくを討うつために悠ゆう久きゆうを渡わたり歩いた。邪悪との血戦の果てに如い何かなる結果が待ち受けようと、それは本ほん懐かいぞ」

　アルは拳こぶしを握にぎりしめると、震える声こわ音ねでつぶやいた。だがそのような嘘うそにもはや効力はない。

今さらそんな嘘では誰だれも騙だませず、誰も救えはしなかった。

（そんなの大間違いだ。少なくても俺は救われやしないっ！）

　九郎は心を決めた。

「もういい。解った。もうなにを言っても無む駄だだな」

　そう答えたとき、アルは安あん堵どとも傷ついたとも言える微び妙みような表情を浮うかべた。

「決めた。問答無用でついていく。話し合うだけ無駄だ。そっちがその気なら、こっちだって言うことを聞いてやる義理はねえ」

「九郎！　まだ……！」

　九郎はアルの怒ど声せいを無視し、彼女のすぐ側そばまで詰つめ寄った。無言のまま鼻先が触ふれ合うギリギリのところまで顔を寄せ、アルの瞳を覗のぞきこむ。

「お前、なんか勘かん違ちがいしてないか？」

　言わんとしていることが理解できないのだろう。アルは戸と惑まどい、翡ひ翠すいの瞳を彷徨さまよわせる。

「お前を独りにしておけないとか、そんな理由で俺がついていくとでも思ってのか？」

「……！」

「自うぬ惚ぼれるな、馬鹿！　お前、自分がそんなに気を遣つかってもらえる奴だとでも思ってんのか？」

　するとアルは再びボロボロと涙を零こぼし、しゃくり上げるようにして泣き始めた。悠久の時を超こえてきたとは思えぬほどの脆もろさである。

「う、自惚れてなぞいるものかっ！　ど、どうせ妾独りには任せておけぬだろうて！　ああ！　頼たよりない魔ま導どう書しよで悪かったなっ！」

　感情的になりすぎているのか、アルはすっかり幼児化してしまっている。

「だがな！　だが、それでも妾は……っ！」

「それも間違いだ。誰がそんな理由だけで戦いに行けるかよ」

　よほど九郎の話が意外だったのだろう。発言を否定されたアルは、きょとんとした目で見つめ返してくる。問うような眼まな差ざしを受け、九郎はゆっくりと息を吐はき出した。これから口にしようとしていることを考えるだけで心臓が高鳴り、体は熱を帯びてくる。

「俺がついてく理由は、もっとてめえ勝手な理由だ」

　深呼吸を繰くり返し、気持ちを落ち着かせたところでゆっくりとした口調で答える。

「俺が──俺がお前と離はなれたくないからだよ」

　それを最後に、二人は黙って見つめ合った。

　どれくらいの間、沈ちん黙もくしていただろうか。それほど長い時ではないはずだが、九郎にとってはとてつもなく長く感じられた。赤面しているのが解る。意志の力ではどうにもならないほど頬ほおが熱くなっていた。できるだけさり気なく告白したつもりだっ

たが、これでは台無しである。

　九郎の照れが感染したのか、アルの顔も紅潮していく。

　そして躊躇ためらうように沈黙は破られた。

「……うつけ」

　開口一番、それだった。

　それで事態は収拾するかに思えたが、ある意味、状じよう況きようはより深刻さを増している。

　九郎とアルは顔を背けてうつむくと、所在なげにおどおどするより他ほかなかった。

　なんとも間ま抜ぬけな光景である。

+

　藍あい色と紅あかとが溶とけ合う大空の下、白の天使はデモンベインを見下ろしていた。

《──間抜け》

　腰こしに手を添そえ、呆あきれたように溜ため息をつく。

（やれやれ……）

　とんだ道どう化けになってしまったとメタトロンは苦く笑しようする。

　結局のところ、自分が心配するまでもなかった。

　大十字九郎とアル・アジフは、これ以上ないほど強く結ばれ、通じ合っている。

　友と友として、戦友と戦友として、そしてそれを超えて……。

彼らは比ひ翼よくの鳥。

連理の枝。

二人そろってこそ、なのである。

メタトロンが浮かべた微び笑しようは仮面に隠かくされて表に出ることはない。冷たい機械仕じ掛かけの瞳ひとみの奥、慈じ愛あいと憧どう憬けいの瞳の色が零こぼれることはない。

背負った光の翼つばさが輝かがやきを増した。白い軌き跡せきを空に描えがきながら、メタトロンはノーデンスに帰き還かんする。そして最後に一度だけ、二人のほうへと振ふり返る。

（彼等なら──あの二人とデモンベインなら大だい丈じよう夫ぶだ）

あの二人であれば、あんなふうに間抜けな姿を晒さらしながらも絶望的な状況を打破するに違ちがいない。それが大十字九郎とアル・アジフの強さであり、自分が持ち得なかった最強の力だった。

（私はあの二人のようには強くなれない。あの二人のようには戦えない）

ならばせめて、彼等がつなぐ未来を信じよう。

この限りある力で、自分のなせることを可能な限りやっていこう。

それだけがきっと、誰より熾し烈れつに戦うあの二人に対してできる唯ゆい一いつの報むくいだった。

甲かん板ぱんの上に立ち、変へん神しんを解く。

「九郎ちゃん……」

朝日を孕はらむブロンドの髪かみを靡なびかせながら、メタトロンは──ライカは万ばん感かんの想おもいをこめてつぶやいた。

騒さわがしくも楽しかった日々が次から次へと脳のう裏りを過よぎっていく。

それは二度と戻もどることのない愛いとしい日々──。

（もし輪りん廻ねがあるとしたら……もう一度、あの日に戻ることができるのだとしたら……）

　そのとき自分はどういう行動に出るだろうかと、ふとライカは思う。

　ミスカトニック大学の学徒と町外れの寂さびれた教会に住むシスターとして出で逢あい、他た愛わいのない会話に華はなを咲さかせ、日々を積み重ねていく。

　もしかしたら、それ以外の可能性もあるのかもしれない。

　ごく普ふ通つうの、どこにでもいる女として彼と出逢えたかもしれない。

　そんな愚ぐにもつかないことを考えてしまう。

　だがすぐに頭からそれを振り払はらうと、デモンベインの雄ゆう姿しを仰あおぎ見た。

　それは鱗うろこ状じようの翼を広げ、悠ゆう然ぜんと飛び立っていく。

「貴方あなたがたに神の御ご加護がありますように――」

　邪じや神しんどもにではなく、ライカは人の心に宿る神聖な神に祈いのる。

　そして気がついた。

　天使の名を持ちながら、ここまで純じゆん粋すいに祈ったのは初めてのことだと。

+

「うつけ」

　アルがボソリとつぶやいた。

「二度も言うな」

「うつけうつけうつけ」

「三連打かよ」

「うつけうつけうつけうつけうつけ。莫ば迦か者もの。阿あ呆ほう。変態。根無し草。甲か斐い性しようなし。ロリコン」

　容よう赦しやなく浴びせかけられる罵ば声せい。そのどれもが正しく的を射ているだけに酷ひどく腹立たしい。

　九郎は気き恥はずかしさをごまかすように大声でアルに断言する。

「つーワケで！　俺はてめえの我わが儘ままで無理矢理ついていくことに決めたから。ぜってー言うことなんか聞かねえ！　居直った人間が無敵なことは、お前に散々思い知らされたからな！」

　叫さけぶ九郎に、アルはまたしても泣き出しそうな表情でつぶやいた。

「……汝なれは気が動転して、自分がなにを口走っているか解っておらぬのだ」

「人の感情を勝手に決めつけるな、コラ」

「……何ど処この世界に魔ま導どう書しよに心惑まどわされるうつけがいるというのだ」

「この世界にいるんだから、しょーがねーだろーがよ」

　九郎は叱しかりつけるような勢いで口を開くと、さらに続ける。

「俺は別に思いつきで言ってるんじゃねえ」

　逸そらしたままの顔を元に戻し、再びアルの顔を正面から見つめる。彼女はいまだにうつむいたまま彼を見ようとしない。

「ハッキリと意識できたのは、ついさっきだ。でも意識するまでもなく、ずっと前から、ごくごく自然に、当たり前に、俺は傲ごう岸がん不ふ遜そんで糞くそ生意気な小こ娘むすめに惚ほれちまってた

んだよ！」

　もう顔は火ほ照てってはいなかった。気恥ずかしさもない。

「だって……だって……っ！」

　いやいやをする子供のように体をくねらせるアル。そんな彼女の顔を両手で挟はさみこむと、むりやり自分のほうへと向けさせた。アルの瞳ひとみが九郎の視線を避さけるかのように泳ぎ出す。だが九郎はそれを許さず、彼女の瞳を捉とらえ続けた。

「で、お前はどうなんだ？」

　端たん的てきに問う。

「妾わらわは……」

「俺の気持ちは伝えたんだ。今度はアルの番だ」

「自分勝手な……」

「そんなの知ったことじゃない」

　口を噤つぐんでしまうアルに対し、九郎はさらに問いつめる。

「もう一度訊きく。お前はどうなんだ？」

「妾だって……ッ！」

　ついにアルの瞳が九郎の目を正面から捉えた。

　二人の視線は交差し、饒じよう舌ぜつなまでに互たがいの想いを伝え合う。

「妾だって、汝のことが大事に決まっておるではないか！　千年間、こんな激しい想いを抱いだいたことはない！　主あるじとしてではなく、戦友としてではなく、妾は大十字九郎を愛して……！」

　それ以上の言葉は不要だった。九郎は薄うす紅べに色をしたアルの唇くちびるを奪うばう。それは契けい約やく時じに交かわす口づけとは違ちがい、アルを自分のものにしてしまいたいという凶きよう暴ぼうな欲望に駆かり立てられた貪むさぼるような口づけである。

二人とも息いき継つぎすら忘れ、長いこと唇を重ねていた。

（ずっとずっと、こうしていたい）

そんな衝しよう動どうに駆られながらも、どちらからともなく唇を離はなした。

アルは顔を紅潮させ、惚ほうけた瞳で九郎をぼうっと見つめている。九郎は九郎で似たような面つらを晒さらしていた。九郎はアルを引き寄せると、その華きや奢しやな体を包みこむようにして抱きしめる。そして耳元でささやいた。

「今度こそ、ずっと一いつ緒しよだな」

アルは泣きながら、ただ何度も何度もうなずいた。

+

朝日が東の地平から姿を現し、黎れい明めいの空を澄すんだ白に染め上げていく。

朝の空気はどこまでも透とう明めいで繊せん細さい。

そしてその輝かがやきを妨さまたげるものは何一つ存在せず、デモンベインの装そう甲こうを煌きらめかせている。

コックピットに身を預けていた九郎は、静かに心を研とぎ澄ませていく。

交わす言葉はない。

心が通じた今、そのような手段を用いる必要もなかった。

九郎は徐じよ々じよに昇のぼっていく朝日を見守りながら、闘とう志しと魔ま力りよくが生成されるのをじっくりと待つ。

魂たましいと力は鍛きたえ上げられた刃は金がねのごとく鋭えい利りかつ強固。

そこを伝う心の流れは澄み渡わたっている。

そして魂と力は鍛え上げられた。

出しゆつ立たつの時だ。

憎ぞう悪おの空より来たりて

正しき怒いかりを胸に

我等は魔を断つ剣けんを執とる

汝、無む垢くなる刃やいばデモンベイン！

　幾いく度どとなく繰くり返した誓ちかいの祝詞のりと。

　その詩うたが世界に響ひびくのも、これが最後である。

「さあ、行こう。マスターテリオンを倒たおしに」

　シャンタクが点火し、魔力のフレアが轟ごう音おんとともに噴ふき出された。

　暁あかつき色いろの空をデモンベインが舞まっていく。

　目指すはヨグ＝ソトースの門の向こう側。混こん沌とんが渦うずを巻く異界の彼方かなた―。

　デモンベインは九郎とアルの決意を乗せ、そして皆みなの祈いのりを背負い、超ちよう狂きよう気きの中へと飛びこんでいった。

第五章

征(ゆ)こう、恐怖と絶望と勇気と誇りに満ちた戦場に

リベル・レギス
搭乗者：マスター・テリオン&エセルドレーダ

　原色の絵の具を掻かき混ぜたかのような極ごく彩さい色しきの宙そらが広がっている。

　方向も距きよ離りも意味をなさず、なにもかもが溶とけ合い、なにもかもが拒きよ絶ぜつし合う混こん沌とんの海―。

　すべてがあやふやなここでは、心を強く持たなければ個を保てずに霧む散さんしてしまうだろう。

　あまりにも理り不ふ尽じんで不可解な空間が果てなく続いている。

　早くも帰り道は消え失うせていた。

「慎しん重ちように手がかりを探さぐってゆけ。このような領域においては魂を揺ゆるがせないことが重要だ」

　うなずき返すと同時に意識を集中させ、神経の網あみを全世界へと張り巡めぐらせていく。そしてそこに触ふれるものすべてを感じ取り、一つ一つ念入りに探りを入れた。神経が焼き切れそうなほどの衝しよう撃げきが脳内を走り抜ぬけていくが、意図的に失念して作業を続ける。

　人間が住む世界とは異なる理ことわりが支配する空間。それを暴あばこうとする不届き者の脳を、魂を、うねる超狂気が苛さいなんでいく。神経を火で炙あぶられるかのような苦痛に耐たえながら、それでも九郎は意識の触しよく手しゆを伸のばし、広げていった。マスターテリオンの気配を得るために―。

「くっ……！」

　思わず呻うめきが漏もれる。

　魂はズタズタに引き裂さかれ、九郎は自我の容かたちを保つのに必死だった。

（ちくしょう……！　こんなんじゃ奴やつに届かないってのに！）

　焦あせりが心を乱し、乱れた心は感覚を鈍にぶらせていく。焦りはさらなる心の乱れを生み出し、最悪の悪あく循じゆん環かんが形成され始めていた。

　九郎の顔が苦く悶もんに歪ゆがんだそのときである。

「案ずるな」

　アルの声が聴きこえてくる。たったそれだけで焦しよう燥そう感かんは淡あわ雪ゆきが溶けるかのように消え失せ、苦痛も取り除かれた。心は波一つない湖面のような平へい穏おんさを取り戻もどしていく。

「汝なれは妾わらわが護まもる」

　九郎は今度こそ確実に術を紡つむぎ、世界を侵おかす勢いで精神の網を広げていく。

　ありとあらゆる情報が洪こう水ずいのごとく押し寄せてくるが慌あわてることなくさばき、ついにはマスターテリオンの微かすかな気配を捉とらえることに成功した。

「そっちかっ！」

　九郎はバルザイの偃えん月げつ刀とうを召しよう喚かんすると、それを真上に放ほうり投げた。偃月刀は高速で回転しながらデモンベインの胸の高さまで落ちてくるとピタリと静止。何処いずことも知れぬ空間をコンパスのごとく指し示した。九郎がそちらへと目をやった瞬しゆん間かん、バルザイの偃月刀は混沌を斬きり裂きながら一直線に飛び、その先にある見えないなにかに突つき刺ささった。目の前の景色に罅ひびが入る。それは即そく座ざに波は及きゆうし、甲かん高だかい音を立てながら鏡のように破は砕さいした。

　その瞬間、世界が豹ひよう変へんする。砕くだけた景色の向こう側から、怒ど濤とうの勢いでなにかが押し寄せてきた。大量の水のごときそれは軽々とデモンベインを押し流していく。世界のすべてを埋うめ尽つくす圧あつ倒とう的なそれに、為なす術すべもなく鋼はがねの巨きよ人じんは飲みこまれていった。

+

何処とも知れぬ世界の果て―。

世界の狭はざ間まに巨きよ大だいで荘そう厳ごんな玉座が鎮ちん座ざしている。

そこに座すのは紅くれないの鋼をまとう鬼デウ械ス・神マキナ・リベル・レギス。それは胸の前で腕うでを組みながら、時が満ちるのを静かに待っていた。そしてその胎はらの中で眠ねむるように静止していた獣けものが、静かにその眸ひとみを開く。輝かがやきを忘れた金色の眸が前方へと向けられる。

「来たか」

亀き裂れつのような笑えみが少年の顔を切り裂いていく。それは陰いん惨さんで凄せい絶ぜつを極きわめる魔ま性しようの笑みでありながら、同時に陽光の下ではしゃぐ幼子のような笑みでもあった。

相反する二つの顔を同時に孕はらみ、顕あらわとするのは幽ゆう幻げんの存在・マスターテリオンである。

そしてその少年の側には夜の湖のように昏くらく澄すんだ狂きよう気きをたたえる一人の少女がいた。【ナコト写本】の精せい霊れい・エセルドレーダである。彼女は来たるべき血戦に備えて純然たる狂気の炎ほのおを燃え上がらせていた。

「マスター。我々の魔ま力りよくは感知されていますが、よろしいですか？」

「勿もち論ろん」

マスターテリオンはうなずくのと同時に、自分たち以外のモノの気配を感じ取った。

それはリベル・レギスの肩かたの上にいた。胸むな元もとが開いたスーツを身にまとった長身の美女だが、それはヒトではない。ヒトの形をした異形である。その人ひと形がたの異形は遥はるか遠く―この場所からは見えぬなにかを見つめていた。マスターテリオン

と同じなにかを、である。

「ナイアか」

「今回も初めまして、マスターテリオン」

　ナイアは艶つややかな笑みを浮うかべると、リベル・レギスの中で座するマスターテリオンと視線を絡からめてきた。闇やみよりも深い闇あん黒こくに染まった双そう眸ぼうには、あらゆる狂気と絶望が見て取れる。異形の女は悩なやましげな笑みを浮かべたかと思うと、瘴しよう気きとともに言葉を紡ぎ出した。

「これで何度目だったかな？　三千回くらいまでは数えていたんだが」

　そう言って笑うナイアの顔には純然たる邪じや悪あくが宿っていた。

「知らぬな。なにより意味がない」

　マスターテリオンは眸を閉じてつぶやく。

　そこにはすでに微び笑しようはない。あるのは虚きよ無む……いや、虚無に見せかけて閉じこめた憎ぞう悪お、絶望、恐きよう怖ふ、そして畏い怖ふである。一方、エセルドレーダは表情にこそ出さないものの、あからさまな敵意をナイアへとぶつけていた。

　異形の女は肩をすくめながら白々しく嘆たん息そくする。

「さて。九郎君は『古ぶるしき者』の導きを受けて君の下にたどり着けるだろうかね？」

「その問いは更さらに意味がない」

　うっすらと開かれた金色の双眸は燃えていた。昏くらく、深く、そしてなによりも熱く──。

「来る。討うち滅ほろぼして来る。貪むさぼり食くらいて来る。外げ道どうの知識を用い、外道を調ちよう伏ぶくする魔ま導どう書しよとともに。外道を狩かる鋼をまとい、外道を狩る刃は金がねを執とって。大十字九郎は来る！」

+

デモンベインは血の色をした宇宙を漂ただよっていた。

辺りは静かで物音一つしない。聞こえるのは互たがいの息づかいだけである。

そんな虚無にも等しい世界の中に無数の扉とびらが浮かび上がっている。大きさはデモンベインの全長を若じやつ干かん、上回るだろうか。扉にしてはあまりにも巨大である。それらはすべてデモンベインの方向を向いており、すべてが同じ設しつらえとなっていた。さながら扉の迷宮と言ったところか。

（この中から正解を探せってことか？）

無限に存在する扉の中からたった一つの正解を導き出すなど不可能に近い。

その場でデモンベインを静止させ、扉の一つ一つに探さぐりを入れていたときである。突とつ然ぜん、目の前に扉が出現した。それは周囲に浮かぶ扉と比べてあまりにも小さく、とてもではないがデモンベインが潜くぐり抜ぬけられるような大きさではない。その扉が突然、軋きしむような音を立てて開き始めた。ゆっくりと開かれたその扉の先―得体の知れぬその空間から、一人の人間が姿を現した。もっともそれが人間かどうかなど、この世界においては意味をなさない。扉の向こう側から現れたベールを被かぶった人形のそれは、ゆっくりと……酷ひどくゆっくりと扉を潜り抜け、デモンベインの前に立った。

ベールを被った異形は黙だまってデモンベインの眸を見つめている。いや、ベールに隠かくされているので顔があるのかさえ定かではない。定かではないが確かなこともある。目の前の異形から尋じん常じようではない気配を感じ取っていたのだ。それがなんであるのかは見当もつかないが、とにかく底が知れないのである。果てのない深しん淵えんを覗のぞきこんだかのような感覚に捕とらわれてしまう。

（こいつは下手へたすりゃクトゥルーよりヤバイかも……）

　ベールの内側に潜ひそむ深淵に引きずりこまれそうな気がして、九郎は慌あわてて自我を武装する。

「ウムル・アト＝タウィル！」

　アルが聞き慣れない単語をつぶやいた。

「ウムル……なんだって？」

「ウムル・アト＝タウィル。『門を護るもの』『導くもの』『古ぶるしきもの』などの異名を持つ、ヨグ＝ソトースに仕える神性だ。……否いや、ヨグ＝ソトースの化け身しんそのものやも知れぬ」

　だが圧あつ倒とう的な威い圧あつ感かんは感じるものの、ウムル・アト＝タウィルから害意は感じられない。九郎たちをどうこうするつもりはないようだ。

　ウムル・アト＝タウィルの様子をうかがっていたときである。突然、それは自らの胸に両手を突つき刺さすと、心臓でも晒さらすかのように左右に胸を引き裂さいた。裂かれた胸はウムル・アト＝タウィルを遥かに超こえて広がり、やがて完全にそれを飲みこんでしまう。裂け目は拡大し続け、やがては世界すら押し退のけていった。

（これは……）

　裂け目の向こう側に九郎は見た。天まで伸のびゆく大理石の階段を。

　階段の左右に広がるのは無限の宇宙と星々の海──。

　そして宇宙には無数の時計が浮かんでいた。大きさは大小様々である。腕うで時ど計けいほどの大きさのものもあれば、惑わく星せいほどの大きさの時計もある。種類も多種多様だ。柱時計、鳩はと時計、懐かい中ちゆう時計、砂時計。日時計、目覚し時計。掛かけ時計……。それらはどれ一つとして同じ時を刻んでいない。ただ時を刻む秒針の音、時刻を告げる鐘かねの音、鳩の鳴き声、ベルの音、それらが輪唱となって世界に響ひびき渡わたっていた。

「なるほど。ウムル・アト＝タウィルは水先案内人というわけだな」

アルの話に九郎は同意すると、果てなく続く大理石の階段へと足をかけた。そして遥か遥か先にある最上段、その宇宙の果てを見み据すえる。

「この先にマスターテリオンがいる」

その名を口にした途と端たん、心が凍こおりつくほどの恐怖と、それを燃料にして燃え盛さかる闘とう志しが宿った。退路はない。帰る場所もない。だから躊躇ためらうこともない。前進あるのみである。

「―アル」

声をかける九郎に、アルは振ふり返り、そしてうなずいた。

「ああ、行こう。最後の戦場に。そしてその先に……」

「地じ獄ごくが待とうが、離はなれることはない。そうだろ？」

アルがうなずき、九く郎ろうもうなずきを返す。それを確かく認にんできれば十分だった。

九郎は宇宙の果てを見据え、そして階段を昇のぼり始めた。

+

ナイアはリベル・レギスの肩かたに腰こしを下ろし、時間と空間を超ちよう越えつした遥はるか彼方かなたを見つめていた。

そこではウムル・アト＝タウィルに導かれた大十字九郎とアル・アジフが魔を断つ剣けんを駆かり、一段一段、足あし下もとを確かめながら階段を昇っていた。

間もなく彼らは時の狭はざ間まにあるこの場所へとたどり着くだろう。

世界の怨おん敵てきであるマスターテリオンを討うち、人類の未来を勝ち取るために。

　ナイアは狂きよう的てきなまでの笑みを浮うかべると、彼らの様子をうっとりとした瞳ひとみで見つめた。

（期待しているよ、九郎君。君ならきっと……）

　その瞬しゆん間かんを想像しただけで、ナイアの軀からだは喩たとえようもないほどの快楽で満たされていく。

　デモンベインは悠ゆう然ぜんと階段を昇り続けている。

　ナイアはそれを黙もく然ぜんと見守っていた。

　時が満ちようとしている──。

+

　リベル・レギスの肩に腰を下ろしていたナイアが、すっと目を細めた。

「いよいよだね……」

　ナイアは燃えるような眸ひとみをマスターテリオンへと向けると静かに立ち上がる。

「さてと。いつもどおり、僕は邪じや魔まをしないように遠くから見守らせてもらうよ」

　異形の女は狂きよう気きに満ちた笑えみを浮かべると、何処いずことも知れぬ空間の中へと溶とけこんでいく。足が、体が、腕うでが煙けむりのごとく失うせてゆき、最後に顔だけが残された。

「じゃあね、マスターテリオン。次の永えい劫ごうでお逢あいしよう」

　ナイアは吐はき気がするほどの艶えん笑しようを残して姿を掻かき消した。

「……忌いまゝいましい女」

　その様子をコックピットで見守っていたエセルドレーダは端たん整せいな顔を苦く悶もんに歪ゆがめる。

「知ったことではない。今はただ奴やつを……大十字九郎を──」

　マスターテリオンは動じる様子もなく、ただ一点を見据えている。

　少年の暗い金の眸は眼下の長い長い階段へと──その先にいる大十字九郎とデモンベインの姿を凝ぎよう視ししていた。

「案ずるな。この果てになにが待ち受けていようとも、今以上の地獄などあろうはずもない」

「マスター……」

+

　いつ終わるとも知れぬ長い長い階段を、デモンベインは足下を確かめるように昇っていく。

　どれくらいの時が経たっただろうか。数分のような気もするし、何日もの時が流れているようにも思われる。周囲には星の数ほどの時計が浮かんではいたが、それが正確な時を刻んでいるかどうかは定かではない。そもそも確かめたところで意味などなかった。

　やがて階段にも終わりが見えてくる。その最上段に鎮ちん座ざする巨きよ大だいな玉座。そこに座するのは紅くれないの鬼デウ械ス・神マキナ。翼つばさを折りたたみ、外がい套とうで身を包んだ紅の蝙こう蝠もり。その偉い容ようは玉座に深々と腰かけ悠然とデモンベインを見下ろしていた。

『待ち草臥くたびれたぞ、デモンベイン』

　少年とも少女とも取れる中性的な声が紅の空間に響き渡る。

　デモンベインはピタリと足を止めると、紅の鬼械神を機械仕じ掛かけの眸で真っ直すぐに見上げた。

「よう。お待ちかねだな、獣けもの」

　九郎は臆おくすることなく言ってのけると、リベル・レギスを凝視する。

　紅の鬼械神が玉座から立ち上がった。

『では始めようか。終わりの始まりを。始まりの終わりを。永劫の終しゆう焉えんを。永劫の開演を――』

　それは歌うがごとく、謳うたうがごとく、受け入れるがごとく、抱だきとめるがごとく、終末を告げる預言者のごとく両手を広げる。

『クライマックスだ』

　リベル・レギスの右手に金色の光の粒りゆう子しが集まり始める。それは収束し、収縮し、結けつ晶しよう化かし、最終的に金色の宝ほう剣けんを象かたどった。

「――力を与あたえよ。力を与えよ。力を与えよ……」

　デモンベインの右手に炎ほのおが宿る。炎は直線を描えがき、閃せん光こうを発し、結晶化し、バルザイの偃えん月げつ刀とうとなってその手に握にぎられた。

「行くぜ！」

『参れっ！』

　階段を蹴けりつけるようにデモンベインが疾しつ走そうする。そのタイミングに合わせてリベル・レギスが階段を駆け下りた。

「がああああああああッ！」

　デモンベインが刀を振ふるう。

『はあああああああああッ！』

　リベル・レギスが剣を振るう。

　二筋の剣けん閃せんが交差した――。

バルザイの偃月刀と黄金おうごんの宝剣は互たがいに弾はじかれ、逸それていく。それでも二機の鬼械神の動きは止まらず、互いの脇わきを擦すり抜ぬけて静止。振り向きながら第二撃げきが繰くり出される。

互いの間合いの外で繰り出された一撃だが、刃やいばから迸ほとばしる魔ま力りよくが不可視の斬ざん撃げきとなって相手に襲おそいかかった。それは破は壊かいの波は紋もんを階段に刻みながら中央で激げき突とつ、爆ばく砕さいする。

両機は階段が崩くずれる寸前で跳ちよう躍やくすると、その先で第三撃を繰り出した。互いの肩かた口ぐちに刃が打ちこまれ、両機とも傷口から火花が散るが致ち命めい傷しようには程ほど遠とおい。同時に刃を引き抜いて再び打ち合う。

斬撃に次ぐ斬撃。

繰り出された斬撃の速度は高速を超こえ音速へ、音速を超こえ神速へと変わっていく。

百撃、千撃、万撃、億撃、激突する度たびに刃は火花を散らし、機体に無数の傷を刻んでいく。

やがて火花は閃光に、閃光は爆ばく発はつに、爆発は崩ほう壊かいに、崩壊は無へと変わっていった。

ヒトを超え、魔を超え、神を超え、世界を超え、限界を超えた攻こう防ぼうは世界をも斬きり裂さいていく。

空間が激げき震しんし、世界が震ふるえた。

『マスター！　時空震、来ます！』

「九郎、備えろ！　どこに飛ばされるか解わからぬぞ！」

デモンベインとリベル・レギスの渾こん身しんの一撃が激突する。

その衝しよう撃げきは世界に断だん末まつ魔まの悲鳴を上げさせた。

光が弾はじけ、すべてが容かたちを失っていく──。

+

瞼まぶたを開いたとき、そこはすでに別の世界だった。

時計もなければ階段もない。眼下には奇き怪かいなフォルムをした古代遺い跡せきのような建造物が建ち並び、その上空を蝙蝠に似た翼を生やした人ひと形がたの怪かい物ぶつが飛び交かっている。地球上の景色ではない。どことも知れぬ場所である。九郎は石造の建築物の一つにデモンベインを着陸させると、辺りの様子をうかがった。

「ここは……大図書館！　セラエノか！」

アルが声を張り上げる。

「セラエノ？」

「プレアデス星団にある惑わく星せいの一つだ。ここには旧支配者や旧神から盗ぬすみ出した書物や石せき碑ひが収蔵されているというが……」

「よく解わかんねえけど、とにかくとんでもないところまで飛ばされたってことだよな……」

あらためて周囲を見み渡わたした九郎は、大図書館の屋根の上で佇たたずむリベル・レギスの姿を捉とらえた。

『どうだ、大十字九郎。それにアル・アジフよ』

「マスターテリオン！」

デモンベインはバルザイの偃月刀を構え、それに応こたえるようにリベル・レギスも剣けんを構える。

『このような血けつ闘とうこそ我等に相応ふさわしいとは思わぬか？　時間も時空も定まらぬ現在、過去、未来。あらゆる宇宙を亡ぼう霊れいのごとく彷徨さまよい、たどり着く世界を崩しながら必ひつ滅めつの術を交え、犯おかし合い、侵おかし合う……』

　興奮し、陶とう酔すいするかのようなマスターテリオンの叫さけびが異星の空に轟とどろく。

『そうだ！　ただの血闘で足りるものか！　今は、今だけは我等が世界の中心。運命の輪は我等のために廻めぐる！』

「ケッ。ゴチャゴチャとよく喋しやべる口だ。んなの知ったことかよ！　俺がやるのはただ一つ。てめえをぶっ潰つぶすことだけだ」

『なんとも風ふ情ぜいに欠ける……と言いたいところだが、貴公の判わかり易い行動原理は心ここ地ちよいぞ。さて……教えておくが』

　リベル・レギスの左ひだり掌てのひらが左胸、すなわち人で言うところの心臓の上に添そえられる。

『ヨグ＝ソトースを現世に留とどめているのはリベル・レギス自身の動力、魔ま術じゆつ機関エンジンに施ほどこされた呪じゆ法ほうにこそある。即すなわち世界を救いたければリベル・レギスを破壊する以外あり得ぬ』

「ご忠告は痛み入るが、端はなからそのつもりだから問題ねえな」

　デモンベインは建物の屋根を蹴り上げて跳躍すると、リベル・レギスとの距きよ離りを一気に縮める。紅の鬼デウ械ス・神マキナは動かない。それとも動けないのだろうか。どちらにせよ反はん撃げきさせるつもりなどなかった。

　だがそのときである。リベル・レギスの右手に握にぎられていた黄金の剣が、凶まが々まがしい装そう飾しよくが施された金色の長弓へと変化した。リベル・レギスは弓に光の矢をかけ、光で編まれた弦つるを極限まで引き絞しぼる。そこから放たれた矢は風を裂き、空間を裂き、迅じん雷らいのごとくデモンベインへと襲いかかってきた。

「くぅ……！」

　九郎とアルは呼吸を合わせてデモンベインを回かい避ひ行動へと移行させる。矢はデモンベインの右みぎ頬ほおをかすめ、追いかけるようにして訪おとずれた衝しよう撃げき波はで装そう甲こうに罅ひびが入った。

『ほう。あのタイミングでかわしたか。よしよし』

　すでにリベル・レギスの指の間には十数本の矢が挟はさまれていた。

『では、続くこれも見事かわしてみせよ』

「……マジかよ」

　つぶやいたときにはその場から飛び退のいていた。直後、そこを矢が射い抜ぬき、余よ剰じよう分ぶんの魔力が大図書館の屋根をクレーター状に剔えぐっていく。矢は立て続けに放たれ、そのどれもが正確無比。神速で飛んでくるそれをデモンベインは曲芸よろしく避さけ続けるしかなかった。

「これでは埒らちが明かぬぞ！」

「解ってる！」

　デモンベインは二挺ちようの魔ま銃じゆうを握りしめると矢を紙かみ一ひと重えのところで避け、自ク動ト式ウ拳グ銃アの引き金を引いた。だがそこにはすでにリベル・レギスの姿はない。邪じや悪あくなる気配を察知して頭上を見上げると、異星の歪ゆがんだ月を背景にリベル・レギスが踊おどるように舞まっていた。それはすでに十本もの矢をデモンベインへと向けて放っていた。九郎は即そく座ざに回転式イタ拳銃クアの引き金を引き、全ぜん弾だん、発射する。六発の魔ま弾だんは己おのれの意志で獲え物ものを捕ほ捉そくし、六本の矢が撃うち落とされた。残る四本に自動式拳銃を向けて発はつ砲ぽう。それによって残りの矢はすべて焼きつくされる。

　連射に次ぐ連射で弾だん倉そうは空っぽだ。九郎は舌打ちをしながら自動式拳銃の空カートリッジ、そして空薬やつ莢きようを投げ捨てると、即座に次のカートリッジとスピードローダーを銃に塡はめこんだ。零れいコンマ一秒にも満たない動きだが、反撃を許すには十分な隙すきである。だが──。

『終わったか？』

　リベル・レギスは反撃すらせず、腕うでを組みながらデモンベインを見守っていた。

「なめられておるな」

「ケッ……。おかげさまでな！」

　吐はき捨てて銃じゆう口こうをリベル・レギスに向ける。一方、紅の鬼械神は弓を天に掲かかげていた。

『それでは次のステップだ』

　リベル・レギスは有機的な印象を与あたえる異形の矢を取り出すと、それを異星の空へと放った。

　天空より無数の殺意が降下してくる。それは空気を裂さき、光の雨となってデモンベインに降り注がれた。

「クッ……結界よ……！」

　アルが術式を展開し、デモンベインの前面に五ご芒ぼう星せい形の防ぼう御ぎよ陣じんを造り出した。幾いく重えにも張りめぐらされた防御陣だが、殺意の矢はそれすら貫つらぬいてデモンベインへと突つき刺ささった。

「あああああああ！」

「ぐあああああああ！　……クソが！」

　貫かん通つうこそしてはいなかったが、矢を全身に浴びたデモンベインは針はり鼠ねずみのようだ。

　周囲の被ひ害がいも尋じん常じようではない。無数の矢が大図書館の屋根を貫き、粉ふん砕さいし、瓦が解かいさせていく。足あし下もとが崩くずれ、デモンベインの機体が沈しずんでいった。

　それを好機と見たのか、リベル・レギスが再び矢をつがえて蒼そう穹きゆうを指し示す。一方、瓦解する建物の中に飲みこまれながらもデモンベインは二に挺ちよう拳けん銃じゆうをリベル・レギスへと向けていた。二つの闘気が真正面からぶつかりあい、その衝しよう突とつが両機の間の空間を歪ませていく。

　空間が──世界が震ふるえ始めた。

「時じ空くう震しんだ！　また飛ばされるぞ！」

『マスター！』

　少女たちの警告を耳にしながらも、それぞれの主あるじの優先事じ項こうに変へん更こうはない。

　デモンベインの魔銃が火を噴ふき、リベル・レギスの魔ま弓きゆうが撃ち放たれる。

　敵を撃ち抜いたという確かな手て応ごたえと、敵に射抜かれたという確実な衝しよう撃げきを得ながら、再び世界は崩れて移ろっていく。

+

　気がつけばデモンベインは宇宙空間をゆらゆらと漂ただよっていた。

　目に映るのは幾いく億おくもの星々の煌きらめきと、何千、何万もの彗すい星せいたち。そして遠くで鈍にぶく激しい光を放ちながら存在を高らかに主張する赤い太陽だけである。太陽系のようにも思えたが、定かではない。たとえそうだとしても、かつて自分たちがいた時代とは限らなかった。

「……ギリギリのところで飛ばされたか……つぅ……」

　アルが苦く悶もんの表情を浮うかべながらつぶやく。

「くっ……！　状じよう況きようは……？」

　時空震に飲みこまれる間ま際ぎわの攻こう防ぼうによりデモンベインの装甲は剝はがされ、内側の機関をさらけ出していた。いたるところが爆はぜており、紫し電でんが散っている。それはコックピットの内部にまで及およんでいた。致ち命めい傷しようではないが損傷はかなりのものだ。そしてそれは九郎とアルも同じである。内臓に酷ひどいダメージを受けているらしく、体が思うように動かなかった。

「王冠、叡智、理解、慈悲、苛烈、美、勝利、栄光、基盤、王国……巡まわれ巡れ生命セフの樹イロトを巡れ」

　アルの呼吸に応じ、デモンベインの全身に魔ま力りよくが行き渡わたる。破損箇か所しよが自己修復を始め、剔られた装甲を復元していく。だが状況はかんばしくはない。絶え間なく彗星が流れていくこの宙域では、いつそれに巻きこまれるか知れたものではなかった。一歩間ま違ちがえばデモンベインが流れ星になるだろう。

　リベル・レギスの気配を探さぐるべく世界へと意識の網あみを広げたときである。闇やみ色をした宇宙に罅ひびが入り、縦に裂けた切れ目から無数の影かげが押し寄せてきた。それは牙きばを、嘴くちばしを、爪つめを、翼つばさを、鋏はさみを、毛を、鱗うろこを、殻からを、角を、針を持つ、ありとあらゆる獣けものの群れだった。無音であるはずの宇宙に獣どもの咆ほう吼こうが木こ霊だまする。

「ちっ！　さっそくかよ！　がああああああああああっ！」

　獣たちはデモンベインに牙を、爪を、嘴を、角を、針を、その獣が獲え物ものを狩かるために与あたえられた得え物ものを突き立ててくる。たとえるならここは獣の海の直ただ中なか。命の箱庭。略りやく奪だつと凌りよう辱じよくの檻おり。牙を持たぬ生いけ贄にえとして、デモンベインは貪むさぼり食われている。

『羊を装よそおうな、大十字九郎。貴公は余ケモノを殺しにきた狩人かりうどであろう？　獣に狩られる狩人などあろうはずもない』

　どこからともなく聞こえてくるマスターテリオンの嘲ちよう笑しよう。

「好き勝手言ってくれるぜ……。こちとらとっくに限界だってのによっ！」

「……九郎、探せ……この餓が鬼き結界も……術である以上、核かくは存在し、破る術もある……！」

　背徳の獣たちに貪られながら、九郎の意識は世界全体へと拡大していく。

　それは世界の裏を暴あばく認にん識しき。今ある世界を自ら望む世界に書き換かえる認識。解かい呪じゆの法則──。

（見つけた！）

そう思ったときは右手が動いていた。デモンベインの右手に食くらいついていた蛇へびの頭に掌てのひらを押しつける。それがこの餓鬼結界の核だった。

「レムリア・インパクト！」

一いち撃げき必ひつ滅めつの無限熱量が蛇を、そしてデモンベインを取り囲む獣の檻を根こそぎ消しよう滅めつさせた。

世界は再び光を取り戻もどすが、今の一撃でデモンベインは再び大きく損傷し、九郎自身もまた魔力を磨すり減らす結果となっていた。

そしてその最悪のタイミングで彗星の一団がデモンベインへと向かって飛んでくる。数にして数十。避さけるにしても数が多すぎるが、それでも右に左に、上に下に、押し寄せてくる彗星の間かん隙げきを縫ぬうようにしてかわし続ける。

だが、なにかおかしかった。何故そのように感じるのかは解わからなかったが、自然な動きではない。そう。そこには明らかな敵意が含ふくまれていたのである。

だが気づいたときには手て遅おくれだった。通りすぎたはずの彗星が軌き道どうを変え、デモンベインへと向かってきたのである。背後からの不意打ちに、デモンベインは為なす術すべなく吹ふき飛ばされていた。

「これも……彼奴きやつの仕し業わざか！」

デモンベインは一いつ瞬しゆん、完全に無防備な姿を晒さらした。そこへ襲おそいかかる巨きよ大だいな金の十じゆう字じ架か。それは防御陣を軽々と突き破やぶってデモンベインに振ふり下ろされた。

真っ先に訪おとずれたのは空白。次に来たのは衝撃―。内臓が掻かき回されるかのようなおぞましい感覚が体を冒おかしていく。九郎は力なく片かた膝ひざをつき、そして四よつん這ばいになった。足あし腰こしから力が抜ぬけ落ちていく。

「ゲフッ！　ガハッ！　ガッ！」

咽の喉どを伝って吐はき出された赤い液体が塊かたまりとなって

宙を漂う。

「くっ……九郎……っ！」

　アルは操縦席に突つっ伏ぷしながらも、それでも九郎を気づかって弱々しい声を上げた。

　コックピットが激しく揺ゆさぶられた。ノイズが走るモニターへと目を向けると、デモンベインの貌かおをリベル・レギスが鷲わし摑づかみにしていた。貌が軋きしむ嫌いやな音が響ひびいてくる。

『まだ出し惜おしみするか。つくづく余よ裕ゆうだな、貴公等は』

「マスター……テリオン……」

　咽喉、そして鼻び孔こうを満たしていく血液を吐き出しながら、九郎はデモンベインの右手をリベル・レギスの顔面へと向ける。掌にレムリア・インパクトのエネルギーを集結させるものの、浮かび上がる魔ま術じゆつ文字の輝かがやきは今の九郎の生命力と同じで乏とぼしい。魔力が足りていないのだ。それでも力ずくで動かすが、レムリア・インパクトが発動するよりも早くリベル・レギスの掌が爆ばく発はつした。デモンベインの顔面に亀き裂れつが生じ、水銀アゾートの涙なみだを流しながら吹き飛んでいく。

「がああああああ……あああああっっ！」

　吹き飛んだ先で次の衝しよう撃げきが待ち受けていた。

　一瞬でデモンベインを抜き去ったリベル・レギスの拳こぶしがデモンベインの背中へと突き刺ささる。さらに強ごう引いんに振り向かされたところで膝ひざ蹴げりが加えられた。それは胸部を強打。直下型地じ震しんの震しん源げん地ちにでもいるかのような激しい振しん動どうがコックピットに襲いかかる。

「がああああああ！」

「きゃあああああ！」

　続いてリベル・レギスの左の手刀がデモンベインの右みぎ肩かたを粉ふん砕さいし、続けざまに心臓部を肘ひじ打うちが炸さく裂れつ。再びデモンベインは宙へと吹き飛ばされていく。追い討ちで投とう擲てきされる黄金おうごんの剣けんが次々にデモンベインへと突き刺さり、その衝撃で九郎の意識はあらぬ世界へと飛んでいく。

「あ……あ―」

　視界が白い闇の中へと閉とざされ始める。音は聞こえず、体の痛みも感じない。意識も遥はるか遠方へと遠ざかりつつあった。五感の機能が鈍にぶっているのだろう。おかげで苦痛を感じずにすんではいたが、それはつまり死へと近づきつつある証しよう拠こでもあった。

『天狼星シリウスの弓よ』

　九郎は遠ざかる意識の中、酷ひどく冷れい酷こくな声を聞いた。それは純じゆん粋すいな殺意の嵐あらし―。

（やべえ……殺やられる……）

　魂たましいの奥底に赤色灯が灯ともり、ひっきりなしの警けい鐘しようを鳴らしている。だが死にかけた体と折れかけた心に、その警告音さえ遠方から聞こえてきた。

（ここで終わるのか……）

　絶望と諦あきらめ。

そんな感情が心を支配していく。だがそれでもなおデモンベインの右みぎ腕うでは動いていた。動かしているという意識はない。ただなにかが、遥か彼方かなたから届けられたなにかが、内部から湧わき起こったなにかが、九郎の意識とは別にデモンベインを突き動かしていた。だがそれは、あまりにもささやかな抵てい抗こう。そのなにかにどんな想おもいや意志がこめられていたとしても、次のリベル・レギスの一撃で一いつ切さい合がつ切さいが無に還かえる。なんの意味もなく、ただただ理り不ふ尽じんに。

放たれる強大で無む慈じ悲ひな滅めつ意いの波動。

避けられるはずもない。耐たえられるはずもない。

にもかかわらず、絶望すら跳はね除のけるほど胸の奥が熱かった。その答えはすぐに出た。滅意を遮さえぎる暖かな波動。それは酷く脆もろいながらも、なによりも強固だった。折れぬ想いが、切実なる決意が、ただそれだけがデモンベインを護まもる盾たてのすべてだった。

まず視界が戻ってくる。

そこに映るのは、黒こく龍りゆうの一撃を受け止める魔ま法ほう障しよう壁へきの輝き。

次に聴ちよう覚かくが戻る。

聞いたのは、命を賭として宣言する聖なる咆ほう吼こう。

「……させぬ。させぬぞ！　汝なれ等のようなくだらぬ連中に、我わが主あるじを、妾わらわの愛する大十字九郎を殺させてなるものかァ！」

アルは顔を苦く悶もんに歪ゆがめ、口こう端たんを血で濡ぬらし、息を荒あらげながらも敢かん然ぜんと立ち向かおうとしていた。九郎の胸の奥を灼やいていた熱が、無限の力となって全身を駆かけめぐり始める。

「あああああああああああああああああッ！」

九郎とアルの咆吼が重なった。溶とけ合う二人の魂と魔ま力りよくで障しよう壁へきの輝きが烈はげしさを増していく。

「終わらせたりするものかぁぁぁぁぁぁぁ！」

　九郎は雄お叫たけびとともに立ち上がると、シャンタクをフルパワーにして飛ひ翔しようする。デモンベインは一いつ瞬しゆんで音速を超こえ、一いち陣じんの光となった。

　リベル・レギスの掌てのひらから重力弾だんが放たれる。それは光を捻ひねり、歪め、飲みこみながらデモンベインへと迫せまる。かわしようのない絶ぜつ妙みようのタイミングだった。だが今のデモンベインは物理法則ですら退しりぞけ、世界を凌りよう駕がしていく。

『なっ……！』

　慣性の法則を無視して直角に曲がり、重力弾をかわすデモンベイン。さらにデタラメな軌き道どうを取りながらリベル・レギスへと迫る。体が押し潰つぶされ、内臓がひしゃげてしまうほどのＧを感じながらもさらに加速を積み重ねていく。鋼はがねのごとき堅けん固ごな意志が肉体を支えていた。

『マスター危険です！　離り脱だつを……ッ！』

　エセルドレーダが叫さけぶが時すでに遅おそし。神速と化したデモンベインがリベル・レギスを頭上から貫つらぬいていく。その破片が宙を舞まうのを確かく認にんしながらデモンベインは超ちよう加速状態から抜け出し、静止する。

　もはや九郎の体は限界だ。体を支えることもままならず、それどころか呼吸さえもやっとだった。それはアルも同じで、尋じん常じようではないほど息を荒らげている。

「ハッ……ハッ……ハッ……ッッッ！　九郎……」

「はぁ……マズイぞ……アル……ッ！　奴やつはまだ……倒たおれてないッ！」

　叫ぶや否いなや、巨きよ大だいな十じゆう字じ架かがデモンベインを撃うった。右みぎ脚あしと左ひだり腕うでが千切れ飛ぶ。それを振ふるうのは下半身と左腕を失ったリベル・レギスである。それは残った右腕だけで十字架を支え、そびえ立っていた。

『はは……はははは……はははははは……あはははははははは

は！　それでよい！　それでよいのだ！　大十字九郎！　それでこそ余は貴様を……貴様を……あはははははははははは！』

　デタラメに振り回されるリベル・レギスの十字架がデモンベインを打ちすえていく。

　その度たびにコックピットは激しい衝しよう撃げきに襲おそわれ、九郎とアルは血を吐はき出した。

（―なぜだ？）

　透とう明めいで静かな心の中で、九郎は自問する。

（こんなに痛いのに……苦しいのに……魔力はとっくに底をついているというのに……）

　むせ返るような咳せきを繰くり返し、血ち反吐へどを吐き出しながらも九郎の目は死んではいない。その瞳ひとみには明確な意志の力が浮うかび上がり、眼前の脅きよう威いを睨にらみつけていた。

（どうして……。どうしてこんなにも……）

　九郎はすっくと立ち上がる。

「どうしてこんなにも戦う力が湧いてくる―！」

　無意識のうちに自ク動ト式ウ拳グ銃アと回転式イタ拳銃クアを召しよう喚かんする。そして怪かい異いは起きた―。肥大化した二に挺ちよう拳けん銃じゆうは絡からみ合い、溶け合いながら巨大な砲ほう身しんを象かたどると、その砲ほう口こうを今まさに破は滅めつの矢を放とうとする黒龍へと向ける。

『天狼星シリウスの弓よッッ！』

　マスターテリオンの叫びとともに破滅の矢が放たれる。それと時を同じくしてデモンベインは引き金を引いた。

　二つの魔力の衝しよう突とつと爆ばく砕さいが彗すい星せいの海を飲みこんでいく。

　そしてまたもや時じ空くう震しんが発生し、二機の鬼デウ械ス・神マキナはそれに飲みこまれていった。

+

デモンベインは何処とも知れぬ宇宙空間に吐き出されていた。

辺りは静かで、物音一つ聞こえてはこない。

静せい寂じやくのみが支配するその世界で、九郎は警けい戒かいするのと同時に慎しん重ちように辺りを探さぐり始めた。

と、そのときである。アルが溜ため息混じりの声を吐き出したのは。

「九郎……あれを……」

促うながされるようにして振り向いた九郎は、その先に見えた光景に声を失った。

視界いっぱいに広がるそれに、ただただ圧あつ倒とうされていた。その何処までも透明な美しさに……。そしてようやく悟さとる。体に漲みなぎる力の正体を。

「アル……俺たちは……」

「ああ、解わかるとも。九郎」

九郎は自じ嘲ちようの笑えみを浮かべながら、その壮そう大だいな景色に魅み入いっていた。

（俺は大おお馬ば鹿か野や郎ろうだ。なにを自うぬ惚ぼれていた？　なにをヒーローぶっていた？　そんな器うつわじゃないことは解りきってたことじゃないか）

蒼あおく輝かがやく母なる惑わく星せいを見つめながら思う。

（俺たちが護まもっていたんじゃない。俺たちがこの地球ホシに護られていたんだ！）

いつの時代の地球かは判わからない。

だがその美しさは、九郎たちに漲るほどの力を与あたえていた。

「まだやれるな、九郎？」

「当たり前だ。これからが本番だぜ！」

満身創そう痍いのデモンベインは地球を背負い、闘たたかう。

負ける道理など見当たらなかった。

+

マスターテリオンは畏い怖ふしていた。

蒼い地球を背負って光り輝かがやくデモンベインの美しさは、恐きよう怖ふの化け身しんとなった彼でさえ理解不能な恐怖として目に焼きついている。

それは幾いく千せん、幾万、幾億という永劫アイオンに亘わたり、獣けものを追い続けた狩人かりうどの姿だ。

魔まを断つ、ただそのためだけに砥とがれた聖なる剣けん。

無限に続く絶望の檻おりを打ち砕くだき、ついにこの境地へとたどり着く―。

「否。認めぬ」

マスターテリオンは頭すら振らずに否定した。

この境地すらすべては仕組まれたモノである。

宇宙をこの境地へと導くただそれだけのためにマスターテリオンは生まれ、大十字九郎は剣を執とった。

そう。幾千、幾万、幾億回―。

すべては運命の奴ど隷れい。すべては運命へと捧ささげられる生いけ贄にえ。

（貴様等のその気高さも、美しさも、すべて。すべて……）

　憎にくかった。それでも憎かった。どこまでも憎かった。

（貴様等は絶望の檻に囚とらわれていながらそれを識しらず、それを気に留めず、ただひたむきに戦士であり続ける）

　それが少年には憎く、許せなかった。

（余は此これ程ほど穢けがれたというのに、貴様等はそんなにも美しく――！）

「憎い……憎い……憎い……憎い、憎い、憎い、憎い憎い憎い憎い――憎い！　憎いぞ、大十字九郎、アル・アジフ！　あはははは！　余はこんなにも……こんなにも貴様等が憎いぞ！」

　少年はその憎しみだけを糧かてにデモンベインへと襲おそいかかる。

　その憎しみだけが少年の存在を証明するすべてであるがゆえに――。

+

　魂たましいを昏くらく澄すみ切らせたまま、エセルドレーダは身を引き裂さく激痛に慟どう哭こくした。

　無意識の底に沈しずめた僅わずかな痛みは今、後あと戻もどりのできない致ち命めい傷しようとなって彼女を狂くるわせていく。

（またあの二人に……マスターを奪うばわれた！）

　この世界に少年の憎ぞう悪おを受け止めることができるのは大十字九郎とアル・アジフのみ。

　己おのれを顧かえりみぬほどに想われるのは彼等だけだった。

　そう。エセルドレーダではない。

輪りん廻ねの度たびにそれを思い知らされ、この境地に至って遂ついにマスターテリオンの心に彼女の居場所はなくなった。この絶望の宇宙で遂に独りきりとなった。

（……憎い）

運命もなにもかも知ったことではなかった。ただ眼前にいる二人が憎く、許せなかった。

（絶望を―。マスターと私が背負った絶望の億分の一でも、このなにも識らぬ愚おろか者どもに刻みつけてやる）

その嫉しつ妬とだけを糧に、エセルドレーダはデモンベインに襲いかかる。

その嫉妬だけが彼女に残されたすべてであるがゆえに―。

+

蒼く輝く母なる惑星を背景に、二機の鬼デウ械ス・神マキナが対たい峙じしている。

一機は右みぎ脚あしと左ひだり腕うでを失い、装そう甲こうに無数の罅ひびが入った魔を断つ剣。対するのは下半身をもぎ取られた紅くれないの巨きよ人じんである。二機とも動いているのが不思議なほどであり、それを操あやつる搭とう乗じよう者しやもまた満身創痍だった。にもかかわらず両機から発せられる闘気は微み塵じんも衰おとろえてはいない。それどころかより激しさを増している。

『大十字九郎ッ！』

「マスターテリオンッ！」

上半身のみのリベル・レギスが白光をまとい、破は滅めつと憎悪を靡なびかせながら飛ひ翔しようする。

デモンベインはシャンタクのエネルギーをすべて解放し、フレアを爆ばく発はつさせながら宙そらを翔かける。

激げき突とつする蒼と紅の流星。せめぎ合う魔ま力りよくが爆発する。デモンベインとリベル・レギスは計算もなにもなく、己の魂の奥底からこみ上げてくる衝しよう動どうを叩たたきつけるように殴なぐり合う。

迫せまるリベル・レギスの左の手刀にデモンベインは右の拳こぶしを叩きこむ。爆発と同時に互たがいの指があらぬ方向へとねじ曲がる。デモンベインの攻こう撃げきは止まらない。九郎よりも速くアルが操縦に干かん渉しようし、左ひだり脚あしで蹴けり上げる。絶ぜつ妙みようのタイミングで放たれたその一いち撃げきはリベル・レギスの顔面を捉とらえる……はずだった。だがそれは再生したばかりの左手によって受け止められていた。

『生まれて二千年も経たっていない小こ娘むすめが！　私を嘗なめるなっ！』

「ナコト写本っ！」

少女たちが感情をぶつけ合う最中さなか、今度は【アル・アジフ】の魔ま術じゆつが鋼鉄を編み上げてデモンベインの左腕を修復する。九郎は復元された左腕の拳をリベル・レギスのコックピットへと叩きこむ。さらに追つい撃げきを加えようとしたとき、再生したリベル・レギスの右のハイキックがデモンベインの左ひだり肩かたに直ちよく撃げき。振ふり上げられた右脚から踵かかと落おとしが炸さく裂れつした。水銀の血を流しながら後方へ吹ふき飛ぶデモンベイン。機体が分解されてもおかしくないほどの衝しよう撃げきが走り抜ぬける。

「九郎！　来るぞ！」

十字に輝かがやく金色の光が闇やみを切り裂きながらデモンベインへと迫る。

『砕け散れ！　デモンベイン！』

呪のろわれた背徳の十じゆう字じ架かの裁きがデモンベインへと下される。その速度たるや尋じん常じようではなく、とてもかわせるものではなかった。だが元よりかわす気はない。

デモンベインの右みぎ掌てのひらが光を放ち、吼ほえた。

「レムリア・インパクト！」

一撃必ひつ滅めつの威い力りよくを以もつて迫りくる十字架を、一撃必滅の法則を組みこんだ右掌が迎げい撃げきする。その衝撃で右腕がへし折れ、火花が、紫し電でんが散った。だがその崩ほう壊かいの波は紋もんが機体に波は及きゆうするよりも速く、解き放たれた無限熱量が罪人の十字架を剔えぐっていく。

「昇しよう華か！」

必滅の論理が侵しん略りやくを開始し、罪人の十字架を跡あと形かたもなく抹まつ消しようしていく。リベル・レギスは十字架を手放して巻きこまれるのを避さけたが、デモンベインとの距きよ離りが大きく開く。

『こざかしい！』

リベル・レギスの腕が折れ、そこから黒い砲ほう口こうが姿を現す。その表面に魔術文字が疾しつ走そうし、闇の塊かたまりを吐はき出した。その数、十一。それは星々の光すら歪ゆがめながらデモンベインへと迫る。

「重じゆう力りよく弾だんだ！　捕つかまったら根こそぎもっていかれるぞ！」

九郎はシャンタクを操って重力弾を避け続ける。立て続けに八つを避け、続いて迫るそれに防ぼう御ぎよ陣じんを展開。旧エルきダー・印サインを飲みこんでいく重力弾。相そう殺さい。だが最後の一発に捕まってしまう。

（しまった！）

直撃こそ免まぬかれたものの、圧縮された重力がデモンベインを押し潰つぶしていく。シャンタクの一部が剔られ、急激に推進力が低下していった。

E’

『　H□Y□Y A□Y A□Y A H A A H□

E’

ＹＡＹＡＹＡＡＡＡＡａａａａａａａａ！』

　リベル・レギスが突とつ撃げきしてくる。だがシャンタクが破は壊かいされた今、それをかわす術すべはない。

　間髪かんはつを入れずに叩きこまれる拳の弾だん幕まく。あまりにも速いそれに、さばくだけでも手て一いつ杯ぱいである。加速する思考。反射神経が加熱し、脳を焼いていく。血圧が上じよう昇しようし、眼球の奥で毛細血管が破は裂れつする。視野が赤く濁にごり、九郎の頬ほおを血けつ涙るいが伝った。

　リベル・レギスの右掌を疾走する破滅の術式。形作られた手刀が白く燃える炎ほのおをまとう。絶対零れい度どの白き炎をまとうその大おお技わざを九郎は知っていた。

『ハイパーボリア・ゼロドライブ！』

「させるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

　振り下ろされる手刀の真横から掌しよう底ていを叩きこみ、ハイパーボリア・ゼロドライブの軌き道どうを逸そらす。ほんの僅わずかだけ左肩をかすめていくそれにより、左肩の半分が消しよう滅めつした。コックピットに衝撃が走り抜け、あらゆる機器が火を噴ふき、紫電が散った。

「くそっ……たれ！」

　九郎は一向に出力が上がらないシャンタクを噴かせながら姿勢を保とうとする。だがそのとき、見えない枷かせがデモンベインを呪じゆ縛ばくした。機体が重くなり、自由がまるで利きかなくなる。

「しまったっ！　地球の重力に……！」

　先ほどからシャンタクはフル回転させている。だが出力の大半が失われている今、地球の重力圏けんから逃のがれる術はなかった。

デモンベインは少しずつ、しかし確実に地球へと向かって落ち始める。そこへ追ってきたリベル・レギスが体当たりし、デモンベインはさらに深く、地球の重力に囚とらわれていく。

『……墜おちろ』

　大気圏に触ふれた二機の機体が灼しやく熱ねつし、燃え始める。

『……墜ちろ』

　呪のろいの言葉とともにリベル・レギスの右手が白く燃えた。大気よりも激しく燃える絶対零度の炎でトドメを刺さすつもりなのだ。

『墜おちろ、デモンベイン！』

　振り下ろされる手刀を前に防御陣を展開。必滅の手刀に防御陣を叩きつけることで術を相殺すると、デモンベインはリベル・レギスへと組みついた。

「てめえも道連れだぁぁぁぁぁ！」

　このまま押し潰し、引き千切ってしまうほどの勢いでリベル・レギスの機体を締しめつけるデモンベイン。だが大気が燃える轟ごう音おんの中、耳に届くのは獣けものの嘲ちよう笑しようだった。リベル・レギスの左の掌に光り輝かがやく逆三角形。

『死にABRA雷のHAD洗礼をABRA』

　鷲わしづかみにされたデモンベインの貌かおが爆ばく発はつする。デモンベインの軀からだから力が抜け落ちていくが、それでもなおリベル・レギスを放すことはなかった。嘲笑は凍こおりつき、マスターテリオンとエセルドレーダの絶ぜつ叫きようが轟とどろく。

『貴様ァァァァァァァァァァッ！』

　デモンベインは渾こん身しんの力でリベル・レギスの軀にしがみつく。

「最後まで付き合ってもらうぞ！」

世界が燃えていく中、デモンベインとリベル・レギスは地球の空を翔かける流れ星となった。

+

なにも見えず、なにも聞こえない。無明で無音の世界に九郎はいた。

感じるのはアルの気配と、世界を歪ませるほどの怨おん念ねんを放つリベル・レギスの気配―。

ここに至って九郎は確信していた。

デモンベインはリベル・レギスのいかなる技を食くらったとしても敗れることはないと。理り屈くつではなく実感として感じていた。

だが同時に、リベル・レギスにいかなる技を食らわせたとしても滅ほろぼすことはできないとも感じていた。

互たがいにトドメの一いち撃げきに欠く状じよう況きようである。

もし本当に術がないのだとしたら、未来永えい劫ごう、無限にこの戦いを続けることになるだろう。

だが、唯ゆい一いつの例外がある。

リベル・レギスの存在を否定しつくす窮きゆう極きよくの最終必滅兵器。

輝Shiくningトラ Traペゾ pezoヘドhedロンron□□。

その存在を知覚したとき、戦場は最終血戦場と化した。

闇やみが集つどう。

闇が集う。

闇が集う。

歪ゆがんだ、狂くるった、悶もだえる、異形の闇が集う。

光が集う。

光が集う。

光が集う。

荒あらぶる、吼ほえる、嘲あざ笑わらう、異形の光が集う。

闇の極限に位置する。

光の極限に位置する。

此処ここは異界。在り得てはならぬ世界。

矛む盾じゆんの巣そう窟くつ、世界の綻ほころび、神々の禁きん忌き。

デモンベインの右みぎ掌てのひらより闇の塊かたまりが現出した。

次元を歪ませ、引き裂さきながら、刃やいばのない神しん剣けんが掌より排はい出しゆつされる。デモンベインはシャイニング・トラペゾヘドロンを手に、絶対的な権けん威いを以もつて魔まを裁

く……はずだった。

「なっ！」

　九郎とアルは目を剝むいた。

　デモンベインの真正面に立つリベル・レギスの胸部が開き、その中に潜ひそんでいる機関部をさらけ出す。そしてそこから現出される闇の塊。それが意味するのは―。

『貴女あなたたちだけの奥おう義ぎだと思ってた？　アル・アジフ』

　次元を歪ませ、次元を引き裂き、それは召しよう喚かんされてくる。

　捻ねじ曲がった神柱。狂くるった神樹。刃のない神剣―。

「シャイニング・トラペゾヘドロン！」

『そのとおり。我々の窮きゆう極きよく呪じゆ法ほう兵へい葬そう・シャイニング・トラペゾヘドロンだ。大十字九郎よ』

「何故、汝なれもそれを……!?」

　トラペゾヘドロンは九郎自身も理解していない謎なぞの武器である。それがよりにもよってリベル・レギスも武装していたのだ。それがどのような事態を招くかは想像すらできない。いや、それ以前にトラペゾヘドロンがこの宇宙に二つも存在しているとは思いもしなかった。

　驚きよう愕がくと畏い怖ふに凍りつく九郎たちをせせら笑うかのように、マスターテリオンは語る。

『識しらなかったのか？　識らされてなかったのか？　あいつから』

「あいつ？　……あいつだと？」

　アルが訝いぶかしむ。

『あり得ざる物質。同時に存在しえぬ物質。神々の禁忌。輝くトラ

ペゾヘドロン。永き時の果てに、それは余と貴公の手に渡わたったのだ。何故なら──』

　──何故なら。

　夢む幻げんと現うつし世よの狭はざ間まで事の成り行きを見守っていた異形の女・ナイアがつぶやいた。

　彼女は己おのれの軀からだを抱だきしめると、突つき上げてくる快楽に打ち震ふるえていた。

　宇宙がこの境地へと達したことに歓かん喜きしながら……。

　──それは彼等に封ふう滅めつされた神々の宇宙だから。

　かつて自分を追い詰つめた者。その忌いまわしい記き憶おくに慄おののきながら……。

　デモンベインがシャイニング・トラペゾヘドロンを手に執とる。

　リベル・レギスも鏡写しのようにそれを手に執る。

　両機、まったく同じ構えで対たい峙じ。

『我々の血戦に決着をつけることのできる武装は、これ以外にあり得ぬ。二つのシャイニング・トラペゾヘドロンの衝しよう突とつの果て、余と貴公のいずれかがこの宇宙より拒きよ絶ぜつされる』

「くっ……！」

　九郎は呻うめきながらもトラペゾヘドロンを相手に向け、魔ま法ほう円えんを虚こ空くうに描えがいていく。それはリベル・レギスも同じだ。刹せつ那なの狂いもなく魔法円を描いていく両機。そうすることが本来のやり方だと、なぜか知っているのだ。

　宙に光の痕あとを刻み、魔法円は灼しやく熱ねつを宿して燃焼する。

　──輝かがやくトラペゾヘドロンの衝突。

　──それを成すためだけに君たちはこの無限に囚とらわれていたのさ。

　──九郎君、君は憶おぼえていないだろうがね。

　ナイアは九郎へと語りかける。愛を伝えるかのように熱っぽく、情熱的に。

　だがその言葉に耳をかたむける者はいない。

　大十字九郎とマスターテリオンは互たがいの姿しか目に入ってはいなかった。

　──絶望を識しる魔人と絶望を識らぬ英えい雄ゆう。

　──ヒトの負の極限と正の極限。

　──必要な駒こまはその二つだった。

　それは唯ただの自じ慰い行こう為いであり、女は自ら堕おとした二つの愛あい玩がん具ぐを想おもって恍こう惚こつに酔よう。

　甘く、艶つややかに。

『ようやくだ……。ようやく余よは、この無限の絶望と恐きよう怖ふから解き放たれる……』

　そうつぶやくマスターテリオンの声には、あの狂きよう気きはどこにもなかった。

　あるのは磨すり減へった魂たましいと、その果ての虚きよ無む。

　九郎は初めて、この異形の少年を老人のようだと思った。

　だがそれも一いつ瞬しゆんのことである。

『だが、ただ終わるだけでは足りぬ！　大十字九郎！　アル・アジフ！　永えい劫ごうの刻ときを経て積み上げた我が怨おん念ねん！　おぞましきこの無限！　貴様等に余さずまとめてくれてやろ

う！』

　荒あれ狂くるう憎ぞう悪お。否、それは唯の憎悪の化け身しんである。

　──永かった。本当に永かったよ。

　──千の貌かおから切り離はなしたこの姿と、黒いファラオ、ナイ神父……。

　──ヒトの世界に潜ひそみ、求め続けていた。

　異形の女が見守る中、デモンベインとリベル・レギスは刹那の狂いもなくシャイニング・トラペゾヘドロンの剣けん先さきを突きつけ合う。

　二つのトラペゾヘドロンが共鳴し、反発し、吼ほえた。

　血戦に愉ゆ悦えつして。

　血戦に哀あい哭こくして。

　──二つのトラペゾヘドロンを見つけるまでに千の永劫。

　──しかし、僕には触ふれることはできなかった。

　──連中の創つくった神器だからね。

　──だからトラペゾヘドロンを執る者たちが必要だった。

『さあ。大十字九郎、アル・アジフ。貴公等にも教えてやろう』

『──絶望を』

　マスターテリオンとナコト写本の囁ささやきは、トラペゾヘドロンの咆ほう吼こうが木こ霊だまする宇宙にあってなお鮮せん明めいに届いた。

　──まずは最さい凶きようの魔ま人じん、世界の怨おん敵てき、神を解き放つ鍵かぎ、マスターテリオン。

　──君の完成にはさらに千の永劫を積み重ね……。

「絶望？　知ったことかよ。俺がやるべきことは一つ。マスターテリオン。お前を倒たおす。そして未来に道を拓ひらく。そう、世界に──」

「──希望を」

　九郎とアルの決意は、トラペゾヘドロンの咆吼が木霊する宇宙にあってなお鮮明に響ひびく。

　──そして魔を断つ者、外げ道どうを以もつて外道を狩かる者、神殺しの刃やいば、大十字九郎。

　──君の完成に今、この瞬しゆん間かんまで永劫を積み重ねた！

『笑わせるな』

　リベル・レギスが一歩を踏ふみ出す。

「笑うがいいさ」

　デモンベインが一歩を踏み出す。

「そうやって人間を妬ねたみ続けるがいいわ」

　デモンベインがシャイニング・トラペゾヘドロンを掲かかげる。

『なんて吐はき気を催もよおす偽ぎ善ぜん！』

　リベル・レギスがシャイニング・トラペゾヘドロンを掲げる。

―今こそ二つの輝くトラペゾヘドロンが衝しよう突とつする！

ナイアという容かたちを食い破って排はい出しゆつしてくる異形の闇やみ。

秩ちつ序じよなく悶もだえ狂う闇の正体は、混こん沌とん。

そう。

それは混沌の端たん末まつである。

女の真の姿は……。

そして世界最後の詩うたは、女の立つ世界の狭はざ間ままで届いた。

「荒あらぶる螺ら旋せんに刻まれた

神々の原罪の果ての地で

血ち塗まみれて　磨り減り　朽くち果てた

聖者の路みちの果ての地で

我等は今　聖約を果たす」

トラペゾヘドロンを手に、デモンベインとリベル・レギスが詩に合わせて舞まう。

祭さい壇だんの神み子このごとく、この血戦に捧ささげる剣けん舞ぶ。

それは一分の狂いも乱れもなく。

『其それはまるで御お伽とぎ噺ばなしの様に

眠ねむりをゆるりと蝕むしばむ淡あわき夢

　夜明けと共に消ゆる儚はかなき夢

　されど　その玩具の様な宝の輝かがやきを

　我等は信しん仰こうし　聖約を護まもる』

　詩は術式。舞まいは陣じん。唄うごとに、舞うごとに、新たなる世界の秩序を編み上げ、組み立てる。

　両者の放つ存在力を前に、この血戦のための世界すら歪ゆがんでゆく。

「我は光　夜道を這はう旅人に灯ともす　命の煌きらめき」

『我は闇　重き枷かせとなりて路を奪うばう　死の漆しつ黒こく』

『我は光　眸ひとみを灼やく己を灼く世界を灼く熾し烈れつと憎ぞう悪お』

「我は闇　染まらぬ揺ゆるがぬ迷わぬ不変と愛」

「愛は苦く　烈はげしく　我を苛さいなむ」

『憎にくしみは甘く　重く　我を蝕む』

「其れは善」

『其れは悪』

『其れは享きよう受じゆ』

「其れは拒きよ絶ぜつ」

　其れは　純潔な　醜しゆう悪あくな　交配の儀ぎ式しき

　結ばれるまま融とけ合うままに産み落とす

堕だ胎たいされる　出で来き損そこないの世界の──

九郎とアル、マスターテリオンとエセルドレーダの声が重なり合う。

+

アルは唄い、舞いながら、違い和わ感かんと焦しよう燥そう感かんに囚とらわれていた。

なにに対して焦あせりを感じているのかは定かではなかったが、記き憶おくの奥底から慟どう哭こくにも似た警告が放たれているような、そんな感じである。

なにかに気づかなければならない。それだけは確かだ。だからこそアルは激しい焦燥感に襲おそわれていたのである。そしてそれに気づかなければすべてが手て遅おくれになる。今、この時を除いて救いへの光明はなかった。

だが、それがなにか判わからない。

思い出せない。

何者かがその記憶を禁きん忌きとして鍵かぎでもかけたかのようだった。

──検けん閲えつされているのだ。

不意に聞き覚えのある声が脳のう裏りを過よぎっていく。

（思い出せ！　思い出せ、アル・アジフ！）

アルは焦りながらも慎しん重ちように記憶の糸を手た繰ぐり寄せ

ていく。

（なんとしても、なんとしても彼奴きやつの思い通りにさせてはいけない！）

　九郎を救えるのは自分だけなのだという思いが、彼女を焦じらせ、蝕んでいく。

（妾わらわは……妾は……）

　頭痛とも閃ひらめきとも取れる思考の片へん鱗りんが、アルの脳内を通り過ぎていく。

　その瞬しゆん間かんに対たい峙じするとき、

　正しく真実にたどり着つかなければならない。

＋

　血戦の儀式はクライマックスへと差しかかっていた。

　二つのトラペゾヘドロンの―デモンベインとリベル・レギスの魔ま力りよくは限界にまで膨ふくれ上がり、収まりきらなくなったものが機体の接合部から染しみ出してくる。あとはそれを爆ばく発はつさせ、相手へと叩たたきつけるだけだった。そこに小細工や計算は一いつ切さい存在しない。

『その深き昏くらき怨おん讐しゆうを胸に』

「その切実なる命の叫さけびを胸に」

　舞いが止まる。

　二機の鬼デウ械ス・神マキナは、手にしたトラペゾヘドロンの剣けん先さきを突つきつけ合う体勢で静止。

『埋まい葬そうの華はなに誓ちかって』

「祝福の華に誓って」

　最後の口上が紡つむがれていく。

　──我は世界を紡ぐ者なり！

　デモンベインとリベル・レギスが同時に駆かけ出した。

+

　リベル・レギスへと向かってトラペゾヘドロンを振ふり下ろそうとした瞬間である。

「────ッ！」

　アルは記憶の錠じようが外され、検閲されていた最後の記述が蘇よみがえるのを感じていた。それは彼女の著者であるアブドゥル・アルハザードが我わが身を蝕むしばむ狂きよう気きの中、最後の力を振り絞しぼり書き遺のこした、世界に訴うつたえる必死の警告。ありったけの人間の叫びだった。

　そして今、この瞬間を以て、魔ま導どう書しよ【アル・アジフ】は真に完全となる。

（すべては予あらかじめ仕組まれたこと。すべてはあの女の……）

　──はははははははははははははははははは！

　異形の女の哄こう笑しようが聞こえてくる。

　この遠大な茶番を演出した、あの女の嬌きよう笑しようが──。

「撃うつなァァァァァァ！　九郎――――――ッ！　すべては邪じや神しんの謀ぼう略りやくだっ！」

+

　アルの絶ぜつ叫きようがコックピットに木こ霊だまする。

「なっ――！」

　シャイニング・トラペゾヘドロンを撃つことに全精力を傾かたむけていた九郎にとって、アルの叫びはあまりにも意外で唐とう突とつすぎた。

　渾こん身しんの力をこめて突き出されたそれを渾身の力を以てねじ曲げようとするが、今さら勢いを止めることなどできはしない。

　突き出された二つのシャイニング・トラペゾヘドロンが交差する。重なり合った二振りの神しん剣けんの切っ先から、荒あれ狂くるう光と闇やみが噴ふき出した。

　光の手。

　闇の手。

　闇の手。

　光の手。

　互たがいの世界を蹂じゆう躙りんするため、激しい攻こう防ぼうを繰くり広げる。

　相手の世界を引き裂さき、自らの世界を侵しん食しよくさせれば

　其その世界を飲みこみ逆転させ、逆に侵食する。

　其の世界を爆ばく砕さいし、自らの世界を侵食させ

　其の世界を腐ふ敗はいし、自らの世界を侵食させ

　其の世界を燃焼し、自らの世界を侵食させ

　其の世界を凍とう結けつし、自らの世界を侵食させ

　其の世界を崩くずし、自らの世界を侵食させ

　其の世界を呪のろい、自らの世界を侵食させ

　其の世界を貪むさぼり、自らの世界を侵食させ

　其の世界を抉えぐり、自らの世界を侵食させ

　其の世界を貫つらぬき、自らの世界を侵食させ

　其の世界を犯おかし、自らの世界を侵食させ

　其の世界を嬲なぶり、自らの世界を侵食させ

　其の世界を辱はずかしめ、自らの世界を侵食させ

　其の世界を堕おとし、自らの世界を侵食させ

　其の世界を抱だいて、自らの世界を侵食させ

　この領域で幾いく億おくの世界を創造し、殺さつ戮りくする。

　その果てに両者のシャイニング・トラペゾヘドロンが罅ひび割われた。

　そして九郎は知る。シャイニング・トラペゾヘドロンに封ふうぜられた邪じゃ悪あくの存在を。

『言っただろう？　絶望を教えてやるとな』

　マスターテリオンは氷のような冷たい声でつぶやいた。

『結末など判わかりきっていたことなのだよ』

「なんだとっ！」

『そんなことも識しらずに安あん穏のんと……。愉ゆ快かいね。そ

の魂たましいが引き裂かれる様を見届けるのは！』

「おのれ……！」

　結末が決まっていたのだとしたら―。もしそれが真実だとするならば、ここに至る道のりのすべてを全否定されたのも同然だった。

（俺とアルの出で逢あいも、デモンベインを駆ってブラックロッジと戦うことになったのも……。決められたレールの上に乗っていたにすぎないのか!?）

『そう！　すべては―！』

　―すべては。

　宇宙の生誕と死し滅めつ。

　その狭はざ間またるこの血戦場を引き裂いて、混こん沌とんの闇をまとう女が現出する。

　女の姿をしたその異形は、交差するシャイニング・トラペゾヘドロンの上に舞まい下りてきた。

　九郎はその人ひと形がたの異形を知っていた。胸むな元もとが盛大に開いたスーツを身にまとった長ちよう身しん痩そう軀くのその女は、以前、アーカムシティの古書店で出逢ったあの人物である。

「ナイア……」

　呆ぼう然ぜんとつぶやく九郎に対し、アルは即そく座ざに否定する。

「否！　此こ奴やつは……！　そうか。すべては此奴が……」

　アルが驚きよう愕がくする中、その女は本ほん性しようを現した。

―すべては、このナイアルラトホテップの意のままに。

千の異形。

無む貌ぼうの神。

這はい寄る混沌。

外なる神・ナイアルラトホテップ。

―宇宙よ、今こそ……在るべき姿に！

宇宙は、混沌に、沈しずんだ。

+

なにもない空間に九郎は存在していた。

光はおろか闇やみすら感じられない。

生きているのか死んでいるのかさえも判然とせず、思考を試みている自分自身の存在すらあやふやだった。だが同時に満たされてもいる。ありとあらゆるものの存在を感じ、完全な世界として認にん識しきすることができた。

虚きよ無むでありながら完全でもある世界。

そんな世界で九郎は落ちているのか浮うかんでいるのかも判わからないまま、手がかりを求めて手を伸のばしていた。だが指先に触ふれるものはなく、だが同時にどこまでも届いてしまう。なにかを求めて目をこらすが、光も闇も見えず、だが同時に世界の果てまでも見通していた。

世界と自己とを隔へだてる壁かべが存在せず、酷ひどく曖あい昧まいだった。自我を強く保たねば世界の中に融とけてしまうだろう。

不意に触れるはずのない指先が柔やわらかななにかをつかんだ。なにものも見えるはずのない目が光を遮さえぎる影かげを見る。それは肉の柔らかさを持ち、女のシルエットを光の中に象かたどっていた。

急速に世界が結けつ晶しようする。黒い太陽と紅あかい月が昇のぼる澱よどんだ空。静せい寂じやくを運び、死の臭においを孕はらむ風。地平の先までも広がる廃はい墟きよ。それは古代遺い跡せきにも似た景色ではあるが、見覚えのある懐なつかしい光景だった。アーカムシティの黄昏たそがれの姿である。人の気配は感じられない。生きとし生けるものすべてが死に絶えているようだ。

九郎はうずたかく積まれた瓦が礫れきの上で―墓標のごとく突つき出した鉄骨の下で寝ね転ころがっていた。衣服は身につけていない。全ぜん裸らである。そんな九郎の上には裸ら婦ふがまたがって

おり、魅み入いられてしまいそうなほどの艶つややかな眸ひとみで彼を見下ろしていた。

「やあ、九郎君」

　脳のう髄ずいを冒おかすほどの鮮せん烈れつな声が響ひびき渡わたる。

「ナイア……」

　いや、そもそも彼女はナイアという名前でもなければ女性でもない。

「……ナイアルラトホテップ」

　その名を口にした途と端たん、女の容かたちが崩くずれ、闇色の混沌が排はい出しゆつされる。その闇の中、爛らん々らんと輝かがやく眸が九郎を捉とらえていた。

「そう。それが僕の本当の名だ。九郎君、永いこと御ご苦労だったね」

「……なんのことだ？」

「君はね、この前も、そのさらに前も、そのさらに前も、マスターテリオンと戦っていたんだよ。前回の九郎君──そう。あのときは確か覇道鋼造と名乗っていたかな？　とにかく、前回まではマスターテリオンに及およびもしなかったけどね」

「……覇道、鋼造だと？」

　だがそう考えると、今まで起きたすべての出来事も納なつ得とくできるような気がした。繰くり返された出会いや別れ、事象の数々は意識せぬところで魂たましいに刻みこまれ、それとなく影えい響きようを与あたえてきた可能性がある。初めて瑠璃と出で逢あった際に懐かしさを覚えたのも、前回の自分が覇道鋼造として彼女と深くかかわっていたと考えれば合点がいく。ミスカトニック大学の件もそうだ。覇道鋼造が次の自分に未来を託たくすため、『あしながおじさん』としてかかわった可能性だってあった。すべては起こるべくして起きた出来事だと言えるのである。怨おん敵てきだと信じていたマスターテリオンでさえ、ただの駒こまの一つでしかなかったのだ。そしてその事実を知っていたからこそ彼は疲つかれ果てて

いたのだろう。マスターテリオンにとっては世界がどうなろうと知ったことではなかったはずだ。この永えい劫ごうとも思えるほどの繰り返しの中で、ひたすら終わることのみを切望していたに違ちがいない。彼もまた被ひ害がい者しやだったのである。

　ナイアルラトホテップは続ける。

「輝くトラペゾヘドロン。それを執とるに相応ふさわしい器うつわになるため、君は戦い続けていた。僕の掌てのひらの上でね」

「シャイニング・トラペゾヘドロン……あれはいったい……？」

「連中の神器さ」

　ナイアルラトホテップは、さらに続ける。

「トラペゾヘドロンには僕たち邪じや神しんが生きる、おぞましいほどの邪じや悪あくに満ちた、限りなく美しい宇宙が封ふうぜられていた。連中に敗れて引き裂さかれてしまった本来の宇宙がね……。あれに射い抜ぬかれた者が引きずりこまれる異界の正体がそれだ。九郎君。君がティベリウスを異界へと叩たたき落としたように、僕たちがいた宇宙もああやって断絶されたんだよ。そして二本の神しん剣けんに封ぜられた」

「じゃあ、お前の本当の目的は……」

「もちろん、トラペゾヘドロンを破は壊かいすることさ。そして僕たちの宇宙を、アザトースの庭を解き放つ。人類を圧あつ倒とうする観測者たる僕たちは、君たちの宇宙を僕たちが望む容かたちに変えるだろう。そして三さん千ぜん大だい千せん世せ界かいは遍あまねく僕たちのものとなる。連中の存在など跡あと形かたもなく歴史から否定しつくしてやるさ」

「……神様ともあろうものが、連中ってやつを随ずい分ぶんと恐おそれてるじゃねえか。トラペゾヘドロンなんか、さっさと自分の手でぶち壊こわせばよかっただろ」

　現状での精せい一いつ杯ぱいの毒を吐はくと、混こん沌とんの闇が嗤わらった。

「それは僕には無理だ。トラペゾヘドロンは連中が造り出した神器だからね。僕には触れることすらかなわない。だから――」

「だから俺たちを使った」

「そう。ヒトという種の正の極限である君と、負の極限であるマスターテリオン。その二人が放つ相反するトラペゾヘドロンのエネルギー。その衝しよう突とつこそが神器たるトラペゾヘドロンを破壊する唯ゆい一いつの方法だった……。ありがとう、九郎君。君のおかげで僕は悲願を達成できる」

「そうやって、すべてを自分の思いどおりにできると思っているんだな。クソッタレが」

　艶えん然ぜんと嗤う混沌は再び女の容に納まった。

「そうつれなくするなよ、九郎君。確かに君は手て駒ごまだったけど、気に入っていたのは事実。僕は君を愛しているのさ。ただ、こんな愛し方しかできないだけで……」

　ナイアは九郎に顔を寄せると、紅く濡ぬれた舌先を彼の首筋に這はわせた。おぞましいほどの快楽が怒ど濤とうのごとく押し寄せてくる中、女の姿を模した異形は九郎の耳みみ朶たぶを噛かむ。

「すべては終わったんだ。後はただ、君のことを愛し続けよう」

　うっとりとした表情で、ナイアは九郎の体を貪むさぼり続ける。

「マスターテリオンも……こうやって無限の中に捉えたのかっ」

「彼は解放してあげるさ。あの子は無限に疲れ果てていたからね。無限から解き放たれ、何ど処こに堕おちるか知らないけど、あの子が望むのなら仕方がない。でも……」

　女は舌を離はなし、九郎を見つめる。

「それじゃあ僕が寂さびしいじゃないか。だから九郎君。今度は君が僕を慰なぐさめてくれ。僕は君に果てのない快楽をあげよう。それは永遠。死すら終しゆう焉えんを迎むかえる永遠。狂くるうことも、壊れることも、好きなだけできる。だから際限なく、一片の慈じ悲ひもなく、君を愛する。九郎君。それが愛を交かわすってことなんだよ。さあ、この快楽を共に……」

　再びナイアが顔を寄せ、麻ま薬やくにも似た淫いん靡びな言葉を吐き出した。強ごう引いんに引き出される凶きよう悪あくなまでの

快楽―。だが九郎はそれに身を任せたりはしない。その代わりに、彼は右手に顕けん現げんさせたバルザイの偃えん月げつ刀とうでナイアの胸を刺さし貫つらぬいていた。

「なっ……。九郎？」

「悪わりィな、ナイアさん。俺、あんたのことは嫌きらいじゃなかったけど……」

　九郎は口こう端たんを吊つり上げ、不適なまでの笑えみを浮うかべる。

（あいつの存在が胸の奥で燃焼している限り、俺に敗北などありえない！）

　絶望の淵ふちにありながら闘とう志しを失ってはいなかった。絶望を理解しながらも、絶望に屈くつする理由を一つとして見つけられなかったからだ。

「どうも俺、やっぱロリコンだったみたいでさ。あいつの綺き麗れいな体を知っちまってる以上、てめぇなんざ汚きたなすぎて抱だく気にもならねえんだよ！　このババアがっ！」

　九郎の体を魔ま導どう書しよで編まれた黒いボディスーツが覆おおっていく。それと同時にバルザイの偃月刀を通してナイアの中に魔ま力りよくを叩きこんだ。九郎の上でナイアの体が紅ぐ蓮れんの炎ほのおに包まれていく。

「大十字九郎ッッッッ！」

　ナイアは体を焼かれながらも、その爛ただれた体でつかみかかってきた。

「人間を侮あなどっちゃいけねえな！　解わかったかい？　カ・ミ・サ・マよぉぉぉぉぉ！」

　九郎はニヤリとすると、左手に自ク動ト式ウ拳グ銃アを召しよう喚かんし、その銃じゆう口こうを彼女の頭に突つきつけて引き金を引いた。爆ばく音おんのごとき銃じゆう声せいとともにナイアの頭は粉こな微み塵じんに吹ふき飛んでいく。

　それとともに絶望の世界は鏡のように罅ひび割われて砕くだけ

散った。

+

　偽いつわりの無限から帰き還かんした九郎は閉とざしていた瞼まぶたをゆっくりと開いた。

　デモンベインとリベル・レギスはシャイニング・トラペゾヘドロンを交差させた状態で静止しており、その上には闇やみをまとう異形の女・ナイアが佇たたずんでいる。

　一度は混沌に沈しずんだはずの宇宙だが、状じよう況きようは先ほどと何ら変わらない。驚きよう愕がくし、狼ろう狽ばいするナイアと、すべてを知った九郎を除いては―。

「侵おかされていたんだ。犯おかされていたんだ。冒おかされていたんだ」

　九郎は静かに口を開く。

「為なす術すべもなく邪じや悪あくに貪られていた。理り不ふ尽じんに、無意味に、ただ凌りよう辱じよくされていた。未来に繋つながることなく殺され続けていた」

「……九郎？」

　アルの問いには答えずに続ける。

「それは子供の明日を奪うばわれた母親の嘆なげき。それは子供の明日を護まもれなかった父親の怒いかり。それは穢けがされ続けてきた世界の、無力な憎にくしみ。だけど―」

　九郎は遥はるか過去を見つめていた。

『なにを……なにを喋しやべっている!?　大十字九郎ッッ！』

　そして未来を見つめている。

「それでも、それは怨えん嗟さじゃないんだ！　それは正しき怒り

と憎ぞう悪お。涙なみだを流し、血を流し、それでも歩くことを止やめない、いつしか希望へたどり着こうという熾し烈れつな命の叫さけび！　すべての怒りと憎悪を清め、我わが子に未来を遺のこしたいと願う親たちの優やさしき祈いのり！」

　九郎の瞳ひとみが決戦場を捉とらえた。シャイニング・トラペゾヘドロンを交えたままデモンベインとリベル・レギスは静止している。罅割れ、互たがいに侵しん食しよくし合っていたそれも動きを止めていた。

『な……なんだ……？』

『これは……なんなの……？』

「トラペゾヘドロンが……！」

　交差されていたトラペゾヘドロンが容かたちを崩くずし始める。

　──な……な……なにをしたぁぁぁぁぁぁ！　大十字九郎ッ！

　トラペゾヘドロンの上で絶ぜつ叫きようするナイア。

「トラペゾヘドロンのエネルギーを……取りこんでいるのか……！」

　アルが呆ぼう然ぜんとつぶやく。

『あり得るはずがない……！』

『人間如ごときにそんな真似まねが……』

　──そんな真似ができるはずがないだろう!?

　九郎は静かに首を横に振ふる。

「人間だからできるのさ」

　断言すると、九郎は隣となりへと目を向ける。気がつけば寄り添そうように立つパートナーの姿がそこにあった。

「……アル」

「……九郎」

「側そばにいてくれ。お前と一いつ緒しよなら……なんだってできる！」

　九郎はアルの瞳を真っ直すぐ見み据すえ、彼女は首を縦に振って応こたえた。

　トラペゾヘドロンから溢あふれ出ているものは、もはや邪悪の宇宙ではない。どこまでも穏おだやかで暖かな光だった。

　光が世界を包みこんでいく。それはリベル・レギスが手にしたトラペゾヘドロンへと絡からまり、結びついていった。

『トラペゾヘドロンが……』

『融ゆう合ごうしてゆく……』

　リベル・レギスの手からトラペゾヘドロンが離はなれ、融合して一つとなった神しん剣けんがデモンベインへと渡わたった。デモンベインの全長を凌りよう駕がするほどの巨きよ大だいな神剣は、体の一部だと言わんばかりに軽かろやかに動いた。振り下ろし、横に薙なぎ、軽やかな剣けん舞ぶを披ひ露ろうしたあと、樹きのように天と地を指した状態で静止する。

　―識しらない。

　九く郎ろうとアルは頷うなずき合うと、互いの掌てのひらを重ね合わせる。

「祈りの空より来たりて

　切なる叫びを胸に

　我等は明日への路みちを拓ひらく」

　二人の掌は一度左右に離れ、互いの腕うでを交差させながら斜ななめ下へ。そして対角線に沿って斜め上へと向かった手は、お互いを求め合うように再び重なり合った。

　──識らないぞ、僕は！　こんな結末は識らない！

　二人の掌がたどった軌き跡せきが宙に光の筋を創つくる。それはデモンベインが執とるシャイニング・トラペゾヘドロンに転写し、デモンベインを包みこむ魔ま法ほう陣じんと化して広がっていく。

『五ご芒ぼう星せい……』

『旧神の紋もん章しよう！』

　──馬ば鹿かな！　あり得ない！

　──ここは僕が創ったクラインの壺つぼだ！

　──連中からの介かい入にゆうがあるはずがない！

　──真ま逆さか!?

　トラペゾヘドロンから溢れ出す超ちよう大だいな魔ま力りよく。それは今までにないほどに爆ばく発はつ的で強大なエネルギーだった。デモンベインですらその力に耐たえ切れず、機体はゆっくりと光に熔とけてゆく。

　だが不安はない。今、無限の絶望を撃うち砕くだこうとするこの力はどこまでも優しかった。

なぜなら、それは滅ほろびの力ではなく命の力である。

断絶し、拒きよ絶ぜつする力ではなく、享きよう受じゆし、創造する力。

そう。炎ほのおの中から新たな命が芽め吹ぶくように―。

「汝なんじ、無む垢くなる翼つばさ―デモンベイン」

そしてデモンベインは光こう輝きとなった。

振り下ろされたシャイニング・トラペゾヘドロンから、おびただしい量の光が溢れ出した。

その一いち撃げきを前に、なぜかマスターテリオンの心に焦あせりはなかった。それどころか惚ほうけたような面つらを晒さらしながら暖かく穏やかな光を見つめている。

「マスタァァァァァァァー！」

エセルドレーダが絶望的な悲鳴を撒まき散らしながら術式を展開している。

リベル・レギスの前に幾いく重えにも張り巡めぐらされた魔ま法ほう障しよう壁へきが現出し、光の洪こう水ずいから機体と主人を守り抜ぬこうとしていた。

だが死力を尽つくして張った障壁も、光を阻はばむどころか素す通どおりとなる。

熔けてゆく。融とけていく―。

最強の鬼デウ械ス・神マキナが、ヒトの邪じゃ悪あくの結けつ晶しようが、ようやく安らぎを得ようとしていた。

「させるか……させるか……！　マスターを……マスターを滅ぼさせてなるものか……！」

エセルドレーダは大おお粒つぶの涙なみだをボロボロと零こぼしながら抵てい抗こうを続けていた。

「……人間」

　マスターテリオンがつぶやくなか、リベル・レギスの全出力が落ちた。眸ひとみから光が消え失うせ、紅くれないの鬼械神が静かに眠ねむりに就つく。

「マスター！」

　エセルドレーダは沈ちん黙もくしてしまったリベル・レギスを動かそうと、必死の抵抗を試みている。

　そんな彼女に対し、マスターテリオンは静かに語りかけた。

「もう良い。大たい儀ぎであった。エセルドレーダ」

「そんな……。マスター！　マスター！」

　マスターテリオンは手で制し、さらに続ける。

「考えてもみよ。たとえデモンベインに絶望を刻み、我等が解き放たれたところで……宇宙は何ど処こまでも絶望の海。ならばこの優やさしき光に散ったとすれば、まだしも救いが――」

　一ひと際きわ、眩まばゆい光が少年を包みこんでいく。

　少年はその向こう側に愛いとしい誰だれかを見た気がした。

　しかしそれが誰であるかも判わからぬうちに、世界は白く塗ぬりつぶされていく。

「マスタァァァァァァァァァァァ！」

　エセルドレーダの悲しき悲鳴を耳にしながら、マスターテリオンの意識は消え失うせていった。

　混こん沌とんの女もまた、シャイニング・トラペゾヘドロンが生み出した光に抗あらがう術すべを持ち合わせてはいなかった。

　――真逆……。

　――君も同じだったのか？

　――だとしたら、僕は知らずに自ら巨きよ大だいな運命の輪に囚と

らわれて……。

　どこかから扉とびらが閉じる音が聞こえてきた。

エピローグ

世界最後の詩——我等は神話を紡ぐ者なり

　かくして、かくも壮そう大だいな狂きよう騒そう劇げきは、されど誰にも知られることなく静かに幕を下ろす。

　訪おとずれる結末は二つ。恐きよう怖ふの化け身しんとしてしか生きる術すべを持たなかった哀あわれな獣けものに訪れる結末と、お人よしの青年に訪れる結末である。

　まずは獣の末路から──。

　深遠。

　深しん淵えん。

　果てなく限りない星々の海。

　静かに煌きらめく雄ゆう大だいな天あまの河かわを少年は眺ながめていた。

　この宇宙は──この宇宙の裏側に潜ひそむ怪かい異いは、永えい劫ごうに亘わたって彼を怯おびえさせてきた。

　だが、その恐怖も今はない。

（余よは……）

　生死すら判然としないが、そのようなことはさしたる興味もなかった。

　ただ確かなこともある。彼を捉とらえ続けていた恐怖が終わったということだ。

　その事実だけが少年のすべてだった。

　それ以外、なんの必要もなかった。

だからこそ、ただ黙だまって星々に見み惚とれている。

その行こう為いに意味などないが、それ以外にすることもない。

ただそうしているだけで安らげた。

「……綺き麗れいだな」

思わず零こぼれ落ちた言葉に少年はハッとする。彼は生まれて初めて世界を美しいと感じていた。

それはあまりにも遅おそすぎた、ごく当たり前の感動。

少年はようやく、それを手にする権利を得た。

世界に魅み入いられながら、ふと思う。

これから自分はどうなるのだろうかと。

（このまま星を眺めながら過ごすのだろうか……）

それも良かった。

もはや彼を脅おびやかすものはなにもない。

時か世界か、それとも少年の魂たましいか──。

そのいずれかが朽くちるまで、この平へい穏おんは続く。

だとしたら拒こばむ道理はなかった。

（いつまでも、いつまでも、こうやって宇宙を漂ただよい……自らも星となろう）

ただ独り、孤こ高こうの輝かがやきを放ちながら。

「いえ、独りではありません」

少年を優やさしく包みこむ澄すんだ少女の声──。

孤こ独どくであるはずの宇宙に彼女は存在していた。

少年の金色の瞳ひとみが少女の漆しつ黒こくの瞳を覗のぞきこ

む。

　少年は少女の名を呼んだ。

「エセルドレーダ……。お前も来ていたのか」

　少女は少年に微笑ほほえみかける。深淵にも似た瞳に涙なみだを浮うかべながら、それでもなお少年を傷つけないように、優しく、優しく。

「イエス、マスター。私がマスターを独りにするはずがありません」

　マスターテリオンは不思議そうに少女を見つめる。

　そして思い返す。常に自分の傍かたわらに寄り添そっていた少女のことを。

　あの無限の絶望の中にあって、それでもそれだけではなかったことに、少年は今さらながらに気がついた。

　少年は少女に微笑み返す。それは狂きよう気きなど微み塵じんも存在しない、真に穏おだやかな微笑みだった。

　少年は生まれて初めて心の底から微笑んだ。

　──それはあまりにも遅すぎた、ごく当たり前の微び笑しよう。

「そうだな……。独りでいるには此処ここは少し寒い。側そばにいてくれるか？　エセルドレーダ」

「……はい」

　少女の瞳から涙が零れ落ちる。

　涙を宇宙に輝かせて、少女は少年の胸に飛びこんだ。

　二人は固く、強く抱だき合った。

　二度と離はなれぬように。

　互たがいを護まもるかのように──。

「いつまでもいつまでも此処で世界を見つめ続けましょう。なにも壊こわさず、誰だれも傷つけず、生き足あ掻がく命たちを笑いながら、憬あこがれながら、この永遠を過ごしましょう。それだけが――」

「ああ、それだけが……それだけが僕たちに赦ゆるされた救いなんだね、エセルドレーダ」

永えい劫ごうに続いた絶望の果てに、少年はようやく愛を知った。

――それはあまりにも遅すぎた、当たり前の命の在り方。

そしてもう一人。否いや、もう二人。

深遠。

深淵。

果てなく限りない星々の海。

静かに煌きらめく雄大な天の河を、九郎とアルは寄り添いながら飽あくことなく見つめていた。

「……綺き麗れいだな」

「ああ、そうだな」

たわいのない会話だが、当たり前のことを確かく認にんする作業が九郎には堪たまらなく嬉うれしい。

（しかし……。よくもまあ今の今まで弱音の一つも吐はかずに付き合ってくれたもんだな）

九郎はデモンベインの機体に手を添える。

デモンベインの損傷は激しく、しかも見事なまでに魔ま力りよくは枯こ渇かつしていた。もはやデモンベインはウンともスンとも言わず、身動きの取りようがなかったのである。

（お疲つかれ様、デモンベイン）

　心からそう思う一方で、ふと気になることを思い出した。

（で。俺たち、どうなっちまうんだろう？）

　マスターテリオンとの最終決戦のあと、デモンベインはこの宇宙へ放ほうり投げ出されていた。

ここがどこで、いつの時代の宇宙なのかは判わからない。判ったところで、どうなるというものでもない。

（つーことは、このまま座して死を待つだけか？）

　だが、それはないだろうとも九郎は考えていた。なんとなくではあるが、生死を超こえた領域へとたどり着いてしまったという実感があった。

（つまり未来永劫、俺たちは星の海を漂い続けるわけか……）

　だが、それも良いと思う。

　九郎はアルへと目を向けると、彼女の頭をクシャクシャになでた。

「な、なんだ、いきなり！　人の頭を乱暴に……！」

　抗こう議ぎするアルに対し、九郎は笑いかける。

「いや、なに。こう……いい子いい子してやろうと思ってな」

「子供扱あつかいするな！　実際にも精神的にも、汝のほうがよっぽど餓が鬼きだ！」

　声を押し殺しながら笑う九郎に対し、アルはそっぽを向いた。

　そう。九郎の側にはアルがいた。それ以上、求めるものなどありはしないのだ。

（十分だ。俺はバチが当たりそうなくらい幸せ者だ）

　九郎はアルの小さな体をそっと引き寄せ、そして抱きしめた。

アルは少し驚おどろき、戸と惑まどったような表情を見せていたが、すぐに九郎の体に身を委ゆだねた。

そうやって二人はしばし抱き合っていたが、不意に沈ちん黙もくが破られる。

「九郎、汝は……」

神しん妙みような顔で語りかけてくるアル。だが九郎は彼女が言わんとしていることを承知していた。

心を結んだ彼女のことである。口になどせずとも理解できた。

九郎は彼女の機先を制して答えた。

「いいんだよ。二人で過ごす永遠だ。なんにも怖おそれることなんかないじゃないか。だって俺は―。アルが大好きだから」

誰が見ているわけでもなかったが、九郎は少し照れながらその言葉を口にした。

「……ありがとう」

アルは心の底から嬉しそうな表情をしていた。

「しかし……今回はさすがにしんどかったな」

極限すら超えてしまうほどの緊きん張ちよう感かんを強しいられてきたのである。今さらだが体が疲ひ労ろう感かんを訴うつたえかけてきた。そしてそれに気づいた途と端たん、九郎は猛もう烈れつな眠ねむ気けに襲おそわれた。瞼まぶたがやけに重い。

「ちょっとだけ眠ねむるわ。アルも眠ったほうがいいぞ。どうせ腐くさるほど時間があるんだからな」

「ああ。汝の寝ね顔がおを見届けてからな」

「……んなもん見て、なにが楽しいよ」

九郎が問うと、アルはくすりと笑う。

「邪じゃ神しんすら退しりぞけた男が無防備な姿を晒さらして眠りこけるのだぞ。なんとなく嬉しいではないか」

「ふん。アホ面づらを笑いたいだけだろうに」

「迂う闊かつなことを寝ね言ごとで言うなよ？」

「ケッ。まあ、いいや……。じゃ、おやすみな……」

　心が充じゆう足そく感かんで満たされているせいか、意識は速すみやかに遠ざかっていく。

　アルの深い深い翡ひ翠すい色の瞳ひとみに見つめられながら、九郎は眠りへと落ちていった。

　次に目覚めたときも、側そばに彼女がいる幸せを感じながら──。

+

　眠りに就ついた九郎の寝顔を眺ながめながら、アルは穏おだやかに微笑ほほえんだ。

　なんの憂うれいもない幸せな寝顔を見つめているだけで、彼女の心は満たされる。

（どのような夢を見ているのであろう？）

　そこに自分がいるのであれば、どんなにか幸せなことだろう。

　規則的に漏もれる呼吸音を心ここ地ちよく感じながら、アルは九郎の髪かみをそっとなでた。

（確かにこの男とな ら、如い何かなる永遠も苦痛たりえぬだろう）

　ただ愛する男が側にいるだけで少女は満たされる。千年を超える戦いの中を生きてきた彼女にとって、こんなにも穏やかな永遠は完全な幸福であり、約束された楽園だった。

（いつまでも……こうして抱だき合っていられる）

　それは極ごく上じようの幸せであり、それほどまでに少女は大十字九郎を愛していた。

だからこそ自問する。

本当に、これでいいのかと―。

悠ゆう久きゆうを生きる自分の幸福に、この男を巻きこんでもいいのかと。

ヒトはヒトの世界で生きるべきではないのかと。

（九郎を永遠の庭に閉じこめる……。そんなことを赦ゆるしてもよいものなのか？）

アルの頬ほおを涙なみだが伝っていく。

漏れそうになる嗚お咽えつを必死に堪こらえながら、九郎の眠りを妨さまたげないようにそっと頬を濡ぬらす。

（たとえ赦されぬことだとしても……。別れることなど……できぬ）

少女が九郎に抱いた愛は―九郎が少女に与あたえた愛は―少女を強くし、同時に弱くもした。

もはや独りで永えい劫ごうを生きるための嘘うそを少女は持ち合わせてはいない。虚うつろであるが故に強固でもあった嘘の力は失われていた。

少女は片かた翼よくの鳥。つがいでなくては空を翔とべない……。

たとえ九郎が片翼でないとしても。

いつでも自分を置いて空を飛ぶことができるのだとしても―。

ならば彼の翼つばさをもぎ、自分の下もとから逃にげられるようにしなければならない。

（―妾わらわは枷かせだ）

大おお粒つぶの涙がひっきりなしに頬を伝っていく。

「……すまない……九郎……赦して……赦して、くれ……九郎……九郎……」

少女は繰くり返し繰り返し、何度も何度も赦しを乞こうた。

だがそれは無意味なことだ。九郎は少女を責めたりはしない。ただいつもどおり、なんの曇くもりもない笑え顔がおで──少女を幸せに満たす笑顔で、ただただ彼女を抱きしめるだけだろう。

誰だれからも責められることの無い罪。故に、誰からも赦されることのない罪。

存在し得ぬ罪に、少女の心は施せ錠じようされる。

己おのが業ごうの深さに慄おののき、少女は泣いた。

幸福の牢ろう獄ごくで少女は泣いた。

+

──喩たとえ噺ばなしをしよう。

反応炉ろの中の宇宙。

試験管の中の宇宙。

ガムの包装紙にくるまれた宇宙。

宇宙の外に宇宙が広がっていると云いうお話。

宇宙の内に宇宙が広がっていると云うお話。

永劫を飲みこんだ刹せつ那なのお話。

無限大を閉じこめた極ごく細さい塵じんのお話。

宇宙の外に広がる宇宙の、

宇宙の外に広がる宇宙の外に広がる宇宙の、

宇宙の外に広がる宇宙の外に広がる宇宙の外に広がる宇宙の、

宇宙の外に広がる宇宙の外に広がる宇宙の外に広がる宇宙の外に広がる宇宙の外に広がる宇宙の……

無限に連なる宇宙のお話。

すべては無限でありながら零ゼロであると云うお話だ。

無限と零が溶とけ合って、輪りん廻ねの蛇へびが腐り堕おちて、煮にえ滾たぎる混こん沌とんのスープを造るのだ。

すべては泡うた沫かた。

万物の王様が盲もう目もくにして零知の神様が見る泡沫の夢。

微睡まどろみに浮うかぶ一いつ瞬しゆんの夢だ。

覚かく醒せいすれば、終わる。

終わりとも知れず、ただ消える。

むしろ最初から存在しないだけのことか。

ならば世界は何処までも、ただただ虚ろなだけなのだろうか。

これは喩え噺なのだが―。

そうは想おもわない存在はいたらしい。

+

光。

眠ねむりの闇やみも、瞼まぶたの裏の闇さえも貫つらぬいて、圧あつ倒とう的な光の気配が感じられた。

覚醒した九郎は、そっと瞳ひとみを開ける。

闇。

どこまでも眩まばゆい白い闇。

激しい闇。

それは自分の体すら見失ってしまうほどであり、意識すらも溶けそうなほどだった。

（これは……いったい……）

見み渡わたす限りの白い闇の中で、九郎は状じよう況きようの把は握あくを試みる。

だが白一色の世界の中に放ほうりこまれてしまっては、何一つとして手がかりは得られない。

「―九郎」

すぐ側そばから少女の声が聞こえてきた。

強く抱だきしめてみると、確かに腕うでの中に彼女の存在を感じる。すべてが消えていきそうな光の中でも、すべてが溶けこみそうな闇の中でも、その温ぬくもりと柔やわらかさだけは確かなものだ。

「なにが起こってんだ？」

「妾にも解わからぬ。しかし、これは―」

光は圧倒的で苛か烈れつではあったが、暴力的ではない。喩えるなら、この光の激しさは力強い生命の力だった。そう。この光には優やさしい生命の息吹いぶきが宿っているのだ。

そしてその光の向こうに―。

歌を聴きいた。

祈いのりがこめられた歌だった。

願いの託たくされた歌だった。

誓ちかいに絆ほだされた歌だった。

あるいは愛の歌のように。

あるいは凱がい歌かのように。

あるいは子守唄うたのように。

其それは、戦う誇ほこりに満ちた歌だった。

其れは、護る優しさに満ちた歌だった。

其れは、ただただ、生きる喜びに満たされた歌だった。

途と絶だえることのない、消し去ることのできない、其れは―。

其れは生命賛歌だった。

光の向こう。歌に合わせて舞まう影かげが見える。

少女のような影が、青年のような影が、あるいはその両方が、姿を変え、容かたちを変え、流れを変えて。

舞まいが終わった。

二つの影。

男と女の影。

光の向こう、光の中心から、九郎たちに向かって手が差し出される。

そして光に刻まれた印。

見慣れた印。

五芒星形の印。

旧き印。

旧き印が解け、魔ま術じゆつ文字の線となり、二重螺ら旋せんを

描えがく。

　九郎は識しった。

　二重螺旋の中央。強大な存在が紡つむがれてゆく。編まれてゆく。

　勇ゆう壮そうで、精密で、強きよう靱じんで、なにより美しい存在が、圧倒的な気配の爆ばく裂れつとともに顕けん現げんする。爆ばく誕たんする。その存在を目まの当たりにし、誕生の過程のすべて見届けて、九郎たちは思う。

　──神？

　　＋

　では次に御お伽とぎ噺ばなしをしよう。

　とおい、とおい、むかし。

　遥はるか昔のお話。

　最初の人間が生まれるよりも、さらに前のお話です。

　冥くらい冥い星々の向こうから、生まれたばかりの地球に『ぐれーと・おーるど・わん』と呼ばれる悪い神様たちがやってきました。

　悪い神様たちは海に空に大地に押し寄せて、お城を築き、神しん殿でんを築き、地球を我が物にしてしまいました。

　悪い神様たちは好き勝手に暴れて、地球に生きるみんなを苦しめました。

　みんなみんな泣きました。

地球も痛い痛いと泣きました。

だけど神様たちはとても強くて、誰だれもどうすることもできませんでした。

みんなみんな、祈ることしかできませんでした。

だけど悪いことをしているのは神様なのです。

──ではいったい、誰に祈ればよいのでしょう？

+

どこまでもどこまでも廃はい墟きよは広がっていた。

辺りには朽くちて瓦が礫れきの山と化した建物と、そこから突つき出した墓標のような鉄骨だけ。あとは乾かわいた埃ほこりっぽい風が吹ふき抜ぬけていくばかりである。

なにもかもが空っぽな世界。だが空っぽな空は抜けるように青い。

うずたかく積み上げられた瓦礫の上──。突き出された鉄骨に腰こしを下ろし、空を見上げている少女がいる。少し癖くせのある赤毛のショートヘアと大きな瞳ひとみ。フリルのついたドレスのような衣い装しようを身にまとい、掌てのひらで日差しを遮さえぎりながら微笑ほほえんでいる。その無む邪じや気きなまでの笑顔は、空っぽな世界には酷ひどく不ふ釣つり合いだ。

少女は楽しそうだった。足あしをブラブラさせながら詩を口ずさんでいる。まるでデートの待ち合わせでもしているかのように、浮うかれ、はしゃいでいた。そう。確かに少女は待っているのだ。焦こがれ、憧あこがれ、暖かい気持ちで、熱い気持ちで、つまりは恋こいする乙女おとめのように。

少女は彼を待ち続ける。いつまでもいつまでも待ち続ける。

待ち焦がれることすらも喜びへと変えて、孤こ独どくすらも謳お

う歌かしている。

「なにをそんなに焦がれているのかな？」

　唐とう突とつに。

　空っぽの世界に。

　少女しかいない世界に。

　孤独の世界に。

　異形の声が響ひびいた。

　その瞬しゆん間かん、世界は空っぽでも孤独でもなくなった。

　目に視みえるわけでも音として聴きこえるわけでもない。嗅かぐことも触ふれることもできない。だが確実に存在する濃のう密みつななにかが、世界を急激な勢いで邪じゃ悪あくに侵おかしていった。

　瘴しよう気きを孕はらんだ風が吹き抜けていく。

　少女の詩が止やんだ。

　濃密な気配が、少女の背後に立つ気配が、少女の名を呼んだ。

「―ネロ」

　少女の顔に鬼相が走る。

「ナイアルラトホテップ」

　つぶやきながら振ふり返ると、そこには邪悪がいた。

　黒い肌はだをした長ちよう軀くの男が、少女を見上げるようにして立っている。

「ここではその姿なの？　アウグストゥス。いや、中身が違ちがうなら呼び方も変えるべきかな？」

　少女の口元に不敵な笑えみが浮かび上がる。

　それを受けた男の口が嘲ちよう笑しようの容かたちを取って裂さける。

　少女が男の名を呼んだ。

「―ナイ神父」

　黒い男の哄こう笑しようが響き渡わたった。

「いやはや、名前など僕には―私には、まったくもって意味のないものさ」

　男の内側から、燃え盛さかる闇あん黒こくが噴ふき出した。

　雲一つない晴天の下、男の貌かおに影かげが差す。

　漆しつ黒こくの貌に燃える眸ひとみが爛らん々らんと輝かがやいていた。否いや。額が裂けたように、第三の眸が燃えている。

　少女が鼻で笑った。

「往おう生じよう際ぎわが悪いなあ。まだ諦あきらめていないのかい、神様？」

「あの世界では無理だったがね。まあ、いいさ。もう一度、繰くり返すとしようじゃないか。今度は如い何かなる結果にたどり着くかは判わからないが、まあ、それも一興。空間も時間も私にとっては意味を成さない。宇宙のすべては泡うた沫かたの夢」

「泡沫の夢だとしてもね、神様でも壊こわせない、強くて綺き麗れいなモノもあるんだよ。喩たとえばね―」

　少女は再び空を見上げた。邪悪を孕んだ世界で、空だけは清せい廉れんとして美しく、そして蒼あおい。

　少女は再び詩を詠うたう。祈いのりのように、願いのように、誓ちかいのように。

　それは御お伽とぎ噺ばなしだった。

+

だけど、みんなの祈りは届きました。

ある日、空が輝きました。

誰もが、空を見上げました。

そして、誰もがそれを見ました。

憎にくしみに燃える空から、血を舐なめる地球に降り立った光の巨きよ人じん。

空を輝かせ、地を照らし、彼はやってきました。

──善よい神様が舞まい降りたのです。

善い神様は、荒あれ果てた地球を見て、とても怒おこりました。

そして悪い神様たちを懲こらしめようと、その手に光り輝かがやく剣けんを執とりました。

+

「それは喩えば、あの大十字九郎のように、かな？」

男の問いに少女は答えない。

「なるほど。私がそのように育てたとはいえ、確かに彼は私の思おも惑わくを遥はるかに超こえた存在だった。認めよう。あの世界では確かに私は敗北した」

答える男の表情は闇に覆おおわれ、まったく判別がつかない。

だがその声には苦く渋じゆうの響きがあった。憎ぞう悪おの臭においがあった。そしてなにより──愛の温ぬくもりがあった。神たる存在には似つかわしくない、生温さがあった。

「だがそれも千の異形を持つ無む貌ぼうたる我にとって夢の出来事

に過ぎぬ。世界が泡沫なれば、この我もまた泡沫にすぎぬ」

「寂さびしい奴やつだね、君も」

　詩を止めて、振り向きもせず少女は言った。

「なればこそ、道どう化けは道化らしく滑こつ稽けいに振ふる舞まわねばな。私は私の役目を演じよう。来たまえ、ネロ。再び道化芝しば居いを始めるために」

　闇に覆われた男の口元が、亀き裂れつのような笑えみを刻んだ。

　少女は応こたえず、振り向くことすらしない。

　ただ青空を見上げながら詩を続ける。

　御伽噺を続ける。

+

　善い神様と悪い神様たちとの戦いが始まりました。

　実のところ善い神様は、みんなが思っていたような全知全能の神様ではありませんでした。

『えるだー・ごっど』が『ぐれーと・おーるど・わん』を懲らしめたなんて嘘うそっぱちなのです。

　このお話は御伽噺ですが、御伽噺の中でも嘘は嘘なのです。

　宇宙はやっぱり悪い神様しかいないのです。

　だけど祈りは確かに届いたのです。

　善い神様に届いたのです。

+

二人しか存在しないはずの世界に別の気配が顕けん現げんする。

その瞬しゆん間かん、世界は邪じや悪あくに毒されるのを止めた。

目に視みえるわけでも音として聴きこえるわけでもない。嗅かぐことも触ふれることもできない。だけど確実に存在する清廉ななにかが、世界を侵おかす邪悪に挑いどみかかった。

不変にして永えい劫ごうなる邪じやと、刹せつ那なにして永劫を紡つむぐ聖とが鬩せめぎ合う。

闇やみの男は背後に立つ清せい浄じような気配に振ふり返った。

瓦が礫れきの山の下、彼と彼女は立っていた。

二人の姿を認めた闇の男の貌かおに──闇に包まれ判別がつかないはずの貌に──驚きよう愕がくが、歓かん喜きが、憎悪が、憧どう憬けいが、浮うかんだ。燃える三つの眸ひとみが忙いそがしく揺ゆらぐ。

少女は振り向かない。

ただ青空を見上げて、詩を詠う。

御伽噺を謳うたう。

+

悪い神様たちは、やはり強すぎました。

善い神様は何度も何度も傷つき、倒たおれました。

傷だらけになって、たくさん血を流して、でも、それでも善い神様は諦あきらめませんでした。

何度も何度も立ち上がって、涙なみだを堪こらえ、歯を食いしば

り、剣を手に、何度も何度も悪い神様たちに挑みました。

　そんな善い神様を見て、悪い神様たちは怖こわくなってきました。

　ものすごく痛いはずなのに、泣きたいくらい痛いはずなのに、どうしてこいつは何度も何度も立ち上がれるのだろう？

　悪い神様たちは次し第だいに、善い神様に追い詰つめられるようになりました。

+

「真ま逆さか──こんな世界にまで、やって来るとはね」

　闇の男は二人を見つめながら両りよう腕うでを広げた。燃え盛さかる闇が、よりいっそう激しく燃え盛る。

「ヒトとして戦い、戦い抜ぬいて、ヒトを超え、ヒトを棄すて、遂ついに神の領域にたどり着いたか！　邪悪を討うち滅ほろぼすために私と同じ存在になったか！」

　怒ど声せいに乗って噴ふき出した瘴しよう気きが二人に襲おそいかかるが、彼らは怯ひるむ様子すら見せない。

「てめえとーいつ緒しよにするな」

　青年が口を開く。

「大十字九郎！」

「同類にされては不ふ愉ゆ快かいだ」

　少女が言葉を紡つむぐ。

「アル・アジフ！」

　その瞬間、世界が六度、爆ばく砕さいした。周囲を取り囲むようにして顕現する六機の威い容よう──。

―レガシー・オブ・ゴールド。

―ベルゼビュート。

―クラーケン。

―ロードビヤーキー。

―サイクラノーシュ。

―皇餓オーガ。

天すらも覆おおいつくしてそびえ立つ六機の威容。強きよう壮そうにして理り不ふ尽じんの化け身しん、鬼き械かいの神。

禁断の魔ま導どう書しよによって成し遂とげられる驚きよう嘆たんすべき奇き跡せきを、闇の男は一いつ瞬しゆんにして実現させた。

その機体に秘ひめた圧あつ倒とう的な魔ま力りよくが、邪悪を相そう克こくする二人を威い圧あつする。

常人であれば魂こん魄ぱくを破は壊かいされるほどの瘴気を浴びながら、二人は不敵に微笑ほほえんでいた。

男が剣けん指しを作り、宙に結印を刻む。剣指を追いかけるように光が魔ま法ほう陣じんを描えがいた。

五ご芒ぼう星せい形の印―。

六機の鬼械神と闇黒をまとう異形を前に、二人は高らかと聖句を詠よみ上げる。

―憎ぞう悪おの空より来たりて

九郎の声が全世界、全宇宙へと広がっていく。

―正しき怒いかりを胸に

アルの声が邪悪を踏とう破はしていく。

──我等は魔を断つ剣を執とる！

──汝なんじ、無む垢くなる刃やいば・デモンベイン！

無限の数を重ねて唱えられた魔を断つ誓ちかいを、九郎とアルが詠み上げる。

「然しからば、私もまた苛か烈れつなる憎ぞう悪おを以もつて愛し抜こう！　魅みせてみよ！　この盲もう目もくにして痴ち愚ぐなる神の夢──。泡うた沫かたの宇宙で何ど処こまで生き足あ掻がくことができるか……この私に魅せてみよ！　神のシナリオすら超こえる窮きゆう極きよくの破壊者！　神殺しの刃やいば！　そう。お前たちはヒトが創つくりし神！」

闇の男の軀からだが崩くずれ、闇黒の炎ほのおとなって世界を覆っていく。

六機の鬼械神が爆ばく音おんを轟とどろかせて一いつ斉せいに襲いかかる。

「最も新しき神──旧神よ！」

闇の男が吼ほえたのと同時に、七度目の爆砕が世界を震しん撼かんさせる。

+

いつか悪い神様たちは思うでしょう。

宇宙の果ての寒い場所に閉じこめられながら悩なやむでしょう。

怒りながら、嘆なげきながら、憎にくみながら、妬ねたみながら、そして、憧あこがれながら。

なぜ、こんなことになってしまったんだろう？

この世界には善い神様なんていなかったはずなのに。

いったい誰だれが、どんな願いが、宇宙の真理すらも捻ねじ曲げて、善い神様を創り出すのだろう？

──生命とはなんなのだろう？

これは御お伽とぎ噺ばなしです。

だけど、それは。

世界の中心で夢見る神様ですら、

宇宙のすべてをお創りになった神様ですら、

決して、決して、消し去ることのできないそれは、

刹せつ那なの愛を紡つむいで、永遠の時を刻み続ける──

いのちの歌。

あとがき

このとてつもなく巨きよ大だいな世界と相対することになってから、早いもので十ヶ月ほどが過ぎました。上巻に取りかかり始めたときは「安やす請うけ合あいしちゃったなぁ」と苦く悩のうしたもんですが、今となっては良い思い出です、ええ。

書き終わったあとで「あれも書いておけば良かった」とか「こういう展開でも良かったんじゃないだろうか」とか、イロイロと思うところもあったりしたんですけど……。まだまだデモベワールドは拡大し続けているし、小説版が未来へとつながるパーツの一欠片かけらにでもなってくれていればいいのではないかと、今はそんなふうに思っています。

そんなわけで小説版『斬魔大聖デモンベイン』、いかがだったでしょうか？

パソコン版をプレイされた方はご存じでしょうが、このエンディングはいくつかあるエンディングの中の一つでしかありません。設定上、それ以外の可能性もあるわけで、今後もデモンベインの世界は拡ひろがり続けるのだと思います。

小説版からデモンベインに入った皆みな様さまには、ぜひ他のエンディングにも触ふれてもらいたいですね。この本が皆さんのお手元に届くころにはプレイステーション２版『機神咆ほう吼こうデモンベイン』も発売までのカウントダウンに入っているはずなので、そちらでぜひ。

少しだけ発売の時期がズレちゃいましたけど、ニトロプラスの社員一同、馬車馬のように働いているのでご勘かん弁べんを。でも延びたぶんだけ完成度の高い作品をお届けできるものと確信しております。

そうそう。中巻で鋼屋さんが書かれていましたが、ＰＳ２版はＯＶＡ同どう梱こんですぜ！

ぜひ動く九郎とアルの姿を目に焼きつけて下さいね。

さて最後になってしまいましたが……。

小説版のデモンベインを書くにあたり、御ご支し援えんと御協力をいただいた皆様、ありがとうございました。特に原作者の鋼屋さんには、いらぬ仕事を増やしてしまって申し訳なかったです。でも機会があればまたよろしくです（こりてません）。下巻の解説を書いて下さった古橋秀ひで之ゆきさま、ありがとうございます。実は前から密かにサイトを拝見しております、はい。あと不運にも担当となってしまった角川書店の難波江さん、お疲つかれさまでした。いつも限界ギリギリまで粘ねばっちゃってすみません。でも〆しめ切きりは一度も破ってないですよね？　ね？（笑）

そして何と言っても本を買ってくださった読者の皆様、本当にありがとうございました。

これにて僕はデモンベインから離はなれ、次の作業へと移行します。

近い将来、またお会いしましょう！

株式会社デジターボ　涼すず風かぜ　涼りよう

解説

古ふる橋はし秀ひで之ゆき

どうですか『デモンベイン』、面おも白しろかったでしょう。燃えましたか？　たぎりましたか？

──と。ニトロプラスファンとスニーカー文庫読者の皆みなさま、はじめまして。物書きの古橋秀之と申します。〝最終巻の解説〟という重要な席に私などがノコノコ出てきちゃっていいんでしょうか、と、実は内心ひやひやしているのですが、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは本題──

『斬ざん魔ま大聖デモンベイン』という作品をひと言で表すならば、「巨きよ大だいロボ＋クトゥルー神話」とすることに異論はないでしょう。

ロボの中でもいわゆる〝スーパー系〟。巨大ロボットの祖『マジンガーＺ』の血を濃こく受け継つぎ、「おまえは神にも悪あく魔まにもなれる！」とか「見よ！　大地を揺ゆるがす鋼はがねの巨きよ体たい！」とか「彼こそは人類最後の希望！」とかいった血圧の高そうなハッタリとカタルシスを旨むねとする〝男の子のためのロボット〟です。

そうしたスーパーロボット物の持つ〝様式美〟とオカルトの〝儀ぎ式しき〟は、意外とネタ的な相あい性しようがいい──というのは原作シナリオライターの鋼屋ジン氏が前巻の解説で指し摘てきされているところですが、ここではさらに、オカルト方面のネタ元である〝クトゥルー神話〟に絡からんだ解説を試みたいと思います。

〝クトゥルー神話〟とは、アメリカの幻げん想そう小説家Ｈ□Ｐ□

ラヴクラフト（1890-1937）の遺のこした諸作品を元に、ラヴクラフトの弟で子しに当たるオーガスト・ダーレス（1909-1971）が発展させ、現在も多くの作家によって書き継がれている恐きよう怖ふ小説群です。

〝宇宙コズミ的ツク・恐怖ホラー〟とも呼ばれるその世界観の基本は「我々の認にん識しきする〝現実〟は混こん沌とんの海に浮うかぶ水すい泡ほうのごとき不安定なものであり、今日明日にも崩ほう壊かいしてしまうかもしれない」というもので、そうした不確かさを表現するのが、クトゥルー神話作品におなじみの道具立て──〝禁断の真理を記された魔ま道どう書しよ〟であり、〝異常な特とく徴ちようを示す変死体〟であり、〝次元の裂さけ目に垣かい間ま見みえる異境の情景〟であり、〝死の眠ねむりにまどろむ狂きよう気きの邪じや神しん〟であるわけです。

中でも圧あつ倒とう的な存在感を放っているのが〝邪神〟たち。

〝外なる神々〟や〝旧支配者〟と呼ばれる彼らは、そもそも「人間には抗こうし得ない存在」の象しよう徴ちようなので、「やたらに巨大だったり不定形だったりする」「異形の眷けん属ぞくに崇すう拝はいされている」「人間の体を乗っ取り怪かい物ぶつに変えてしまう」「人間はその存在を知っただけで発はつ狂きようする」といった具合に、もうワケが分からんほどにパワフルです。

このあたり、創始者ラヴクラフトの意図は「〝現実〟の薄うす皮かわ一枚向こうに正体不明の超ちよう存在が蠢うごめいている」というところにあったのですが、しかし彼の死後、後こう継けい者しやダーレスはそれら〝正体不明の存在〟を怪かい獣じゆう図ず鑑かんのごとく分類し、系統化してしまいました。

これを指して「ダーレス分かってねえよ！」と言う人も多いのですが（『ゴジラ』や『ガンダム』を「一作目しか認めん」という人が多いのと似てますね）、しかし──分かりやすくとっつきやすい「怪獣図鑑としてのクトゥルー神話」がなければ、そもそもラヴクラフトの名も現代に残っていたかどうか。なかなか難しいところです。

さて、そこで『デモンベイン』ですよ。

クトゥルー神話作品としての『デモンベイン』はダーレスノリの極北とも言うべきスタンスを取っており、ラヴクラフトの想定した「人間には抗し得ない存在」たちを、「そんなもんは気合次し第だいだあッ！」とばかりにブチ倒たおしてしまうわけですが──そのすさまじい〝気合〟を支える要素のひとつが、これまで八十年にわたって書き継がれ、蓄ちく積せきされてきたクトゥルー神話作品群そのもののエネルギーであったことは確かです。

クトゥルー神話大系の孕はらむ膨ぼう大だいな情報を、〝スーパーロボット〟というこれ以上ないほどに正しい様式にのっとって方向づけ、言こと霊だまの奔ほん流りゆうに変えて叩たたきつける──つまり「クトゥルー神話のエネルギーを借りることによって、それらの本質であるところの虚きよ無む感かんや終末主義を否定する」というあたりが、「魔を以もって魔を制す」という本編の内容に、あまりにもぴたりとハマっています。できすぎと言ってもいいくらいです。

「巨大ロボ＋クトゥルー神話」という、おそらく最初はイロモノ的なノリで決まったのであろうコンセプトが、このように非常な勢いと熱量を持つ作品として完成したことの背後には、関係者の皆さんの技術や熱意に加え、なにか運命的な力が働いていたのではないか──なんて言うとちょっと芝しば居いがかって聞こえますが、要は「天に愛された作品」なのだなあ、と──いやいや、ここで運命論に落としちゃいけませんね。

たとえ天に憎にくまれたとしても、ものすごい馬力で自らガッツンガッツン突つき進んでいく、『デモンベイン』はそんなエネルギーを持った作品なのである──と言い換かえましょう。

前述の鋼屋ジンさんほか、原作ゲームのスタッフの皆さま、それにノヴェライズを担当された涼すず風かぜ涼りようさま、おつかれさまでした。

最後になりますが、小説版『デモンベイン』のファンの皆さまにちょっとしたプレゼントというか、オマケの情報。

──実はもう一冊さつ出るのです。

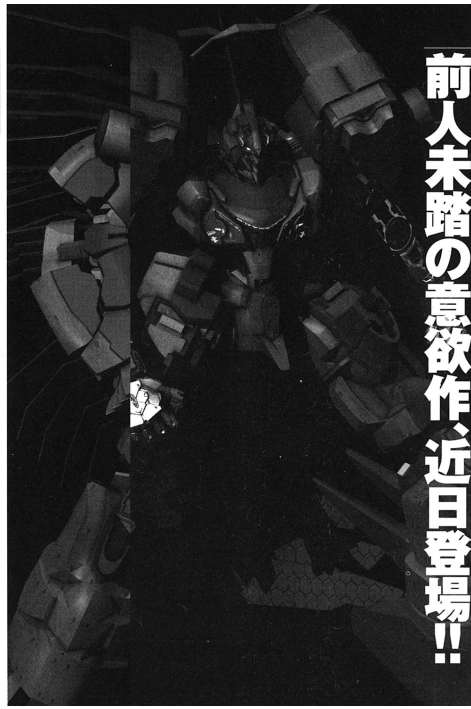
執しつ筆ぴつ担当はワタクシ古橋秀之。時代は本編よりだいぶ

前、まだジジイになっていない覇は道どう鋼こう造ぞうが活かつ躍やくする番外編です。「この世界の話をもうちょっと読みたいな」という方は、どうぞよろしくお願いいたします。

　それではまた、『デモンベイン外伝（仮）』でお会いしましょう。

「ブラックロッド」「サムライ・レンズマン」の
鬼才・古橋秀之が贈るデモンベイン公式外伝

前人未踏の意欲作、近日登場!!



斬魔大聖デモンベイン 機神胎動

原作●鋼屋ジン（ニトロプラス）
著●古橋秀之　イラスト●Ni-θ

1890年4月、アメリカイリノイ州――
魔術結社"ダークネス・ドーン"の操る翼竜がサンタフェ鉄道を襲撃する。
貨物車の屋根をぶち抜き、翼竜を握りつぶした巨大な鋼の拳……
そこには魔導書を携えた若き日の覇道鋼造の姿があった……

DEUS MACHINA DEMONBANE NEXT

©Nitroplus/TOKUHIRO 2003,2004

カバー・口絵・本文イラスト / Ｎｉ

フィニッシュワーク / なまにくＡＴＫ

アシスタント / りんごキック

デザイン / タケウチユタカ

(C) Nitroplus, DIGITURBO 2003, 2004

斬ざん魔ま大たい聖せいデモンベイン

明あ日すへの翼つばさ

原作：鋼はがね屋やジン（Nitroplus）

著：涼すず風かぜ涼りよう（DIGITURBO）

平成25年12月1日　発行

(C) Nitroplus, DIGITURBO 2004

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『斬魔大聖デモンベイン　明日への翼』

平成16年4月1日初版発行

平成18年7月10日7版発行

発行者　山下直久

発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745（営業）

編集　角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19

03-3238-8694（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/

BOOK☆WALKER